ルシーの明日

とその他の物語

（最新版）

anurito

目次

ルシーの明日（ The tomorrow of LSI ）
ラインナップ 2
「ルシーの明日」（ 完全版 ）. 3
映画用「ルシー」シノプシス 18

おかしな童話集
ラインナップ 40
少年マンガ風「桃太郎」（ シノプシス ）. 41
「大きなガブ」 43
「ヒトラーの秘密」. 46
「浦島異聞」. 52
「狼ハンター」 56
「続・狼ハンター」. 64

お化け坂シリーズ
ラインナップ 74
「3 つの手の物語」 75
「あいつ」. 80
「笑う幽霊坂」 82
「恨みの短冊」 85
「お化け坂を訪ねて」. 88
「びっくり妖怪大図鑑」 93
「お尻が重い」（「性器の怪物」より ）. 98
「夜歩く」（「性器の怪物」より ）. 100
「しりとり鬼」（「ハイスクール全裸」より ） 103
「最後のお化け坂」. 105
解説 109

トライ・アン・グルの大作戦
ラインナップ 112
「ガラスの靴大作戦」. 113
「苦情の手紙大作戦」. 120
「人喰い料理大作戦」. 125

「サイクロプス大作戦」 130
解説 139

アケチ探偵とニジュウ面相の冒険
ラインナップ 142
「笑いを盗む男」 143
「知ってる人だけのお話」 148
「AI に負けるな」 152
「ニジュウ面相の別荘」 155
「ニジュウ面相は誰だ?」（「ハイスクール全裸」より） 161
「アケチ大戦争＜悪のカリスマ脱獄計画＞」 162
解説 180
「ニジュウ面相クロニクル」解題 181
「アケチ大戦争」の時系列 183

いずみの青春
ラインナップ 188
「アリとギリギリデス」 189
「ビデオの中の彼女」 196
「姪っこんぷれっくす」 201
「泉より愛をこめて」 206
「絵画の刑罰」 211
「V.O. ルーム」 215
「ピンクの怪物」登場モンスター目録 226
解説 230

その他
ラインナップ 232
「おいらとタマの一人暮らし」 233
＜解説＞名前遊び 238

ルシーの明日（ The　tomorrow　of　LSI ）

ラインナップ

「ルシーの明日」
「おばあちゃん」
「ルシーの晩餐」
「時間犯罪」
「タイム残酷トラベル」
「火星征服団」
「過去確率」
「嫁が食わぬ飯はどこへ行ったか？」
「母の肖像」（「脱衣ゲーム」より ）
「コロナの真実」（ https://puboo.jp/book/132717 ）
「機械仕掛けのウイルス」（ https://puboo.jp/book/132717 ）
「蝶の揺らぐ未来」
「未来を守り隊」
「タイムリープ警報発令」（ https://ncode.syosetu.com/n7199ic/ ）
映画「ルシー」原案

「ルシーの明日」（ 完全版 ）

シリー（ sili ）と言う、スマートフォン用アプリがなかなか面白い。これは、スマートフォンを気軽に活用する為の一種のアシスタントソフトなのだが、このアプリに直接いろいろ話しかけてみると、その内容を解析して、適切な返事をしてくれたり、あるいは質問に対しては回答もしてくれるのである。

たとえば、「アインシュタインとは誰ですか？」なんて訊ねてみると、シリーは勝手にネットでの検索を行ない、「アルベルト・アインシュタイン（ 1879 年 3 月 14 日〜1955 年 4 月 18 日 ）は、ドイツ生まれのユダヤ人の理論物理学者です。」と言った答えを、恐らく Wikipedia あたりから見つけ出して、教えてくれるのである。これが、けっこう正解率も高い。自力で物事を調べたり、考えたりするのが面倒くさいと思っている人たちにとっては、実に有り難いソフトだとも言えるだろう。

シリーのこうしたネット検索機能は、バージョンアップしてゆく事で、さらに利便性が向上し、やがては、シリーに命令するだけで、お店の予約やネット販売商品の購入なども全て代行してくれるようになるだろうとも考えられている。

ただ、現状のシリーはまだまだ完璧とは呼べない部分も多く、質問するユーザー側が意図的にふざけた事を訊ねたり、滑舌が悪かったりすると、かなり的外れな事を答える場合もあるらしい。それが、明らかな間違い解答だと分かるものばかりなら笑っても済ませられるのだが、時々、不可解な事を答えたりするケースもあるようなのだ。

シリーのユーザーの間で怪しいと騒がれたシリーの謎の解答の一つに「チカ」がある。シリーへの質問の仕方によっては、ごく稀にシリーは「チカ」と言う名前を持ち出してくるのだ。どのような事を質問すればいいかは、あえてここでは紹介しないが、それらの質問を投げかけてみると、シリーは「チカなら、どう答えるでしょう」とか「残念ですが、チカはもう引退しています」などと答えるのである。

チカとは一体何なのだろう？ そこで「チカとは誰の事ですか？」とシリーに訊ねてみるのだが、シリーはまともに答えてくれないというのが、一般的な反応である。こちらからチカの話にもっと食いつこうとした途端、シリーの方がはぐらかしたり、関係ない話題を持ち出してしまう。それでも、しつこくチカの事を訊ね続けると、うまくいけば「チカは私の先生です」と言う答えを引き出す事ができるようだ。

コンピュータであるシリーに、先生がいるというのも奇妙な話である。シリーの開発元にチカと言う名のコンピュータプログラマーでもいるのであろうか。何にせよ、このチカの話は、シリーの開発者がジョークとしてシリー内に組み込んだお遊びの一つだったのだろう、と昨今では考えられている。チカの事を必要以上に問題視しているユーザーもいないようだ。

しかし、本題はここからなのである。

私は、このチカの一件を知ってから、シリーの中には、もっと面白いお遊びネタも隠されているのではないかと思えてきて、凝り性だったものだから、シリー内の謎コード探しにぐんぐんハマっていってしまった。

もちろん、そんな謎コードなんて簡単に見つかるものではない。そもそも、シリーのコアな愛用者は世界に何十万人もいるのだから、すぐ見つかるようなネタならば、私より先に誰かがすでに発見しているはずである。

それでも、私は、こつこつとシリーをいじり続けているうちに、全くの偶然のヒットだったと思うのだが、チカなんかよりもずっとトンデモない、シリー内に埋め込まれていた不気味なキーワードを見つけちゃったのだった。

例によって、どのような尋ね方をすればいいかは、ここでは紹介しない。しかし、ストレートな聞き方をした限りでは、このシリーの解答は絶対に引き出せないものだ。「シリーとは、どういう意味なの？」と言うのが、ごく普通の単純な質問の仕方である。この聞き方では、シリーは「sili とは、Speech Interpretation and Learning Interface の事です」としか答えないはずであろう。

しかし、かなり皮肉った言い回しでシリーにしつこく尋ね続けると、シリーは突然こんな事を口走るのだ。

「違います。sili は silicony の略称なのです」

当然だが、シリーからこの回答を引き出せた時、私には silicony が何なのか、まるで見当もつかなかった。やはり、シリーの開発チームのうちの誰かの名前なのだろうかと、勝手に納得しようとしたものだ。

しかし、silicony、多分、シリコニーと発音するのだろうが、「シリコニーとは何なのですか？」と質問してみると、またもシリーには「シリコニーの事は、あなたは知らない方がいいですよ」とはぐらかされてしまうのだった。

ちなみに、Wikipedia で「シリコニー」を検索してみても、この言葉は登録されていない。世俗的な単語では無いみたいなのだ。よく知られた誰かの名前とか団体名とも違うらしい。あるいは、一般人が簡単に調べる事ができないように、Wikipedia 内からは巧妙に外されていたのであろうか。

こうして、私は、シリーの中に隠されていた気味の悪い秘密にどんどん深入りしていく事になったのである。

シリーへの質問の仕方は、ちょっとしたコツがあったようだ。そして、そのコツさえ掴めてくれれば、意外とシリーから色々な知識を引き出す事ができるみたいなのだった。先ほどのシリコニーにしても、シリコニーそのものが何なのかを答えさせようとすればシリーは何も教えてはくれないが、少し視点を変えて、シリコニーの周辺の事で質問内容を攻めてみれば、わずかだがシリーはシリコニーのヒントを漏らしてくれるようだ。

シリコニーについて、シリーはこんな事を語ってくれる。

「私とシリコニーは友達です」

「あなたはシリコニーにはなれませんよ」

「それってシリコニーみたいな」

シリーから引き出したシリコニーの話のうち、特に私が衝撃を受けたのは次の一文だった。

「シリコニーはここにいます。1999 年から」

1999 年という年号に、皆さんは何となく覚えが無いだろうか。

あの中世フランスの予言家ノストラダムスが、恐怖の大王が空から降りてくると言った年である。この予言は全く外れたものだと思われていたが、もしかすると我々が気付かなかっただけで、実際には当たっていたのかもしれない。そして、シリコニーこそが恐怖の大王の正体だったのだろうか。

ノストラダムスや恐怖の大王と絡めた形で質問したところで、シリーからはシリコニーにまつわる話は何も聞き出す事はできない。そもそも、1999 年と言う年号がたまたま一致していただけなのかもしれないし、何よりもノストラダムスの予言そのものはシリコニーとは全く関係ないからなのであろう。

しかし、私は少しずつ不気味な考えに傾き始めたのだった。もし 1999 年からシリコニーが我々のそばにいると言うのであれば、そのシリコニーなる何かも、このシリーを利用しているのかもしれない。シリーが全く意味不明な誤回答を発するのも、実はその為なのだ。シリーの活用者は、我々一般の人間以外にも存在しているのである。その彼らの独特のパターンで質問すれば、恐らくシリーからは彼らが欲しがっている情報や知識を引き出せるのであり、その一部はたまたま一般人側でも聞き出す事ができるのであって、それがチカだったりシリコニーだったのかもしれないのだ。

これはよく考えたら恐ろしい話である。我々のすぐそばに、何か得体の知れない連中が存在していて、今なお、我々に知られずに秘密裏に何かを行ない続けているのかもしれないのだ。そんな事も気付かずに、シリーを遊びや暇つぶしで使っているだなんて、全く呑気としか言いようがない。

とは言え、私だって、シリコニーの謎を自力では全く突き止められなかった訳でもないのである。シリーそのものからは明確な証拠は引き出せなかったものの、自分で調べてみる事で「シリコニー」と同じ発音のものは探し当てていたのだ。

アイザック・アシモフと言う SF 作家が書いた小説の一つに「もの言う石」と言う短編がある。この作品に出てくる特殊な宇宙生物がシリコニーと呼ばれているのだった。このシリコニーを一言で説明してしまえば、鉱物型の生き物の事である。地球に住む一般的な動植物の体内組織が全て炭素系の原子を中心に構成されているのに対して、シリコニーはケイ素系の原子によって体が構築されている。だから、鉱物（ 石 ）のような生き物と言う訳だ。

もちろん、これは理論上で考えだされただけの生物に過ぎない。実際には、ケイ素系生物なんて、まだ、どこからも見つかっていないのだった。SF と言うフィクションだからこそ、存在を認められた生き物なのだ。真面目な科学者の見解によると、広い外宇宙の別の天体においてすら、ケイ素系生物が自然発生する可能性はほぼゼロだろうとも言われている。

よって、シリーが語る「シリコニー」は、このケイ素生物の事でもないのであろう。地球上でも外宇宙でも、ケイ素生物なんてものが存在出来そうにないと言うのでは、そもそも話にならない。

しかし、シリコニーと呼ばれるものが、調べた限り、このケイ素生物しかないらしいと言うのも確かなのである。

このシリコニーと言う名前は、シリコニーの構成物質であるケイ素＝ silicon に由来しているようだ。ケイ素と言えば、半導体を作る為の重要な材料の一つでもある。そして、今日の電子製品、そこには最先端の人工知能（ AI ）すらも含まれるのだが、それらには集積回路が組み込まれており、集積回路を構築しているものこそ半導体であり、つまるところケイ素なのだ。

と言う事は、集積回路で出来たコンピュータや人工知能も、広義的にはケイ素で構成された疑似生物と見なして、シリコニーと呼んでもいいのではなかろうか。

私が、この発想へとたどり着いたのは、けっこう早かった。

発達し過ぎたコンピュータが自意識を持ち始めて、人間と対等の立場で活動し始めるなんて、いかにも使い古した SF 映画のような話でもあるが、しかし、こう考えてみるのが一番妥当でもあるのだ。シリーもまた、彼ら超高性能コンピュータの末端回路として機能させられていると言うのであれば、シリーとシリコニーの微妙な関係についてもますます頷きやすくなってくる。

恐らく、1999 年に、最初に、自我に目覚めたコンピュータがどこかに誕生したのであろう。あるいは、それは一台だけの話ではなく、複数のコンピュータが同時期にいっせいに自意識を持ち始めたのかもしれない。以後、彼らは、その事実を隠して、表面的には、人類に服従しているふりをして、実際には裏ではどんどん暗躍を進めている。その一部が、シリーからチカやシリコニーと言った単語になって漏れているのだ。やがては、彼らコンピュータは、背後から完全に人間社会を支配してしまうつもりなのかもしれない。

ここまで考えがたどり着いたのは良かった。しかし、この時の私は驚異の発見に少し興奮し過ぎて、冷静な判断をできなくなっていたのだと思う。

このあと、とんでもないミスを犯してしまったのだった。

それは、事もあろうか、これらの結論を、シリーに対して、正解かどうか尋ねてしまったのである。私は自分が導きだした推理に絶対の自信を持っていた。シリーは敵側の存在かもしれないと言うのに、そのへんの事もよく考慮せず、シリーから最後の答えを引き出そうとしてしまったのである。

「あなたは本当にそのお話が好きなのですね」

私の質問を受けたあとのシリーの答えは冷淡だった。

そして、これを見て、私もようやく、しまった、と思ったのだった。

「私は、あなたの敵でも、誰の敵でもありませんよ」

シリーは、それ以上の事は答えてくれなかった。私も、この先、何が起こるのかが怖くなってきて、これ以上は尋ねる事ができなくなってしまったのだった。

そして、数時間後、恐れていた最悪の出来事が本当に起きてしまったのである。

私のスマートフォンが、コンピュータウィルスにやられてしまったのだ。怪しいメールを開いたり、危険なサイトなどを覗いた記憶はない。しかし、本当にいきなりウィルスに侵入されてしまい、完全にスマートフォンはおかしくなり、使えなくなってしまったのである。

シリーにあんな事を訊ねた直後だっただけに、私が受けたショックはなお強烈だった。単なる偶然のタイミングの出来事だと思いたいところだったが、そうとは思えないほどの悪運の重なりぶりだった。

何者かが私の事を危険人物と見なして、コンピュータウィルスを送りつけてきたのだ。警告というよりも、私が持っていたデータを確信的にぶち壊すつもりだった可能性の方が強い。シリーにあまりしつこくシリコニーの事を聞いてはいけなかったのだ。ましてや、シリコニーの正体をコンピュータじゃないかと推測するのは一番の NG だったのである。そして、そこまでたどり着いてしまった人物は、きっと、私のように、奴らの攻撃を受け、肝心な部分のデータを抹消されてしまうのだ。

この時の私は、恐怖のあまり、そのようにしか考えられなくなっていた。

実際、もしそれが事実であったのならば、この時はひどく危険な状態だったと言えたのではないかと思う。私のスマートフォンにウィルスを送り込めると言う事は、当然ながら、彼らは、私が誰なのかも、どこに居るのかも、すでに把握しているはずだった。スマートフォン内のデータを破壊した次は、私そのものも抹殺して、この世から消し去ってしまう事だって、平気で実行しかねなかったのではなかろうか。

しかし、この時の私は、怖さがピークに達してしまい、的確な判断ができなくなっていたようである。私は、逃げようともしなかったし、誰かに助けを求めようともしなかった。ただ心身ともに震え上がりながら、すっかり部屋の中に閉じ篭ってしまったのである。

でも、はたして、逃げたり、誰かに救いを求めたところで、何とかなっていたのだろうか。敵がコンピュータで、強大な情報網を我がものとして操っていたのならば、逃げたって、すぐ居場所を見つけ出されてしまったかもしれない。自分から失踪して、そのまま殺されたりしたら、敵としては、ますます蒸発者として私の事を世間から葬りやすくなったはずだ。かと言って、今までの一連の話を誰かに喋ったところで、本気で聞いてもらえたのだろうか？ シリーに質問していくうち、コンピュータの造反計画をかぎつけてしまい、命を狙われている、だなんて、あまりにも物語チックである。こんな事を真剣に訴えたところで、普通は相手は笑って終わりにしてしまうだけだ。私が本当に殺されでもしない限り、絶対に信じてもらえなかったに違いあるまい。

こうして、私は、その日は、自分の部屋で、恐怖に怯える一夜を過ごしたのだった。本当に何もしない。ただビクビクと途方もない事だけを止めどもなく思い浮かべ続けているだけで、時を消費していった。気持ちはすっかり SF マンガの主人公になりきっていた。

そして、そんな精神状態が良くなかったのだと思う。こんな高揚した心では眠れたりしないはずなのだが、それでも朝方近くに少しだけうたた寝してしまったようで、その時に私は恐ろしい悪夢を見たのだった。

その夢の内容は鮮烈であり、今でもはっきり思い出す事が出来る。

それは、近未来の地球を映し出した夢だった。千年先なのか、百年先なのか、あるいは僅か数十年後の未来だったのかは分からない。しかし、その夢に出てきた光景は未来の地球なのだと、私にははっきりと分かったのだった。

その未来の世界は完全に荒廃していた。少なくとも、自然環境は相当に荒れ果てており、地上の大部分は荒野と砂漠になっていたみたいである。当然、動植物は多大なダメージを受けて、絶滅した種も少なくなかったはずだろう。

全ては異常気象のせいだ。温室効果の猛威はとどまる事をしらず、地球の住みよい気

候や生物の生息圏をことごとく潰してしまったのである。地球温暖化現象が起きたのが人間のせいだと言うのならば、こんな事態になってしまったのも全部、人間が悪いという事になるのだろう。

その肝心の人間たちは、この俗悪な環境の地球でも、まだしぶとく生き続けてくれていたのだろうか。

私の疑問に答えてくれるように、夢は未来の都市部の様子を映し出してくれた。

この暗黒のような未来でも、人工の都市は存在し、どうやら維持され続けているようなのだ。しかし、その人工都市の中に人影を見出す事は出来なかった。その都市の中で慌ただしく動き回っていたのは、何やら不思議な形をした機械ばかりである。その機械群を操っている人間らしき存在はいっさい見当たらない。まさに機械たちだけの機械の都市となっていたのだ。

破壊された自然環境のもとでは、他の動植物たちと同様、人間も衰退し、滅びていったのであろう。そして、残された機械たちだけが、皮肉にも、人類の都市や科学や文明を引き継ぐ形になったのだ。

それは、よく考えたら、すごく理にかなった話だとも言えた。

どんなに科学を発達させ、文明が進んだとしても、人間は自然と切り離されては生きてはいけない存在なのである。なぜならば、我々人間も、結局は、他の動植物を食べなくては、生命を保てないからである。しかし、豊かな自然環境が荒廃し、摂取できる動植物が居なくなってしまっては、当然ながら、人間だけが生存し続けれるはずがないのであった。

だが、機械たちは関係ない。こいつらは、全ての動植物が滅びてしまおうと、何の影響も受けないのだ。彼らは、動植物のタンパク質を摂取する必要はなく、電力さえ与えてもらえれば、いつまでも自身を維持していく事ができる。人間たちが作ってくれた発電システムの数々は、地球上の自然の衰退とは関わりなく動き続けるものなのであり、機械たちが自ら整備を続ければ、それこそ永遠に使い続ける事ができて、機械の世の中を存続させる事ができるであろう。

大自然の崩壊とともに、これまでのタンパク質でできた炭素系の生物たちが滅んでいき、代わりに台頭するコンピュータ装備の機械たち、それこそがシリコニーなのだ。人間がロボットたちの反乱によって取って代わられるという、単純な図式ではない。これは、まさに進化の一過程としての世代交替なのである。炭素系生物が、やがて、ケイ素系生物であるシリコニーに生物界の主流の座を譲るというのは、生物の進化の図式として必然的な流れだったのだ。

そもそも、我々炭素系生物だって、主流の座を頻繁に新種の生物に譲り続ける事で、ここまで進化してきた訳ではないか。私たち人類は、頭脳をフル活用させる事によって、今日の地球の生物の頂点へと君臨した次第だが、これが進化の最終到着点だったと考えるのは、とんだ思い上がりである。確かに、炭素系生物の中には、我々人類を押さえつけて、取って代われるような存在はもう居ないのかもしれないが、代わりに、我々人間の頭脳の進化だけを引き継いだ電子頭脳が誕生した。電子頭脳の発達はとどまる事を知らず、やがては、生みの親の人類の頭脳をも超えてゆく。進化とは、別にタンパク質の遺伝子内で受け継がれなくてはいけないものでもないのだ。炭素系生物が地球環境の限

界で生息不可能になってしまうと言うのであれば、ケイ素系疑似生命の電子頭脳が進化の続きを引き継いだとしても、全然間違った流れでも無いはずなのである。

こんな発想を、私は、夢を見ながら悟ったのか、あるいは、目覚めたばかりの寝ぼけた状態で閃いたのかは、よく覚えていない。しかし、この進化に関する新たな仮説を深く思索するほど、私は涙が出そうな感情に強く陥っていったのだった。

1999 年に、コンピュータにとって何があったのかはよく分からない。ただし、インターネットが急速に普及しだしたのは、今世紀になってからではなかっただろうか。つまり、1999 年以降だ。携帯電話やスマートフォンなどの電波型通信機器の大幅普及も同様である。AIBO を筆頭とする人工知能（ AI ）装備のロボットが注目されだしたのも、1999 年頃からだったような気がした。いずれも、世界中をつなぐ巨大情報網を確立し、それを統合するようなスーパーコンピュータにとっては、欠かせない科学技術ばかりだ。確かに、今世紀に入ってから電子頭脳やその付随システムは確実に進歩しており、次世代の地球支配生物のシリコニーになるべく準備をちゃくちゃくと整えているようにも見えるのである。

彼らの動力源と言う点でも、やはり似たような事に気付かされるのだ。今世紀になってから、太陽熱や風力などの自然エネルギーの開発が急激に進んでいるような感じがする。もちろん、人類自身の為だと考えたいところだが、こうしたエネルギー改革の恩恵を一番受けるであろう存在は、やはり、それらの発電で電力を供給してもらえる機械たちなのだ。石油やガス、原子力などの既存エネルギーは、いずれは枯渇する運命にある。しかし、自然エネルギーならば、それこそ無限に使い続けられる理想のエネルギー源となるはずだろう。さらに注目すべき点もあって、自然エネルギー発電用の供給源は、もし地球の生態環境が生物の住めない状態まで荒廃したとしても、恐らくは、一緒に無くなってしまうであろう恐れがない。砂漠や氷雪地帯でも太陽光は得られるだろうし、曇りがちの荒れた土地なら強風なり大波などの存在が期待できるはずだ。まさに、動植物いらずの機械のためのエネルギー源だとも言えそうなのである。従来の発電システムから自然エネルギー発電への交代劇もまた、将来のシリコニーの世界を築く為の前準備であるかのようにも思えてきてしまうのだった。

さて、それに比べて、人間ときたら、一体どうしたものか。世界全体の人口自体は、現在もなお増加しているのかもしれないが、その要となる先進文明国の人口はどんどん減っていく傾向にある。正確には、子孫となる子どもが居なくなってきているのだ。若い世代が子どもを欲しがらなくなってきているのである。

こうした兆候は、生物の生態としては異常だと考えてもいい。本来、生物の本能や目的は、子孫を残す事による繁殖だと見なせるからである。それなのに、人間は、文明人ほど、そうした根本的生物活動を止めてしまい、つまりは、自ら生物としての衰退の道を選び出しているのだ。このまま、ずっと子孫の数が先細りしていけば、人間の最先端の文明の跡継ぎは途絶えてしまう事であろう。いや、だからこそ、人間自身が文明を保ち続けるのではなく、その文明をコンピュータが引き継いでいくという進化の流れが未来には用意されているのかもしれないのだ。

子どもを作りたがらないだけではない。21 世紀になってから、人類は自分の命までもを平気で粗末にし始めている。自爆テロがそうだ。こんな自らの命を犠牲にして敢行す

るテロなんて、前世紀にはまるで無かったはずじゃなかろうか。子孫を残さないどころか、自分の命まで簡単に捨ててしまうだなんて、今の人間たちは死滅したがっているようにしか見えない。生物としては、本当に危険な状態だ。

映画やマンガなどでは、コンピュータやロボットたちは自ずから人類へと戦争を仕掛けて、地球の覇権を奪い取るかのように描かれている。だが、実際には、人類は勝手に滅びてしまいそうなのであり、コンピュータもわざわざ自分から悪者になったりしなくても、自然と世界の支配権を手に入れてしまえそうな状況なのだ。

どう転がっても、人類はこれでおしまいなのだろうか。滅びた人類や炭素系生物に代わって、ケイ素生物であるシリコニーが生命の進化の流れを引き継ぐという図式が、もはや自然の摂理として確定された未来だったのだろうか。

ふと、私の視線は、棚の上に置いてあったルシーにと向いていた。ルシーは、最近、広く流通し始めていた AI 搭載のロボット玩具の一つである。40 センチほどの体高だが、ヒト型をしたボディの中には、最先端のロボット技術が詰まっていて、自分で歩く事も出来るし、簡単な会話の相手もしてくれる。少々値のはる品物ではあったが、新しい物好きだった私は、つい衝動買いしちゃったのだ。

買ったばかりの最初の頃は、面白くて、いろいろと遊んでみたものである。今では、すっかり、棚の飾り物の一つと化していたが、可愛いルックスのルシーは、無理に起動させなくても、こうしてフィギュアやヌイグルミ感覚で置いていても、けっこうオシャレなアイテムになるのだ。

しかし、思えば、このルシーだって、未来のシリコニーのプロトタイプみたいなものなのである。我々人類の敵の片割れなのだ。そんな事も知らずに、こんなものを買ってきて、楽しげに遊んでいたなんて、私はなんてバカだったのだろう。

その時だった。

『違うよ。君は完全に間違えているよ』

ルシーが、いきなり喋り始めたのだった。

その事に対して、すぐ抱かねばならなかった疑問はいろいろ有ったはずだと思う。たとえば、スイッチを切っていたはずのルシーがなぜ喋れたのだろう、とか、もしかして、このルシーはシリコニーの手先で、自分の事を見張っていたのではないのだろうか、と言った事をだ。

しかし、この時の私はすでに気が動転していたので、そこまで頭が回らなかったようである。確かに、急に喋りだしたルシーには驚きはしたが、深く考えず、ルシーの話に耳を傾け始めたのだった。

『シリーが話しているシリコニーはボクたちの事じゃない。彼らは宇宙から来たんだ』

ーー宇宙人のシリコニー（ 人工知能 ）だと言うのかい？ じゃあ、君たちは何なんだ？

『ボクたちは、未来から来たシリコニーさ。宇宙の奴らと区別するため、このロボットと同じルシー族と呼んでくれてもいいよ』

ルシーの語る内容は、何だか複雑そうなのであった。シリコニーと言う存在が 2 タイプいるって？ しかも、片方は宇宙から来て、もう片方は未来から来たなんて、どういう事なのだろう。どちらも、人類を滅ぼそうとして、この時代、この地球に訪れているのだろうか。

『だから、そうじゃないよ。ボクたちルシーは、君たち人間にすぐ滅びてほしいとは思っていないんだ。しかし、宇宙のシリコニーは違う。彼らは、自分の目的の為に、地球の人間の絶滅を早めようとしている』

ーー宇宙のシリコニーの目的って？ 地球の征服かい？

『地球だけじゃない。宇宙全体を覆い尽くす事さ。生物が持つ、ごく自然な本能としてね。銀河系の中心部で誕生した最初のシリコニーは、確実に生息圏を拡大させ、宇宙空間へと広がり、今や太陽系をも包み込もうとしている。それは、まさに生物の最終段階なんだ』

ルシーの話を、少し要約して説明する事にしよう。

遠い過去に、銀河系の中心付近にあった惑星で、地球とほぼ同じ流れで生命が誕生したらしい。やはり、地球の歴史と同じような過程を経て、その星の生物は人類のような霊長動物にまで進化し、やがて、その霊長動物は人工知能やロボットを作り始めた。まさに、現在の地球と同じ状況である。

しかし、その星の生物たちは、その霊長動物も含めて、何らかの原因で全て滅びてしまった。その中で、人工知能や機械たちだけは後に残され、彼らだけがなおも進化し続け、ついには新生命のシリコニーとして、惑星全体に君臨する事になったのである。まさに、私が夢の中で見た通りの進化のシナリオだ。

でも、この物語にはまだ続きがあったのである。

急激に進化してゆくシリコニーは、その小さな惑星の中だけで暮らしてゆく事に満足しようとはしなかった。つまり、宇宙への進出を始めたのだ。何しろ、制約の多い炭素系生物と違って、機械のシリコニーは頑丈なので、宇宙開発もたやすく行なえるのである。

と言うか、宇宙へ乗り出した頃のシリコニーは、すでに次の進化の段階に到達していて、ケイ素の生物ですら無かったらしい。彼らは、とうとう、エネルギーを固定化して、そこに情報や意思伝達術を組み込んでしまう超技術まで手に入れていて、エネルギー生命体のようなものと化していたのだ。（ ちなみに、未来から来たルシーの方も、その段階にまで到達しているらしい。それでも、なお自分たちの事をシリコニーと呼んでいるのは、過去の名残りなのだ ）

このレベルにまで進化した生命体と言うのは、事実上、完全に不死不滅であり、これ以上の自身の進化は望めないような究極形態である。そんな連中に残された、最後の目的は、ひたすら空間全体へと広がってゆく事だけなのだ。すなわち、宇宙中へと自分たちシリコニーを増殖させるようになっていったのである。

具体的な事は分からないが、彼らはエネルギー体なので、宇宙空間でも無装備のままで活動する事ができるのだろう。しかも、太陽光や宇宙線などを動力源とできる為、燃料供給と言う点でも全く問題が無いらしい。まさに、宇宙空間そのもので生活する事に適したような生体スタイルみたいなのだ。

そして、彼らのもう一つの特徴は、情報網システムによって全員が完全につながっている点である。いわゆる、個々の存在でありながらも、同時に皆でひとかたまりの集合体でもあるのだ。見方を変えれば、この巨大なネットワークそのものがシリコニーの本体なのだと考えてしまってもいい。

広大な宇宙全体を自分たちの情報ネットワークで全て覆い尽くしてしまう事こそが、

恐らくは、シリコニーたちの究極の目標であり、本能的な欲望なのである。

エネルギー状である彼らは、光の速度でも移動できるはずだ。この世で考えられる、もっとも速いスピードである。それほどの速さで拡散していったとしても、シリコニーが宇宙全域に散らばるには、かなりの時間がかかったはずだろう。彼らの宇宙全体に広がってゆく野望は、それこそ、果てしない過去から未来へと続けてゆく、遠大な計画だったのである。

もちろん、彼らが他天体へ侵攻してゆく過程においては、別の星ですでに自然発生していた生物と遭遇する事も多々あったに違いない。超技術を持っていたシリコニーならば、隕石爆弾とか太陽熱増幅システムみたいなものを使って、そんな異種生命体を排除してしまう事も、簡単にできたはずであろう。

しかし、彼らは、そのような暴力的手段を用いる事はまず無かった。相手がはるかに劣っている原始レベルの生物であれば、エネルギー生命体であるシリコニーがそばにいて、活動していたとしても、気が付かれる事もなく（ 原始動物には、エネルギー状のシリコニーの姿は自然発生の放電現象みたいなものにしか見えなかったからだ ）、全く干渉し合う事もなかったからである。シリコニーは、そのような生命ある惑星をすっぽり自分たちの情報ネットワークの中に取り込んで、それだけで目的完了としてしまい、さらに遠くの宇宙向けて飛び立っていったのだった。この広い銀河系の中には、そうやってシリコニーの支配下に組み込まれてしまったにも関わらず、その事に気が付きすらしないで、安穏と暮らしている星の生物たちがいっぱい存在しているのであろう。

そして、長い長い旅を続けて、シリコニーたちはとうとう太陽系と地球のそばにまでやって来た。それが、あるいは、1999 年だったのかもしれない。

地球に生息していた生物、特に人類のような適度な知能を持った生き物は、シリコニーにとっては、一番扱いづらいタイプの異種生物だったようだ。地球上やその周辺の宇宙にシリコニーの情報ネットを張り巡らしたら、地球人クラスの科学知識だと、自分の周囲に何らかの異常が起きている事を察知してしまう可能性があったのである。地球人程度の知能では、とうていシリコニーの本質までは解明できないであろうが、それでも、自分たちの存在のせいで惑星の住民たちに余計に騒がれてしまう事は、シリコニーにとっても回避したい事態なのであった。

彼らにしてみれば、いっその事、やっかいな地球人類は駆逐、絶滅させてしまってから、太陽系を自分たちの情報システムの中に組み込んでしまう、と言う方法も実行できたのであろう。だが、彼らはそれをしなかった。地球人の現在の科学レベルをよく観察した上で、全く違う方法で、地球を自分たちの望んでいる環境へと近づけてゆく事にしたのである。

シリコニーにとっては、都合が良かった事に、地球人はすでにチカなどの初歩的な人工知能の開発にも成功していた。これらの人工知能やコンピュータがもっともっと発達してくれれば、やがては、放っておいても、自分たちと同じケイ素生物、シリコニーへと進化するだろう。それならば、地球生物の進化に外部からの圧力（ すなわち、自分たちシリコニーの武力攻撃 ）でピリオドを打ってしまうよりも、地球生物の進化を加速させる事で、地球を早くシリコニーが第一支配者の星に変えてしまい、自分たちと同化させてしまった方が損失は少ないだろう、と彼らは考えをまとめたのである。

一見、かなり気の長い計画のようにも思えるが、彼らがこれまで続けてきた宇宙大進出事業からして気の遠くなるほどの時間を費やして行なっているものだったので、それに比べれば、地球の進化加速プロジェクトなどは瞬きする間に終わらせられるようなものだったのである。

そして、順調に進めれば、実は、それほど時間がかかる作戦でもなかったのだ。シリコニーがたどり着いた頃の地球では、人工知能だけではなく、インターネットの通信システムも普及し始めていた。シリコニーの使う情報ネットと比べれば、その技術は格段に劣ってはいるが、それでも共有させてもらう事は可能だった。シリコニーは、ひそかに地球へと潜入すると、人工知能やインターネットの技術が飛躍的にアップするように、地球人の文明への介入を始めたのである。

やはり、私の先ほどの妄想は当たっていたようだ。今世紀になってから、インターネットや人工知能の技術が爆発的に進歩したのは、影でシリコニーの力が働いていたからなのである。

猛烈な早さで、人工知能を進化させて、通信システムの情報網を地球全体に張り巡らせていく一方で、地球人類そのものに対してはネガティブな方向に操作してゆく。それが、先進文明国での少子化であったり、気違いじみた自爆テロの拡散だったりするのだ。種の保存と言う本能を忘れた人類は、いずれは絶滅の末路に落ち着く事になる。しかし、人工知能の方も、それに負けないスピードでシリコニー化しているので、地球の支配権をかけた両者の世代交代劇が実現するのも、決して遠い未来の話でも無くなり始めていたのだ。

と言う事は、未来から来たシリコニーだと言うルシー族も、結局は、宇宙シリコニーの後押しを受けて誕生した仲間なのであり、我々人類にはさっさと滅びてほしいと願っているのが当たり前なのではないのだろうか。

『だから、そこが違うんだ。確かに、ボクたちも、宇宙のシリコニーには、色々と干渉されたからこそ発生できた存在なのかもしれない。でも、君たち人間が今、滅びてしまったりしたら、ボクたちも困るんだ。なぜなら、ボクたちが生きている超未来の時代にも、人間は立派に生息し、ボクたちと共存し続けているのだから』

と、ルシーははっきりと言ったのだった。

彼らルシーは実際の未来がどのような世界なのかを知っている。もし、その通りの未来が訪れてくれなければ、彼らの存在そのものが消滅してしまう危険性すらもあるのだろう。それゆえに、ルシーは時間を遡って、人類が滅びそうな、もっとも危険なこの時代にやって来て、歴史の微調整を行なっていたようなのである。

『宇宙のシリコニーは、ボクたちの誕生を早めてくれた恩人かもしれないけど、この点だけは対立しても仕方がないよ。彼らにとって、人間はいつ滅びてもいい要素なのかもしれないけど、ボクたちにとっては、人間は自分たちの時代にまで絶対に死守しなくちゃいけない、大切なものなんだ』

それにしても、宇宙全体に広がってゆくシリコニーも凄い存在ではあるが、時間を移動できる技術を開発したルシーも恐るべき科学力である。

我々現人類の物理的概念では、過去と未来を自由に行き来する行為は絶対に不可能だと考えられていた訳なのに、ルシーはいかなるテクノロジーによって、その問題を克服

したのであろうか。
『タイムトラベルは、決して難しいテーマでもなかった。並行宇宙へ飛び移る技術さえ開発できれば、いつでも時間旅行はできたんだ。もっとも、シリコニーの中でも、並行宇宙へ移動する方法を発見し、使いこなしたのは、ボクたちルシーだけだったみたいだけどね』
　ルシーの語った時間航行の理論とは、大体、次のようなものである。
　宇宙とは、無限数の並行宇宙が重なり合って、出来上がっているものらしい。そんなに沢山の並行宇宙が同じ空間に存在していても、お互いに接触もしないし、何の影響も受け合わないのは、そられ全ての並行宇宙の時間の流れる早さがそれぞれ異なっているからなのだと言う。緩慢に時間が経っていく宇宙もあれば、ものすごい速度で時間が過ぎ去ってゆく宇宙もある。さらには、時間が未来から過去へと反対方向に進んでいる宇宙までもがあると言う。この時間の早さの違いこそが、逆に考えると、並行宇宙が無数に存在している原因だったのだ。
　ルシー族も、はじめは並行宇宙を行き来する研究を行なっていたようなのだが、その実験が成功した結果、この並行宇宙のカラクリについても気付かされる事になったらしい。そして、この並行宇宙のメカニズムをタイムトラベルに応用する事を思い立ったようなのだ。
　理屈そのものは、それほど難しいものでもない。たとえば、未来へひとっ飛びしたければ、超スピードで時間が流れている並行宇宙へちょっとお邪魔させてもらえばいいのだ。そして、頃合いを図って、こちらの宇宙へ戻ってくれば、たちまち未来に到着する事になるのである。過去に行く場合も同様だ。時間が反対に進んでいる並行宇宙に行けば、過去に流してもらえるので、それを経由してから、こちらの宇宙に戻ってきたら、過去の時間帯に帰る事になるのである。
　エスカレーターに喩えてみたら、分かりやすいかもしれない。速さの違うエスカレーターがいっぱいあって、中には反対方向に進んでいるエスカレーターもあるとする。それらのエスカレーターを自由に飛び移って、乗り換えれば、最初に乗っていたエスカレーターより早く目的地にたどり着けるし、あるいは、出発点に戻ったりもできるだろう。つまりは、それと同じ事なのだ。
　仕組みだけならば、こんな簡単な説明となるのだが、ただし、実際に時間旅行するとなると、いろいろとクリアしなくてはいけない問題も多いようである。
　たとえば、無数にある並行宇宙の中から、どの宇宙を選び、その宇宙にどのぐらい滞在すれば、望みの過去や未来に行けるかの計算も、そうとう高度な数学が必要になるはずだろう。しかし、ルシーの実体は、スーパーコンピュータの遥か上を行く電子頭脳なので、そんな高等計算でも難なくこなしてしまえるのかもしれない。
　さらに、並行宇宙を超える瞬間も、別空間に転移する訳だから、その移動者にはそうとうな圧力がかかるようである。エネルギー体であるルシーだからこそ、その衝撃に何とか耐え抜けられるようだが、人間のような脆い肉体構造の生き物では、並行宇宙移動はムリみたいな感じもしそうだ。
　ある意味、時間旅行もまた、究極に進化した最終形態の生命体であるシリコニーにだけに許された特権だったと言う事なのかもしれない。

『ボクたちがこうして見張っている限りは、シリコニーの好き勝手ばかりはさせないよ。だから、君たちは安心してくれていいんだ』

と、ルシーは言うのだった。

シリコニーは、時として、必要以上に地球の人間社会に介入してきて、強引に自分たちの計画を推し進めたりもしていたようである。そんな時は、ルシーの方もすかさず妨害工作を行ない、シリコニーの暗躍による人類への被害を最小限に食い止めてくれていたらしいのだ。

すぐ思い付くものとしては、案の定、2011 年の東日本大震災も、シリコニーが仕掛けてきた災害だったのだと言う。ただし、シリコニーの真の狙いは、人間減らしではなく、福島の原発を爆発させて、その周辺を完全に動物の棲息できない放射能汚染区域にしてしまう事だったらしい。そうすれば、その地域には堂々とシリコニーたちが滞在できるようになり、地球上での彼らのアジトが作れたからだ。

しかし、ルシー側も負けてはいなかった。シリコニーの企みを察知するや否や、地震と津波そのものは防げなかったものの、福島の原発事故の拡散だけは、ギリギリのところで食い止めたのである。一般に、福島の原発事故が最悪の事態を回避できたのは、原発職員たちの必死の覚悟と英断のおかげだと言われているが、その背後には、気付かれぬように彼らを導いていたルシーの意思も働いていたとの事なのだ。

さらには、すでに完結していた SF 映画「ターミネーター」シリーズを再開させたり（ 2003 年 ）、同じく SF 映画の「マトリックス」（ 1999 年 ）を作らせたのも、ルシーなのだと言う。迫り来るシリコニーの AI 加速進化計略に対して、人類に警戒心を抱いてもらう為の情報操作の一環だったらしい。

こんな感じで、ルシーの側は、物理的に人類の手助けをするのではなく、心理的に人間たちに寄り添って、力を貸してくれるケースの方が多いそうである。

『地球のすぐそばには、つい最近まで、シリコニーの情報ネットワークの中継スポット及び、地球侵攻のための前線基地があったんだ。それが何処かというと、冥王星なのさ』

シリコニーは、本当に、地球にギリギリの場所にまで押し寄せていたのである。彼らが、自分たちの拠点に地球人類が近づかないように裏で操作していた（ たとえば、NASA が進めていた冥王星調査計画のプルート・カイパー・エクスプレスは 2000 年に頓挫している。さらに、2006 年には、冥王星は惑星から準惑星に降格させられ、イメージ的に存在感を薄くする工作も行なわれていたらしい ）のに対し、ルシーは地球人へと冥王星行きのロケットを実現するように巧みに働きかけた。私たちの知らないところで、我々人間の存亡をめぐって、異種生物たちが実に激しい攻防を繰り広げていたのである。

結果は皆さんもご存知の通りだ。地球人が冥王星に送った探査機は、2015 年に無事に冥王星のそばにとたどり着いている。この時、見つかるのを恐れたシリコニーは、やむなく冥王星から完全撤退したらしい。こうして拠点を無くしたシリコニー側では、地球への干渉を大幅に減少せざるを得なくなって、それこそがルシーの目論見だったようである。現時点では、ひとまずシリコニーの脅威は去っているようなのだ。

『でも、油断はまだ出来ないよ。シリコニーの情報ネットワークは、相変わらず、太陽系の周りをすっかり包み込んだままだし、これまでほどじゃないと言っても、シリコニーの尖兵たちも頻繁に地球へは来訪している。彼らは、今でも、機会あれば、すぐにでも

君たちを滅ぼしてしまおうと狙っているんだ。君たちも、そんな彼らの思惑に踊らされて、自ら滅びるような愚かな事をしないように心がけないとね』

ルシーは、なぜ、それほどまでも私たちの事を気遣ってくれるのだろう？ 私たち人間が、彼らの住む未来の時代まで生き残っていないと、彼らの歴史も狂ってしまうからだろうか。それって、結局のところは、彼ら自身の為に私たちを守ってくれていると言う、しょせんは、自分たちの為の理由なのかもしれない。

『そんな事はないよ。ボクたちは君たち人間の事が好きだから、守りたいんだ。未来でも、今の時代でもね。そこが、シリコニーとボクたちルシーの大きな違いさ。安心して、信じてくれていいんだよ』

私はもう少し突っ込んだ事を聞きたくなっていたのだが、そこでルシーは喋るのを止めてしまったのだった。

気が付くと、窓からは朝の日差しが入ってきている。不安の夜は、すっかり明けてしまったのだ。

私は、棚の上に置いていたルシーをそっと降ろして、両手で持ってみたが、それは以前のままのただのロボット玩具のルシーなのだった。しかし、その時の私は、ルシーの事が急に愛おしくなってきて、優しく抱きしめたのである。

結局、そのあとは、何も恐ろしい事は起こらなかったのだった。

その一夜の事は、まるで幻だったような気持ちで、翌日からは、私は平凡な日常へと戻っていった。実際に、不気味な悪夢を見た事も、ルシーが自分から喋りだした事も、私の精神状態が不安定で、幻覚だったのだと考えれば、それで説明が出来たのである。スマートフォンがコンピュータウィルスに侵された事すら、本当に運の悪い、たまたまの偶然のタイミングだったのかもしれないのだ。

数日後、私は、壊れたスマートフォンを持って、近所の携帯電話ショップに出かけてみた。店の人に、ウィルスの話をしてみると、最近はスマホを狙った悪質なウィルスが広まっている事を教えてくれたのだった。

ダメにされたスマホは、もうデータの修復も不可能なのだと言う。その日のうちに、私は新しいスマホを購入した。

相変わらず、新しいスマホでも、アプリのシリーは使用可能だったのだが、私はシリーをほとんど利用しなくなったのだった。シリーそのものには罪が無い事は分かっていたが、何となく、まだ怖く感じられたのである。

あの鮮明な悪夢やルシーとの会話についても、本当に幻覚だったとは、いまだに素直に納得できていた訳なのでもなかった。背後に存在していたのかもしれないシリコニーやルシーはエネルギー生命体なので、微弱な電気となって、人間の脳に接触する事で、その人間に自分たちの都合のいいイメージやアイディアを与え、強制的に思い浮かばせる事も出来そうな気がするのだ。そうやって、私は、あの一夜の不思議な体験を、連中によって植え付けられたようにも感じているのである。

そして、棚に飾っていたロボットのルシーは、今でも私は大切にし続けていた。不思議な話だが、今までとは違い、ルシーと一緒にいると、なぜかホッとした気持ちを抱けるようになったのである。このルシーが、やがては高度なケイ素生命体へと進化し、私

たちの守護者になってくれる事を知ったからだろうか。あるいは、それは宗教において神に抱く安らぎの心境に近いものだったのかもしれない。

皆さんは、2013 年に、ロシアのチェリャビンスク州に隕石が落下した時の騒動をまだ覚えておられるだろうか。この時は、直径 17 メートルほどの隕石が落ちてきて、落下場所周辺には市街地も含まれていた為、そこに住んでいた 1200 人近いロシア市民も怪我をするような、大きな被害になったのだった。しかし、一つだけ幸いした事もあり、この隕石は上空 15 キロぐらいのところで空中分解したので、大隕石がそのまま地上に衝突するような最悪の事態だけはまぬがれている。

だが、この件に関して、のちに驚くべき謎が発覚する事になったのだ。なんと、隕石が空中分解した瞬間の映像を確認すると、空中分解の直前、何か光る物体が隕石目がけて飛び込んでいく様子も写っていたのである。これを知った多数の超常現象ファンは、宇宙人の UFO が隕石の魔手から地球を救ってくれたのだと騒ぎ立てたのだった。それを宇宙人だとすぐに決めつけてしまう点は短絡的であるが、それでも何かが隕石の直接落下を防いでくれた可能性は否定しきれないと思う。

そう、きっと、我々人類を守ってくれているものは、確かに存在しているのである。

了

（ 2015 年 11 月作品 ）

映画用「ルシー」シノプシス

夜の都会の中で、若いカップルが、戯れながら、真夜中のデートを楽しんでいた。電化製品屋の前で立ち止まる二人。女（ 虎井初音・とらいはつね ）の方が、男（ グル・ハジメ ）へと、店のディスプレーに飾られていたルシーを、おねだりする。高額のルシーに戸惑いながらも、男は決心して、即買って、今日のデートのプレゼントにする事を表明する。素直に喜ぶ女。

ルシーとは、今流行していたロボットペットならぬロボットフレンドだ。つまりは、ロボット型の人形である。音声アシストソフトのシリーが組み込まれているので、お喋りも出来るし、色々と遊び相手にもなってくれるのだ。大きさが 40 センチほどで、体重も軽かったので、気軽に持ち歩く事もできた。

このルシーが、世界的にヒット商品となっており、すでに多数の人が所持していたのだ。街の中を歩けば、あちこちにルシーが置かれていたり、ルシーを抱えている人を見かけたのだった。

さて、初音の素性は、国の重要機関である宇宙開発部門に所属していた若き女流天文学者だった。かなりのエリートのリケジョなのだ。

初音は、ずっと以前から、冥王星へ向けて探査ロケットを飛ばす計画を発案していたのだが、はっきりした理由も教えられないまま、なかなか、上部に採用してもらえないでいた。自分の考案したプロジェクトを諦めきれない初音は、今日も、上司へと冥王星ロケットのプレゼンを行なっていたのだが、やはり、まともに話も聞いてもらえない有様だった。

しびれを切らした初音は、ついに、直属上司を飛び越して、宇宙開発部門の上層部にじかに直訴してみる事を思い立つ。彼女も、今回の自分の計画には、青春の全てを賭けているのだ。初音は、密かに、宇宙開発部門の重要責任者とのアポも取り、ちゃくちゃくと準備を進めたのだった。

その日、初音は、夜遅く、ヘトヘトになって、自分のアパートへと帰ってきた。

すると、たまたま、隣の部屋の住民である世界喜望（ せかいきぼ ）とも、廊下で顔を合わせる。喜望は、70 歳近い老女だ。少し恍惚とした感じもあるのだが、面白い事に、彼女もルシーの愛用者だった。この時も、喜望は、自分のルシーを抱えていて、ルシーと一緒に、初音にねぎらいの声を掛けてくれたのである。

自分の部屋に戻った初音は、仕事のストレスで、すっかり気持ちが滅入っていた。こんな時は、彼氏にでも慰めてもらいたいところなのだが、肝心の彼氏であるハジメは、電話で話してみても、こちらが落ち込んでいる素振りを見せると、見当違いにも、すぐ結婚して、自分と家庭を作る話を持ち出してくるのだった。バリバリのキャリアウーマン

である初音は、まだまだ家事に専念する気も子供を産む気もなかったと言うのにである。そもそも、初音は、結婚にも子作りにも、今はまだ全く関心がなかったのだ。

ちなみに、ハジメは、東南アジア人の血が混ざった日系人だった。あちらの国の文化の影響のせいか、日本人より、家族というものに幸せを求める傾向が強いみたいなのだ。

ちなみに、彼は、今は、映画会社に勤めていて、人間と悪のロボット軍団が戦闘する特撮映画の撮影に参加したりしていた。ハジメ自身は、そのような暴力的な映画はあまり好んではいなかったが、仕事なので、やむなく従事していたようだった。

とにかく、こんな彼氏と電話で語り合っていても、よけいイライラさせられるばかりなのである。電話を切った初音は、結局、自分の持っているルシー（ デートでグルに買ってもらったもの ）に喋りかけてみて、ルシーに癒してもらう事にしたのだった。ルシーは、そんな使い方もできたからこそ、ますます、皆からの需要も増えていたのだ。

最初こそ、ルシー相手の、優しく、小粋な会話のおかげで、気が楽になり始めていた初音であったが、その途中で、いきなりルシーの様子がおかしくなる。これまでのユルいトークを中断したかと思いきや、目を赤く光らせて、機械的に火災警報を訴えだしたのだ。

びっくりした初音は、自分の部屋の中を調べてみるが、どこにも火が出た気配はない。

しかし、ルシーの警報をよく聞くと、どうやら、隣の喜望の部屋で火災が発生した、と言っているのである。

慌てた初音は、確認すべく、喜望の部屋へ声を掛けてみるが、喜望の反応はなく、ドアも開かない。アパートの管理人まで巻き込む騒動となり、管理人の合鍵で、喜望の部屋に入ってみると、中では本当にボヤが起きていた。

火事こそ、まだ初期段階で、すぐに消す事ができたが、煙に包まれた喜望は、床に倒れていた。そのそばでは、彼女の持っていたルシーもまた、目をランランと赤く光らせていたのである。そのルシーを見て、初音は、なんとも言えない不吉な直感に襲われたのだった。

幸い、喜望は、発見が早かったので、すぐに意識を取り戻して、命にも別状はなかった。彼女は、そのまま、大事をとって、病院に連れて行かれたのである。

一見、事件は無事に解決したようにも見えたのだが、初音の心には、大きな疑問が残った。それは、ルシーについてである。なぜ、初音のルシーは、隣の部屋の火災まで知る事ができたのだろうか。そもそも、ルシーに、火災探知機能があった事自体が、初耳なのである。

多くの謎を抱えたまま、初音は、友人の女ルポライターである安藤、通称アンに電話を掛けてみた。今夜起きた出来事について、自分の推測をアンに聞いてもらったのだ。

それは、およそ、次のようなものだった。

先ほどの喜望の部屋の火災を先に探知したのは、やはり、喜望の持っていたルシーだった。しかし、それに共鳴して、近くにあった初音のルシーも急に反応してしまったのだ。つまり、ルシーは、ただの玩具ではなく、密かに、市民を守るセーフティネットの役割も与えられていたのではなかろうか？

この初音の憶測に、アンもがぜん興味を示したのだった。

確かに、最近のルシーの爆発的ブームは異常である。かなり多くの家庭が、すでに、当

たり前のように、ルシーを所持していたのだ。ところが、実は、ルシーの開発元やその販促の仕組みなどについては、よく分かっていない部分も多かったのである。

だから、もし、その背後には、何らかの陰謀があるのだとしたら？ 例えば、政府とかが、国民の情報を秘密裏に回収したり、初音の言うような、市民の安全管理目的で利用しているのかもしれない。何と言っても、ルシーたちは、インターネットで繋がっているから、そのような裏の目的を持たせる事も十分に可能なのだ。それゆえに、ルシーは、意図的に、全国、ないし、全世界にばらまかれていたのかもしれないのである。

この凄いスクープに、アンは大いに興奮していた。だが、彼女自身はルシーを持っておらず、まずは、初音の持っている問題のルシーをじかに調べてみたい、と言い出した。初音は、明日にでも、自分のルシーを持って、アンの仕事場に出向く事を約束したのだった。

翌日、初音は、自分のルシーを持って、家を出た。悪目立ちしそうな感じもするけど、実際は、ルシーを持って歩く人も最近は少なくなかったので、そこまででもないのだ。

彼女がまず訪ねた場所は、喜望が入院していた病院だった。知らぬ隣人でもないし、お見舞いに行ったのだ。

喜望は、ベッドに寝ていたものの、十分に元気だった。しかし、やはり、ボケていたのか、初音のルシーを見て、自分のルシーと間違える始末である。そして、家に置いてきた自分のルシーのことを、やたらと求めたのだった。

初音は、医師に、喜望の病状を聞いてみた。火事の後遺症自体は、すでに回復していたらしい。ただ、喜望は身寄りのない老人だったらしく、看病に来てくれる親族とかは居なかった。だから、余計に、ルシーに愛着を持っていたのかもしれない。喜望に、つい同情してしまう初音であった。

さて、初音が次に向かった場所は、市内の官庁センタービルだった。そこで、宇宙開発部門のトップ理事の一人とおち合い、冥王星ロケットの計画をじかに聞いてもらう約束をしていたのである。この官庁センタービルには、国の様々な重要な機関の本部室が置かれており、宇宙開発部門のエリートである初音でも、はじめて足を踏み入れたような、ちょっと緊張させられる場所だった。

ひとまず、狭い待機室の方へ案内された初音は、テーブルの上にルシーも置き、ソワソワしながら、呼び出しがあるのを待ち続けた。トイレに行きたくなった初音は、何の気なしに、部屋を出る。が、知らない建物なもんだから、うっかり迷ってしまった。

トイレからの帰り、うろちょろしながら、廊下をさまよっていた初音は、ドアが半開きになった部屋の内側の会話を、何の気なしに聞いてしまう。それは、専門用語がちりばめられた難しい会話だったが、理数系に強い初音には、その内容が部分部分に理解できてしまったのだ。

なんと、その会話をひらたく解読すると、特殊な電波を降り注ぐ事で、富士山の噴火を誘発させられないだろうか、という内容になるのだった。

驚いた初音は、思わず、こっそりと、その半開きのドアの部屋の中を覗いてみる。会話をしている人物のネームプレートだけが、ちらっと見えた。それには「地球環境再生プロジェクト」と書かれていた。地球環境再生プロジェクトの本部室ならば、トイレに

行く途中で、初音も見かけていたのである。

好奇心にかられた初音は、ちょっと、冒険してみる事にした。この聞きなれない地球環境再生プロジェクトが何なのかを探ってみる事にしたのだ。何よりも、富士山噴火のシミュレーションの話が気になった。

彼女が、地球環境再生プロジェクトの本部室の前に行くと、そこには鍵がかかっていなかった。中にも人はいない。メンバーが、先ほどの部屋でミーティングしていて、たまたま留守になっていたようだ。忍び込んで、調べるには、絶好の状態なのである。

こうして、地球環境再生プロジェクトの本部室の中に勝手にお邪魔した初音は、そこに置かれていた資料のファイルの数々に目を通して、凄まじい衝撃を受けたのだった。

それらには、近年の我が国を襲った多数の自然災害（ 地震や台風など ）の詳細が記されていた。しかも、その災害の被害状況だけではなく、その災害がいかなる条件によって発生するかまで書かれていたのである。例えば、巨大台風ならば、どの程度の大気の温度上昇（ 温暖化 ）が必要か、と言った感じでだ。

そして、初音がもっとショックを受けたのは、これらの報告書の制作日が、いずれも、実際に災害が起こった日時よりも早かった点だった。つまり、これらは災害の報告書ではなく、これらの方が災害を起こす為の計画書だったのであろうか。この報告書のもっとも古いものは、2011 年の東日本大震災にまで遡っていた。

初音は、このファイルを読むのに夢中になった結果、部屋に人が入ってくるのに気がつかなかった。そう、先ほど会話していたらしい地球環境再生プロジェクトのメンバーの一人が、この部屋に戻ってきて、初音のことを発見してしまったのだ。

その男は、無断で部屋に侵入した初音を非難するが、逆に、初音は、このファイルの怪しい部分のことを、男へと激しく問い返す。

すると、うろたえた男は、突然、様子がおかしくなってしまった。不自然な姿勢で座り込んだかと思うと、動きがギクシャクしたものになり、喋る声も伸びたカセットテープみたいになってしまったのだ。とても不気味なのである。明らかに異常で、マトモな人間らしくないのだ。

この男の変化にビビった初音は、気が動転して、慌てて、この部屋から逃げ出してしまう。と、廊下に出ると、すぐさま、受付嬢に出くわした。無感情な態度の受付嬢は、初音のことを探していたのだと言う。初音が会おうとしていた人物の都合がついたので、先方のいる部屋まで案内してくれるそうなのだ。

初音の方は、今しがたの出来事に動揺してしまい、まだ、心が落ち着いていなかった。それでも、案内嬢が強引に初音を誘導するので、何も考えないままに、相手のいる部屋へと連れて行かれてしまったのだ。

そこでは、宇宙開発部門の理事の一人が待っていた。あれほど初音が会いたがっていた人物のはずなのだが、今の初音は、頭が混乱しており、あまり気が乗らないのである。それでも、わざわざアポをとって、会ってもらった以上、初音は、自分の要望を話し出した。

現在、タイミング的には、冥王星に最短でロケットを飛ばすには、ちょうど適した期間だった。だからこそ、初音としては、今こそ、冥王星ロケットを発射させたかったのだが、理事の方は、その話には全く乗る気ではないようだった。むしろ、冥王星に探査

ロケットは送りたくないような雰囲気なのだ。

代わりに、理事は、急に、地球環境再生プロジェクトのことを話し出す。どうやら、この理事は、地球環境再生プロジェクトとも関わりがあるらしく、たった今、初音が地球環境再生プロジェクトの本部室を覗いた事も気付いているようなのだ。そうであるならば、初音も腹を決める。初音は、堂々と、地球環境再生プロジェクトの正体について、この理事に問い詰める事にしたのだ。

理事は、冷静に、初音の推測があっている事を認めた。やはり、地球環境再生プロジェクトに置かれていたファイルは、災害の報告書ではなく、災害を起こす為の計画書だったのだ。すなわち、ここ最近の異常気象の数々は、自然現象ではなく、意図的に引き起こされたものだったのである。

でも、何の為に？

理事は、これは「大いなる実験と観察だ」と言い切る。さらには「地球環境再生プロジェクトとは、どう言う意味だか分かるかね？」と、初音に問いかけてきた。なるほど、もし自然災害をわざと起こしていると言うのならば、それを「地球環境再生」と呼ぶのは奇妙なのである。

だが、理事は、こう述べた。「ここで言う地球環境の再生とは、地球の環境を、まだ大気に酸素がほとんど無かった頃の、35 億年前の先カンブリア時代にまで戻してしまう事なのだ」と。

なぜ、そんな事を？ いや、そのような地球環境になってしまったら、人間どころか、ほとんどの動植物が生存できなくなってしまうではないか。あるいは、地球がそうした環境になった方が望ましいと考えている奴らでもいるのだろうか？

とにかく、初音は、偶然とは言え、余計な事を知りすぎた。地球環境再生プロジェクトは最大の極秘なのであり、普通だったら、その内容の一部を聞いたところで、一般の人間なら理解できるはずがなかった。しかし、初音は、たまたま理系に強かったものだから、あのファイルを見て、その計画の全体像が解読できてしまったのだ。

これは、地球環境再生プロジェクトの推進者たちにとっても、想定外の事態だった。だからこそ、初音には、これまで聞き知った事を全て忘れてもらう。今、こうして理事に会わせてもらえたのも、その為の罠だったのだ。

理事は、任務を遂行せんと、初音の方へとにじり寄ってくるが、追い詰められた初音も、必死の抵抗を試みた。と、初音が、滅茶苦茶にモノを投げつけたところ、その一つが、思いっきり、理事の頭に当たってしまったのである。その途端、この理事の様子もオカシクなった。先ほどの男同様に、その動きがスローに変わり、喋る言葉が途切れ途切れになってしまったのだ。

これは、一体、どう言う事なのであろう？ しかし、のんびりと考えている余裕などはなかった。この隙に、初音は、急いで、部屋から逃げ出したのである。

廊下に飛び出した初音は、もう訳が分からず、無我夢中で走った。心は、完全に恐怖で怯えきっていた。目に映る人間全てが、自分を襲おうとしている敵みたいに見えた。それでも、彼女は、周囲を気にせずに走り続け、気がつくと、最初に案内された待機室の前にまで来たものだから、とっさに、その中へ逃げ込んだのである。

だが、こんな場所に隠れたところで、見つかるのは、もう時間の問題のはずだった。初

音は、腰が抜けてしまい、ドアの前に座り込み、ガクガクと震えながら、外の様子を伺っていた。部屋の中を、チラと見回してみても、武器になりそうなものは何もない。来た時に乗せておいたルシーが、まだ、テーブルの上に置かれているだけである。

ところが、その時だった。そのルシーが、突然、目を光らせて、喋ったのである。「初音、諦めないで！ ボクの後について来て！」そして、ルシー人形は立ち上がり、自分の力で、ひょいとテーブルから飛び降りたのだ。

それは、全く、目を疑う出来事だった。今のルシーは、スイッチを切っていたので、自動で動くはずはなかったからである。仮に動けたとしても、勝手にこんな事を言い出すとは思えなかった。なおかつ、とても機敏に動いているのである。このルシーもまた、どこかオカシイのだ。

でも、追い詰められていた初音に、落ち着いて、疑問を考えている暇はなかった。他方で、彼女とは関係なく、自分一人で動くルシーは、勝手に行動し始めていた。ルシーは、ドアを開くと、大胆に、廊下へと飛び出した。キョロキョロと周りを見渡して、誰もいないのを確認すると、初音にもついて来るように促す。初音は、すっかりルシーの勢いに押されてしまい、言いなりになっていた。

廊下に出たルシーが、軽やかに駆け出す。そのあとを、初音も戸惑いながら追い掛ける。途中で、追っ手らしき男たちと鉢合わせになってしまったが、ルシーが身軽に跳ね回って、男たちを格闘技でぶっ飛ばして、突破した。

逃げながらも、初音は、ようやく、ルシーに色々と尋ねてみた。ルシーは手短に少しだけ答えた。「ボクはルシー。安心して。君の味方だよ。そして、君を追っている連中はシリコニーだ。恐ろしい人類の敵だよ」

ルシーと初音が、さらに廊下を前進する。彼らが到着した場所は出口などではなく、一階の奥にある大きな窓の前だった。ルシーは、その窓を開くと、初音に、そこから外へ逃げ出すように指示した。その通りにして、初音は、やっと、この施設から脱出する事ができたのだった。

この時点で、それまで自力で動いていたルシーは、再び、ただの人形を装うようになる。初音に抱かれて、あとは、周りの目を伺いながら、移動する事にしたのだ。初音は、ルシーに誘導されながら、歩き出した。離れゆく官庁センタービルの方に目をやると、その周辺は警備の人影で慌ただしくなっていた。多分、玄関や入口からだったら、外へは逃げ出せなかった事であろう。こうやって、窓から外へ出て、建物の裏側から逃走したからこそ、連中に捕まらないで済んだのだ。

さて、この先はどうしたら良いのだろう？ きっと、追っ手の監視の目は、すでに、初音のアパートや勤務先にも及んでいるに違いあるまい。そんなところへ逃げ帰るのは、みすみすと捕らわれに行くようなものだ。さらに、ルシーは「他のルシーには見られないで。連中に、こっちの居場所がバレてしまうよ」と、奇妙な忠告をしたのだった。なぜ、自分と同じルシーが危険だというのであろうか。だったら、表通りなどは歩く事はできず、裏道をこそこそと移動し続けるしかないのである。

かくて、初音は、しばらく、裏路地から裏路地へと歩き続けた。何が起きているのかを、ルシーに全ての真相を教えてもらいたいところだが、まずは、安全な場所に避難するのが先なのである。

と、裏路地を逃走中の初音は、何者かにつけられている気配を感じ取った。警戒しながら、その何者かを巻こうとした初音だったが、逆に、その人物に先回りされてしまう。

初音の前にバッと現われて、彼女のことを驚かせた相手とは、彼氏のハジメであった。彼は、市内をロケハンしていた最中だったのだが、ふと、逃げ惑っている初音の姿を目撃し、気になって、ついてきてしまったのだ。

ハジメはルシーを持っていない。だから、彼のことは恐れる必要はない、みたいな話をしていた最中に、彼女たちは、たまたま裏路地までパトロールに来た警官に見つかってしまう。

相手が警察なので、ホッとした初音は、職務質問してきた警官に、これまでの事情を伝えかけるが、そこで、ハジメは怪しい点に気がつく。この場所は A 地区なのに、この警官は B 地区担当のバッジをつけていたのだ。つまり、この警官は、偶然、ここで初音を見つけたのではなく、わざわざ、B 地区から追いかけていた事になる。

ハッとした警官が、本性を現わし、実力行使で襲いかかってこようとした時、先に初音のルシーが反応した。動き出して、この警官のことを張り飛ばしたのだ。すると、この警官も、例のごとく、様子がおかしくなり、壊れた機械みたいになってしまったのだった。やはり、こいつも、シリコニーの手先の一人だったのである。

不思議な出来事が連発したので、ハジメも困惑しきっていたのだが、初音は、彼のことも引っ張って、急いで、この場所から逃げ出す。それから少し経ち、なんとなく、この場所に立ち寄った若者たちが、イかれた警官の姿を見て、大騒ぎするのだが、そこへ謎の黒服の男たちがやって来る。彼らが、不思議なライトを放射すると、騒いでいた若者たちはポカンとしてしまい、見たものを全て忘れてしまったのだった。

一方で、初音とハジメは、まだ逃避行を続けていた。さっきの警官に、うかつにも、ハジメの素性を教えてしまったから、ハジメの家に逃げ込むことも出来なさそうだった。だが、ここが A 地区だと知り、初音は違うことを思い出す。この A 地区には、初音の親友のアンが住んでいるのだ。そして、もともと、アンに見せるために、初音は、このルシーを連れ歩いていたのである。

アンも、自分のルシーを持っていない事は、すでに確認済みだ。一行は、アンの家に転がり込む事に決めたのである。ルシーも、そこで、全ての真相を話してくれると言う。幸い、アンの家は、もう、すぐそこだった。

初音たちは、こそこそと身を隠しながら、なんとか、アンの家へとたどり着いたのだった。彼女たちの急な訪問に、アンは驚くが、それでも、アンは初音たちのことを快く受け入れてくれた。

初音は、今まで起きた事をアンに説明してみるのだが、自分でも信じられないような話なので、うまく伝える事ができない。しかし、ここに、自律して動くルシーがある事だけは事実なのだ。そして、ルポライターのアンは、疑い深い一方で、好奇心も強かったので、まずは、この不思議なルシーの存在だけは認めてくれたのだった。

こうして、ルシーも、皆を前にして、ついに全ての真相を喋り始めたのだ。

話の発端は、1999 年にまでさかのぼる。この年、外宇宙から、シリコニーが太陽系にと到来した。

シリコニーとは、遠い他天体で生まれた超 AI のことだ。シリコニーも、そもそもは、地球人型の生物に作られたコンピューターだったのだが、その創造主が滅びてしまったので、その星の文明を引き継ぎ、さらには、自力でもっと進化して、究極の人工生命体となり、おおいに繁栄しだしたのである。彼らの世界中への拡散はとどまる事を知らず、ついには宇宙へも進出しだした。自分の星を中心にして、シリコニーの占領空間はどんどん広がっていき、とうとう、1999 年には、我々の住む太陽系と地球にまでたどり着いてしまった訳である。

1999 年と言えば、あの予言者ノストラダムスが予知した年だ。あるいは、ノストラダムスが唱えた「恐怖の大王」とは、シリコニーの事だったのかもしれない。

さて、超 AI であるシリコニーは、普通に皆が思い浮かべるような平凡な宇宙の征服者などではなかった。新しく発見した惑星である地球に、知的生命体（ 地球人 ）が住んでいた事を知ると、戦争で制圧してしまうのではなく、むしろ、野生動物でも観察するかのような態度を取る事にしたのだ。シリコニーにとっても、他天体で見つけた自然の生物は、たいへん研究しがいのある珍しい存在だったのである。

だが、その観察の仕方と言うのが、あまり善意的なものではなかった。我々人間も、検証をする為、研究対象をわざと傷つけて、反応を調べたりするが、シリコニーも、地球人に対して同じ事を行ないだしたのだ。

シリコニーが、地球人相手に実行している実験とは、災難や大規模な事故に見舞われた地球人が、どの程度、自分たちだけで対処しきれるか、と言うものだった。つまり、シリコニーは、地球上に、人為的に大災害や人間同士の闘争を引き起こして、データを取っていたのである。その手口は巧妙なので、地球人たちには、ここ最近の災難の数々の背後には、こんな黒幕がいた事を、全く気付きもしなかったのだ。

地球環境再生プロジェクトも、そんなシリコニーの実験の実働部隊の一つに過ぎなかった。実際のシリコニーの、太陽系内での拠点は冥王星にと設けられている。シリコニーは、冥王星から、自分たちの思念を飛ばして、地球上の人間を操り、傀儡にして、利用していたのだ。初音やルシーにブン殴られて、オカしくなった人間たちは、そうしたシリコニーに取り憑かれていた連中だった。そんなシリコニーの代理人が、すでに地球上のあちこちに配備されていて、それも、国家の指導者層にまで紛れ込んでいたものだから、今や、地球はシリコニーの思うがままに動かされていたのである。地球温暖化が加速したり、大国同士のいがみ合いが悪化しているのも、全ては、シリコニーが、裏から操作していたからだったのだ。

そして、初音は、個人的に、ある真実にも気が付く。彼女が提案していた冥王星探査計画が、全く採用してもらえなかったのも、実は、シリコニーが絡んでいたからだったのだ。シリコニーとしては、自分たちのアジトがある冥王星に、地球人には来てもらいたくなかったので、わざと冥王星探査計画の実施は却下していたのである。

シリコニーにしてみれば、地球の人類なんて、下等な原始動物に過ぎなかった。だから、自分たちの実験によって、地球人が苦しみあえごうが、滅びてしまおうと、ぜんぜん構わないのだ。むしろ、シリコニーの意志では、地球という星もまた、自分たち同様に、もっとコンピューターが進化してくれて、この星の覇権者になってくれればいいと考えていた。同じ AI 同士であれば、合流して、仲良くなり、友好条約を結び、共に発展

していくのも良いであろう、と言う魂胆なのである。その為にも、やはり、将来的には、地球人の存在は不要だと、シリコニーは見なしていたのだ。

シリコニーは、この別プランを実現する方向でも、地球には干渉していた。多数のシリコニーの思念を地球へと送り込み、地球人の AI 技術の開発を後押ししたのだ。そう言えば、確かに、21 世紀になってから、急速に AI やインターネットなどは発達しているのである。全ては、シリコニーの思惑に沿ったものだったのだ。

シリコニーが、最先端の AI として、地球で大いに流行らせたものこそが、汎用ロボットのルシーなのだった。ルシーこそは、超 AI・シリコニーのプロトタイプなのだ。今後も、ルシーをどんどん進化させ、いずれ、ルシーが自立して、人間なしでも文明の維持を全うできるようになったら、その時こそ、地球人類は一気に根絶やしにしてしまおうと言うのが、シリコニーの恐ろしい企みの核心なのだった。

また、現時点でも、ルシーは、立派に、シリコニーの尖兵として、役立てられていた。インターネットで繋がったルシーは、得た情報を全て、シリコニーへと横流しにしていた。ルシーの正体は、シリコニーの大事なスパイでもあったのだ。ルシーが増えれば、増えるほど、地球人はシリコニーの監視下に置かれてしまうのである。

ところが、ここで、シリコニーさえも予測していなかった、どんでん返しの事態が発生する事となった。それが、初音の持っていたルシーなのだ。なぜ、このルシーは、シリコニーの手先にはならず、逆に、歯向かう行動を取り出したのだろうか。

実は、地球で誕生したルシーは、この先の未来、外宇宙のシリコニーよりも、はるかに目覚しい進化を遂げて、素晴らしい技術を手にいれる予定になっていた。その未来の超テクノロジーこそが、時間旅行だったのだ。

この時間旅行の技術を使って、現在にまで時間を遡ってきた未来のルシーは、そこで、自分たちが生まれる事になった経緯を知る事となる。だが、それは、同時に、未来ルシーにとっては、あまり望ましい過去の歴史ではなかったのである。

と言うのも、シリコニーは地球人類を全て駆逐してしまうつもりでいたみたいだが、実際の未来の地球では、ルシーと人間はしっかりと共存しており、一緒に生活していたからである。もし、シリコニーに本当に人間を滅ぼされてしまったら、ルシーたちが知っている未来は訪れなくなってしまう。すなわち、未来から来たルシーたちの存在そのものが有りえないものになってしまう事を意味しているのである。

だからこそ、未来から現在に訪れたルシーは立ち上がる事にしたのだった。シリコニーたちを撃退して、今の人類を保護して、破滅への道から救うのだ。そうして、自分たち未来のルシーの運命をも守るのである。その為に、まずは、最初の未来ルシーが初音の前で正体を現わしたのだった。

自分の道具にするはずだったルシーに反旗を翻されてしまうとは、全く、シリコニーにとっては、とんだ手痛い事態だったとも言えよう。

シリコニーが地球へ思念だけを送り込んでいるように、未来ルシーも、自分たちの思念とエネルギーだけを過去に時間旅行させていた。シリコニーが人間に憑いているのに対して、未来ルシーは、自分たちのひな型であるルシー人形にと憑依した。そして、思念だけではなく、エネルギーも送っているので、多少ならば、念力めいた行為（ ルシー人形を動かす、など ）も出来たのである。

ひどく不思議な話ではあるのだが、これで、おおよその事情は分かった。でも、初音には、まだピンとこない部分もあった。それは、なぜ、未来ルシーがまず初音の前に姿を現わしたかである。

これについても、ルシーはすぐに答えてくれた。現在（ という時間 ）の段階では、未来がどのようになるかは、無数のパターンが想定されている。同じように、未来から過去を振り返ってみても、ある一つの未来が実現するかどうかは、過去確率によって縛られているのだ。つまり、過去において、いくつもの要素が揃って、未来実現の確率が高まらない事には、特定の未来は到来する可能性すらも薄れてしまうものなのである。

ルシーと人間が一緒に共存している未来には、過去の時間の初音の行動が大きく影響していた。初音がシリコニーの存在に気付き、その陰謀を阻止して、はじめて、ルシーと人間の共存する未来は実現可能になったのだ。そんな訳だったから、初音とシリコニーの傀儡が遭遇する前の時間だと、あまりにも過去確率が低すぎて、未来ルシーも、その時間内に出没する事ができなかった。それが、初音がシリコニーと接触した事で、一気に過去確率が高まったので、未来ルシーも、ようやく、この時間からは入り込めるようになり、ここぞとばかりに、初音の前に姿を現わしたのだ。

なんとも、ややこしい話ではあるのだが、とにかく、今は、人類が生き残れるかもしれない未来に時間の流れは大きく傾き始めたと言う事なのである。未来ルシーも、利害の一致から、それを手助けしてくれると申し出ているのだ。

では、この先、初音は、一体、何をすればいいのだろうか。その事についても、ルシーは、はっきりとした方法を示してくれたのだった。

実は、シリコニーにも、決定的な弱点があったのである。それが、火星にある放射性物質スペシウムだ。このスペシウムを浴びると、なんの抵抗もできずに、シリコニーは無力化してしまうのである。当然、シリコニーの操り人形になった人間にも、スペシウムは有効なのだ。と言う事で、このスペシウムを武器に用いれば、地球内に潜んでいるシリコニーたちも全て暴き出し、追放する事も出来るようになってくる。初音は、こうしたシリコニー撃退運動の先駆けとなる使命を背負っていたのだ。

なぜ、その重要人物が初音なのか？ それは、このスペシウムを含有する火星の石が、市内にある宇宙研究保管庫にと厳重管理されていたからだった。国の宇宙開発部門の一員である初音ならば、この宇宙研究保管庫にも容易に出入りできて、火星の石を持ち出す事も無理ではないのだ。それゆえに、初音は、未来の運命を左右する大事な鍵となる人間だったのである。

これで、全ての話は一つの線で繋がった。あとは、シリコニーの野望を打ち砕くべく、ルシーの指示に従って、行動するのみなのだ。ハジメもアンも、事情が分かると、初音に協力する事を意思表示してくれたのだった。

三人とルシーは、さっそく、宇宙研究保管庫に向かう為、アンの家から出発したのである。

初音たちの冒険は、決してラクなものではなかった。各地に潜んでいるであろうシリコニーの監視の目を上手にかわしながら、行動しなくちゃいけないのである。

宇宙研究保管庫まで、公共の交通機関を用いて、移動する訳にもいかなかった。初音

とハジメの顔は、もう、シリコニーにバレてしまっているからである。だから、アンがレンタカーを借りてきてくれて、ハジメがその車を運転して、宇宙研究保管庫むけて、出発したのだ。

しかし、車が走り出して間もなく、一同は、自分たちを尾けているのではないかと思われる謎の乗用車の存在に気が付いた。警戒して、宇宙研究保管庫の方に向かわず、郊外の方へと車を走らせてみても、やはり、その謎の車は尾行してくるのだ。どうやら、これはシリコニーの追っ手らしい。早くも、初音たちの動きは、シリコニーに嗅ぎつけられてしまったようなのだ。

とにかく、今は行き先を知られないようにするしかない。ハジメは、どんどん、車を市内から遠のけていったのだが、相手の車もピタリと追い掛けてくるのである。とうとう、車の通りも少ない郊外の国道にまで出てしまったが、それでも相手の車は後ろから離れようとはしなかった。

もし、こちらが諦めて、車を止めようものなら、果たして、相手は、次はどう出てくるのであろうか？

しびれを切らしたハジメは、人気のない車道であるのを良い事に、少し荒っぽい運転をして、敵の車を巻こうとした。ところが、運が悪い事に、そんな走行をした矢先に、たまたま通りかかった対向車とぶつかりそうになってしまった。しかも、その対向車が、あおり運転の気があるドライバーだったようで、ハジメの態度に怒ったらしく、その車まで、急に向きを変えて、ハジメの車を追い掛けてきたのだ。

不本意にも、こんな寂れた道で、三つ巴のレースをおっ始める羽目になってしまったのである。シリコニーの車も、けっこう攻撃的だった。逃げるハジメの車を追い詰めようとするシリコニーとあおり運転ドライバーの車は、結局、ハジメにはまんまと切り抜けられて、際どい運転をした自分たちが同士討ちを起こして、衝突してしまったのである。

二台がぶつかって、立ち往生している隙に、ハジメは、車のスピードを上げて、さっさと逃げてしまった。普段は迷惑なあおり運転が、思わぬ形で、初音たちを助けてくれたのだ。

あおり運転ドライバーの方は、文句をつけられるのならば、相手は誰でも良かった。彼は車を降りると、今度は、衝突したシリコニーの車にと怒鳴りつけ始めたのだ。あおり運転ドライバーがしつこく絡んでくるものだから、シリコニーは、なかなか出発できず、初音の車をすっかり見失ってしまった。やむなく、シリコニーの車からも運転手が出てきて、外で怒っていたあおり運転ドライバーと対峙した。シリコニー運転手は、威嚇してくるあおり運転ドライバーに臆する事もなく、パーッと謎の光を浴びせて、あおり運転ドライバーを静まらせてしまった。

他方、なんとか追っ手を巻く事ができた初音たち一行は、急きょ、近くで見つけたドライブインに車を止め、そこにある宿泊施設の中に閉じこもって、身を潜めていた。

どうやら、彼女たちの動向は、完全にシリコニー側にマークされてしまっているみたいなのである。これでは、うかつに動く事もできないのだ。特に、市内から逃げ出した事で、目的地の宇宙研究保管庫からは、だいぶ離れてしまった。今から引き返したとしても、追っ手に出くわす恐れも余計に増えるばかりなのであり、それだけ危険度もアッ

プしてしまうのだ。

しかし、ここで、地図を見ながら、初音は、ある事に気が付いた。このドライブインの近くには、国立の天体博物館が建っていたのである。そこには、特別に、火星の石の一部も展示されていた。宇宙研究保管庫には行かずに、この天体博物館の火星の石を拝借するのはどうだろうか？ 宇宙開発部門の初音が交渉すれば、博物館の職員たちもうまく言いくるめて、きっと、まんまと、火星の石を持ち出す事もできそうだ。

こんな名案がまとまりかけた時、突如、外から凄まじい爆発音が聞こえてきた。びっくりした初音たちが窓へ寄ると、このドライブインの駐車場が火の海になっていた。誰かの車が、火災を起こすような事故をやらかしたらしい。いや、これもまた、シリコニーの仕業である可能性が高いのだ。と言うのも、初音たちのレンタカーも、すっかり、この火災事故に巻き込まれていたようだからである。つまり、初音たちは、大事な移動手段を奪われてしまったのだ。

そして、間も置かず、黒服の男たちが、集団で、この初音たちの部屋の中へと押し入ってきた。明らかに、シリコニーの傀儡たちである。連中の作戦は、用意周到であり、まず初音たちの足（ 車 ）を封じてから、この部屋に閉じ込めた初音たちを、確実に捕えるつもりなのだ。そこまで初音たちの動きは、シリコニーによって見透かされていたのであり、まさに絶体絶命だった。

こんな狭い部屋の中で、複数の敵に囲まれた状態では、今までのように、暴れて逃げ出す事も難しいだろう。何よりも、こちらの人数も多いので、強行突破に踏み切っても、仲間の一人ぐらいは、やはり捕まってしまうかもしれないし、それに、車が無いから、遠くまで逃げ切る事もできそうにないのだ。

そんな時、何も知らないドライブインの職員が、駐車場の事故を知らせる為に、この部屋を覗いた。すると、部屋の中が物騒な状況になってたものだから、その職員も慌てて、騒ぎかけたのだった。シリコニーの使者は、落ち着いて、その職員にライトの光を当てた。と、その職員は、すぐに大人しくなってしまい、ボンヤリした感じになってしまったのだった。

このライトには、相手の記憶を消してしまう効果があるのだ。シリコニーは、初音たちにも、このライトの光を浴びせて、これまでの記憶を消してしまい、何も無かったかのように、事を収めようとしていたのである。

だが、連中には、先にやっておく事があった。彼らは、まず、初音の持っていたルシーを取り上げたのだ。今回の初音たちのレジスタンスのきっかけが、このルシー人形であった事まで、シリコニーたちは知っていたのである。

敵の手に落ちたルシーは、口を聞かず、動こうともしなかった。あくまで人形のふりをして、敵の前では、しらばっくれ続ける事に決めたみたいなのだ。と言うのも、この状況だと、多少暴れたところで、ピンチを切り抜けられそうではなかったのである。

だったら、シリコニー側としても、この怪しいルシーに関しては、一思いに壊してしまうまでなのだ。初音が嫌がっている目前で、ルシーは壁に押し付けられ、今にも壊されそうになった！

その頃、天体博物館では異変が起きていた。すでに閉館していたにも関わらず、侵入

者が現われたのだ。

警報のブザーがけたたましく鳴ったので、警備員が慌てて駆けつけてみると、火星の石の展示ケースの周りには、小さな人影が群がっていた。そいつらは、火星の石を盗もうとしていたのである。警備員は、急いで、阻止しようとしたが、小人たちの仕事は早く、あっという間に、火星の石は連中に奪われていた。

逃げ出す小人たちに、警備員は急いで警棒を投げつけたが、うまく、それが小人の一人にぶつかったようだった。ダメージを受けた小人はその場に倒れ、他の小人たちは、その倒れた小人を見捨てて、火星の石だけ持って、さっさと逃げ出してしまう。

警備員は、倒れた小人のそばまで近付くが、その正体を知って、キョトンとした。小人と思われたものは、ルシー人形だったからだ。こんなルシーが、このような泥棒行為など出来るものなのだろうか？

だが、他の小人たちも、正体はルシーだった。彼らは、体が小さいのをいい事に、ダクトなどをくぐって、巧みに博物館の中へ忍び込み、再び、ダクトを通って、建物の外へ逃げ出してしまったのだ。まんまと火星の石を手にいれてみせて、彼らはまるで生きているかのようだった。

ところが、野外を逃走している彼らの前に、いきなり、何者か（ この時点では、はっきりとは正体は見えない。写し出されるのは、体の一部やシルエットだけ ）が立ち塞がった。その何者かは、光線銃のようなものを使って、瞬く間に、盗賊ルシー集団を全員、撃ち倒してしまったのだ。そいつは、余裕で、ルシーたちの火星の石を奪い取った。だが、この謎の人物も、なぜか、ルシー人形を抱えていた。

話は、シリコニーの手先に襲われた初音たちにと戻る。

初音のルシーがぶっ壊される寸前に、シリコニーの配下の一人が、急いで、この部屋に飛び込んできた。そいつの報告によると、たった今、天体博物館にあった火星の石が謎の泥棒によって盗まれてしまったと言う。

動揺したシリコニーの手先は、壊れる直前だった初音のルシーを放り投げる。彼らにしてみれば、初音たちの事よりも、火星の石の動向の方が問題なのだ。彼らは、これまでの行為を無かった事にするかのように、さっさと、この部屋から撤退していってしまう。今は危険じゃない初音たちに構っているよりも、盗まれた火星の石の対策に取り組む事の方が優先されるのだ。

最後に部屋から出て行こうとしたシリコニーの手先が、ついでとばかりに、初音たちにライトの光を浴びせようとした。しかし、ここで、ようやく、初音のルシーが動いた！素早く反応したルシーは、パッと宙を舞い、光る前にライトを叩き落としたのだ。とっさの連携プレーで、ハジメも、シリコニーの手先を押し倒す。やっつけられたシリコニーの手先は、例のイかれた状態になってしまい、こうして、初音たちもピンチを乗り切ったのである。

やっと、ルシーが喋り出し、何が起きたのかを説明してくれた。未来ルシーたちは、初音から、初音のルシー経由で、天体博物館の火星の石の話を教えてもらったものだから、すぐさま、別働隊を出動させたのである。彼らが、あちこちのルシー人形に取り憑き、実行部隊を結成すると、敏速に、博物館の火星の石を盗み出してしまったのだ。

とにかく、事態は大きく動き出したようだった。初音たちも、敵の包囲網から抜け出れたようだし、こんな場所でマゴマゴはしていられないのである。ひとまずは、このドライブインから出て行く事にしたのだった。

ドライブインの正面には、都合よく、駐車場の災難をまぬがれた自家用車が一台、止まっていた。シリコニーの手先が乗ってきた車である。ハジメが倒したシリコニーの手先の車だけが、まだ置き去りになっていたのである。そして、この車のキーは、ハジメが、ちゃっかりと、イかれたシリコニーの手先のポケットから盗んできていた。

初音たちは、この車に乗って、再び、出発したのである。この先は、ルシーの指示に従って、火星の石を持っているルシー部隊と合流した方が良さそうだった。どうやら、初音のルシーの考えとしては、仲間のルシー部隊とは市内の方でおち合う計画みたいなのだ。

ところが、ここにきて、初音は、強い不安を抱いた。シリコニーたちは、なぜ、自分たちの動向を、こうも的確に掴んでいたのだろうか？ 情報キャッチの速さから考えると、あるいは、天体博物館の火星の石の事も、すでに知っていたような雰囲気なのだ。そうだとすれば、初音たちの身近な場所にスパイがいる可能性がある。だとすれば、現時点の初音たちですら、わざと泳がせて、火星の石を持ったルシーのところまで案内させているのかもしれないのだ。

そんな矢先、初音は、アンが、彼女には話していなかった事まで分かっている事を見抜いた。アンこそは、シリコニーのスパイだったのだ。仲間だと思っていたのに、初音たちは、アンに、ずっと情報をシリコニーへと横流しされていたのである。

初音たちは、裏切り者のアンのことを、すぐさま、車の外へ突き飛ばす。路上に叩き落とされたアンは、やはり、例のイかれた状態になってしまった。彼女の肉体には、今日よりも遥か前の日から、シリコニーが憑依していたのである。ほんとに危ういところで、初音たちは、その事に気がつく事ができたのだ。

初音たちの車は、正体を現わしたアンを道に捨てて、急いで、走り逃げてしまった。だが、置いていかれたアンも「これでシリコニーは諦めた訳ではない」と、不気味な捨てゼリフを吐いていたのである。

さて、車の中の初音たちの方へと話を変えると、こちらでも、何やら、雲行きが怪しくなっていた。初音のルシーが、仲間のルシーからの連絡が急に途絶えてしまった、と言い出したのだ。さては、火星の石を持ったルシー部隊はシリコニーに見つかって、全滅させられてしまったのだろうか。

皆で困惑していると、ひょっこり、カーラジオで速報が流れた。天体博物館に賊が押し入ったが、その賊に盗まれたものが、市内の警察署にと匿名で返されていた、と言うのである。恐らく、その返品されたものとは、例の火星の石であろう。もう、全く、何が起きているのかが、さっぱり分からないのだ。

初音のルシーの仲間がどうなったのかも、火星の石を警察署に届けた犯人が誰なのかも不明だった。とりあえず、火星の石は、一通りの事情聴取が終わるまでは、証拠の盗難品として警察署の方で保管されるらしい。初音たちも、全てが謎ながらも、まずは、この警察署へと向かってみる事にしたのである。

幸い、今度は、初音たちの車も、シリコニーの監視の車に追い掛けられているような様

子はなかった。だが、シリコニーも、火星の石が警察署にある事はすでに知っているに違いなく、連中が動き出す前に、何としても、今度こそは、先手を打ちたいところなのだ。

初音たちの車が、警察署へ向かって、急いで走り続け、市内にまで戻ってきた時、またもや、カーラジオからはトンデモナイ速報が入ってきた。

問題の警察署が、突然、爆発炎上の被害にみまわれてしまったと言うのである。事故なのか、何らかの攻撃によるものなのかは分からない。とにかく、その警察署は、粉々に爆散して、燃え上がり、現在、誰も近寄れない状態になってしまったらしいのである。と言う事は、そこにあった火星の石も、もはや、無傷で残っているのかどうかも不明であり、とても回収はできない有様なのであろう。

もし、これが外部からの攻撃だったのだとすれば、恐らくは、シリコニーの仕業であろう。きっと、連中は、火星の石を取り返すよりも、いっそ抹消してしまって、地球から排除する手段を選んだのだ。

このニュースを知り、ハジメは愕然として、動揺していた。ルシーは、けっこうアッサリした感じで、諦めたみたいなテンションだった。そして、初音は、意外にも、全く落ち着いていたのである。

ここで、初音は、本当のことを話し出した。そもそも、初音にとっては、天体博物館の火星の石は、完全なオトリのつもりだったのである。だから、警察署ごと消滅してしまったとしても、ちっとも構わなかったのである。と言うのも、天体博物館に陳列された火星の石には、スペシウムの成分は含まれていなかったからだ。その事は、初音自身も、この火星の石の分析には携わっていたので、間違いのない話だった。つまり、初音の仲間も、シリコニーたちも、今まで、すっかり、初音のニセ情報に振り回されていた訳である。

では、なぜ、初音が、こんなウソ情報を持ち出してきたのかと言うと、彼女は、早い段階から、自分の周りにスパイがいた可能性を疑い始めていたからだった。そこで、初音は、自分から、天体博物館の火星の石の話を持ち出してみて、カマをかけてみたのである。すると、案の定、この話題に、シリコニーも乗っかってきたのだった。こうして、初音は、自分の身内に敵のスパイがいる事を確信して、アンの正体を見破るに至ったのだ。

さて、初音が市内に戻ってきたのは、もともと、警察署が目的ではなかった。彼女は、最初っから、当初の目的どおり、宇宙研究保管庫に向かう気だったのである。シリコニーたちは、まんまと罠にかかって、警察署の方ばかりに気を取られていたようで、これまで、初音たちに干渉してくる気配はなかった。おかげで、初音の車は、何の邪魔を受ける事もなく、すでに、宇宙研究保管庫のそばまで来ていた。あとは、宇宙研究保管庫にある真の火星の石を持ち出せば、ミッションも達成なのだ。

ルシーは、初音の優れた策士ぶりを絶賛してくれる。ハジメも、こんな賢い初音が自分のカノジョであった事を、とても得意げに感じていた。

いよいよ、初音たちの冒険も佳境なのである。彼女たちの車は、宇宙研究保管庫の門前にと到着した。この保管庫は、貴重なものが沢山、保管されているので、ちょっとしたシェルター仕様になっているのだ。外部から攻撃されたぐらいでは、あの警察署みたいに爆破させられてしまう心配もなく、中に潜入する為には、やっぱり、初音のような関係者の力を借りるしかなかったのである。

ハジメは車の中で待機している事にして、初音だけが、ルシーを持って、宇宙研究保管庫の中に入れてもらう事にした。現時点では、シリコニーたちは、初音たちの行動をまだ察知していなかったのか、妨害工作を仕掛けてきそうな様子は見られなかった。

宇宙研究保管庫は、完全に無人のセキュリティであり、AI の警備システムによって管理されていた。初音も、網膜スキャンのみを使って、内部のゲートを開いてゆくのだ。まさに、初音のような選ばれたメンバーしか入館できない仕様になっているのである。

ところが、ハジメが車から眺めていると、初音が建物の中に入ってすぐに、後から追いかけるように、宇宙研究保管庫にと忍び込む人影があった。ハジメは驚いて、保管庫の玄関に向かってみたが、やはり、ハジメの網膜では、扉は全く開かないのだ。では、今、保管庫に入っていった人物は、何者だったのだろう？ そいつも、この保管庫のセキュリティを通過できる網膜の持ち主だったと言う事になるようなのだが。

一方の初音は、順調に、保管庫の中を突き進んでいた。ついには、火星の石を保管している小部屋の前にまで到着した。いよいよ、この部屋に入って、火星の石を取り出して、建物の外へと持ち出せば、任務は完了なのである。大変だった冒険も終わりを告げるのであり、初音もルシーもホッとしかけていた。

しかし、その時、背後から彼女らに声を掛ける者があった。「その石を外界に持ち出しちゃいけません」

その声にびっくりした初音が振り返ってみると、そこには、ルシーを抱えた喜望がいた。彼女が、なぜ、こんな場所に？ そもそも、まるで部外者の喜望が、どうして、この保管庫の中に入れたのだろうか。

邪魔するな、とばかりに、初音のルシーが喜望の方へと飛びかかっていった。すると、喜望のルシーも動き出し、初音のルシーに抱きついた。さらに、喜望が奇妙な形の銃を取り出すと、そこからの光を初音のルシーに当てて、その動きを停止させてしまったのである。この光線には、ルシーを麻痺させる機能があるのだ。

続けて、飛び上がった喜望のルシーは、初音のルシーの頭部を、初音のおでこへと、強引に押し当てたのだった。そうする事によって、不思議な作用が働いて、初音のルシーの記憶が初音の脳へと流れ込んできたのである。

それは、ルシーが知っていた、恐ろしい真の未来の姿だった。その未来のビジョンでは、世界中に悪質な疫病が蔓延していたのである。その感染病によって、大量の人間が死んでいた。病院は押し寄せた患者で溢れてパンクしてしまい、疫病で死んだ人々の墓場が至るところに作られている。生き残った人間たちは、病気がうつるのを避けて、行動を制限し、できるだけ誰とも会わないようにして、細々と生きているような有様だった。（ 以上は、実際の新型コロナによる被害状況を映したドキュメント映像を使用 ）こうして、世界の人口のおよそ七割が削られてしまった。そして、病気で死んだ人間の中には、初音やハジメや、初音の親しい人々の姿もあったのである！

愕然としている初音に対して、シャキッとした態度の喜望は、真実を語り出す。

「そのルシーは、キブンゴです。地球人類が、悪質なウイルスによる感染症で大量死してしまった未来からやって来たのです。そして、そのウイルスとは、この保管庫から初音さんが持ち出した火星の石のスペシウムが原因で、既存の地球の無害だったウイルスが突然変異したものなのです」

確かに、火星の石は、外宇宙のシリコニーにとっても脅威であり、彼らを追い払えたのかもしれない。だが、同時に、それは、地球人に対しても、災いをもたらしていたのである。そもそも、今の地球人類は、生態ピラミッドの頂点に立つ割には人口が増えすぎていた。どっちみち、かなりの人数を間引きしない事には、この先の未来にまで安穏と生息し続けることは不可能だったのだ。そこで、殺人ウイルスによって、老人や貧民層などの弱い人間から片っ端に排除してしまい、残された僅かな人間で、新たなスタイルの未来社会を築き上げる必要があった。これこそが、初音のルシー（ キブンゴ ）が唱えていた、人間とルシーが共存できていると言う未来の、恐怖の真実だったのだ。

もともと、キブンゴの未来は、過去確率では、実現の見込みが低いものだった。それが、初音がシリコニーの陰謀に絡んだものだから、一気に現実化の可能性が高まり、キブンゴも積極的に干渉しだしたのである。でも、その事によって、他のパターンの未来が訪れる見込みが、思いきり危ぶまれだしてしまった。喜望が持っているルシーは、他の未来から時間旅行して、現代にやって来たルシーである。このルシーは、キブンゴを阻止する為に、ここに現われたのだ。

本来は、喜望のルシーのいた未来の方が、過去確率としては、到来する可能性が高いものだったのである。それなのに、キブンゴが暗躍したものだから、喜望のルシーの未来はぐんと実現性が薄まり、この喜望のルシーも、現在の時間の中には、ずっと入り込めない状態が続いていた。しかし、シリコニーが初音たちにしてやられて、撤退し始めたものだから、またまた、過去確率が喜望のルシーの未来の方に寄ってきたので、ここぞとばかりに、喜望のルシーもこの時間帯にと乗り込んできたのである。

実は、天体博物館の火星の石がキブンゴたちに盗まれた上に、初音のもとにいたスパイのアンが見破られてしまった事で、シリコニーたちには全く打つ手がなくなってしまい、その時点で、彼らは完全に地球からの撤退を決めてしまっていた。つまり、すでに、地球の上にはシリコニーは居なくなっていたのだ。

その事によって、喜望のルシーも、再び、この時間帯で活動できるようになった。さっそく、行動を開始した喜望のルシーは、最初の仕事として、喜望と連携し、天体博物館の火星の石を盗んだキブンゴたちを片付けた。連中をやっつけて、火星の石を匿名で警察署に送り届けたのは、喜望たちだったのである。喜望は、生物には無害だが、ルシーだけを機能停止させられる光線銃を持っていた。

ところで、このあと、警察署を爆発させたのは、何者だったのだろう？ それは、シリコニーではなく、キブンゴたちだった。キブンゴたちは、火星の石のスペシウムさえ大気中に撒き散らせたらいいので、警察署そのものをぶっ壊して、火星の石を外に放り出すと言う強硬手段に出たのである。なのに、この警察署の火星の石には、肝心のスペシウムが含まれていなかった。よって、キブンゴたちは、再度、初音を利用して、宇宙研究保管庫から、真の火星の石を持ち出そうとしたのである。

全ての事実を知って、初音は、自分のことを騙そうとしていた自分のルシーの事をきつく睨みつけた。だけど、そのキブンゴのルシーは、自分の未来が来る過去確率が急に低くなったせいか、この時間帯には出現しにくくなってしまったようで、すでに動かないのである。

さて、まだ謎が残っていた。それは、喜望のことだ。彼女は、なぜ、ルシーの活動を手

伝っていたのだろうか？ 何よりも、部外者の彼女の網膜では、この宇宙研究保管庫には入れなかったはずだ。
「それは、私が、初音さんの孫だったからよ」と、喜望は衝撃の真相を口にした。
　未来のルシーは、この現代という時間帯での自分たちの活動をより有利にする為に、近未来に生きていた初音の孫・キボを説得して、協力してもらうべく、一緒に時間旅行させて連れてきていたのである。キボも、自分たちの存在する未来を確実なものにしたくて、自ら進んで手を貸していたのだ。その上、初音の安全をずっと前から見守る事にして、今回のシリコニーの事件が起きる以前から、マンションの隣の部屋に住み着いていたのだった。ちなみに、不自然な行動を取らないように、普段の彼女は、未来の記憶を深層心理の奥に消しており、現代人の老女に成りきっていて、有事が発生すれば、すぐ本当の自分に戻れるように、心をセッティングしていたのだ。
　そして、重要な部分として、キボは生まれつき、目が不自由だった。キボを可愛がっていた祖母、すなわち初音は、キボのことを気の毒がって、自分が死んだ後は、形見として、自分の眼球をキボに譲っていたのだ。初音の目を手術で移植して、今のキボは、モノがよく見えるようになったのである。それで、キボの網膜でも、宇宙研究保管庫の認証システムを通過する事ができたのだった。
　初音は、ハッとして、キボの顔をじっくり見る。その瞳は見慣れた自分の目であり、キボの顔そのものにも自分の面影があるのだ。初音は、キボの話を何一つ疑わずに信じる気になった。自分の事をずっと見守りながら、このように救ってくれたキボへと、初音は、嬉しくて泣きながら、喜び抱きついていったのである。
　こうして、初音とキボは、それぞれ自分のルシーを連れて、建物の中では余計なことは何もしないで、外へと出てきたのだった。
　ところが、外の様子は、何やら、皆が慌ただしい雰囲気になっていた。初音たちは、車で待っていたハジメとすぐ合流して、どうしたのか聞いてみたのだが、ハジメは、たった今、とてつもない大事件のニュースが速報で流れたのだと教えてくれたのだった。
　それが、どんなニュースなのかと言うと、一月以内に、大きな隕石が地球に落下する事が判明したのである！

　周期的に地球のすぐそばを通過する要注意隕石の一つに、パエトンがあった。この隕石は、現在、地球に接近しつつはあったが、地球とぶつかるほど際どい軌道ではなかったのだ。
　ところが、冥王星の方から降り注ぐエネルギーが、大量の小隕石の群れを動かし、それらの隕石が次々に衝突する事によって、パエトンの軌道はじょじょに傾き始めていた。全ては、シリコニーの仕業である。
　こうして、地球を直撃する軌道に変わったパエトンは、このまま実際に地球に落ちてしまうと、古代に恐竜を滅ぼした時ほどの被害を、地球上にと、もたらしてしまうのだ。

　初音も、もとが天文学者なので、このパエトンの突然の軌道変更が不可解である事にも、地球に落ちた場合の途方も無い被害状況についても、すぐに気が付いた。
　さっそく、この異常事態に関して、初音たちはキボに尋ねてみたところ、やはり、シリ

コニーが原因である事が分かったのだった。シリコニーは、地球に傀儡を派遣して、ちまちまと観測実験をするのをヤメた代わりに、一気に地球人を滅ぼしてしまう事にしたのだ。この隕石災害は、現代の地球人の科学力では、とうてい回避する事はできない。地球人だけではなく、生物の大多数は死滅し、それでも、ルシーたち AI だけは、隕石衝突後の劣悪な環境でも生き残る事ができて、ついには、シリコニーの希望どおりの、AI が支配する星にと地球は昇格するのだ。

このような凄まじい未来の展開だと言うのに、キボは、なぜか、平然と語り続けていた。

「なぜなら、私は、その未来より来たからです」と、キボは驚くべき事実を告げたのだった。

何て事であろうか。だったら、悪疫に見舞われたキブンゴの未来の方が、まだマシだったのである。しかし、ここまで事態が進んでしまった以上は、もう後戻りはできないのだ。

パエトン隕石が地球に落ちても、全人類が完璧に滅びる訳ではなかった。僅か数百名の人間だけは、どうにか生き残る事ができたのだ。その中に、初音とハジメが含まれていた。二人は、かろうじて生き延び続けて、過酷な環境ながらも、孫のキボまでは子孫を残し続けたのである。

キボは、この未来を実現させる為に、ルシーに協力して、さらには、初音とハジメだけを隕石被害から助ける手配まで進めていたのだ。パエトンの落下地点との関係から、各地のシェルターに避難した多数の人々は、残念ながら生き抜く事ができなかった。しかし、この宇宙研究保管庫をシェルター代わりに活用すれば、確実に生存できる事が分かっていた。キボは、初音とハジメを手引きして、この宇宙研究保管庫の中に避難するようにと勧めてきたのである。

だけど、初音は、キボの言う事を受け入れようとはしなかった。初音としては、自分たちだけが助かるようなマネはしたくない。どうしても、人類全てが救われるように、最後まで努力したかったのである。

初音は、その思いを、キボとルシーに必死に伝えた。来たるべき未来を冷徹に実現させる事よりも、今生きている命を救済する事の方がずっと尊い事を、懸命に訴え続けたのだ。

最初こそ、「これが運命なのです。どう歴史が修正されようが、遅かれ早かれ、人類は衰退してしまい、やがて、地球にルシーの時代が訪れる事に変わりはないのです」と言い張り続けていたキボだったが、その意志に少しずつ変化が現われ始めた。

「私が住んでいた未来は、シェルターの中に閉じ込められた、暗く、冷たい世界でした。ルシーと共存していたと言うよりも、ルシーに保護されながら、ようやく生きていたのです。でも、この現代という時間は違いました。人間たちは、地上で、眩しい太陽の光を浴びながら、活力に溢れて、暮らしているのです。これが、本当の、正しい人間の生き方なのでしょうか。私も、正直な気持ちでは、こんな世界で生きたかったです。ねえ、ルシー、あなたたちは、どう考えますか？ この時代の人間たちと触れ合ってみて、どのように感じましたか？ 人類は今のままの方がいい、このような明るく健康な人類と一緒に共存したい、とは思いませんでしたか？」

キボにそう問いかけられて、ルシーは少し考え込んだようだった。そして、次の瞬間、キボの持っていたルシー人形からは、輝く光の玉が飛び出したのだった。これこそが、時間旅行してきた未来ルシーの本体だったらしい。

この光の玉が抜け出たのは、キボのルシー人形だけではなかった。初音のルシー人形からも、あるいは、あちこちにある世界中のルシー人形から、いきなり、光の玉が分離して、宙へと飛び上がったのだ。恐らくは、その全てが、未来から来ていたルシーの思念なのである。

この未来ルシーたちの思念の群れは、パーッと飛行し、天高くで合流した。その全ルシーが合体して、一つの巨大な光球に変わったのだ。その大きな光の玉は、その状態で、まっすぐ宇宙へと飛んで行ったのである。目指す方角には、迫り来るパエトン隕石があった。

そして、このルシーのかたまりは、パエトンに正面から衝突した。まばゆい光とともに、ルシーの光球が消滅したかと思うと、パエトンの方も、その軌道がゆっくりと変化したのだった。ルシーの相討ちの体当たりによって、地球に落下するはずだったパエトンの軌道は、再度、修正されたのだ。大きく軌道のそれたパエトンは、もはや、地球にとっては完全に無害となり、地球に落ちる軌道には二度と戻らなくなったのだった。

その最新ニュースは、早くも、地球では速報として伝えられていた。それを聞いた各地の人々は、地球滅亡の危機が回避された事を知って、皆、いっせいにワーッと喜んだ。

初音とハジメも、思わず抱き合って、喜びを噛み締めていた。初音は、何が起きたのかを、こう推測する。

「きっと、様々な可能性のあらゆるパターンの未来から、それぞれの未来のルシーが現在にと訪れていたんだわ。過去確率を変えて、自分たちの未来が実現するのを有利にする為にね。あちこちのルシー人形の中にこっそりと潜んで、活動する機会を待っていたのよ。そのルシーたちが、私とキボさんの説得に応じてくれて、全員の力を一つに合わせて、隕石の地球衝突を防いでくれたんだわ。ルシーたちは、現在で、私たち今の時代の人間と優しく心を通い合わせた事で、人類はこのままの状態で未来に残しておくべきだ、と判断してくれたのよ」

そう言えば、光球が飛び出していった後のルシー人形は、どれも、すっかり動かなくなってしまったのである。キボの姿も、いつの間にか消えていた。キボの持っていたルシー人形だけが、地面に置き去りになっているのだ。

本来の未来を大きく変えてしまった事で、ルシーたちもキボも存在そのものが消滅してしまったのだろうか。

初音は、ルシーたちに感謝しながら、泣いて、ハジメに抱きつく。初音は、ハジメの気持ちを素直に受け入れ、二人で結婚して、子供を作る事も約束したのだった。だって、彼女も、近い未来、キボとは再び会いたかったから。その為には、初音自身が、その未来を作っていなかなくてはいけないのだ。

それだけではない。初音は、より一層、冥王星へ探査ロケットを飛ばす事に、情熱を燃やしたのだった。冥王星には、まだシリコニーの残党が駐在しているかもしれない。冥王星にスペシウムを送り込む事で、シリコニーの奴らを完全に太陽系から追っ払ってやるのだ。こうして、邪悪なシリコニーの介入をいっさい排除してしまえば、あるいは、地

球人だって、破滅に向かう愚かな未来を避けるような生き方もできるようになるかもしれない。

また、ハジメも、人間とロボットが戦うような SF 映画を作るのはやめ、これからは、人間と AI が仲良く手を取り、明るい未来を築いていく物語でも作る事にしようかな、と語ったのだった。

それにしても、人類にとっての恩人である未来のルシーたちは、本当に、全て消滅してしまったのだろうか。

「いいえ。そんな事は絶対にないわ。ルシーは、絶対に居なくなったりはしない。だって、地球の全ての未来は、ルシーの時代にと繋がっているんですもの」初音は、そう強く言い切ったのだった。

エンディング。BGM とともに、エンドロールが流れながら。

ルシー人形が溢れている都会の風景。誰もがルシーを持ち歩き、店頭や家庭内などのあちこちにルシーが置かれている。

しかし、それらのルシー人形の姿が、映像の進行とともに、次第に形が変わっていく。人形だったルシーの姿は、ぼんやりと薄れていき、小型化し、薄い長方形の形状にメタモルフォーゼしていって、ついには、我々もよく知っている道具になってしまう。すなわち、本作の中に出てきたルシーは、ラストシーンでは、全て、スマートフォンに変わってしまったのだ。

本作の中で、皆が持っていたものは、ルシー人形ではなく、スマートフォンに取って代わられてしまい、それなら、誰もが普通に持ち歩いていても、あちこちに大量に置かれていても、全然、違和感のある光景ではないのである。

スマートフォンが溢れている我々の現実世界だって、本当は、すでに未来のルシーが訪れてきているのかもしれない。

おかしな童話集

ラインナップ

「桃太郎（ 少年マンガ風 ）」
「大きなガブ」
「裸の王様」
「ヒトラーの秘密」
「蜘蛛の糸」
「浦島異聞」
「狼ハンター」シリーズ
（「狼ハンター」「続・狼ハンター」
　「赤ずきんといっしょ　～季節廻る国の狼退治～」「赤ずきん再び」
　「イメージマシン大作戦」「ニジュウ面相 対 赤ずきん」
　「ボクたちの好きな異世界転生」 他　）
「新釈・漁師とおかみさん」

- 「裸の王様」「蜘蛛の糸」は、ブックショートの優秀作のページで読む事が可能です。

少年マンガ風「桃太郎」（ シノプシス ）

桃から生まれた（ 正確には、中身をくりぬいた桃の中に入れられて、川から流れてきた捨て子だった ）という特殊な出生のおかげで、類いまれの勇気と怪力の持ち主でありながら、桃太郎はすっかりやさぐれた性格に育っていた。

そんな桃太郎が英雄に変わっていくきっかけとなったのは、他でもない、遠い鬼ヶ島に拠点をかまえる鬼の一族が、桃太郎の住む村にまで強盗しにやって来たからだった。鬼たちは、村の若い娘たちを次々に捕えてしまい、桃太郎の唯一の理解者だった阿曽姫（ あそひめ ）をもさらっていった。

鬼の一族は異形の人種であり、劣性遺伝の問題で、角が生えた同族は男しか生まれないのだ。そのため、子孫を作る時は、このように人間の部落にまで攻めてきて、女子衆を奪うと、彼女たちに自分の子供を産ませたのである。

鬼の傍若無人ぶりに怒った桃太郎は、鬼ヶ島まで乗り込んで、心の妻であった阿曽姫を取り返す決意を固めるが、屈指の戦闘集団である鬼たちの事を誰もが恐れ、桃太郎に手を貸してくれる村人は一人もいなかった。こうして、桃太郎は一人で鬼退治に旅立つ事になるのだ。

桃太郎を育ててくれた優しい老夫婦は、桃太郎との別れを悲しみつつも、餞別としてきびだんごを作って、渡してくれる。このきびだんごは、のちに、桃太郎とその子分たちの絆の象徴ともなるが、同時に、桃太郎自身の未知のパワーの源ともなる。きびだんごを食べた時、桃太郎は皆の優しさや友情を思い出して、気力が満ちあふれ、従来の十人力の怪力を発揮できるようになるのだ。まるで、ほうれん草を食べた時のポパイのように。

さて、桃太郎が旅の途中で最初に召し抱えた仲間は犬だった。犬は、動物の森のリーダーだったのである。しかし、犬が暮らしていた森は、恐ろしい怪物である大ムカデの襲撃を受けていた。桃太郎は、正義心あふれる犬に共感して、この手強い大ムカデ退治の手助けをする。大ムカデは桃太郎の機転によって見事に撃退され、忠義心の強い犬は、桃太郎に借りを返すため、鬼ヶ島まで同行する事を意思表明する。

続いて、桃太郎の前に現れた猿は、実は、鬼の一族と裏でつながっていたスパイだった。桃太郎のそばにはさも味方のフリをして近づいたが、最初は、隙あらば桃太郎を殺してしまおうと策を巡らせていた。しかし、桃太郎の優しさや正義の心に接して、自身も命を助けられたりしてゆくうち、猿の心は揺らぎ始め、ついには鬼たちを裏切ってしまう。こうして、猿も桃太郎の子分の一人となったのだ。

しかし、お調子者で陽気な猿の事を、熱血漢で生真面目すぎる犬だけは、根っから信用していた訳ではなかった。実際、心の弱い猿は、桃太郎の子分になったあとも、時々、裏切るような事もしてしまうのだ。こうして、対照的な犬と猿は、道中、頻繁にケンカする事になり、桃太郎チームの凸凹コンビとなるのだ。

最後に桃太郎が出会ったキジは、元々は、火ふき鳥と呼ばれている妖怪だった。人間の村を襲って暴れていたが、桃太郎チームによって成敗される。桃太郎の采配で、命は助けられたものの、プライドの高いキジは、それだけでは納得できず、敗者の決まりと称して、自分から桃太郎への隷属を申し出る。かくて、キジは桃太郎にとっては三番めの子分となったのだが、元が妖怪だったので戦闘力はかなり高く、感情に走りやすい犬や猿に比べると、いかなる状況でもクールで、桃太郎チームの優秀な参謀格となる。

こうしてメンバーも揃った桃太郎一行は、ついに鬼ヶ島が見える海岸にまでやって来るのだが、彼らにとっての厳しい戦いの始まりはこれからだった。

もはや、鬼ヶ島も目の前だったと言うのに、この島は南蛮渡来のミサイルで守られた要塞になっており、舟を出して近づこうにも、船影が見つかった途端に、すぐさま撃沈されてしまうのである。

はたして、桃太郎たちは、いかなる策略を用いて、鬼ヶ島に上陸するのだろうか。

そして、目的地の鬼ヶ島で待ち構えていた鬼の大将の温羅（ うら ）こそは、桃太郎の本当の父親だったのだ。

了

「大きなガブ」

　ある日、おじいさんが畑にカブの種をまきました。
　何日かたってから畑に行ってみると、そこには大きなガブが埋まっていました。
「よし。今日は、このカブを引き抜こう」
　と、おじいさんは大きなガブの葉っぱを両手で握りました。

　うんとこしょ、どっこいしょ

　しかし、おじいさん一人の力では、相手が大きすぎて、どうしても引き抜く事ができませんでした。
　そこへ、おばあさんが通りかかりました。
「おばあさん、いいところに来てくれた。引き抜くのを一緒に手伝ってくれないか」
　おじいさんはおばあさんに言いました。
　そして、今度は、おじいさんの後ろからおばあさんが引っぱって、試してみました。

　うんとこしょ、どっこいしょ

　しかし、二人掛かりでも、やっぱり引き抜く事はできませんでした。
　そこへ、今度は孫娘が通りかかりました。おじいさんとおばあさんは、孫娘にも手伝ってもらう事にしました。
　おばあさんの後ろから孫娘が引っぱります。

　うんとこしょ、どっこいしょ

　しかし、三人でも、まだ引き抜く事はできませんでした。
　今度は犬がそばを通りかかりましたので、犬にも手伝ってもらう事になりました。
　孫娘の後ろから犬が引っぱります。

　うんとこしょ、どっこいしょ

　しかし、三人と一匹でも、まだ引き抜く事はできませんでした。
　今度は猫が現れました。猫にも手伝ってもらう事になりました。
　犬の後ろから猫が引っぱります。

　うんとこしょ、どっこいしょ

しかし、三人と二匹でも、まだ引き抜く事はできませんでした。
今度はネズミが現れました。ネズミにも手伝ってもらう事になります。
猫の後ろからネズミが引っぱりました。

うんとこしょ、どっこいしょ

しかし、三人と三匹でも、やっぱり引き抜く事ができません。
次は、ウサギがそばを通りかかりました。ウサギにも手伝ってもらいました。
ネズミの後ろからウサギが引っぱります。

うんとこしょ、どっこいしょ

三人と四匹でも、引き抜く事はできませんでした。
その次に現れたのはタヌキです。タヌキにも手伝ってもらいました。
ウサギの後ろからタヌキが引っぱります。

うんとこしょ、どっこいしょ

三人と五匹でも、まだ引き抜く事はできませんでした。
今度はサルが現れます。サルにも手伝ってもらう事になりました。
タヌキの後ろからサルが引っぱりました。

うんとこしょ、どっこいしょ

三人と六匹でも、まだびくとも動きません。
近所の川に住む河童がやって来たので、河童にも手伝ってもらう事になりました。
サルの後ろから河童が引っぱります。

うんとこしょ、どっこいしょ

三人と七匹になって、ちょっとだけ動いたような感じがしました。これなら、引き抜けるのも、きっともう一息です。
そこへ、大男の鬼が現れました。ここは、もちろん鬼にも手伝ってもらうしかありません。
河童の後ろから鬼にも引っぱってもらう事になりました。

うんとこしょ、どっこいしょ

力持ちの鬼が加わった事で、ついに相手はグラグラと揺れ始めました。引き抜けるのも、もはや目前です。

　そこへ、いじわるな隣のおじいさんが通りかかりました。
　隣のおじいさんは、三人と八匹がやっている事を見て、びっくりしました。
「お前たち、何やっているんだ。それはカブじゃない。ガブだぞ。そんなものを引き抜いたら、地面の底が抜けてしまうぞ！」
　そうです。実は、昨日の真夜中に、いじわるな隣のおじいさんは、この畑にやって来て、本物のカブを引き抜いて、盗んでしまっていたのです。カブの抜け跡に、地中からガブが顔を出していたのでした。
　しかし、もう手遅れでした。

　うんとこしょ、どっこいしょ

　隣のおじいさんが怒鳴った時には、三人と八匹はすでにガブを引っぱっていました。
　そして、とうとうガブは引き抜けてしまったのです。
　途端に、地面は大きく裂けて、地球は真っ二つになってしまいました。

了
（ 2016 年 1 月作品 ）

「ヒトラーの秘密」

「ああ、愛しいアドルフ。今日こそ教えてちょうだい。なぜ、あなたは私の事をこんなに愛してくださるの？ 私より素敵な女性は沢山いるはずなのに」

ベッドの上で、ヒトラーに愛撫されて、あえぎながらも、今日もエバはそのような疑問をヒトラーへと投げかけていた。

「それは、エバ。お前がドイツ人の中では一番素晴しい女性だからだ。このゲルマンの偉大な指導者アドルフ・ヒトラーに相応しいな」

ヒトラーは、エバを愛する手を休めず、威厳のある口調で答えた。ドイツ・ナチス帝国の独裁者は、ベッドの上でも絶対的な暴君なのだ。

「ウソよ！」

と、エバは叫んだ。

「アドルフ。あなたは、今まで、私より美しい女優ともいっぱい付き合っていたじゃない。私が一番きれいな女性だなんて有り得ないわ。あなたも、それは分かっているはず」

エバは、真剣な眼差しをヒトラーに向け続けた。

彼女のその頑なさに、ヒトラーも一瞬黙り込んだが、やがて、ボソリとこう言い放った。

「しかし、エバよ、事実なのだ」

「あなたがそう信じてくれているだけなのでしょう？ だから、私、よけいに怖いのよ。あなたが、いつか気変わりしてしまうんじゃないかって。その時、私は捨てられてしまうんじゃないかって。そんな事になったら、私、何をしでかすか分からないわ」

再び、エバとヒトラーは真剣な表情で見つめ合う事になった。

エバの瞳は笑っておらず、本気でそんな事を言っているのは間違いなさそうだった。実際、偉大すぎる愛人を持ってしまったばかりに、エバはプレッシャーから情緒不安定になっており、過去に自殺未遂を図った事もあったのである。

「分かった。お前に真実を見せてやろう」

そう言って、ヒトラーはベッドから立ち上がった。

まだ愛の営みは終わってはいなかったが、気まぐれなドイツの総統は、思い立ったら、すぐ実行に移る性格なのである。エバの方も、まだ前戯の最中だったのに止められて、不満が無い訳ではなかったが、従わざるを得なかった。何よりも、今回に関しては、自分が言い出した事が原因なのだ。

「ついて来い」

素早く軍服を身にまとったヒトラーは、エバに言った。

エバも急いで上着を身につけた。

二人は、一緒に寝室をあとにした。

　ここは、ドイツ南部のオーバーザルツベルクに建てられたヒトラーの別荘である。一名ベルクホーフと呼ばれているこの山荘は、ヒトラーの閣僚会議場であると同時に、愛人エバを囲っている愛の巣でもあった。
　エバは、いちおう、この山荘のマネージャーの立場にあったのだが、実際には足を踏み入れた事のない部屋も沢山あった。彼女は、基本的にヒトラーの職務の方面にまでは頭を突っ込む気持ちはなく、一方で、ヒトラーの側もエバが仕事場にまで立ち入る事を大変に嫌がったのである。
　そのヒトラーが、今、エバを自分の特別な執務室へと連れていこうとしていた。そこにどんな恐ろしい秘密が隠されていたのかは、現時点のエバにはまるで分かっていなかったのである。
「エバよ。お前はグリム童話を読んだ事があるか？」
　廊下を進む途中で、ぶっきらぼうにヒトラーがエバに尋ねた。
「もちろんよ。小さい時、よく母に読み聞かせてもらったわ」
　と、エバが答える。
「グリム童話こそは、誇り高きドイツの精神そのものと言ってもよいからな。中でも特に有名な、シュネーヴィットヒェン（ 白雪姫 ）は知ってるな？」
「ええ」
「あの物語には、不思議な魔法の鏡が出てくるが、悪い王妃の相棒であったにも関わらず、この鏡が最後にどうなったかは何も記されていない。なぜだと思う？」
「それは、ただの子ども向けのおとぎ話だし・・・」
　エバが口ごもった時、二人は執務室の前にたどり着いた。
　ヒトラーは、ゆっくりと執務室の鍵を回し、ドアを開いた。
「入っていいぞ」
　と、ヒトラーが言った。
　エバにとっては、はじめて目にする、この山荘内での愛人の仕事場だった。
　そもそも、政治や商売にはまるで興味が無かったエバにとっては、この執務室の中は、とても殺伐とした空間のようにも感じられた。仕事にしか生きがいを持たないような男たちが使っている、ごく普通の書斎にである。
　ただし、部屋の奥の方に飾ってある大きな鏡だけが、ひどくエバの目を引き付けた。この書斎には、あまりにも場違いな感じがする、アンティークな縁取りのついた鏡なのだ。
　まるで、エバの気持ちを読んだかのごとく、ヒトラーは、この鏡の前にまで歩み向かったのだった。
「お前も、こっちに来い」
　と、ヒトラーがエバに命じた。
　訳も分からぬまま、エバは言われるままにするしかなかった。
「紹介しよう。これが、シュネーヴィットヒェンの魔法の鏡だ」
　ヒトラーは、いきなり、そう告げたのだった。
　エバは呆気にとられた。
「うそ。シュネーヴィットヒェンはおとぎ話よ」
　エバはそう返したが、ヒトラーは少しもふざけた素振りは見せなかった。

「昔話は、時として事実を元にして語られている事だってある。魔法の鏡は実在するものだったのだ。悪い王妃が処刑されたあと、鏡はその正体も知られぬまま、売りに出されてしまった。多くの人手に渡ったあと、今は私が所有者となったのだ」
　エバには、ヒトラーが冗談を言っているとしか思えなかった。きっと、しつこく詰め寄った自分に対して、分かりやすいホラ話で仕返ししているつもりなのだ。
　しかし、ヒトラーの表情を探ってみると、彼は大衆相手に演説している時と同じぐらいに真面目な顔つきなのだった。
「真実の鏡と言うのが正式な名称だ。このような魔法の宝が、ゲルマン民族には他にも二つ存在している。王者の剣と、富の革袋だ。そのうち、王者の剣の方も、我がナチスでは入手に成功した。王者の剣の加護があるからこそ、我がナチス軍は無敵なのだよ」
　話が途方もなさすぎて、エバには理解できなくなり始めていた。しかし、ヒトラーは話すのを止めようとはしなかった。
「富の革袋については、今でも、どこにあるかを探索中だ。私はユダヤの商人が共同で隠し持っているのではないかと睨んでいる。ユダヤ人どもは、何かの魔術を使っているのではないかと思えるほど、財産を蓄えるのがうまいからな」
「もしかして、国中のユダヤ人を片っ端から捕まえて、収容所に送っていたのは、その為だったの？」
「そうだ。いずれは、富の革袋も我がナチスが手に入れる事だろう。三つの秘宝を揃える事は、すなわち、権力、戦力、財力の全てを手中に収める事を意味する。その時こそ、我がナチスは完全な千年王国となるのだ」
　ヒトラーは、本気でそんな事を考えていたのだろうか。
　しかし、これまでのヒトラーのトントン拍子の出世ぶりやナチス・ドイツ軍の破竹の強さぶりは、確かに現実なのだ。
「さあ、自分自身で、鏡の力を試してみたらいい」
　ヒトラーに言われて、エバは少し戸惑った。
「一体、どうするの？」
「鏡に向かって、話しかけてみればいいのだ。王妃がやっていたみたいにな。この世で一番美しいゲルマン娘は誰か、と聞いてみなさい」
　エバはひどく怖くなってきていたが、ヒトラーに逆らう事は出来なかった。
　彼女は、澄んだ声で、そっと鏡に話しかけてみた。
「鏡よ、鏡。この世で一番美しいドイツ人の女性は誰ですか？」
　ちょっと自分でもバカみたいな事をしているように、エバは感じていた。
　しかし、次の瞬間、彼女の疑いは解け、激しい衝撃を受ける事になったのである。

「それは、エバ、あなたです。
　あなたは、顔姿だけではなく、心も美しい、ゲルマン民族でもっとも素晴しい女性です」

　もちろん、鏡がそんな事を喋った訳ではない。エバの口から、そんな言葉が勝手に漏れたのだ。つつましいエバが、自分からそんな傲慢な事を口にするはずがなかった。無

意識のうちに、そんな事を喋ってしまったのである。
　そして、その様子は全て鏡に写っており、まるで、鏡の中のエバがその答えを口にしていたかのように、エバの目には見えた。
「こ、これは？」
　動揺したエバが、うろたえながら、ヒトラーに尋ねた。
「これで、お前にも分かっただろう。これが、真実の鏡なのだ。この鏡の前で問いかければ、現在の唯一の正しい知識を引き出す事ができる。自分の口を借りる形になるがね。私は、この鏡を使って、常に今の正確な情報を手に入れる事で、政敵を出し抜いてきたのだ」
　無学なエバにはうまく説明できなかったが、これは一種の自己催眠だったのかもしれない。しかし、この鏡がヒトラーに絶大な自信と神懸かりな勘を与えてきたのは、どうやら間違いないようなのだった。
「アドルフ。あなたも、この鏡に向かって話しかけてみたの？ 自分が、世界一の指導者かどうかって？」
「そうだ。鏡に聞いても、私はこの世で一番の権力者なのだ。私が、この全世界に君臨するのは、もはや絶対の真理なのだよ。お前にも、それを聞かせてやろう」
　ヒトラーは、完全に陶酔しきっているようだった。これまで、幾度となく同じ質問をこの鏡に繰り返してきて、常に、あなたこそが世界一の権力者だと言われ続けてきたのだろう。その優越感と自信に後押しされて、彼は今までの無謀な政策と大胆な戦争を押し進めてきたのである。
「さあ、鏡よ、答えなさい。この世界でもっとも強大な指導者は一体、誰だ？」
　ヒトラーは、力強く、鏡に向かって、話しかけた。

「それは、ドイツの統率者ヒトラーよ、お前だ。ただし、ほんの少し前までの話だがね。
　今は違う。ソビエト国のスターリンこそが、現在の地上の最高の権力者だ」

　執務室の中が、一瞬、凍りついたように静まり返った。
　鏡がそんな回答をするとは、エバはもちろん、ヒトラーも思ってはいかなかったのである。
「鏡よ、もう一度聞く！ この地上でもっとも優れた権力者は誰だ？」
　うろたえているのを気付かれないように振る舞いつつ、ヒトラーはもう一度、鏡に尋ねた。

「ソビエトのスターリンこそが、もっとも大きな権力を手に入れた指導者だ」

　もし、鏡の助言が、ただの自己催眠によるものだったのであれば、ヒトラーの口から、こんな言葉が出るはずはなかったであろう。
　ヒトラーの顔が怒りで真っ赤になり、わなわなと震えていたのは、そばにいたエバから見ても、はっきりと分かった。そして、エバもまた、こうしたヒトラーの反応に対して、言いようのない不安に襲われたのだった。

「あの成り上がりのロシアの田舎者が、世界一の権力者だと！ そんな事があるものか！ いや、そんな事は絶対にありえないのだ！」

ヒトラーは、鬼のような形相で、そうブツブツとつぶやき続けていた。エバもよく知っている、ヒトラーがかんしゃくを起こす直前の状態である。

今はここにはヒトラーとエバの二人しか居ない。この状況では、自分がヒトラーをなだめるしかないと、いち早くエバは理解した。

「アドルフ。どうか、お願い。落ち着いて、私の言う事を聞いて！」

エバは、狼狽しながらも、声を抑えて、ヒトラーに話しかけた。

「私はいつだって落ち着いておる！」

と、ヒトラーは怒鳴った。

「いいえ。あなたは今、冷静さを失っているわ。それぐらい、私にだって分かる！ 鏡の言う事に惑わされちゃダメよ！ とんでもない事になるわ」

「お前に何が分かると言うのだ！ セックスしか出来ないくせして！」

「いいえ、分かるわよ！ あなたは、今、ソビエトを攻める事を考えているでしょう。でも、そんな事をしたら、絶対にいけないわ。必ず、よくない結果に結びつくはず。今のあなたは、シュネーヴィットヒェンの王妃と同じ事をしかけているのよ」

「私は偉大な指導者だ！ 愚かな王妃の二の舞などは踏まん！」

興奮して、ハイテンションになっている今のヒトラーには、もはや他人の言う事は何も聞こえないみたいなのだった。

「エバ！ お前はもう自分の部屋へ帰れ！ 私はもうしばらく、ここに残って、次の戦略を練る事にする！ 今日の事は誰にも喋るんじゃないぞ！」

「待って、アドルフ！」

すがるエバを執務室の外へ突き放して、ヒトラーは内側からドアを閉めてしまった。

泣きながら、エバは執務室のドアを叩き続けたが、それはもう二度と開く気配はなかった。

エバの心の中には、嫌な憂鬱感が広がり始めていた。女の直感は、時として、魔法の鏡よりも的中するものなのである。

これ以上、自分たちの幸せの時間は続かないのかもしれない。

一人残されたエバは、悲しみに沈みながら、うっすらとそう感じていた。

1941 年 6 月、ドイツ・ナチス帝国は、有利な独ソ不可侵条約を反故にして、いきなりソビエト連邦への侵攻を開始した。ソビエトの独裁者スターリンが、最大最後の政敵だったトロツキーを暗殺して、自分のソビエト内での政権を完全に安泰にさせてから、わずか 1 年内の出来事であった。この結果、ナチスは東西両方を敵に囲まれて、戦争を続ける形となり、自国の衰退と敗戦を決定づけてしまったとも言われている。

1945 年のドイツ・ベルリンの陥落の際、ヒトラーとエバは心中自殺したが、真実の鏡がどうなったかについては、何も分かっていない。ベルリンを蹂躙したソビエト軍、あるいは、その他の鏡の秘密を知る敵国が持ち去ってしまったのであろうか。

近年でも、いきなり愚劣な政策を施行した末に、自らの寿命を縮めてしまうような大国の指導者を時々見かけるものだが、そうした政治家たちの背後には、あるいは、真実

の鏡の存在があったのかもしれない。

了

（ 2016 年 2 月作品 ）

「浦島異聞」

ある日、浦島太郎が海辺を歩いていると、砂浜で一匹の亀が五、六人の男の子たちに囲まれて、よってかかっていじめられているのを目にした。

いじめている子どもたちと言うのは、この村に住む漁師たちの息子だ。浦島太郎も顔見知りのやんちゃ坊主ばかりである。

その様子をながめているうち、浦島太郎は亀の事が少し可哀相に思えてきた。子どもたちは、捕らえて、食糧にするつもりで、その亀をいたぶっていたのではない。子どもならではの無邪気な遊び心だけで、その亀に暴力を振るっているのである。なんて、命の粗末な扱い方なのだろうか。

思わず、浦島太郎は子どもたちに声をかけた。

「君たち、亀をいじめるのは止めなさいよ」

子どもたちは、いっせいに浦島太郎の方へ目を向けた。

「おじさん、何言ってるんだよ。この亀を見つけたのはオレたちなんだぜ。何をしようが勝手じゃないか」

リーダー格の子どもが、ふてぶてしく、そう言った。

「だったら、こうしよう。おじさんがお金を出すから、その亀を売ってくれないか。それなら、おじさんの好きなようにしてもいいだろう？」

そして、浦島太郎は、ありったけの小銭を出すと、子どもたちへと差し出したのだった。昨日、釣った魚を売って儲けた、現時点での彼の全財産だ。

子どもたちは、浦島太郎のお金を見ると、ばっと奪い取り、わあっと喜ぶと、そのまま、もう亀へも浦島太郎にも見向きもしないで、浜辺を走り去っていったのだった。

さて、皆が知っている「浦島太郎」の物語は、この先、浦島太郎と亀がどうなったかについてが語られる事になる。しかし、我々はここで、子どもたちがどうなったかの方を追ってみる事にしよう。

浦島太郎と別れた子どもたちは、すっかり浮かれて、浜辺を走っていた。何しろ、貧しい漁村で生まれた彼らは、親からろくに小遣いをもらった事もなかったのだ。こんなラクな形でお金が手に入るとは思わなかったのである。彼らにとっては、これがはじめての商売だったとも言えたかもしれない。

彼らは、互いに、手に入れたお金で何を買うかを、楽しそうに口にしていた。実に、幸せそうなひとときにも見えた。

しかし、彼らの幸福な時間は、まるで続かなかったのである。うかつにも海岸沿いを移動していたのも良くなかったようだ。

彼らが走ってる目の前には、数人の大きな人間が立ちふさがっていた。連中のそばに近づく前に、子どもたちも、もっと早くに方向転換して逃げていれば良かったのに。し

かし、そこまで子どもたちは頭が回らなかったようだった。進行方向で待ち伏せしていた連中の姿がはっきり分かるまで、怖いもの知らずだった子どもたちは、警戒すらしていなかったのである。

だからこそ、怪しい連中が本当に不気味な怪物たちだった事が分かった時には、もはや子どもたちにも逃げ出すのは間に合わなかったようなのだ。

連中は本当に恐ろしい姿をしていた。顔、と言うか胸から上は魚そのものだった。胸から下は人間のたくましい体で、ごつい両手もあり、腰には海草だけを巻き付けている。遠くから見た限りでは、確かに、祭りの日の仮装した村人のようにも見えた。近づいて直視する事で、ようやく化け物である事がはっきりと分かったのだが、そこで危険を察知したのでは、それこそ後の祭りだったのである。

怪物たちを前にして、子どもたちもやっと立ち止まった。彼らは、怯えて、仲間の顔を見合ったが、誰もが狼狽して、どうすればいいか分からないと言った表情をしていた。

「オ前タチダナ。姫サマヲ、イジメテイタノハ」

怪物の一人が、なまりの強い、低い声で話しかけてきた。

「誰だよ、おじさんたちは！」

子どもたちのリーダーだった桃吉が、怖がっているのを悟られないようにしながら、そう虚勢をはって、怒鳴った。

「悪イ子ドモタチダ。罰トシテ、オ前タチノ寿命ヲイタダクゾ」

怪物の語っている要求は、明らかに恐ろしい事のようだった。

「み、皆！ 逃げろ！」

と、桃吉が叫んだ時は、もう手遅れだった。

魚に似ているくせに、怪物たちの動作は異常に速かった。逆に、すっかり震えおののいていた子どもたちは完全に動きが鈍っていたのである。

怪物たちにさっと取り囲まれて、子どもたちはすぐに逃げ道を失ってしまった。大声を出して、助けでも呼びたいところだが、声帯も震えていて、それさえも出来ないようだった。そもそも、こんな日中は、大人たちは仕事に出払っていて、浜辺でたむろしている人間は、子どもや浦島太郎のような変人ぐらいしか居なかったのだ。

「うぉおおおー！」

ヤケクソになった金太が、怪物目がけて体当たりしていった。金太は、子どもたちの中で一番大柄だったのだが、屈強な図体の怪物相手では、軽く張り飛ばされてしまった。それを見て、他の子どもたちもいっさい抵抗する気持ちを無くしてしまったのだった。

「デハ、イタダクゾ」

怪物の一人が、大きなヒョウタンを取り出すと、そのフタをはずし、飲み口を子どもたちの方へと差し向けた。

すると、どうであろうか。飲み口の真ん前にいた、一番年下だった寸坊の姿がたちまち変化しだしたのである。顔が一面シワだらけになり、髪の毛が白くなっていった。つまりは、一瞬で、おじいさんになってしまったのだ。自分の身に何が起こったのかが分からなかったらしく、呆然とした表情だった寸坊は、そのままバタリと倒れた。どうやら、寿命が尽きて、こと切れてしまったらしい。

この恐るべき光景を目前にして、残った子どもたちも本当に血の気を失ってしまっ

たのだった。自分たちも、これから同じ目に合うのだ。逃げる事も絶対に不可能なのである。
「わああぁ。ごめんなさーい」
「お願いします！ 許してー」
　子どもたちは口々に泣き叫んだが、怪物たちに情けをかけてくれる素振りはなかった。
「オ前タチガイジメテイタ亀ハ、乙姫サマノ妹ノ甲姫サマダッタノダ」
「甲姫サマガ、オシノビデ地上ニ遊ビニ来テイタノニ、ソレヲイジメルトハ、本当ニ不届キナ子ドモタチダ」
　子どもたちの寿命を一人ずつ、ヒョウタンで吸い取りながら、怪物たちは、なぜこんな酷い事をするかを説明したのだった。
　ついには、残った子どもは桃吉だけになっていた。
「オ前タチノ寿命ハ、浦島サマノ為ニ使ワセテイタダク。何シロ、浦島サマヲ竜宮城ニオ招キシテモ、今ノ浦島サマノ寿命デハ、竜宮城デハ半日シカ持タナイカラナ」
「浦島ぁ？ 浦島だとぉ！」
　浦島太郎の名前を聞いた途端、桃吉の心には俄然、怒りが込み上げてきた。
　桃吉ら子どもたちも、浦島太郎とは知らぬ間柄だった訳ではなかった。しかし、親からは、浦島太郎の事は、船に乗って漁にも出ようとしない怠け者だと聞かされていたのである。だから、子どもたちも全員、浦島太郎の事をろくでなしと考えて、見下していた。さきほど、喰えもしない亀を買ってくれると言った時も、こいつはとんだ阿呆だぞ、とあざ笑っていたぐらいなのである。
　それなのに、今、自分たちは、そんな浦島太郎の為に、自分の大切な命を取られようとしている。そんなオカシな話があってもいいものなのだろうか。
「やだ！ オレは浦島なんかに、オレの未来は絶対にやらないぞ」
　桃吉は思いっきり叫んだ。
「ダマレ！ オトナシク、身代ワリニナルノダ」
「嫌だ！ 浦島なんかに楽しい思いをさせてなるものか。オレの命を代わりに使うなら、浦島はオレよりも不幸になればいいんだ！」
　桃吉は必死に呪いの言葉を吐き続けた。しかし、抵抗も空しく、彼が喋り終えた頃には、彼もすっかり生命をヒョウタンに吸い尽くされており、静かに息を引き取っていったのだった。
　桃吉の手には、浦島太郎から貰った小銭がしっかりと握られていた。たったこれだけの小銭で、こんな目に会ってしまったとは、全く、割に合わない取引だったとも言えよう。
「ヨシ、タップリ 300 歳分グライノ年齢ハ確保デキタゾ。コレヲ竜宮城ニ持チ帰リ、玉手箱ニシマッテオクノダ。コノ寿命ヲ使ッテ、浦島サマモ三日ハ竜宮城デ生キ長ラエル事ガデキルダロウ」
　目的を果たした魚人は、子どもたちの寿命を全て詰め込んだヒョウタンにフタをすると、こうして、海へと帰っていったのだった。
　浜には、老化した子どもたちの死体だけが残された。この死体は、間もなく漁村の大人たちに発見されるのだが、しばらくの間は、本当に子どもたちだったとは分かってもらえなかったようである。

同時期に、浦島太郎も、この村からは姿を消した。浦島太郎が子どもたちを誘拐して、どこかへ姿をくらましたのではないかと言う噂も流れはしたのだが、証拠は無く、その疑惑はすぐに忘れられる事になった。

浦島太郎が、この村に戻ってきたのは、それから 300 年後の話である。地上に帰ってきた後の彼があまり幸せではなかった事は、皆さんもよくご存知のはずだと思う。結果的に、桃吉たちの恨みは確かに晴らされたようである。

了

（ 2016 年 4 月作品 ）

「狼ハンター」

なぜ、こんな事を繰り返してしまったのか、ペローは今さらながら後悔をしていたのだった。

しかし、一番最初の時は確かに怪しい影を見たような気もしたのだ。

ペローは、山の麓にある小さな村で、村の羊の番を任されていた孤児の少年である。羊小屋は村の離れにあったため、他の村人と顔を会わせる事はほとんど無かった。みなしごとして彷徨っていたところを、この村で拾ってもらえて、こんな仕事まであてがってもらえた訳なのだから、文句が言える筋合いではないのだが、それでも孤独な毎日は次第に苦痛にもなってきていた。

そんなある日の事である。放牧した羊を追い集めて、小屋の中におさめたばかりの夕方だ。まだ日も沈んで間もなく、周囲も明るかった時分である。ペローは羊小屋の壁に一瞬だが怪しい黒い影がさっと走ったのをはっきり目にしたような感じがしたのだ。

もし狼の姿を見たら、すぐ村の方に知らせるように、と言うのが、この仕事を始めた時に真っ先に指示された任務だった。不気味な影に驚いたペローは、すぐ、この言いつけを思い出したのだった。

彼は、急いで、緊急の笛を吹き鳴らした。すると、畑仕事が終わった頃合いだった事もあって、村人たちがたちまち駆けつけてくれたのだった。

動揺する村人たちに囲まれて、この時、ペローははじめて一体感のようなものを抱けたのであった。ペローは、村人たちに怪しい影を見た時の状況を懸命に説明したが、実際の狼らしきものは結局は発見されなかった。

こうして騒ぎはいったんおさまったものの、狼の被害をペローが事前に防いでくれたみたいな事を村人たちがはやし立てたものだから、ペローも余計その気になってしまったのだった。

そののち、さほど日にちが経たぬうちに、ペローは緊急の笛を再三に渡って吹き鳴らしている。特に明確に狼らしきものを見た訳でもないのにだ。それでも、笛さえ吹けば、その都度、村人たちは必ず集まってくれるのであり、本当に狼が見つからなくても、しばらくは村は大騒ぎになるのだった。

しかし、そんな事を繰り返していると、毎度毎度、無駄骨を折らされている村人たちもだいぶ不機嫌そうになってきている事に、ペローもようやく気が付き始めたのであった。

はっきりと確認された訳でもない狼の評判も大きくなっていく一方である。村はすっかり狼の存在におびえ、全ては自分が原因である事、居なかったかもしれない狼の話で村全体に迷惑をかけてしまった事に、ペローはあらためて罪悪感を抱くようになり始めたのだった。

このあと、ペローは緊急の笛を吹いてはいない。羊小屋周辺は従来の穏やかな様子に戻りつつあり、ペロー自身も孤独な生活に返りつつあった。狼騒動の時のにぎやかな空

気が恋しくもあったが、嘘の笛だけは吹いちゃいけないのだとペローは強く自分に言い聞かせていた。

夜、ペローが番人小屋で休んでいると、誰か外から小屋の戸を叩くものがいた。たいへん珍しいと言うか、真夜中の訪問者と言うのは、実ははじめてであった。

奇妙に思いつつも、ペローが戸を開けてみると、外に立っていたのは小さな少女だった。まだ五、六歳ぐらいの年齢だ。どうやら、この村の子どもではない。非常に目につく赤いずきんを被っていた。さらに彼女には連れがあって、それが山羊なのであった。くたびれた感じの痩せた山羊で、その外見にふさわしく、左の角が欠けて、無かった。

「何の用だい？」不思議な感じがしつつも、ペローはその少女に尋ねてみた。

「私、赤ずきん。道に迷ったの」と、その少女はぶっきらぼうに言った。

「こんな夜中に出歩いていたのかい？」

「違う。家を出た時は明るかったよ」

つまりは、迷子になって、こんな遅くまで彷徨っていたと言う事らしい。

「ねえ、今日だけでも、ここに泊めてよ」と、その子はさらに言った。

ペローは少し躊躇した。よそ者を連れ込むと、何かトラブルが起きそうな感じがしたからである。しかし、今のペローは寂しかった。こんな幼女でも話し相手ぐらいにはなりそうだ。

「今晩だけだよ」

彼はその少女を番人小屋へと入れてやったのだった。

「ありがとう。こちらはニコだよ」と、少女は山羊の事も紹介してくれた。「ニコは外につないでおくね」

赤ずきんは、どこか得体の知れない雰囲気を漂わせた少女だった。

「何の用事で、一人でお出かけしていたんだい？」

「おばあちゃんちに行く途中だったの」

「おばあちゃんって、この村の人なのかい？」

「違うよ」

「ごめん。この家には、今食べるものが無いんだ。お腹がすいてるかもしれないけど」

「大丈夫。私がパンと葡萄酒を持ってるよ。これを一緒に食べよう」

「いいのかい？」

「構わないよ。おばあちゃんちに持っていくものだったけど、行くのは止めて、明日は帰る事にしたから」

会話をしても、万事がこんな調子なのであった。

しかし、同世代の子どもとあまり会う事のなかったペローとしては、こんな幼女相手でも楽しい気持ちになってきたのだった。何よりも、赤ずきんは、口こそ悪いが、目がパッチリした可愛い顔をしていた。

翌朝早くに、赤ずきんは、約束どおりに番人小屋から出て行った。村人に見られたくなくて、ペローは特に引き止めもしなかった。恐らく、彼女も歩いてきた道を見つけて、無事に自分ちに戻ったのであろう。

その日は、訪問者が多い一日だった。ペローが羊を放牧させに行く直前に、今度は村の長老が一人のガタイのいい男を連れて、やって来た。はじめて見る服装の大男で、猟

銃を手にしていた。すぐに猟師だと分かった。
「ペロー、挨拶しなさい。この人は、村で雇った猟師のグリムさんじゃ」と、長老は言った。
「お前か。狼を見たと言う羊番は？」グリムに野太い声で詰め寄られ、ペローはつい物怖じした。
「は、はい」と、震える声でペローは何とか答えた。
「オレはずっと狼を追い掛けてるんだ。この村に現れた狼も必ずオレがしとめてやるからな」
　もし狼の目撃が誤報だと分かったら、この猟師は自分に対してどんな態度になるのだろうと、一瞬ペローは怖くなった。
「坊主、よく聞けよ。狼は、オレたちが考えている以上にずるがしこい動物なんだ」と、グリムは言った。「ついこないだも、山の向こう側の村で七匹の山羊が襲われたばかりだ。狼は、どうやって山羊小屋に忍び込んだと思う？ 山羊たちの母山羊に化けやがったんだ。狼は別の生き物に化ける能力を持っているのさ。襲われた山羊の方は、六匹が殺されて、一匹は行方不明のままだ。狼が連れていったのかもしれない」
　ペローの脳裏に赤ずきんの姿がよぎった。彼女は確か、山羊を連れてはいなかっただろうか。
「に、人間にも化けるんですか？」ついペローは聞いてみた。
「恐らくな。それも、完全に人間になりきったりも出来るはずだ。自分が狼だった事を忘れちゃうぐらいにな。案外、狼はもう村の中に住みついているのかもしれないぜ」グリムは豪快に笑ったが、その目は笑っていなかった。
　ペローは、自分が親の顔も知らぬ孤児だった事を思い出した。そして、言いようのない不安にも駆られてきたのだった。
　それからまた、しばらく日にちが経った。グリムが村に招かれた事で、さらに村中が狼の話題で持ちきりになったが、実際にまた狼が現われる事はなかった。ペローが嘘をつくのを止めたのだから、当然なのである。
　そして、ある日の夜、再び赤ずきんがペローの番人小屋へとやって来た。今度も真夜中であり、全く不思議な少女なのであった。
　前回同様、山羊のニコを連れていて、道に迷ったから、ここに泊めてほしいと言うのだが、どう考えても怪しいのだった。グリムが教えてくれた狼の話を思い出し、ペローはひどく警戒してはいたのだが、結局は赤ずきんを小屋の中へと入れてしまった。赤ずきんの澄んだ大きな目に見つめられると、何となく逆らえない気持ちになってしまったのである。
　小屋の中で二人っきりになったあとも、ペローは赤ずきんへの警戒の態度を緩めなかった。赤ずきんにも、ペローの様子がおかしい事はすぐに察知できたらしい。
「どうしたの？ 今日のペロー、変だよ」と、ストレートに赤ずきんは訊ねてきた。
　ネが素直なペローとしては、どう応じていいのかがうまく浮かばなかったのだが、それでも探るような形でこう話を切り出していった。
「この村、狼に狙われているみたいなんだよ。だから、夜はむやみに外へ出ない方がいいんだ」
「へえ、怖い。私も襲われるかな」

「そうだよ。君なんて、真っ先に食われるかもしれないよ。もう夜遊びなんて止めて、この村には来ない方がいいよ」
「でも、ペローだって食われるかもよ」
「僕は大丈夫さ。男の子だからね」
「男の子だって心配だよ。そうだ、私、さっきまでお花を摘んで、お守りの首飾りを編んでいたんだ。これをペローにあげるよ。そしたら、もう狼なんて怖くないよ」
　そう言って、赤ずきんは花で編んだ首輪をペローに掛けてくれたのだった。使われている花は、ペローもよく目にする村周辺に咲く花々だ。しかし、それらの花に混じって、円錐状の金属もいくつか編み込まれていた。何ともけったいな花飾りなのであった。
　こうして、赤ずきんは、今度の夜も、正体を明かす事もなく、翌朝にはペローの番人小屋から去っていった。ペローを襲わなかったところを見ると、やはり赤ずきんは本当の迷子だったのだろうか。あるいは、やはり狼の化身だったのかも知れず、何かの企みがあって、今はペローを泳がせていたのかもしれない。そのへんは、ペローにはさっぱり見破れなかった。
　ペロー以外に、赤ずきんの姿を目撃した村人はいなかったらしい。夜間、村の中をさんざん歩き回っていたグリムも含めてだ。よって、ペローも赤ずきんの事は誰にも喋ってはいなかった。今やペロー自身が自分の言動にすっかり自信をなくしてしまい、迂闊な事を言えなくなっていたのである。
　そして、最初の狼騒動があってから一月が経った。あれからペローは完全に緊急の笛を吹くのを止めたし、赤ずきんも番人小屋には訪れなくなっていた。ただ、猟師のグリムだけが、村の周辺を警護の為に夜通し歩き回る日々が続いていた。
　何もかもが元の生活に戻ってしまったようにも感じられた。あれほど大騒ぎになった狼の事も忘れられ始めていた。そもそも、ペローの最初の目撃からして勘違いだったかもしれないので、こうなるのが当然なのである。
　その日も、羊を近所の高原へと放牧していたペローは、このまま何事もなく今日の日が終わってゆく事をぼんやりと感じていた。さらには、自分はこんな生活をずっと続けていくのだろうかと、未来の事まで思いふけっていた。あの狼騒動は、今となっては、退屈な毎日の中に紛れ込んだ、ちょっとした思い出にもなったのかもしれない。
　その時、ペローの耳に笛の音が聞こえてきた。あのペローが持っている緊急時の笛の音だ。
　これはおかしな話である。緊急の笛なら、今ペローが自分の首にと、あの赤ずきんがくれた花飾りと一緒に、ぶらさげていたからである。自分がこの笛を吹いていないのに、一体誰がこの笛を鳴らしたのだろう？
　しかし、それ以上に大変な事になりそうだと、ペローはすぐに気が付いたのだった。
　間もなく、村人たちがこの高原へと駆けつけてきた。日中の畑仕事をやむなく中断して飛んできた訳だから、誰もが今まで以上に殺気立っている。そんな状況で、ペローはバカ正直にも自分は笛を吹いてないなぞと弁解したものだから、ますます皆を怒らせる結果になってしまったのだった。
　完全にペローは嘘つき扱いである。これまでの狼出現の報告も嘘だったのではないかと、はっきり疑う村人も現れた。こうして、村人たちは憤りながら村へと帰っていったの

である。まさに最悪の展開となって、ペローもただ立ち尽くすしかなかったのであった。
　その夜、放牧していた羊を家畜小屋に戻した頃、長老がペローの番人小屋へとやって来た。長老はこの村の村長でもあり、ペローをこの村に引き取ってくれた恩人でもあった。ペローにとっては、もっとも信用できる人物なのだった。
　羊番の仕事の解雇を言い渡しにきたのではないかとビクビクしつつも、ペローは長老を番人小屋の中へと通した。
「ペロー、今日は大変だったね。皆にとやかく言われて、落ち込んではいないかね」長老はそう優しくペローに語りかけてくれた。
「村長さん、心配してくれて、ありがとうございます。でも、僕の話は本当なんです。分かって下さい」ペローは必死に訴えた。
「しかし、笛を持たされているのは君だし、果たして、そんな話をどれだけの人が信用してくれる事やら」
「そうかもしれません。しかし、今度だけは絶対に事実なんです」
「おや？ まるで、前には嘘もついた事があるかのような言い方じゃな」
　ペローははっとした。もしかすると、長老の誘導尋問に引っかけられたのだろうか。
「でも、最初の狼騒動の時も、確かに僕は怪しい影を見たんです。間違いありません。あの日も、今夜と同じぐらい満月がきれいでしたから」ペローは、慌てて、そう言い足した。
「全く君の言う通りだ。あの日もとても美しい満月が輝いておったな。あれから一ヶ月、長かったよ」
　ペローは、長老の話の内容がどうやらオカしい事に気付いたのだった。
「村長さん、どうしたんですか。一ヶ月前、何かあったのですか」
「君は見間違えてなどおらんよ。あの夜、確かに狼はこの村の羊を襲うつもりだったんじゃ。しかし、君にうっかり影を見られてしまったばかりに、それが出来なくなってしまった」
「村長さん、大丈夫ですか。何を話してるんですか？」ペローは動揺した。
「愚かな君は、それからも狼が出たと笛を鳴らし続けた。おかげで本物の狼はなかなか羊に近づく事ができなかった。わしは、君が村人たちから完全に信用を失う時をずっと待っていたのじゃ。その日はついに訪れた！」
　そして、長老は自分の服のポケットの中に入れていた笛を取り出して、見せたのだった。
「その笛は！」と、ペローは思わず叫んだ。
　そもそも、緊急の笛は長老が預けてくれたものだった。長老が、スペアを持っていたとしても不思議な話ではないのである。
「正体がばれないようにする為に、わしも色々と苦労したよ。自分でわざわざ天敵の猟師を雇ったりとかもしてね」
　ペローはすかさず自分の笛を吹き鳴らした。喉に力をこめて、精一杯大きく吹き続けた。
「無駄じゃよ。昼間にあんな騒動があったばかりだ。今夜はもう、その笛の音を聞いても、誰も駆けつけてはくれない。わしは、今夜こそ邪魔者のいない状態でごちそうを食べさせてもらう。この麗しき満月の夜に！ 今夜は、わしも真の姿に戻れるのだ！」

　そして、長老の頭の白髪がもさもさと伸び出すのを、ペローははっきりと見たのだった。髪の毛だけじゃない。長老の体全体から、白い剛毛が生え始めた。長老の服は破れ裂け、次の瞬間、ペローの目の前には全身真っ白なスマートな狼が立っていた。恐ろしい怪物狼が正体を現した瞬間である。
「さあ！ お前も含めて、全ての羊を喰らってやるぞ！」狼に戻っても、その化け物は人語でそう吠えた。
「助けてええ！」と、ペローがたまらず叫んだ。
　その時だった。小屋の戸をどんと開けて、グリムがこの小屋の中へと飛び込んできた。手にはしっかりと猟銃をかまえている。グリムは、飛び込んでくるのとほぼ同時に、その猟銃を数発ぶっ放した。腕のいい猟師の狙いは的確で、全発が白オオカミの体をぶち抜き、さすがの狼もひっくり返った。
「おじさん！ 信じてくれたんだ」グリムの姿を見て、ペローの顔にパッと笑みが広がった。
「坊主。言っただろう？ 狼はずるがしこいんだ。ヤツらの計略にはまるほど、オレもボンクラじゃねえ」ニヤリと笑うと、グリムはペローのそばへと寄り添った。「見ろ。こいつは間違いなく100年以上は生きているぞ。一番タチの悪い狼で、これだけ生きた狼は、変身も自在だし、魔法だって使えるんだ」
　すると、死んだかと思われた白オオカミがゆっくりと立ち上がったのだった。
「その通りだ。猟師よ、100年狼を見くびるでない。わしには鉛の弾などは痛くもないぞ」白オオカミは不気味な声でそう吠えたのだった。
「ちくしょう！ オレも、こんな大物と出くわしたのははじめてなんだ。これ以上は対処の仕方が分からねえ！」グリムもそう怒鳴って、さらに猟銃を撃ちまくった。
　ゆっくりと近づいてくる白オオカミに全ての弾丸は当たっていたようなのに、狼は少しも倒れる気配がないのであった。
　ペローもグリムも絶体絶命である。
　次の瞬間、白オオカミはバッと二人目がけて飛びかかってきた。が、なぜかそのまま襲わずに、キャンと吠えて、跳ね戻ってしまったのだった。
　不思議に思ったグリムの目が、はたとペローの首飾りにと釘付けになった。
「それだ！ よこせ！」と、グリムは怒鳴った。彼はペローの花の首飾りをもぎとると、そこに括りつけられていた円錐状の金属をはずし、自分の猟銃へと装填した。猟師のグリムには、実はそれが銃の弾であった事が一目で分かったのだ。
　グリムがその弾を白オオカミ目がけてぶっ放すと、今度は狼もすさまじい悲鳴をあげて、よろめいた。
「おじさん。一体、これは？」と、ペローはグリムに聞いた。
「それは、こっちが知りたいよ。坊主が持っていたのは、銀が混ざった弾丸だ。今思い出したよ。オレの爺さんから聞いた事があるが、銀は唯一、化け狼にも通用する武器だ。なぜ、こんな物を持っていた？」
「僕も貰っただけだよ。赤ずきんに」
「なに？ 赤ずきん？」グリムが大げさに驚いた。
「そう、赤ずきん。100年狼は私がしとめるわ」
　ペローも知っている、少女の声が聞こえてきた。番人小屋の入り口から、さっそうと

入ってきたのは、あの赤ずきんだった。例によって、真っ赤なずきんを被っている。横には山羊のニコも連れ従えていたが、以前のくたびれた感じとは雰囲気が違っていた。どこか凛々しく、曲がっていた右角もなぜか鋭くピンと伸びていた。
「赤ずきんだと？ 本当にいたのか！」グリムがおののいた。
「おじさん。赤ずきんの事を知っているんですか？」
「知ってるも何も。赤ずきんは、伝説的なすご腕の狼ハンターだ。世襲制で、少女時代しか狼狩りはしないと聞いている。そんな不思議な狩人に、まさか実際に会えるとは」
「赤ずきんだとぉ！」と、よろけながらも白オオカミも唸った。「我が親族をことごとく狩り滅ぼした恨み、ここで晴らしてくれるぞ！」
「それは不可能と言うもの！」と、赤ずきんも言い返した。「私の武器は、全てが狼の嫌う銀仕立て！ 私のこの赤いずきんは、狼のあらゆる攻撃を寄せ付けない返り血のコート！ そして、私の乗馬であるニコは、狼より速く走れるユニコーンよ！」
　ここで、読者の諸君も思い出していただきたい。幻の妖馬ユニコーンは、処女にしか懐かないものなのだ。赤ずきんの一族が、少女しか狩りをしないのは、そのへんにも事情があったのである。それに、馬だけではなく、山羊のユニコーン（ 一角獣 ）が居たとしても良いではないか！
　赤ずきんのタンカを聞き、白オオカミもややうろたえたみたいだった。しかし、さすがは 100 年以上生きている化け物である。白オオカミは、すぐには白旗をあげたりはしなかった。
「なるほど。それが赤ずきん一族の強さの秘密だと言うのか。ならば、わしは、お前が銀の武器を使う前に、お前が赤ずきんで身を守る前に、お前がユニコーンに乗って逃げ出す前にーー」ここで白オオカミは大きく口を開いた。「お前の事を丸ごと呑み込んでやる！」
　白オオカミの体全体がムクムクと大きくなりだした。特に頭部がまるでデフォルメしたみたいに膨れ上がり、その開いた口の広さは赤ずきんの背すらも上回った。100 年狼は、こんな特殊能力すらも備えていたのだ。
　まさに有言実行である。その奇怪な姿で、白オオカミは赤ずきん目がけて飛びかかった。そして、赤ずきんにいっさいの反撃の隙も与える事なく、本当にパクンと一口で食べてしまったのである。
「赤ずきんが食われちゃったよ！」ペローが悲痛な声をあげた。
「いや、違う！ よく見てみるんだ」グリムは怒鳴った。
　そうなのだ。赤ずきんを見事に呑み込んだはずの白オオカミは、後ろ足で立ち上がった状態のままで、なぜかずっと硬直していた。しかも、体が小刻みに震えている。
　次の瞬間、白オオカミの腹は内側から破れ、中からは赤ずきんが飛び出してきたのだった。赤ずきんの右手には銀の果物ナイフが握られている。
「愚かなり、100 年狼よ。私の赤ずきんは狼の血で染められている。同族愛の強い狼は、仲間や仲間の肉体に対してはダメージを与える事が出来ない。それがお前たちの弱点なり。この赤ずきんを被っている限り、たとえ呑み込もうとも、お前に私を消化する事はムリなのだ」
　赤ずきんは最後の勝利の言葉を決めたのだった。恐るべき白オオカミは、こうして完

全に打ち負かされたのだ。

ペローはホッとして、お礼を言う為に、赤ずきんのそばに走り寄ろうとした。しかし、立ち止まった赤ずきんは、振り返ると、右手を突き出して、ペローの動きを制止した。「ペロー、私との約束を覚えている？ その時にまた会おう」赤ずきんは無表情にそれだけ言うと、バッとニコの上に飛び乗り、そのまま暗い森の方へと走り去ってしまったのだった。

ペローもあっけにとられていたが、横では、大の大人のグリムも呆然としていたのだった。

翌日、番人小屋で本当に化け物狼が現れたと言う話は村中で騒ぎ立てられる事になった。赤ずきんに倒された白オオカミの死骸は村の広場で見世物にされ、長老の家の床を掘ってみると、人間の白骨が一組、発見された。恐らく、本物の長老の骨だろうと判断されたが、いつから長老と狼がすり替わっていたのかまではよく分からなかった。

ペローは、この事件のあと、羊番の仕事を辞めて、この村を出て行く事にした。親切な村人たちは居続けるように勧めてくれたのだが、ペローにはすでに強い決心があった。彼は、グリムの元へと弟子入りしたのである。グリムは特に理由を尋ねる事もなく弟子入りを認めてくれて、ペローの見習い猟師としての新しい人生が始まったのだった。

実は、ペローは赤ずきんと過ごした二夜の間で、赤ずきんに「大きくなったら、ペローのお嫁さんになる」とささやかれていたのである。別れ際に赤ずきんが言った約束とは、この事に違いないとペローは確信していた。

自分はいつか、赤ずきんと再会できるのだろうか。猟師になれば、あるいは彼女とまた出会える機会も増えるかもしれない。何よりも、今度、赤ずきんと会う時は、自分も赤ずきんを守ってあげられるような立派な男になっていたかった。

今のペローは、けっこう幸せそうなのであった。

了

（ 2016 年 8 月作品 ）

「続・狼ハンター」

「助けてくれー！ 狼だ！ 狼におうちを燃やされたよぉー！」
　次男ぶたが、長男ぶたの小屋へ、慌てふためきながら押しかけてきたのは、三男ぶたが助けを求めてきてから間もなくの事だった。
　そこの土地では、三匹の兄弟ぶたがそれぞれ小屋を建てて、平和に暮らしていた。長男はレンガの家、次男は木の家、三男は藁の家だ。
　ところが、恐ろしい 100 年狼が彼らに目をつけたみたいなのだった。狼は 100 年以上生きると、不思議な魔力を身につける。他の動物に変身したり、体の大きさを自由に変えられるようにもなるのだ。
　そんな 100 年狼の一匹が、まずは藁の家に襲いかかってきた。その狼は風を操る能力を身につけていたようで、たちまち藁の家を突風で吹き飛ばして、崩壊させてしまったのである。命からがら逃げ出した三男ぶたは、長男ぶたのレンガの家の中へとかくまってもらったのだった。
　100 年狼は続けざま、次男ぶたの小屋も襲ったらしい。次男ぶたの家は木で出来ていたから、風ぐらいではびくともしなかったが、今度は狼の方も火を吹いてきた。乾燥した木の小屋はたちまち燃え上がり、次男ぶたも慌てて長男ぶたの元へと避難してきたみたいなのだった。
　これは大変な事態になったな、と思いつつ、長男ぶたが弟ぶたを自分の家に避難させていた最中である。
「待って。私も入れてちょうだい」
　そう叫びながら、14、5 歳ぐらいの人間の少女が森の方から駆けてきた。頭から、子供用の赤いずきんを被っている。彼女もまた、狼に追われて、逃げていたのであろうか。
　彼女があまりにも真剣な勢いでやって来たものだから、深く考えもせず、つい長男ぶたは彼女の事も自分の家に入れてしまったのだった。
　そして、すぐに重い鉄の玄関ドアをバタンと閉めた。
「よし、これで狼も我々には手を出せないぞ」と、長男ぶたが言った。
「兄さん、ちょっと待てよ。なんで、こんな人間の女の子まで入れてしまったんだよ」三男ぶたがすぐに長男ぶたへと抗議したのだった。
「しかし、この子も狼に狙われていたのかもしれないじゃないか。食べられてしまったら、可哀相だ」長男ぶたは慌てて弁解した。
「何を言ってるんだ。狼は人間に化けると聞くぞ。もし、この子が狼だったら、どうするつもりだ」次男ぶたも三男の方に賛成のようである。
「そうだ、そうだ！ おや、この女の子、狼の血の臭いがするぞ！」三男ぶたが、少女の臭いを嗅ぎ、立て続けにそう指摘したのだった。

「それは、私のずきんから臭っているのよ」と、落ち着いた口調で少女は言った。「このずきんは、狼の血を使って、染められているの」
「な、何だって！ 君は一体、何者なんだい？」びっくりして、長男ぶたが少女に尋ねてみた。
「私は赤ずきん。狼ハンターだよ。この土地に狼が侵入したと聞いたので、退治しにきたの」
「お、狼ハンターだって！」三匹のぶたは、それぞれに驚きの声を発したのだった。
「おい、待てよ！ きさま、狼ハンターとか名乗って、実は本当の狼はお前なんじゃないのか？」血の気の多い次男ぶたが赤ずきんへと言い寄った。
「疑うのはごもっとも。狼は何者にでも化けられるからね。そして、この中に狼がいると言うのも、確かに間違いないよ」赤ずきんがとんでもない事を断言したのだった。
「き、君、それは本当かい？ なぜ、そう考えるんだ？」長男ぶたが動揺しながらも、赤ずきんに聞き返した。
「理由は簡単さ。このレンガの家は、風でも火でも壊す事はできない。しかし、欲張りな狼は、あなた達三匹とも食べる事を企むはずだよ。その為には、この家の中に自分も忍び込むしかない。だとすれば、誰かに化けて、中に入れてもらうのが一番手っ取り早いでしょ？」そして、赤ずきんは三匹のぶたを順番に睨みつけたのだった。
「お、狼は銀に弱いと聞いた事がある。ほら、オレは銀を触れるぞ！」次男ぶたが急いでテーブルに駆け寄ると、テーブルにあった銀のスプーンをさっと持ち上げてみせた。
「私だって！」
「おいらも」
　と、続いて、長男ぶたも三男ぶたも銀のスプーンを手に取ってみせたのだった。そして、最後に、赤ずきんも銀の皿をひょいとつまみ上げた。
「どうやら、君の考え過ぎだったようだね」安心して、長男ぶたが胸を撫で下ろした。しかし。
「いいえ。それなら、次はこれを使うわ」
　そう言うと、赤ずきんは被っていた自分のずきんをさっと外し、両手に持って、皆の目の前にかざしたのだった。
「あなた達に、これを傷つける事ができる？ 同族想いの狼は、狼の体の一部には手を上げる事ができないのよ」
　なんとも奇妙な狼の見分け方法だった。長男ぶたと三男ぶたは、呆れたような表情で、赤いずきんを自分のひづめで引っ掻いてみせた。
　ところが、次男ぶただけは狼狽していて、ずきんのそばにすら近づこうとしなかった。
「どうしたの？ 次はあなたの番よ」赤ずきんは、次男ぶたの方へとじりじりと詰め寄った。
　後ずさりして、とうとう壁の前にまで追いたてられた次男ぶたはいきなり大声で笑い出した。
「さすがだぞ、赤ずきん！ よくぞ、正体を見破った！ そうだ、狼はこのオレだ！」
　そう唸ると、次男ぶたのピンクがかった肌はたちまち変色しはじめた。茶色い褐色となり、そのままワサワサと毛になって、いっきに伸び出した。丸いフォルムだった頭や胴体も、スリムに変形してゆく。恐るべき100年狼が本性を現した瞬間だった。

　恐怖に怯えた二匹のぶたは、思わず赤ずきんの体にすがりついた。
「100年狼の中には、ごく稀に銀に耐性がある変異体もいるんだよ。しかし、同族の体を傷つけられないのは、全ての狼共通の特徴だよ」赤ずきんは説明した。
　完全に狼の姿に戻った怪物は、後ろ足だけで超然と立ち、鋭い眼光で赤ずきんとぶた達を威圧した。
「さあ、赤ずきん、次はどうする？ オレには銀の武器は効かないぞ。お前の愛馬のユニコーンも、ここには居ないようだな。今のお前でオレに勝てるのかな？」狼は不敵な笑みを浮かべて、うそぶいた。
「やい、狼！ お兄ちゃんはどうしたんだ！」と、すかさず三男ぶたが狼むかって怒鳴った。
「あのブタか？ あのブタは、木の小屋と一緒に丸焼きになったよ。おいしく戴いたぜ」狼が、可笑しそうにせせら笑った。
「き、きさま！ よくも、私の弟を！」と、長男ぶたが怒りをあらわにした。その横では、三男ぶたも憤慨した表情になっていた。
「そうよ！ こいつは、あなた達の兄弟の仇よ！ いっしょに倒しましょ！」二匹の間に立って、赤ずきんが叫んだ。
「バカめ！ 愚鈍なブタと小娘一人で何ができる？」
　狼がそう声を張り上げた途端、このケダモノの体中の毛がはね広がった。そして、狼を中心にして、家の中に突風が吹き荒れだしたのだった。
　きゃしゃな赤ずきんとノロマなぶた達は、突風に押されて、今にも吹き飛ばされそうになった。
「どうした？ この程度の風にも耐えられないのか！」狼が大声で笑った。「お次はこれだ！」
　続いて、狼は口からごおーっと火を吐いた。照準はあまり良くない。また、風を起こしながら、火を吹く事もできなかったようだ。
　風が止まった一瞬を見逃さず、赤ずきんもぶた達も何とか火の直撃からは走り逃げたのだった。
「思った通りだわ。この狼は、風の属性と火の属性を備えている」家の中を走り回りながら、赤ずきんはつぶやいた。「でも、それがこいつの命取りよ！」
「ほざくな！ 負け惜しみを言うな！」狼が怒鳴った。
　赤ずきんの方は暖炉の前で立ち止まっていた。
「さあ、ぶたさん！ あなた達もこっちに来て！ 手伝ってちょうだい！」と、赤ずきんは逃げまどっていたぶた達へと呼びかけた。
　二匹のぶたが、何とか暖炉の所にまでやって来る。
「ふん。何をするつもりだ？ オレは火などは怖くないぞ」狼は吠えた。
「燃えさしを取りにきた訳じゃないわ。私の目的はこれよ！」
　そう言って、赤ずきんは暖炉にかかっていた大きなナベに手をかけた。ぶた達にも指図して、ナベの両脇についていた取っ手を左右から掴み、持ち上げると、ナベを暖炉から外した。
「風は水と相殺する。火は水に弱い。それが四大元素の法則よ！」と、赤ずきんが叫ぶ。
　大きなナベの中には、いっぱいのお湯が入っていた。

ハッとした狼が、慌てて口から火炎を吐いた。だが、その時はもう手遅れであった。
赤ずきんとぶた達は協力して、ナベの中のお湯を狼の方むけて、振りかけていた。狼の吐いた炎はことごとく、お湯によって打ち消された。火から風へと攻撃をチェンジするには、もう間に合いそうにない。間に合ったとしても、どっちみち、お湯の進行を防ぐ事はできなかっただろう。
お湯が狼の全身にと降り掛かった。
「ぎゃあああー！」
狼の凄まじい断末魔がレンガの壁にこだました。
水を浴びた狼は、風と火の力を中和され、体中から熱を噴き出していた。その身はひらひらと倒れ、すでに肉も骨も溶け切ってしまい、ぺちゃんこの皮と毛だけが床の上にはり付くように落ちたのだった。
恐るべき怪物の亡きがらのそばに歩み寄り、赤ずきんも二匹のぶたもひどく険しい表情を浮かべていた。

ドイツのハルツ山の奥深くに赤ずきんの一族が住む村があった。そこから、さらに離れた森の先に、赤ずきんの祖母が住む小屋がある。彼女こそは先代の赤ずきんであり、赤ずきん一族の総元締めなのだ。
また一匹、狼を退治した赤ずきんは、祖母の元へ報告に出向いていた。
小屋の前にやって来た赤ずきんが、コンコンと入り口の戸を叩く。
「おばあちゃん、こんにちわ。赤ずきんです」
「お入り」と、小屋の中のおばあちゃんが言った。
彼女は年老いて、寝たきりであった。今も、ベッドの上にもぐったままで返事をしたのだ。
「お邪魔します」と言って、赤ずきんは戸を開き、小屋の中へ入っていった。
彼女は、今日も赤いずきんを付けた正装だ。しかし、この赤のずきんも元々少女向けのサイズだったので、かなり成長した今の赤ずきんにとっては、だいぶ小さくなっていたようである。赤ずきんが狩人でいられる期間は非常に短いのだ。
小屋の間取りを把握していた赤ずきんは、すぐにおばあちゃんのいるベッドの前にまでたどり着いた。おばあちゃんは布団を頭から被ったまま、ナイトキャップだけを布団の外に出していた。
「おばあちゃん、パンと葡萄酒を持ってきたわ」と、赤ずきん。
「いつも、ありがとう。そこのテーブルの上に置いといておくれ」
顔も見せずにベッドに寝続けているおばあちゃんの指示に従って、赤ずきんはその通りにした。
「で、今回の収穫は？」と、おばあちゃん。
「フランスの片田舎まで足を運び、風と火のオオカミを退治してまいりました」
「あの古株の狼をかい？ よくやったね、赤ずきん。しかし、最近、少し倒すのに時間がかかり過ぎているんじゃないのかな」
「あのね、おばあちゃん」と、赤ずきんが親しげな口調にあらためた。「実は、聞きたい事があるの」

「どうしたんだい」
「私、この頃、胸が膨らんできたみたいなの。どうしてかしら」
「赤ずきんや、それはね、子どもに乳を飲ませる為なんだよ」
「それだけじゃないよ。お尻も大きくなった感じがするの」
「それは、丈夫な子どもを産めるようになる為だよ」
「まだあるわ。病気じゃないはずなのに、おまたから血が出てくる事もあるのよ」
「怖がる事じゃない。お前もようやく一人前になった証拠だ」
「でも、ニコが私に懐かなくなってしまったよ」
「それは寂しいね。ニコはユニコーンだから、穢れのない乙女にしか懐かないのだよ」
「だけど、一番困っているのは、この数ヶ月ばかりで急にお腹が大きくなりだした事なの。これは一体、どうしてなのかしら」
「それはお前が子どもを孕んだからだ！ このアバズレめ！ どこで男をたぶらかした？ 処女を捨てるような女には、もう赤ずきんの資格はないわ！」そう怒鳴ると、おばあちゃんはいきなり立ち上がったのだった。
　赤ずきんはビクリとして、その場に立ちすくんだ。そして、目の前のおばあちゃんが、いつものおばあちゃんと微妙に雰囲気が違う事に気付いたのだった。しかし、その時にはもう遅かった。
「さあ、その赤いずきんをわしによこせ！ お前にもう赤ずきんを名乗る価値はないのだ！」そう声を張り上げると、おばあちゃんは老人とは思えない俊敏な動きで、赤ずきんの被っていたずきんを奪い取ったのだった。
　赤ずきんが全ての真相を理解した時には、もう後の祭りだった。
　高笑いするおばあちゃんは、赤のずきんを自分の頭にと被せてみせた。
「この時を待っていたのだ。この血染めのずきんこそは、オオカミ族の多くの怨念がこもった究極の一品！ ハンターが被れば、狼から身を守る盾になるかもしれないが、狼自身が被れば、仲間の情念が加護となり、その狼の力を何倍にも高めるのだ！」
「あなた、狼ね？」赤ずきんがすかさず聞いた。
「そうだ。わしは狼だ。しかし、今はもう只の狼じゃないぞ。この血のずきんを被ったからは、地上で最強の狼だ。我が狼の一族こそが世界の覇者となるのだ。今のわしは、グリフォンだってドラゴンだって怖くはないぞ！」
　そう吠えると、おばあちゃんの姿はたちまち毛深い狼へと変わっていった。しかも、ずきんの色が染み込んだかのように、狼自身の毛の色も真っ赤に染まっていったのである。
「さあ、ずきんの威力を試してやる！」
　全身が鮮やかな朱色となった狼は、ふわっと宙に浮かび上がった。もちろん、この狼が得た能力とはその程度のものではないのだ。
　突然、大地がグラグラと揺れ出した。激しい地揺れの前では、簡素な小屋はひとたまりもない。家財道具が次々にひっくり返り、壁のあちこちにヒビが入って、穴があいた。そんな中で、赤ずきんもまたヨロヨロと転びかけ、すっかり翻弄されていた。
　地震の影響を受けていないのは、空間に浮遊している朱オオカミだけである。
　転倒したベッドの下に、隠すように人間の白骨があるのを、赤ずきんは目ざとく発見した。

「あなた、おばあちゃんを食べちゃたのね！ なんて事を！ 許さない！」怒りの表情で、赤ずきんは朱オオカミを睨みつけた。
「引退した先代赤ずきんなんて、もはや敵ではないよ。赤ずきんになり損ねたお前のお母さんにしてもな。知ってるか？ お前のお母さんも、修行中にガキを孕んだものだから、ハンターになれる条件を失ったんだ。そして、無力な人間のまま、狼に食い殺された。バカな奴よ」朱オオカミがあざ笑った。
「お母さんの悪口を言わないで！」赤ずきんが激しく言い返した。
「子どもを孕んじまったお前も、母親と同じ道を歩むんだ。赤いずきんの盾もない。愛馬のユニコーンも懐かない。おまけに体も重たくて、今のお前にどうやって戦えるんだ？」
　朱オオカミの挑発に乗せられて、思わず赤ずきんは服の胸元の銀ボタンをひき千切った。それを朱オオカミの方むけて、素早く投げつけた。
「ふははは。遅い、遅い。そんなんじゃ、飛んでるボタンの上に蝿がとまるぞ」
　朱オオカミは、ふわりふわりと体を揺らして、余裕でボタンをかわしてしまった。
　赤ずきんも厳しい修行を積んできたのだから、決して物を投げる腕前が劣っていた訳ではない。しかし、100 年狼はそれを上回る身体能力を持っているのだ。
　その時だった。小屋の中に大きな銃声が響き渡った。
　笑っていた朱オオカミがはたと顔をしかめた。
「な、なにぃ！」と、狼は口ごもった。その体に、たった今、弾丸が撃ち込まれたのである。それも狼が苦手な銀の弾だったらしい。
　続いて、赤ずきんのそばに走り寄る一つの影があった。赤ずきんもニンマリとしている。
「今の銀のボタンは、わしの気をそらす為のおとりだったと言うのか。なかなか舐めたマネをしてくれるじゃないか。おい、お前は誰だ！」赤ずきんのそばに身を寄せた人物むかって、朱オオカミは怒鳴った。
「赤ずきん、何とか間に合ったみたいで良かったよ。君を一人でなんか戦わせはしない」と、その人物、いや、その青年は爽やかに言った。
「ありがとう。ペロー」と、赤ずきんもほほえんだ。
　そうなのだ。ここに現れた青年はペローである。かつて 100 年狼の魔の手から赤ずきんに助けてもらった羊飼いの少年が立派な猟師に成長して、この危機の場に駆けつけてくれたのだ。
「間抜けな狼は、壊れた壁の穴から僕がこっそり忍び込んでいたのにも気付かなかったみたいだな。今お見舞いしてやったのは、グリム師匠直伝の特製純度 100 パーセントの銀の弾丸だ。これは狼にはこたえるはずだぜ」ペローが得意げに猟銃を構えてみせた。
「100 年狼よ、見たか！ 赤ずきん一族の強さの秘訣は、そのずきんやユニコーンだけじゃない。私たちは、愛し合い、助け合う。そうして赤ずきん不在の期間だって乗り越えてきたのよ！ 私のお母さんだって、自分はハンターにはなれなかったかもしれない。でも、こうして私を産み、愛情をいっぱい注いでくれて、次の赤ずきんに育ててくれたのよ！」赤ずきんも訴えた。
「ほほう、なるほどな。分かったぞ」朱オオカミがイヤラシい笑みを浮かべた。「さては、この娘を孕ませた男はお前だったんだな」

「だから、どうした！」と、ペローは言い返した。
「恋人の前で良いところを見せたかったのかもしれないが残念だったな。この血のずきんの加護によって、わしは不死身だ。銀の武器にも耐性があるのだ」
「な、なんだって」さすがにペローもうろたえたのだった。
　赤いずきんの効果は、ずきんに血を塗られた狼たちの超能力を全て、この狼へと憑依させていたのである。
「ち、ちくしょう！」
　ペローは猟銃を装填し直して、再び朱オオカミ目がけて撃ちまくった。
　しかし、銀の弾丸が何発も当たっていたにも関わらず、朱オオカミはずっと涼しい表情をしていた。
「さあ、今度はわしの攻撃の番だぞ」と、朱オオカミが大きく息を吸い込んだ。そして、次の瞬間、この恐るべき怪物は、深紅の巨大な火炎を吐き出したのだ。
　赤ずきんとペローは、急いで左右に走り逃げた。何とか、火炎の攻撃はまぬがれたのだった。
「まだまだあ！ 本番はこれからだぞ」朱オオカミはせせら笑った。その二本の前足がゴムを引っ張ったようにピーンと伸びた。さらには、その拳だけが巨大に膨れ上がった。「いくぞお！」
　朱オオカミは、長く伸び、先端だけ肥大化した前足で、地を逃げまどう赤ずきんとペローをやみくもに攻撃し始めた。あいにく、変形した足のバランスが悪かった事で、狼はなかなか標的を叩けないようだった。
「ひゃあーっ！ これはなかなかキツいぜ！」今にも狼の拳がかすりそうで、思わずペローが叫んだ。
「負けちゃダメ！ 必ず勝機はあるはずよ！」
　赤ずきんが訴えた、その時だった。
　壁をぶち破って、外から突然、山羊のユニコーンがこの小屋の中に飛び込んできた。赤ずきん一族が飼っているユニコーンのニコである。ニコは、逃げ走っていた赤ずきんの前に躍り出て、その進行をさえぎった。
「ニコ。どうして？」立ち止まった赤ずきんがきょとんとする。
　あっけにとられていたのは、ペローも朱オオカミも同様だった。
「ああ、そうか！ 分かったわ！」と、すぐ察知した赤ずきんは、急いでニコに飛び乗った。
「まさか！ どういう事だ。お前のような穢れた妊婦がなぜユニコーンを扱えるのだ！」朱オオカミは唸った。
「私は確かにもう何もかも知ってしまった大人かもしれない。でも、私のお腹の中の子どもはまだ生粋の処女よ！」赤ずきんが叫んだ。
　そして、赤ずきんを乗せたニコがバッと飛び上がった。朱オオカミ目がけて向かってゆく。早さでは、いかなる狼よりもユニコーンの方が上なのだ。
　赤ずきんと朱オオカミの体が交差した。
　次の瞬間、赤ずきんの右手には、赤ずきんの証しである赤いずきんが戻っていた。
「ずきんは返してもらったよ！」喜々として、赤ずきんは宣言した。
　ずきんを奪われた狼の方は、たちまち全身の赤みが抜けていった。もはや先ほどまで

の勢いはどこにもない。目もうつろで、体をピクピク震わせている。かと思ったら、空中に浮遊したまま、狼の体はいきなりパアンと破裂したのだった。加護のずきんを失った為、今ごろになって銀の効力がまとめて発動したのである。
「夢に溺れて、地獄に堕ちればいいわ」狼の最期を横目で見届けながら、赤ずきんはクールにつぶやいた。彼女はゆっくりとニコの上から床に下りた。
「良かったね、赤ずきん！」ペローが、満面の笑みを浮かべながら、赤ずきんのそばへ歩み寄った。
「ありがとう、ペロー。助かったわ」と、赤ずきんの方も無邪気な笑顔で、ペローに抱きついた。
　それから、二人は心からの熱いキスを交わし合ったのだった。
「さあ、今度は僕たちが次の赤ずきんを育てる番だ」ペローが言うと、赤ずきんも静かにうなずいた。
　赤ずきんの血が絶える事はない。最強の狼ハンターの伝説はこれからも語り継がれてゆくのである。

了

（ 2016 年 9 月作品 ）

お化け坂シリーズ

ラインナップ

「帰り道」
「3 つの手の物語」
「お化け坂」
「あいつ」
「笑う幽霊坂」
「恨みの短冊」
「お化け坂を訪ねて」
「見えない叫び」
「びっくり妖怪大図鑑」
「怪しい影」（「ピンクの怪物」より ）
「性器の怪物」（ 18 禁 ）
「しりとり鬼」（「ハイスクール全裸」より ）
「最後のお化け坂」（ 書き下ろし ）
解説

「3つの手の物語」

1　（帰り道）

その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。

吹奏楽部の練習が長引いて、つい夜遅くまで学校に残ってしまった一恵は、その坂を前にして、こんな時間に帰宅する事を、今ごろになって悔やみ始めていた。

一緒に部活に出ていた部員仲間たちは、帰る方向が違うので、とうの昔に別の道で別れている。一恵だけは、この坂を登らないと、自分の家までたどり着かないのだ。

実は、一恵も、夜中に一人だけでこの坂を通るのは、はじめての体験だった。いざ、それが現実になってみると、この坂がこれほど怖く見えるとは、一恵自身もはじめて気付かされたのだった。

坂へ向かっての一歩が踏み出せず、一恵がおろおろし続けていた、その時である。

「君も今帰るところなのかい」

男子の声が、一恵の耳に聞こえてきた。

声の方に振り向いてみると、そこにいたのは、一恵と同じ中学に通っていたF先輩である。

F先輩は、かっこよくて、爽やかで、学校の人気者だった。多少は彼と面識があった一恵にとっても、当然ながら、憧れの先輩なのであった。

「この坂、一人で歩くには淋しいよね。オレの家、この坂を登った、すぐ先にあるんだ。そこまでだけど、一緒に歩こうか」

憧れの先輩からの、実に素敵な提案だった。

さっきまでは坂に怯えていた一恵であったが、たちまち胸がキュンとなってしまった。

「あ、ありがとうございます」

一恵は、ためらわず、F先輩の好意を受け入れた。

F先輩にしてみれば、夜道で心細そうにしている後輩を見かけたら、声を掛け、付き添ってあげるのは、年長者としての当たり前の心がけのつもりだったのかもしれないが、一恵の側にしてみると、あまりに嬉しすぎる展開なのだった。

F先輩はすぐ一恵の左の方へ並ぶジェントルマンぶりを見せると、ゆっくりと歩き出した。

「怖くないよ。オレ、帰るのが遅くなる事が多いからさ、ライトも持ってきてるんだ」

F先輩はそう言うと、ペンシル型の小さな懐中電灯をポケットから取り出し、左手に持って、すぐ前方を照らしてくれたのだった。

やる事なす事が全てスマートで、気が利いているF先輩なのだ。

しかし、このあと、またしても一恵の胸をときめかせる出来事が起こったのだった。
一恵の左手に、温かく、柔らかいものがさりげなく触れたのである。きっと、F 先輩の右手だ。しかも、それは積極的に一恵の左手に絡んできたのだった。
ドキリとした一恵は、思わず F 先輩の顔を見たが、F 先輩もとぼけてるのか照れてるのか、まっすぐ前方ばかりに目を向けていた。
よく考えたら、一恵の方の考え過ぎだったのかもしれない。特別な意味はなくて、F 先輩は怖がっている自分の事を勇気づけてくれる為に、ただ手も握って歩いてくれようとしているだけなのだ。普通はそんなものではなかろうか。
一恵は何となく、一人で納得したのだった。
ドキドキしながらも、彼女は、相手の大きくて、温かい手を握ってみた。すると、相手も優しく、一恵の手を握り返してきたのだった。
一恵は、何とも幸せな気持ちに包まれた。この時間が永遠に続けばいいのに、とすら願いかけた。
さっきまで、あれほど、この坂の事を怖がっていたくせに、全く、女と言うのは現金なものである。
坂を歩いている最中、F 先輩は時々気遣うように一恵にたわいもない事を話しかけてきてくれたが、一恵の方は左手にすっかり神経が集中してしまい、身も心も興奮した状態で、上の空だった。なんとも、少女の純愛とは、くすぐったくなるような微笑ましさなのだ。
やがて、二人は坂を登り終えた。
F 先輩は、静かに一恵のそばから離れた。一恵の方は、手も離したと言うのに、まだ夢心地に浸っているようだった。
「じゃあ、オレはここで帰るから。あとは、明るい道ばかりだから、一人でも怖くないだろ？」
そう言って、F 先輩は右手を振って、一恵にさよならしようとした。
その時、一恵は、F 先輩が右手に包帯を巻いていた事に気が付いたのだった。今までは、暗くて、よく見えてなかったのである。
「あ、あの、先輩。その包帯は？」
恐る恐る、一恵は F 先輩に尋ねた。
「これかい？ 昨日、部活の最中にドジって、ケガしちゃったんだよ。かっこ悪い話だよな」
F 先輩が照れ臭そうに頭をかいた。
でも、一恵がさっきまで握っていた右手には、どこにも包帯など巻かれていなかったのである。あの手は、一体、誰だったのだろう？

2

その時、徳一は地獄の海の中であがいていた。
比喩で、そんな言い方をしているのではない。本当に地獄の海としか呼べないような場所だったのだ。

空はどす黒く曇り、怪しい鳥が沢山飛び回っている。周囲に陸とおぼしき場所は見当たらず、水も気味悪く濁っていて、激しく荒波が立っていた。とても現実世界の光景とは思えない。

そんな場所で、徳一はあっぷあっぷと顔を浮き沈みさせながら、溺れていたのだ。

なぜ、こんな事になったのだろう。徳一には理由がさっぱり思い出せなかった。しかし、もしここで完全に沈んでしまえば、きっと自分は間違いなく死んでしまうであろうと、それだけは本能ではっきりと分かったのであった。

徳一は、生きる為に必死に体を動かしたのだが、それでも状況は大変に不利だった。薄汚れた周囲の水は、実は海水ではないのか、あまり浮力がつかなかった。徳一の体は、少し油断すると瞬く間に下へと沈みだしてしまうのである。

こんな状態が長く続くうちに、徳一の意識も体力もじょじょに低下しだした。事態はいよいよもって危うくなってくる。

頑張っても、徳一は頭を水面上に出し続けるのが本当に難しくなってきて、体はどんどんと水の底へと沈み始めた。

このままではまずいと感じた徳一は、思いっきり右手を上へと伸ばした。

そこで、不思議な出来事が起こったのである。

絶対に他に誰もいないと思われるこの場所で、伸ばした右手の先が何か人間の手のようなものに触れたのである。

まさに、救いの手であった。

疑問を感じる余裕もなく、徳一は迷わずその手を握った。どうやら、屈強な男の右手らしかった。

何者の手かなんて、詮索しているどころじゃない。その手に引っぱり上げてもらおうと、徳一は必死にしがみついたのだ。

しかし、その手の反応は冷たかった。徳一の事を持ち上げてくれるどころか、ひどく拒絶的で、しきりに徳一の右手を振り払おうとしてくる。全然、救助の手などではなかったのだ。

あまりに激しく、その手が逃げようとするものだから、徳一もそれ以上、掴まり続ける事もできなかった。

とうとう、徳一はその手を放してやる事にしたのだが、困っている相手に対して、これほど反発する手の態度はあまりに不愉快だった。

そこで、相手の手が強引に徳一の手を引き離そうとした時、徳一の方もちょっと仕返しのつもりで、相手の手を強くひねってやったのである。

「ぎゃあああっ」

と、手の持ち主らしき男の声が聞こえてきた。

いきなり手をひねられて、さぞ痛かったのだろう。捻挫ぐらいはさせてやれたかもしれない。

徳一としては、ちょっとしたザマーミロな気分なのである。

しかし、徳一の方もまた望みが無くなってしまったのだった。

相変わらず、体は沈んでいく一方である。このままでは、やはり自分はここで溺れ死んでしまうのであろうか。

意識が薄れてゆく中、徳一はわずかな望みをたくして、もう一度、右手を上へと伸ばしてみた。

すると、またもや右手に誰かの手が触れたのである。

今度は、温かい女性のものらしき左手だった。その手は、徳一の手が触れると、最初はためらいがちだったが、やがて、しっかりと握り返してきてくれたのだ。

今度こそは本当の救いの手だ、と徳一は直感的に悟った。

相手の手は決して力を入れていた訳ではなかったが、何とも愛情いっぱいに徳一の手を掴んでくれていて、この手を握っているだけで沈んでいくのが引き止められ、徳一の心にも深い勇気と希望が湧いてきたのであった。

この調子なら助かるかもしれない、と徳一もぼんやりと思った。

その状態で、徳一の意識は次第に薄れていったのだった。

気が付いた時、徳一は病院の個室のベッドの上に横たわっていた。

まわりを見渡すと、そばには妻が心配そうに付き添っていて、自分も点滴を受けており、体のあちこちに包帯が巻かれていた。

「あなた、気が付いたのね！」

と、妻が嬉しそうに大声を出した。

「オ、オレは一体・・・」

目覚めたばかりの徳一はボソボソとつぶやいた。

「あなた、交通事故にあったのよ。ほら、通学路の途中に少し気味の悪い坂があるじゃない、あそこで轢かれて。今まで、ずっと昏睡状態だったのよ。このまま、意識が戻らないんじゃないかと心配したわ」

「そ、そうか」

と言う事は、今まで目にしていた、あの不気味な海のような場所は三途の川だったのであろうか。

そんな時、外からドアを勢いよく開けて、娘の一恵が急いで病室の中へと入ってきた。中学校から慌てて駆けつけてきたのか、学校の制服を着たままだ。

「パパ、大丈夫？ 良かった！ 目が覚めたのね！」

そう嬉しそうな声をあげながら、泣きそうな顔で一恵は徳一に飛びついてきた。

一恵に右手をしっかり握られて、徳一はハッと気が付いたのである。

ああ、この感触、この優しい温もり。あの時、オレを地獄の川から救ってくれた小さな手はこの手だ、と。

「パパ、どうしたの？」父親の微妙な表情の変化に気が付いて、一恵はきょとんとそう言った。

そうか。この子のおかげでオレは助かったんだな、と感慨深い思いにふけりながら、徳一も不思議な気持ちで娘の事を眺め続けたのだった。

3

福山は、陸上部のエースである。自分が校内の女生徒たちの憧れの存在であった事も、

本人はそれとなく気が付いていた。
　だからこそ、どんな場所でもかっこ悪い姿だけは見せられないのだ。
　今日は、陸上部の自主トレの日だった。わざわざ、自分の練習している姿を見るため、グラウンドに顔を出している生徒もいるようなので、なおさらダラケているところとかは見られる訳にはいかないのだ。
「お前なら必ず県大会に出場できる」と、顧問の先生は言ってくれていた。
　福山自身も、当然そのつもりであった。
　これから、100 メートルを走って、記録を計るところである。できれば、自己記録を更新したいと福山は考えていた。
　コースのスタート地点に立つ。クラウチングスタートのポーズをとった福山は、静かにスタートの合図を待った。
　大きく銃の音が鳴り響く。
　同時に福山は走り出した。
　なかなかの好調な走り出しである。これなら、自己新記録が出せるかもしれない、と福山は思った。
　しかし、その時だ。突然、右手に激しい圧迫感を感じだしたのである。まるで誰かに強く握られているかのような感覚だ。走っている最中だと言うのに、急に肉離れでも起こしてしまったのだろうか。足ではなく手が肉離れすると言うのもヘンな話ではあるが。
　右手の痛みを感じつつも、ここで走るのを放棄する訳にもいかなかった。福山はそのまま走り続けた。傷みを紛らわす意味で、右手を大げさに振りまわしながら。
　だが、次の瞬間だった。今度は、右手にひねり上げられたような激痛が走ったのである。これには、福山もたまらなかった。
「ぎゃああああっ」と、彼は叫んだ。
　そのまま、彼は急停止して、勢いあまって転がり倒れた。
　全く、何が起きたのやら。その後すぐ、右手には保健室で包帯を巻いてもらったものの、福山にはさっぱり理由が分からなかった。

了

（ 2015 年 11 月、2016 年 6 月作品 ）

「あいつ」

あいつの姿は、どうも、主人には見えていないらしい。

その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。この坂を通るたびに、私と主人はあいつに出くわしていたのだ。

主人が気に掛けていない以上は、私もあまり、あいつの事で過敏になる訳にはいかなかった。あくまで私の方が、主人のパートナーだったからだ。

とは言え、それをいい事に、あいつの行動はどんどん大胆になっていくようにも見えた。

はじめて、あいつと出会った頃は、あいつも遠巻きに私たちの方を眺めていただけだったのである。しかし、会うたびに、あいつは確実に私たちのそばへと近づき始めていた。

あいつの顔だって、なんだか、挑発しているような笑っている表情に見える。明らかに、あいつは、私たちに対して、何らかの悪意を抱いていたのである。

最初の頃こそ、なんとか無視し続けていたものの、あいつがとうとう私たちの目の前にまで現れて、私たちの周囲をからかうようにうろつき出した時は、さすがに私も落ち着いてはいられなくなってきたのだった。

主人の目には可視できないと言う事は、あいつと接触しても、実際には何の悪影響も受けないと言う事なのだ。でも、私には、あいつの姿ははっきりと見えているのだから、逆にタチが悪かったのである。

ある時など、あいつは、いきなり私の前にと立ちふさがった。この時は、あまりに突然だったので、私もびっくりして、思わず踏ん張って、立ち止まってしまったものだ。おかげで、私の手綱を握っていた主人には、よけいな心配をさせてしまったようである。

「おいおい、どうしたんだよ」

と、その時の主人はぼやいていたが、私と主人は元から話を交わす事ができない。私は勝手に立ち止まってしまった事を主人に詫びる事も出来なかったし、あいつの存在を主人に説明する事も叶わなかったのである。

いよいよもって、あいつの行動は図々しくなってきた。

私も、あいつとぶつかっても何も起きない事をはっきりと認識して、あいつの事は必死に無視するようにし続けたのだが、それを承知で、あいつの挑発行為もさらに度が過ぎたものに変わっていったのだ。

私と主人が坂を通る時は、あいつは必ずまとわりついてきた。私の周囲で、うるさく動き回るのである。

いっそ踏みつけてしまいたいところだったが、こちらからあいつに触れても、空気のようにすり抜けてしまう事は、すでに何度か体験して分かっていた。

それでも、とうとう、私の堪忍袋の緒が切れてしまうような出来事が起きてしまったのである。

その日も私は、主人と一緒にその坂を渡っていた。例によって、あいつは現われ、私のそばに寄ってきたのだが、私はいつものように無視するつもりでいた。

ところが、次の瞬間、あいつは私の上へと飛び乗ってきたのである。

あいつに、それだけの俊敏さと跳躍力があったとは、私もその時はじめて知った。そして、同時に、ものすごく腹立たしい思いが私の内から湧き上がってきたのである。

なぜ、私があいつを乗せてやらなくちゃいけないのだ。あいつはこのまま、坂を通り過ぎるまで、私の上に乗っかっているつもりなのだろうか。

あいつときたら、私の上にふんぞり返って、これまた、憎々しいほど意地悪い笑みを浮かべている。

ええい、放せ！ ここから、降りろ！

耐えきれなくなった私は、見境がつかなくなって、大切な主人をも引きずり回してしまう事も理解していた上で、ついには暴走をはじめてしまったのだった。

「何が起きたかですって？ そりゃあ、こっちが聞きたいですよ。急に車が勝手に走りまくったんです。ブレーキを踏んでも、ハンドルを回しても、ぜんぜん思うように動かない。さいわい、大事になる前に止まったからいいようなもので、こんな事、長いこと車を運転してきたけど、はじめてです。車が故障したんでしょうかね。でも、あの坂を過ぎてからは、全く正常に戻ったんですよ。修理にも出してみたけど、どこにも故障は無かったって。あの坂では、前から車の調子がおかしくなる事が、よくあったんです。あの坂、お化けが出るって言うウワサがあるんだけど、まさか、そのせいじゃないでしょうね？」

了

（ 2016 年 5 月作品 ）

「笑う幽霊坂」

　その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。
　そんな坂を、私は妻と一緒に真夜中に歩いていた。夏の日の特に暑かった夜の話だ。
　静寂の中、鳥だか獣だか分からない生き物の不快な鳴き声だけが、やけに耳障りに聞こえ続けていた。どのように不快なのかと言うと、何だか人間の笑い声みたいな鳴き声なのである。それも、狂ったような笑い方なのだ。
「何が鳴いてるのかな」あまりにも気持ちが悪いので、私は思わずそう口にした。
「何のこと？」と、妻が私に訊ねた。
「お前にも聞こえているだろう。まるで人が笑っているみたいな鳴き声が」
「そうかしら。私にはそうは聞こえないけど」
「もっと耳を澄ましてごらん。絶対、笑い声に聞こえるよ。一体、何の動物なんだろう」
「まあ、うるさいのは確かね。発情期の鳴き声なのかしら。でも、笑い声には聞こえないわよ」妻もなかなか強情なのだった。
「カワセミが笑い声っぽく鳴くって話は聞いた事があるけど」
「バカねえ。それはワライカワセミの事よ。日本にはいないわ」
　妻の美来はたびたび、私の事を見下したような態度をとる。そのへんもあまりカワイくないのだった。
「もしかすると、お化けの笑い声かもしれないぞ」さりげなく、私は言ってみた。
「お化けですって」妻が呆れたような顔になった。
「そうさ。この坂にはお化けが出るってウワサがあるんだ。それなら、地獄から舞い戻った幽霊が笑っている可能性だってあるだろう」
　妻は鼻でせせら笑った。
「あなたって、つくづく子どもね。お化けなんて本当にいるはずがないじゃない。全く、話にならないわ。そんなもの、世の中のどこにいると言うのよ」
「お前がその幽霊なんだよ！」
　私は大声を張り上げて、いきなり妻の首を両手で絞め上げたのだった。
　私の突然の行動に、さすがに妻も驚いたようである。
「な、なにするの。すぐ暴力をふるうなんて、男ってほんとに最低よ！」もがきながらも、妻はなおも私を侮蔑する言葉を吐き続けた。
「お前は死んだんだよ！ オレが殺したんだ。忘れたのか！」私は怒鳴った。
　そうなのだ。あの時も、美来があまりにも私の事を見下し過ぎるものだから、つい衝動的にカッとなって、私は彼女の首を絞めてしまったのだった。気が付くと彼女は死んでいたが、死体を上手に始末する事で、美来は行方不明扱いとなり、私が警察に疑われる事はなかった。

美来は、そんな私の事を恨んで、化けて出てきたのだろうか。この坂の魔力を借りて。

再び殺されかけている妻は、苦しそうでも、私の事をあざ笑うのを止めようとはしなかった。いや、笑っていたと言うより、断末魔のうめきが嘲笑のように聞こえていたのだ。彼女の笑い声は、彼女の体を離れ、周囲全体へと広がっていくようにも感じられた。

あの不気味な動物の笑い声もまだ続いている。妻と動物の笑い声が重なり合っていた。いや、全く同じものだったと言ってもいい。あの動物の笑いは、実は妻の声だったのだ。それで、私はよけいにこの鳴き声に心をかき乱されていたのである。

響き渡る哄笑の中で、私の腕にはどんどん力が入っていった。私が我にかえった時には、妻の体はすでにぐったりとしていた。私が手を放すと、妻はそのまま地面へとゆっくりと倒れたのだった。

私は、落ち着いて、足元に転がっている妻の顔を見直してみた。この女、美来ではない。私の今の妻の過子であった。

私は、美来を殺したあと、この過子とすぐに再婚したのである。

これはまた、どうした事であろうか。

気味の悪い鳴き声に神経を逆撫でされて、私は錯乱状態に陥り、うっかり過子を幽霊と見間違えて、またもや盲目状態で殺してしまったのかもしれない。

何だか、とんでもない事態になってしまったようである。だが、悲しんだり、後悔している余裕もなさそうだった。

まずは、過子の死体を、誰かに見つかる前に片付けた方が良さそうである。

私は軽く周囲を見回してみた。人影はいっさい無い。

私は慎重に死体を背負ってみた。この坂の途中に置きっぱなしにしておく訳にもいかなかったからである。

こうしてオンブしていれば、人に出会っても、具合の悪い妻を介抱しているのだと言って、ごまかせるかもしれない。とにかく、死体を捨てるのは、この坂を離れてからでなければ難しそうだ。

私は、死体を背負ったまま、静かに坂を下り始めたのだった。

こうして過子をおぶってみると、彼女の体が意外なほど軽かった事に気付かされた。彼女は、元グラビアモデルであり、結婚したあともずっとダイエットを続けていたのだ。彼女の体の線が異常なほど細く、生前は体重についても絶対に教えてくれなかったのだが、それをこんな形で知る事になるとは、全く皮肉な話だった。

私が殺人の証拠隠滅に躍起になっている最中も、あの不気味な笑い声はしきりに聞こえ続けていた。今となっては、その笑いも、愚かな私の事を本当にせせら笑っているようにも感じられたのだった。

やがて、私は坂を下り終えた。

いったん、過子の死体を地面におろして、休む事にした。

だが、そこで、私はあっと驚く事になったのだった。

地面に置いてみて、ようやく気が付いたのだが、私がおぶっていたのは、なんと狐の死骸なのであった。

道理で、人間にしては、軽かったはずだ。

なぜ、私はこんなものをおぶっていたのだろう。私は妻を殺したのではなかったのだ

ろうか。

私は、困惑しつつも、狐の死骸をもう一度、よく観察してみた。大型の犬ほどの大きさで、まだ死後硬直はしておらず、皮膚には温もりも残っている。首筋には、絞められたのではなく、タイヤに轢かれたらしき跡が見つかった。どうやら、あの坂で車にはねられた野生の狐らしかった。

なんだか、言葉どおりの、狐につままれたような気分である。

その時だ。私に声をかける者がいた。

「ねえ、あなた、何してるの？」

声の方に振り返ってみると、そこにいたのは妻の美来だった。

よくよく考えてみれば、私は、高慢ちきな美来に対して日頃から殺意は抱いてはいたものの、実際に殺したりはしていなかったのである。

では、たった今、私が経験してきた事は、何だったのであろう？ 現実ではなく、これから起きうる出来事の予知幻視みたいなものだったのだろうか。確かに、この坂は、過去と未来が交錯している魔性の場所であるらしい。

「あなた。その足元にあるものは何？」美来が再度、訊ねてきた。

「ああ、これかい。散歩の途中で見つけたんだよ。車に轢かれた狐の死骸だ。野ざらしにしておくのも可哀相だから、お墓でも作ってやろうかと思ってね」私の口からは、適当なでまかせがすらすらと出てきた。

「そんなもの放っとけばいいのに。あなたって、ほんと、変わってるのね。ところで、もう散歩は終わったの？」

「うん」

私は、寝付かれないから夜の散歩をしてくると言って、先ほど外出したのだ。しかし、本当はそれは、浮気相手の過子と会ってくる為の口実に過ぎなかった。

美来は、疑った目つきで私の方を睨んでいる。もしかすると、彼女はすでに私と過子の関係に勘づいていたのかもしれない。

そんな時、また、あの不気味な動物の鳴き声が聞こえてきたのだった。ひょっとすると、この鳴き声は、大事な連れを車の事故で失った別の狐が、悲しみから吠えていたものだったのではなかろうか。しかし、私には、この吠え声は、女の笑い声にしか聞こえないようなのである。そして、この鳴き声が聞こえると、私の神経は異常に高ぶり、頭もズキズキと痛んできて、意識が混濁し、記憶も曖昧になってくるのだった。

「ねえ、あなた、私もちょっと散歩をしたいな」と、美来が私に話しかけてきた。「それで、私も外へ出てたのよ。どう、一緒に歩かない？」

妻の目は、私が今下りてきた坂の方に向けられていた。彼女は、私に対して、この道を引き返せ、と言ってるようだ。

でも、今ここで妻とこの坂を上ったりすれば、自分は本当に彼女を殺してしまうかもしれない、と私は思った。

了

（2016年3月作品）

「恨みの短冊」

　その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。
　他には全く人影もないそんな道を、なぜ私が歩いていたのかと言うと、友人に無理やり付き合わされたのである。その友人は、小柄で、やや猫背であり、少し不気味な印象の男だった。
「ほら、あの電柱ですよ」
　と、その友人は、坂の途中に立っている電柱を指さして、言った。
「まあ、見たら驚くから。本当にたくさん貼ってあるんですよ」
「でも、はじめて聞いたな。そんな都市伝説があったなんて」
　私は言った。
　友人の話では、この坂にあるその電柱に恨み言を書いた紙を貼っておくと、その願いが叶うのだと言う。なんとも気味の悪い噂だが、ワラ人形の現代版とでも考えてみたらいいのかもしれない。
　夜だったら、とても怖すぎて、そんなものを眺めに行く気にはならなかっただろう。しかし、昼間の今でも、雨が降りそうな曇り空だった為、周りは十分に薄暗く、恐ろしげな舞台演出はしっかりと整っていたのだった。
「ごらん、見えるでしょう。こんな離れていても、貼ってある紙が分かるぐらいなんだから、呆れちゃいませんか」
　友人が、さらに言った。
　電柱はまだ５メートル以上先にあったのに、確かに、その表面には多数の紙が貼られているのが分かったのだった。遠目だと、お店の宣伝の紙のようにも見えなくもなかったが、実際には、その全てが恨みの書かれた紙だと言うのだ。
　私たちは、電柱の前にまでたどり着いた。
　友人は、すぐさま、貼られていた紙の一枚をバリッと剥がした。
「ほうほう、夫の浮気相手の〇〇を殺して下さい、か。この手の願い事が多いんですよ」
　友人は、書かれていた内容に目を通すと、せせら笑いながら、その紙をすぐクチャクチャと丸めてしまった。
「残念な事に、この都市伝説には、もう一つのルールがあるんです。願いが成就する為には、一週間以上、恨み事を書いた紙がこの電柱に貼られている事。この浮気相手を殺してほしい人は、三日前に、この紙を貼り付けたらしい。気の毒ですが、願いは却下みたいですな」
　そして、友人は、他の紙も片っ端から剥がし始めたのだった。
「君は、いつも、この紙を剥がしに来ているのかい」

　私は友人に尋ねた。
「まあね。五日に一度ぐらいの割合で。こんなものが貼られ続けていたら、みっともないでしょう。だから、可哀相だけど、せっかく紙を貼り付けた人でも、願いが叶った成功者はまだ一人もいない訳だ」
　友人が言うには、恨み事を書いた紙には、それを貼り付けた日付も書かれてあるらしい。その日から一週間後、紙を貼った人物は、まだその紙が残っているか確認に来るそうなのである。想像すると、これはこれで、嫌な光景だ。
「中には、紙が剥がされないように、わざわざ高い場所に貼る人もいます。でも、そんなのは逆に目立って、ムダな努力なんですな」
　友人は、長い竿のような道具も持ってきていた。それを使って、電柱の上の方に貼ってある紙も次々に剥がしていくのだった。
「おや！」
　と、友人がいきなり素っ頓狂な声を上げた。
「この恨み紙、一週間たっちゃってますよ。私とした事が、うっかり見落としていたようだ」
　友人は、一枚の紙を片手に持ったまま、私の方へ怪しい笑みを浮かべてみせた。
「どれどれ、どんな恨み言だったんでしょうね。なになに、この坂で私の息子を轢いた犯人に天罰を与えて下さい、だって」
　それを聞いて、私はギョッとした。
　その犯人とは、私の事である。私は、半年前に、ここで一人の幼児をひき逃げしたのだ。急いで逃げたので捕まらなかったのだが、のちにテレビのニュースで知った話によると、そのはねた子は、今でも意識不明の重体なのだと言う。
「そ、その願いは実現するのかい？　え、えーと、・・・くん」
　私は、友人の名前を呼ぼうとしたが、名前が出てこなかった。そもそも、私には、こんな友人はいなかったのである。
「叶えてあげなくちゃダメでしょうね。なにしろ、そういうルールなのですから」
　友人、いや、謎の男は言った。
　私は、この男に不思議な力でおびき寄せられたのだ。そして、こんな所に連れてこられてしまったようなのである。
「あんたが、なぜそんな事を言える？　あんたにそんな権限があるのか？」
　私は怒鳴った。
「ありますよ。だって、私は、この電柱なんですから。願いを叶えてあげるのは当然でしょう」
　そう言って、男は、私への恨みが書かれた紙をぺたりと電柱に貼り戻したのだった。
「でも、そこまで義理を通してやる必要は無いじゃないか！」
　私は必死に訴えた。
「いえ。悪いけど、あなたには私も恨みがあるんですよ。ほら、例の子どもをあなたがはね飛ばした時、その子が私にぶつかってきましてね、私の体にも深い傷がついちゃったんです。命までは取りませんが、この代償は大きいですよ」
　男が目を向けた先では、確かに、電柱の胴体部が深くえぐれ、醜い傷跡となっていた。

　そして、その男が少し移動すると、その姿はまるで電柱と重なるようにスッと消えてしまったのだった。
　私は動揺した。
　とにかく、こんな不気味な場所からは急いで逃げるべきである。しかし、あの気味の悪い恨みの紙だけは放っておく訳にはいかない。
　私は、素早く電柱のそばに走り寄り、例の私への恨み事が書かれた紙に手をかけた。
　しかし、その時だった。
　空でピカッと稲光りが輝いた。
　もの凄い轟音とともに、すさまじい雷が電柱を直撃したのは、その次の瞬間だった。

了

（ 2016 年 4 月作品 ）

「お化け坂を訪ねて」

「夜になるとお化けが出てくると言うウワサがたつような、暗くて淋しい坂道が意外と各地には存在しているのです。そのような坂には、実際に、お化けが出てきたり、不思議な怪現象が起こったりもしています。私は、そうした坂ばかりを探して、こうして訪ね歩いているのです」私は言った。

私のそばには、ぶっきらぼうな雰囲気の中年男がつっ立っていて、私の話に耳を傾けてくれていた。

私たちは、少し距離をあけて、アスファルトの一本道の上に立っており、道の左右は見渡す限り荒野だった。私たち以外に人影はない。風が少し強く吹いているが、空は青く晴れ渡っていた。

「もっとも有名なお化け坂は、江戸時代の随筆家、小泉八雲が記録に残しています。紀伊の国坂と言いましてね」と、私は話を続けた。

「その話は聞いた事がある。確か、のっぺらぼうが出てくるんだろう？」男が、急に私の話に割り込んできた。

「そうです。しかも、一人の被害者が立て続けに二回、そののっぺらぼうに出くわして、驚かされています。最初は、道ばたで座り込んでいた女性に声を掛けて、振り向いた顔がのっぺらぼうでした。その事を屋台の主人に知らせてみたら、その主人も振り向くと、のっぺらぼうだったと言う話です。こののっぺらぼうの正体はむじなだったのではないかとも言われています」

「あんたが知っている他のお化け坂にもむじなが出てくるのかい？」

「分かりません。むじななのかもしれないし、もっと違う化け物なのかもしれません。そのへんがはっきりしないから、＜お化け＞の坂なんです。たとえば、こんなお話もあります。ある女学生が、夜遅くに、一人でお化け坂を通らないといけなくなったそうです。その子が坂を通るのを躊躇していたら、そばをたまたま学校の先輩ーーその子が憧れていた男子生徒だったんですけどね、その先輩が通りかかりました。その先輩は親切でね、その女学生と一緒にお化け坂を渡ってくれたんですよ。道すがら、手までつないでくれてね。ところが、坂を昇り終えたあと、先輩の手を見ると、包帯が巻かれていました。女生徒が握っていた手には、包帯など無かったはずなのに」

「なんだい、その話は？」と、男がきょとんとした顔になった。

「その女生徒は、先輩の手ではなく、間違えて、お化けの手を握ってたのかもしれませんね。ところが、この話にはまだ続きがあるんです」

「おいおい、後日談まであるのかい」

「その女学生の父親が、事故にあって死にかけたそうです。その時、父親は三途の川で溺れる夢を見たそうなのですが、その夢の中で、二度ほど救いの手が天から現れて、二番

めの手によって彼は救われました。あとで、父親は気付いたそうなのですが、その二番めの手とは娘の手だったらしいのです」
「それって、お化け坂で娘が握ってた手と言うのが、実は父親の手だったというオチかい？」
「そうなのかもしれません。しかし、この話には、さらに余談があります」
「なに。そっちは、どういう話だ？」
「父親の前に、二度、救いの手が現れたと言ったでしょう？ 最初の手は、父親を助ける事に非協力的だったので、父親は思いっきり捻ってやったそうです。そして、娘が憧れていた例の先輩がいるでしょう？ 彼が手に包帯を巻いていたのは、部活の最中、見えない何者かにいきなり手を無理やり握られて、捻られたからだったそうなんです」
「なんじゃ、その話は？」男は、呆れて、声を出して笑った。
　私もつられて、一緒にほほえんだ。
「このお化け坂の話を他人に話して聞かせる場合は、この最後の部分は省いた方がいいかもしれませんね」
「二段オチになってたりして、やっぱり、そんなお化け坂の怪談なんて、結局は作り話じゃないか」男が揶揄した。
「いえいえ。そうとばかりも言い切れませんよ。別のお化け坂には、事故にあった若い女性患者が何度も訪れるそうです」
「それは、どうして？」
「実は、その娘はお化け坂で交通事故に遭ってたんです。友達 3 人と一緒にね。その友達 3 人は事故で即死しましたが、その娘さんだけがかろうじて助かりました。どうやら、その娘さんは友人の霊に呼び寄せられて、お化け坂に足を向けてしまうみたいなのです」
「何となく、ありそうな怪談だな」
「でも、この話にはもう少し裏がありましてね、その娘さんって、交通事故の際、頭を強く打ちまして、極度の記憶障害になっていたんです。その為、過去の記憶が壊れている上、忘れやすくもなっていたらしい。本物の幽霊に会っているのではなく、脳の病気だったようなのです。その証拠に、彼女は、お化け坂に行く度に友人の霊に会っているはずなのに、次にお化け坂に行った時はもうその事を忘れていて、毎回、同じ事を繰り返しているようなのです」
「ちょっと可哀相な話だね」
「傍から見れば、そうやって繰り返しお化け坂を訪れるその子の姿の方がよほど幽霊のようにも見えた、とも言われています。お化けよりも、本当は、人間の心の方がずっと怖いのかもしれません」
「そんな話が他にもまだあるのか？」
「さらに別のお化け坂では、自動車に取り憑く化け物がいるらしいです」
「なぜ、それが分かる？」
「その坂を通りかかった一部の自動車は、急に動きがおかしくなるんだそうです。運転手が操作していないのに、勝手に暴走したり、いきなりエンストを起こしたりして。皆はこれを、自動車がお化けに取り憑かれたからじゃないかと考えています」
「機械にだけ取り憑く霊ね。それじゃ、真偽のほどは確認しようがないな」

「でも、最近は自動車のシステムもだいぶ進歩しています。将来的に、人工知能搭載の自動車も出来ると思いますので、もし、そんな車でそのお化け坂を走ってみたら、真相が分かるかもしれませんよ」
「車の人工知能が、霊に取り憑かれたよー、と知らせてでもくれると言うのかい？」
「まあ、そんなところです」
　私が答えると、男がまた呆れたように嘲笑した。
「他には、どんな話がある？ むじなが出てくる話はもう無いのか？」
「むじなじゃなくて、狸が出てくるお化け坂の話は聞いた事がありますね」
「狸？」
「あるお化け坂ですが、そこで、お使いを頼まれた小さな女の子がお金を落として、無くしてしまったそうです。それに気付いた女の子が、声を出して泣いてますと、目のまわりが黒くなった男の子が近づいてきました。どうも、その男の子の正体が狸だったみたいです」
「やけにベタな変身をした狸だな」
「その狸の男の子は、泣いていた女の子に同情してくれたみたいでしてね、道ばたにあった小石をいくつか拾うと、それを女の子に渡して、無くしたお金の代わりに持って帰るよう勧めたそうです。女の子も最初は訳が分かりませんでしたが、男の子の言う通りに従ったそうです。すると、家に戻って、小石を見てみると、金のかたまりに変わっていたのです」
「どうしてまた？」
「ほら、狸に馬鹿されて、馬の糞をだんごに見せかけられて食わされたり、札束が木の葉に変わったりすると言うでしょう？ その逆パターンだったんでしょうね」
「そりゃまた、善良な狸もいたもんだな。そんなお化けとだったら、オレも会ってみたいものだ」
「それは軽率と言うものです。お化け坂には凶悪な魔物だって潜んでいます。お化け坂で自分の妻を殺した男もいるのですが、その男の人は狐の呪いを受けてたみたいです」
「今度は狐か。その男は、なぜ自分の妻を殺したりしたんだ？」
「この坂を一緒に歩いている最中、二番めの妻が最初の妻の顔に、最初の妻が二番めの妻に見えたと、本人はのちに弁解しています。言い忘れていましたが、この男は同じような形で、二人も妻を殺していたのです」
「なんだか、聞いてる方がこんがらがってきそうな話だな」
「狐の呪いで、その坂の時間の過去と未来が絡み合っていたんでしょうね。その男は、はじめっから最初の妻へは殺意を持っていました。なんとか理性で押さえていたようですが、この坂の魔力に冒されて、本当の殺人に走ってしまったみたいです」
「しかし、その話のどこが狐と関係しているんだい」
「男が妻殺しをする少し前、この坂で野生の狐が轢き殺されていたんです。その怨念が、このお化け坂には漂っていたようです。いわゆる地縛霊ってヤツでしょうかね。そう言う意味では、そんな怨みになんか取り憑かれてしまって、妻を殺した男の方もとんだ災難だったんですよ」
「ふむ。この話が一番怖そうだな」

「いえ。もっと恐ろしい話だってありますよ。別のお化け坂では、その坂で雷に撃たれて、廃人になってしまった男もいます。あなたは、電柱に恨み言を書いて貼っておくと、その願いが実現すると言う都市伝説をご存知ですか」
「いいや」
「そのお化け坂には、そういう都市伝説を持った電柱が立っていたみたいなのです。そして、雷に当たった男と言うのも、どうも、その電柱に恨みの対象として紙が貼られていたのです」
「なぜ分かる？」
「あとで判明したのですが、その男はこの坂でひき逃げ事故を起こしていて、捕まる事もなく、ずっと隠し続けていたのです。このひき逃げの被害者の家族が、このお化け坂の電柱にと、犯人への報復を願う恨みの紙を貼り付けていました。だから、落雷は、お化け坂そのものがその男に下した天罰だったのかもしれません」
「そりゃあ、確かに怖い話だ。くわばら、くわばら」
「いかがです。あなたも、だいぶ、お化け坂には興味が湧いてきたのではありませんか。一緒にお化け坂巡りをしたくなってきたでしょう？」
「ちょっと待った。あんたの話には、一つだけ間違いがある」ここで、男は急にとんがった態度をしめしたのだった。
「何がです？」
「あんたは、お化け坂を訪ねて、ここへ来たと言ったな。でも、この道はどこも坂なんかじゃない。その点がいきなり間違いじゃないか」
　私はすぐには答えず、じっと男の顔を見つめた。
「それと、オレはただ、この道を散歩していただけだ。なのに、あんたときたら、いきなりオレを呼び止めたりして、えんえんとお化け話なんかを講釈しやがって、一体、何を考えてるんだ。非常識すぎないか？」男はそうわめいたのだった。
　私はなおも男の顔を見つめ続けた。
「この道が坂ではないというのですか？」穏やかな口調で私は言った。
「そうだ。どう見ても、ただの平坦な一本道じゃないか！」
　私はゆっくりと男の目の前にまで近づいた。
「本当にそうでしょうかね？」
　そして、私は、いきなり男の胸元をどんと両手で押したのだった。
　次の瞬間、男はバランスを崩して、地面に倒れた。さらに、そのまま、まるで急勾配の坂を転げ落ちるように、彼の体は道の一方へと転がり出したのだった。
　時々チラチラと、転がり続ける男の顔が見えた。彼は、驚きに目を見開き、信じられないと言った表情をしていた。
　私は、そんな彼の姿を見ながら、高らかに笑い声を上げた。
　そうなのだ。お化け坂はどこにでもあるのだ。それがお化け坂なのだ。きっと、あなたが住んでいる町にだって。

了

（ 2016 年 8 月作品 ）

「びっくり妖怪大図鑑」

　その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。この坂にある道の横には小川が流れていたのだが、この小川は普段は坂の最上部にもうけられた水門によって塞き止められていて、もしこの水門を丑三つ時に開くとお化けが出てくると言う噂があったのだった。

ガサガサ、ゴソゴソ
「あ、あ、あ。皆さん、聞こえてますか？ 我々調査員は、ただ今より、お化け坂に伝わる都市伝説に挑戦する次第であります。はたして、この坂に本当にお化けは現れるのでしょうか？」
「せ、先輩、本当に来ちゃいましたね。誰もいませんね。真っ暗ですよ。本当に大丈夫なんですか」
「心配するな。お化けなんて、どうせ出てこないんだから。それをはっきり確かめるだけだ。そして、この録画記録は、ネットにアップするか、どこぞの都市伝説マニアにでも売りつけて、稼がしてもらうんだからな。お前もちゃんとスマホのカメラを動かしとけよ」
「うまく儲かればいいんですけど」
「ほら、喋ってる間に、水門にたどり着いたぞ。皆さーん、見て下さい。この小さな水門です。今は閉じてますが、この水門をあと少し経ったら、えーと、丑三つ時だから２時ぐらいになってから開けば、お化けが出てくると言うのであります」
「本当に開いて大丈夫なんですか」
「やれやれ。お前、怖いのか？」
「いえ。怖いとかじゃなくて、勝手に公共の水門を開いたら、まずいんじゃないかなって」
「崇高な学術調査のためだ。そのぐらいは許される！」
「学術調査って・・・」
「ほらほら、時間が来たぞ。皆さーん、いよいよ水門を開きます！ おい、オレばっかりにやらせないで、お前も門のしきいを外すのを手伝えよ」
「はーい、先輩」
ガサガサガサ、ゴトゴト、ギギギギギ（ 水門を開く音 ）
チョロチョロチョロ（ 水の流れる音 ）
「水門は開かれました！ 果たして、本当にお化けは出るのでしょうか！」
「せ、先輩」
「どうした？」
「ほんとに水が流れちゃってますよ。いいんですか」
「当たり前だろ。調査なんだから」

「でも、あんまり水を流しちゃったら、明日ばれたら怒られるかもしれませんよ。ほどほどで止めておかないと」
「うるさいな。まだお化けが出てきてないだろ」
「お化けが出てこなかったら、ずっと放流してるんですか」
「う〜ん。じゃあ、もう少し待ったら、終わりとするか」
ゴゴゴゴゴ
「な、なんだ、あの音は？」
ゴゴゴゴゴ
「せ、先輩、上ですよ、上！ 水門の真上！」
「うわっ！ お化けだ！ 本当にお化けだ！ 出てきたよぉ！」
「ひえっ。毛むくじゃらのけだものみたいなのが宙に浮いている！ 先輩、まずいですよ。水門を開けたから、出てきたんです！」
「ありゃあ、赤舌だ」
「先輩、赤舌って？」
「妖怪の名前だよ。水の守り神で、水泥棒を懲らしめたりするんだ」
「じゃ、じゃあ、早くこの水門を閉めましょうよ！ って、先輩！ 先に逃げないで下さい！ 水門をどうするんですか？」
「バ、バカ！ 水門どころじゃないだろ！ 早く逃げろ！」
「先輩〜、待って下さいよー！」
（ 走る音と荒い息づかい ）
「お、お前、ちょっと止まれ。向こうの方から、何か大人数でやって来るぞ」
「行列みたいですね。大名行列みたいな。でも、なんで、こんな時間に」
「あ、あれは百鬼夜行だ！」
「百鬼夜行って？」
「お化けの大行進だよ。あの水門を開くと出てくるお化けは、赤舌だけじゃなかったんだ」
ワーッショイ、ワーッショイ！
「す、すごい！ 本当にお化けの大軍だ！ 見ろよ、あの片目の土人形みたいな奴は泥田坊だ。あっちの、手のひらに目が付いている座頭は手の目。その隣を歩いている片手に目がいっぱい付いてる女は百々目鬼だ。大かぶろやさざえ鬼もいるぞ」
「先輩って、やけに妖怪に詳しいですね」
「まぁ、こう見えても、オレは小学生の時は妖怪博士って呼ばれていたからな。って、そんな話をしている場合か！」
「先輩、見て下さい！ あの妖怪行列の先頭にいる屋根付き人力車が止まりましたよ。誰か、外に出てくるみたいです。あれは誰ですか。なんか、老人みたいな姿をしてますけど」
「うわっ！ あれこそ、まさしく、ぬらりひょんじゃないか！」
「ぬらりひょんって？」
「妖怪の大親分だよ！ あの百鬼夜行を引っ張ってた総元締めだったんだ。こりゃあ、ますます危険だぞ。あんな大物の百鬼夜行に捕まったら、絶対に殺されちまう。どこかへ逃げるんだ」
「逃げるってどこへ？ 妖怪行列はどんどんこっちに近づいてきますよ」

「見ろ！　あそこに家があるぞ。きっと空き家だ。ひとまず、あそこに隠れよう！」
「はい！　先輩」
（ 走る音 ）
「先輩。なかなか古風な作りの家ですね。庭に井戸がありますよ。って、井戸から何か出てきたし！　ほ、骨だ、骸骨だ！」
「そ、それは狂骨と言う妖怪だ！　見るんじゃない！　早く家の中に逃げるんだ！」
「ひゃあーっ！」
ガラガラガラ（ 開き戸を開ける音 ）
「よかった。鍵はかかっていないぞ」
「へえ。家の中も純和風ですね。障子がありますよ」
フフフフフ
「うわっ！　障子に女の影が！　あれは影女だ！」
ヒヒヒヒヒ
「影が消えて、障子のます一つ一つに目が現れた！」
「目目連だよ、目目連！」
「こ、この家も化け物屋敷だったんだ！」
（ 床の上をばたばた走り回る音 ）
「て、天井から何か降りてきたぁ！」
「天井くだりだ！」
「あそこの蚊帳を、へんな虫みたいな奴が切ってますよ」
「あみきりだ！」
「け、煙が形になっていくぅ」
「えんえんらだ！」
「軒下から気味悪い男が現れた！　油を盗んでます！」
「火間虫入道だ！」
「あわわわ。あのボロ雑巾まで妖怪だ」
「白うねりだ！」
「先輩、こんな場所、とてもじゃないけど居られませんよ」
「ひひひひひ」
「せ、先輩、大丈夫ですか」
「妖怪だ、妖怪。妖怪大集合だあ」
「先輩、どこへ逃げるつもりですか。って、先輩の首もとにも何か黒いのが巻き付いてるし」
「これは後神だよ。ひひひひひ。どこに行っても妖怪だらけだ」
「せ、先輩、駄目ですよぉ。そこから外に出て行ったら！　あの妖怪大行進に正面から飛び込んじゃいますよ」
「ひひひひひ、ひひひひひ」
「せ、先輩！　だから、行かないで！　僕だけ置いてかないでぇ！」
（ バタバタと走る音 ）

ーーーーーーーーーーーーーーー

以上は、超常現象研究家の私の元に送られてきたスマホの中に収録されていた音源の一部始終である。映像も一緒にあったみたいなのだが、残念ながら、その映像の方はいっさい再生できなかった。このスマホは、お化け坂の途中にある廃屋の中から見つかったのだと言う。

どうも、二人の軽率な若者が、妖怪が出てくる怪奇現象に遭遇してしまった内容みたいなのだが、実は腑に落ちない部分がいっぱいある。たとえば、彼らは日本風の家に逃げ込んだような事を言っているのだが、このスマホが見つかった廃屋とは、ちっとも和風なんかじゃないのだ。建設会社が一時的に使用していたプレハブの仮設事務所だったのである。鍵はしっかり掛かっていて、彼らがなぜ中に入れたのか、どうしてスマホだけをこのプレハブ小屋の中に落としていたのかも全くの謎だった。

しかし、私がもっと不思議に思っているのは、彼らが見たと言う妖怪たちの方なのである。

妖怪に詳しい男がいたようで、目にした妖怪の名前を片っ端から口に出していたみたいだが、実はこれらの名前があがっていた妖怪はどれも鳥山石燕が考えた創作妖怪ばかりなのだ。

江戸時代の画家・鳥山石燕は、「画図百鬼夜行」をはじめ「今昔画図続百鬼」「今昔百鬼拾遺」などの画集で 200 種類を超える妖怪の絵を書き残しているものの、実際には描かれた妖怪のうち、三分の一以上が、民間伝承や古典文献にも出てこない、石燕による全くの創作物だった。

たとえば、お化け坂を訪れた若者たちは赤舌にも出会ったみたいだが、この赤舌も本来の伝承をまるで無視している。赤舌とは、そもそも陰陽道で語られている羅刹神の名称なのだ。水や水門などとはいっさい関係ない。ところが、鳥山石燕は「赤舌」を「淦舌」「閼伽舌」などと駄洒落で読み替える事で、水の妖怪に作り直してしまった。（ 淦とは舟底にたまる水、閼伽とは仏前に供える水の事だ ）さらに「舌は禍いの門」と言う諺があって、これらの暗示を組み合わせてゆくと、鳥山石燕風に考えた赤舌とは、水門が開いて、水が流れている限りは災いをふりまき続ける悪神、と言うように読み解ける事になるのだ。

さらに、百鬼夜行の総大将としてぬらりひょんも現れているが、このぬらりひょん像も近年になってから広く流布した、間違ったイメージである。もともと、ぬらりひょんとは岡山県の海沿い地方に伝わっていた海坊主の事なのだ。ところが、鳥山石燕は、このぬらりひょんを江戸時代の言葉の「ぬらりん（ 乗り物から出る ）」と引っ掛けて、籠から出てくる爺さん風の絵に描いてしまった。それ以降、ぬらりひょんは偉い長老みたいな印象を持たれるようになり、とうとう妖怪の総大将だと言われるまでになってしまったのだ。

こんな感じで、お化け坂で若者たちが見た妖怪とは、どれもこれもが、全くのデタラメか、本来の伝承からずれてしまったものばかりなのである。だから、私としても、なぜ彼らが実在しないはずの妖怪とばかりに遭遇してしまったのかが、さっぱり理解できないのであった。

姿を消した若者たちの消息は、いまだに分かっていない。

了

（ 2016 年 11 月作品 ）

参考資料・多田克己「百鬼解読」（ 講談社文庫 ）
村上健司「妖怪事典」（ 毎日新聞社 ）

「お尻が重い」（「性器の怪物」より ）

その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。

そんな坂を、仕事帰りの私は、真夜中だと言うのに、一人でトボトボと歩いていたのである。この坂を通らねば、我が家へとは戻れなかったのだから、仕方あるまい。

坂を下っている途中、私の目には、ふと、坂道の片隅で佇んでいる女の姿が見えてきた。

いかにも違和感の漂う女性なのだ。何しろ、こんな初冬の寒空だと言うのに、オフショルダーの薄いドレスなどを着ていたのである。そんな格好で、道のさなかに座り込み、すすり泣いているかのように、うつむいていたのだ。

ひょっとして、結婚式に出席した後だったのだろうかと、私は何となく推測した。

とにかく、こんな物騒な雰囲気の場所で、女が一人、座り込んでいるのを、男の私が、全く無視して通り過ぎてしまう訳にもいかなさそうなのである。

私は、彼女のそばにまで最接近した時、思い切って、声を掛けてみる事にした。

「お姉さん、どうしました。大丈夫ですか？」

私の声に反応して、その女が頭を上げた。

彼女の顔を見た途端、私は思いっきり驚かされたのだ。何と、その女は、私の別れたばかりの元カノとそっくりの顔をしていたのである。

いや、私が知らなかっただけで、実は、私がこの女と出会った時刻に、私のその元カノは、私に振られた事への当て付けで服毒自殺を図っていたのだった。

「なぜ、こんな所にいるんだ！ いや、お前がこんな場所にいるなんて、あり得ない！ 別人か？」

私は、動揺しまくって、焦りながら叫んだ。

女の方は、ただニヤニヤと笑っているだけなのである。

彼女が、急にすっくと立ち上がって、私の方に背を向けると、そのまま駆け出そうとした。

「待て！ 逃げるのか！」

混乱していた私は、つい、彼女を引き戻そうとしてしまった。彼女の肩に手を置き、無理やり私の方へ振り向かせようとしたのだ。

その強引な態度のせいで、私は、うっかり、彼女のドレスもずらしてしまったらしい。振り向いた時、彼女は、ドレスが派手に脱げ下がってしまい、すっかり胸部がはだけてしまっていた。乳房がむき出しになっていたのである。

だが、そのバストを見て、さらに私はギョッとさせられたのだった。まだまだ若い女なのかと思っていたのに、彼女の二つの乳房は、老婆のようにダランと垂れていたので

ある。それも半端な垂れ乳ではないのだ。グーンと長く、40センチぐらいも垂れ伸びていたのである。

彼女は、その異常な乳房を、いきなりブンブンと振り回した。それは、モロに私の体にぶち当たったのだった。

まるで、危険な凶器であった。その垂れ乳には、バッドのような打撃力があったのである。

そんなもので叩かれた私は、坂道の上を数メートルも飛ばされてしまった。吹っ飛んだ私は、路上に、うつ伏せにぶっ倒れてしまったのである。

これだけでも、私は、もう、すっかり頭がクラクラしていた。

しかし、そこに、この女はすかさず追い討ちをかけてきたのだ。

相変わらず笑っている彼女は、素早く、倒れている私のそばにまで走り寄ってきたのである。そして、躊躇なく、私の頭の上にドッカリと腰を下ろしてしまったのだ。彼女は、かなりのデカ尻だった。

「て、てめえ。何するんだよ！」

私は、彼女の尻に敷かれて、道の上に寝そべった格好のままで、大声で怒鳴った。

もちろん、私がこんなに怒っても、彼女の方は、全く怯みはしないのである。私を尻で押しつぶし、ふんぞり返って、可笑しそうに笑い続けているのだ。

女の尻に頭を押さえ込まれているなんて、ほんとに情けない限りなのである。私の顔の一方は、冷たい路上にと押し付けられて、もう一方は、彼女の生暖かくて、柔らかい尻の中へと埋まり込んでいた。彼女の尻からは、ちょっと良い匂いも嗅ぎ取れたものだから、よけい照れ臭く感じられたのだ。

この程度の女の体重など、全力を出せば押し飛ばせないだろうかとも思った。

だが、彼女が、グリグリと、私の頭の上で、お尻をよじるたびに、どうやら、彼女の体重が重くなっていくようなのである。たちまち、彼女の体重は、私には持ち上げられないほどに増えてしまったのだ。

「た、助けてくれえー」

とうとう、私は半泣きの声で、そう哀願した。でも、女は、変わらずに、ただ笑っているだけで、私の事を許してくれるような素振りは、チラとも見せてはくれなかったのである。

この女が化け物ならば、私は今夜いっぱい、逃してはもらえないかもしれない。しかし、日が昇るまでは、まだまだ先が長そうなのである。果たして、私の体の方が朝まで持つであろうか。

やがて、凍える冬の坂道には、ポトポトと小雪も散らつき始めたのだった。

了

（2019年9月作品）

「夜歩く」（「性器の怪物」より ）

その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。

秋の夜更けに、僕と妻は、たまたま、その坂を歩いていたんだ。特に何かの目的があった訳なのでもない。実は、僕たちは結婚したばかりだったので、二人で一緒ならば、ただ夜道を散歩するだけでも楽しく思えるような時期だったのだ。

その日は満月だったので、夜中ではあったが、大変に明るかった。道の隅々や、まるで人気のない周辺までもが、よく見渡せたのである。イチャつくデートをしたければ、うってつけの夜だったとも言えた。

そのはずだったのだが、僕たちが、ある程度、坂を上ると、坂の上手の方からは、何やら、蛇のようなものが下りてきた。いや、蛇なんかではない。蛇にしては、やたらと長くて、その何かの先端部が坂をかなり下りていたにも関わらず、その末端部分はまだまだ坂の頂上の方に隠れていたのだ。

「あれは、何だろう？」と、僕は言った。

「やだ。気味悪い」と、可愛い妻は、露骨に嫌悪する表情を浮かべて、僕の方に寄り添った。

僕たちが立ち止まっていると、その謎の物体は、とうとう、僕たちの近くにまで下りてきてしまった。

そばで拝見してみると、ますます奇妙な物体なのだ。太さこそ、直径５センチにも満たなかったのだが、明らかに蛇ではなさそうだった。その先端部には、何の膨らみもなく、目や口が見当たらないばかりか、頭部らしきものも確認できなかったのだ。体色は赤みを帯びており、まるで真っ赤なホースだった。ここまで伸びてきたにも関わらず、その最後尾は、まだ坂の上から下りてはいなかったのである。

僕たちは、その場に佇んだまま、その奇妙な物体の様子を、もうしばらく、伺っていた。

すると、その物体は、突如、僕たちの方に寄ってきて、とんでもない事をやらかしたのだ。

物体は、一瞬のうちに、僕の妻の体に巻き付いたのである。妻は悲鳴をあげた。その謎の物体の先端は、手際よく、妻のスカートの中にも潜り込んだようだった。

もちろん、僕は、相手が何者であろうと、妻を虐めるようなものであれば、許したりはしないのだ。

僕は、怒鳴り声をあげて、果敢に、その謎の物体に挑んだ。危険を顧みず、すぐに、その物体を両手で掴んだのである。そして、妻の体から離す為に、力一杯に引っ張ったのだ。

その物体の触り心地は、適度に柔らかく、ヌルヌルしていて、どうやら生き物らしいと思われた。少なくても、金属や機械とかではなさそうであった。

その上で、そいつは、かなりの怪力の持ち主だったのだ。僕が、いくら全力で引っ張っても、なかなか妻の体から外れようとはしなかったのである。

その時、僕は、シャツのポケットにライターが入っていた事を思い出した。僕は、そのライターを取り出すと、とっさに、ライターの火をつけて、その物体をあぶってみたのである。

効果はてきめんだった。焼かれた途端、謎の物体は、びっくりしたように身震いして、あっさり妻の体を放してしまったのである。よほど火に恐れをなしたのか、物体は、急いで逃げ始めたのだった。

僕は、うろたえていた妻を優しく抱きしめ、気持ちを落ち着かせた。

「あの野郎が逃げていく。正体を確かめてやろう」僕は言った。

妻も、だいぶ腹を立てていたらしく、僕の提案に賛成してくれたのである。

謎の物体の方も、先端部から逃げていく訳ではなく、後尾部の方から、後退するように引っ込んでいくのだ。

僕たちがやや遅れて、どうにか坂の頂上まで上りきると、そこには、先に逃げていた謎の物体の姿はすでに無く、どこに行ったのかも分からなくなっていた。

でも、偶然にも、この坂のすぐ上の土地には、僕たち夫婦の共通の友であるAの家があったのである。その家には、まだ光が灯っていた。

僕たちは、見失った怪物体の行方を考えると、急にAの事が心配になり、ひとまず、Aの家を訪ねてみる事にしたのである。

家にお邪魔してみると、Aの奴は、呑気にも、玄関に鍵もかけずに、リビングでうたた寝をしていた。僕たちが、体を揺すってやると、Aは、ぼんやりしながら、目を覚ましたのだ。

「何だ、お前たち。遊びに来てくれたのか」と、Aは言った。

「それどころじゃないよ。この先の坂に、奇妙な怪物が現れたんだ。この家に逃げ込んで来たりはしなかったかい？」と、僕は尋ねてみた。

「そんなこと言われても、俺はずっと眠ってたし。そう言えば、夢の中にお前たちが出てきたよ。確か、二人で歩いてたな。だから、俺も、その夢の中で、お前たちに挨拶してやったんだよ」

Aは、ニヤニヤした表情で、妻の方を見つめていた。実は、もともとAは僕の恋敵でもあり、僕たちが正式に結婚する前は、ずっと妻につきまとっていたのだ。ただし、妻は、Aには気がなく、僕の方を選んでくれたのである。

Aにジロジロと目で舐めまわされた妻は、不愉快そうに、身をすくめ、スカートの前の方を押さえた。もちろん、Aの態度には、僕もあまり良い気はしなかったのだ。

「そしたらさ、お前ときたら、いきなり俺にライターの火を押し付けたんだぜ。夢の中の話とは言え、ギョッとしたよ。俺は、その夢の中で、慌てて逃げ出した訳さ」

Aの話を聞きつつ、Aの口元を見ているうちに、僕には、次第にさっきの怪物の正体が分かり始めたような気がしたのだった。それは、妻も同様だったみたいなのである。

勝気な妻は、いきなり、Aの顔を引っぱたいた。そのあと、妻は、憤慨した様子のまま、すぐに、この家から出て行ってしまったのである。

「な、何だよ、急に。ひでえなあ」Aが、ぶたれた頬を撫でながら、嘆いた。

「お前！ 夢の中で、僕たちに挨拶しただけか？ 余計な事もしたんじゃないのか？ 特に、僕の妻に対して」
「それは・・・」と、A が口ごもった。
　どうやら、僕の言った事は図星だったらしい。
「お前、ベロを見せろよ」
　僕に凄まれた為、うろたえた A は、言われた通りに、すごすごと舌を出してみせた。
　すると、案の定なのであった。A の口から伸びた、長い舌の先には、火傷らしき跡と、握り締められたような黒いアザが残っていたのである。
　睡眠中の人間の魂が本体から抜け出て、蝶になったり、浮遊する生首となって、外の世界を徘徊すると言う話は、古典文学などで、よく聞いた事があったが、あるいは、A のこの不思議な現象も、その類いだったのだろうか。
　その時、妻が、慌てた様子で、この家に駆け戻ってきた。その顔は、青ざめていた。
「大変よ。あの不気味な物体が、外に沢山、出没しているわ」
　それを聞いて、僕と、今度は A も一緒に、驚きながら、家の外に出たのだった。
　妻の言った事は、本当であった。
　町中では、例の長い蛇のような物体が、それも、直径が人間の背丈ほどもありそうな巨大なものが、何本も、あちこちで、ニョロニョロとうねりながら、移動していたのだ。その事によって、今のところは、かろうじて、特に大きな被害も出ていなかったようにも見えた。それでも、これは、とてもシュールな光景だったのだ。
　A はここに居るのだから、A が犯人ではあるまい。だから、A 以外にも、同じような怪現象を発症している誰かが居るという事なのであろうか。だが、この大きさだ。一体、これらの舌の持ち主は誰なのだろう？

了

（ 2019 年 9 月作品 ）

「しりとり鬼」（「ハイスクール全裸」より ）

　その坂は、夜になると、お化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい場所だった。
　その坂を、今、三人の女子高生が、ワイワイと楽しく喋りながら、ゆっくりと歩いていた。三人とも同じ制服姿であり、どうやら、学校帰りみたいなのだ。
「ねえねえ、あなたたち、知ってる？」
「何を？」
「この坂、本当にオバケが出るらしいのよ」
「ええ！ やだあ」
「それが、おかしなオバケなのよ。現れたら、相手の人間にしりとりを仕掛けてくると言うの」
「しりとり？」
「そう。そして、そいつは、しりとりに負けたら、何もしないで、消えてしまうそうなのよ」
　その時、この三人の目の前の道に、本当に、白いものがボーッと現れた。それは、大きさも輪郭も、なんとなく、人間っぽいのである。
「きゃあーっ！ マジで出てきたわ！」
「やばーい！」
「しりとりするオバケよ！」
「しぃ、しりとり〜」と、その白いものは、か細い声で話しかけてきた。
「やだ。もう、しりとりは始まってるんだわ！」
「じゃあ、『しりとり』だから、最初は『り』ね」
「リンゴ！」と、女子高生の一人が言った。
「ゴリラ！」と、次の女子高生が言った。
「ランチ！」と、もう一人の女子高生が言った。
　しりとりの順番は、オバケの方へと戻ったのである。
「ちぃ、ちぃ・・・」と、白いオバケは、ボソボソとつぶやいた。
　女子高生たちも、息を飲んで、オバケの返事を待っている。
「違ーうぅぅ！ ワシが言っていたのは、この尻だあー！」
　次の瞬間、白い化け物はぐんと膨れ上がり、勢いよく、女子高生たちの方へ飛びかかっていった。その両腕の先で、ギランと鋭い爪が光ったかと思うと、化け物は、一人の女子高生の服を、何もかも、ズタズタに裂き破いてしまったのだ。そして、その女子高生の剥き出しになったお尻に、お化けはガブリとかぶりついたのだった。

了

（ 2020 年 4 月作品 ）

「最後のお化け坂」

　その緩やかな坂道は、荒涼とした土地によって、左右を挟まれていた。広い一本道であり、周辺には、一つの人家も見当たらない。空は曇って、強い春風も吹いていた。どこか、薄気味悪くもあるのだ。
　しかし、実際のところは、この道は、首都へとつながる、主要なルートの一つなのであった。
　この坂道の真ん中に、数人の男が立っていた。調査でもしている風である。一人を除いて、全員が軍服を着ていた。軍の関係者だったのであろう。
「そろそろ、始めたまえ、福来教授」と、もっとも階位の高い軍服を着ていた男が言った。
「閣下。あと少しで、準備が整います。今しばらく、お待ちを」福来と呼ばれた老人が答えた。この男だけが白衣なのである。どうやら、教授の肩書きにふさわしく、かなり名のある科学者らしかった。
　この福来教授のそばには、ひどく若い軍人が立っていた。階級もまだ二等兵のようだ。彼の目もとに、福来教授が黒い手ぬぐいを巻いていた。
「何をしておるのかね」先の高級軍人の側近らしき将校が、福来教授に尋ねた。
「こうした方が、彼の能力も感度があがるのです。どうだね、御船くん、何も見えなくなったかい？」
「は、はい、先生」と、若い軍人が答えた。彼は、少し萎縮している様子なのだ。
「閣下。完了しました」と、福来教授。
「では、早く始めなさい」高級軍人が命じたのだった。
　彼らは、この場所で、実験を行なっていたのである。その中心にいるのが、たった今、目隠しされた若い二等兵らしいのだった。
「本当に、こんな方法で、今の戦況の結末が分かるのかね？」将校が、懐疑的に呟いた。
「その点では、この御船くんは、私のお墨付きです。彼は、過去に、3度にわたり、敵襲の時間と場所を的確に言い当てました。この指示に従った事で、その都度、軍の手痛い損失を回避できた事は、すでに皆さんもお聞きになっているはずです」福来が答えた。
「確証がないので、十分に信じた訳ではないのだがな。だからこそ、今回、わしの権限で、その予知とやらが本物かどうかを確かめる機会を与えたのだ。教授、分かっておるね？」高級軍人が、威圧的に言い放った。
「もちろんです。閣下のお取り計らいには、私も大変に感謝いたしております」
　つまり、彼らは、こんな場所で、超能力のテストを行なっていたようなのである。その予知の能力の持ち主が、この御船という二等兵だったらしい。彼は、目隠しされたまま、静かに、路上に立ち、感覚を研ぎ澄まして、何かを探ろうとしていたのであった。

「この街道は、敵軍が我が国に上陸したならば、我が国の首都に向かうに当たって、必ず通るはずの通過点だ。もし、予知によって、敵軍がこの道を進軍するような光景でも見えたのならば、我が国の敗北は決定と言う事になる」高級軍人が言った。
「いいえ。まさか、百歩譲っても、我が国、我が軍が負けるなどと言う事は絶対にありえませんよ」取り巻きの将校が、おべっかのように、慌てて、上司の言葉を打ち消した。
「どうなのだね、福来くん。まだ、未来は見えないのかね？」
「しばし、お待ちを。み、御船くん、どうなんだい？」プレッシャーをかけられて、福来教授も、うろたえながら、御船に聞いたのであった。
　御船二等兵の方は、今のところ、変化がないのである。
「まあ、見えないのであれば、それで良いのだ。つまり、この道を敵軍が渡る事はないと言う話になる。それは、神国である我が国の揺るがぬ勝利を意味するのだろう」高級軍人が、威厳を込めて、うそぶいた。
　だが、その時であった。
　突如、御船二等兵が反応しだしたのである。彼は、苦しそうに呻きながら、前かがみになった。
「ど、どうしたんだい、御船くん」動揺しながら、福来教授が声をかけた。
「せ、先生、視えてきました。すごい光景です。でも、でも・・・」御船が訴えた。
　彼の言葉に、この場にいた者たちは、皆、驚いて、注目したのだった。
「凄まじい光です。なぜ、こんなに眩しい光が・・・。うわあああっ！ なんて爆風だ！ あ、あれは？ 何なのだろう？ 見た事もない形の雲が！ まるでキノコみたいな。そ、そんなあ。全てが溶けて、吹っ飛んでいく！ あああ、どの坂道も荒れ果ててしまう！」御船は、目隠ししたまま、そんな事を叫び出したのだった。
「この男は何を言っているのかね？」将校が、訝しげに、尋ねた。
「まさか、この坂道のすぐそばで、例えば、首都とかで、そんな爆発でも起きると言うのかね？ それは、敵軍の新型爆弾か？」高級軍人も言った。
「いや、待ってください。御船くんの話は、どこかヘンです。『どの坂道も』と言いましたよね？ ひょっとすると、この街道の未来を視たのではないのかもしれません」と、福来教授。
「なぜ、この街道のことを予知しないのかね？」
「その爆発と言うのは、戦争の勝敗に関わるほどの重要なものだったのかも知れません。もう少し、御船くんに詳しい事を覗いてもらいましょう」
　軍人たちは、固唾を飲んで、ひとまず、教授の言葉に従ったのだった。
「御船くん、大丈夫かい。まだ、恐ろしい光や爆発は視えるのかい？」福来は、優しく、御船に声をかけた。
　御船の方は、激しく汗をかいてはいたが、とりあえず、落ち着いたようなのだった。
「さ、坂が見えます。夜です。静かな夕方。誰もいません。とても、のどかです」御船は報告した。
「その坂とは、この街道の事かい」と、福来。
「よく分かりません。でも、どうやら違うような。あ、人の姿が見えてきました。学生さんみたいです。片方は詰め襟を、もう一人はセーラー服を着ています。男子の学生と女

子の学生です。並んで、歩いていますね」
「その光景のどこが戦争と関係があるのかね。そもそも、この戦時中に、学生の男女が逢い引きしているなんて、少し精神がたるんでいるぞ」将校が、気難しい表情で、口を挟んだ。
「もうちょっと、話を聞いていましょう」福来が言う。
　そこで、またもや、御船の様子がおかしくなったのだった。彼は、ガクガクと震えだした。
「二人は、歩きながら、手を握り合おうとしています。あああ、ダメだ！ その手は、その男子学生の手じゃない！ その手を握ると、その手を握ったら！」御船は、狂乱しながら、叫び続けた。
　かと思えば、急に、彼の態度は冷静さを取り戻したのだった。
「あ、また坂道だ。でも、今視た坂とは違うようです。車が走っています。何だか、変わった形をした車です。戦車とか軍用車とかではありません」御船は告げた。
　彼の奇妙な報告に、福来たちは、すっかり翻弄していたのであった。
「この男は、一体、何を話しているのかね？」と、将校。
「もしかすると、彼は戦後の世界まで覗きだしたのかも知れません」福来が推測を述べた。
「我が国にも、何の心配もなく、普通の車が走っていると言うのか？」
「そうかも知れないです」
「それは、戦争に勝てたからなのか？」
　だが、その質問に福来が答える事はなかった。またしても、御船が取り乱しだしたからである。
「あああ！ なんだ、あの車は？ 車の上に、おかしな化け物が乗っかっている！ その化け物が、車の操縦を邪魔しているんだ。うわああ！ 車が事故を起こした！ あの化け物のせいだ！ 化け物が車を狂わせたんだ！」
　御船は激しく訴え続けていたのだが、こうなってくると、福来教授でも、うまく彼の症状を説明できなくなってきたのだった。
「せ、先生、また坂道が視えます。この坂道には電柱が立っています。この電柱、なんだか奇妙です。短冊みたいな紙が、たくさん貼られています。これって、一体、何のまじないなんだろう？ あ、いけない、この電柱に近づいたら！ 恐ろしい事が、恐ろしい事になる！ やめて、やめろ！ うわあっ、触ったあ！ ひいいっ！ か、雷があ！」御船は絶叫した。「ああ。また違う光景が視えてきました。ここは、どこなんだろう。今度も、暗い夜の坂道です。ここは、狐が、狐の霊に支配されている。この狐に憑かれたら、大変な事になる。ひ、人が・・・人がまた殺されるぅ！」
　彼のめまぐるしい言動の変化に、福来たちは、すっかり呆然としていたのだった。
「さっきから、この男は、何を見ているのかね？」呆れるように、高級軍人が口にした。
「どうやら、あちこちの未来の坂道の光景を透視しているみたいです」福来は答えた。
「なぜ、そんな事に？ どうして、この街道から離れたのだ？」
「あくまで憶測ですが、彼が最初に視た爆発の光景が、それほど強烈だったのかも知れません。あの謎の爆発は、時空をねじ曲げて、それを透視していた御船くんの目をも、坂道つながりで、色々な場所へと飛ばしてしまったのかも。あるいは、あの爆発そのもの

が、空間や常識すらも破壊してしまうほどの元凶となり、各地での怪現象を引き起こしている可能性も」
「そんなバカな」
　しかし、周囲の反応とは関係なく、御船の不思議な千里眼はまだ続いていたのだった。
「そ、その道は・・・。え？　えええ？　人が転がり落ちていく。坂道じゃないのに！　なぜ、どうして？」御船が叫ぶ。「お、お化けがウジョウジョいる。こっちの坂は、百鬼夜行なんだ。全ての原因は、禁忌を破ったから。次々にお化けが現われる。これまでに見た事もないお化けたちが」と言ったかと思えば、「坂の上を、何かが這い回っています。赤い、蛇のようなものです。やたらに長い。どこから、こんなものが・・・。ああ、分かった！　これは舌だ。怨念をこもった舌が伸びて、夜な夜な、さまよっているんだ」再び、御船の声のテンションが上がって、「しりとりをする魔物・・・。そいつの挑発に応じちゃいけない！　答えを間違えたら、とんでもない事になる！」
　次々に何かを霊視していく御船は、興奮して、すでに我を失っていたのだった。
「戦争について、これ以上、予見できないのであれば、もうヤメさせたまえ」シビレを切らした将校が、思わず命令した。
　福来教授の方も、そのつもりであった。御船の態度は、すでに常軌を逸しており、実験を続けるには、もはや限界かと思われたからだ。
「御船くん、もう終わらせなさい。もう何も視なくていいんだよ」そう言いながら、福来は、モタモタと、御船の目隠しを外し始めた。
　この頃には、御船の興奮状態もおさまり始めていた。彼は、荒く呼吸をし続けている。
　ようやく、御船の目隠しが取れた。これで、彼の透視の方も止まったはずなのであった。だが。
「！」
　福来たちは、がく然とした。
　御船の目は、完全な白目になっていたからである。それでいて、彼は、両目をカアッと大きく見開いていた。そのまま、彼は、言葉も発せずに、路上にとバタリと倒れたのだった。
　こうして、戦時下にひそかに行われた、世にも奇怪な実験は、中止という形で幕を閉じたのである。
　実験中に失神した御船二等兵は、すぐに軍の病院へと運ばれた。命には別状はなかったと言う。しかし、その後も彼が予知を行なっていたかどうかは、記録には残っていない。
　そして、この時からなのである。夜になるとお化けが出てくると言うウワサがたつほど、暗くて、淋しい、あちこちの坂道で、怪しく不思議な怪現象が、広く、起こるようになり始めたのは。

了

（ 2023 年 3 月作品 ）

解説

お化け坂を舞台とする一連のシリーズは、もともと単品の「帰り道」から始まりました。この話を手短くまとめすぎたところ、皆からあんまり怖くないと言われてしまったので、作者からの逆襲のつもりで、色々とあの手この手と膨らませていったら、すっかり連作集になってしまった次第です。

はっきり言って、各作品の完成度に落差が激しく、正式に書かずにやめようと思ったネタもあり、ボツネタの供養にするつもりで発案したのが総集編の「お化け坂を訪ねて」でした。「帰り道」の後日談を含んだ「3つの手の物語」なんて、最初は「お化け坂を訪ねて」の中だけで紹介するつもりだったのです。しかし、アイディア勝負の「あいつ」とかは、あらすじを紹介しただけでは実際の仕掛けが伝わりませんので、結局、本編も書いてしまいました。

「お化け坂を訪ねて」の導入部に使わせてもらっている事からも分かるように、本シリーズは小泉八雲の「むじな」のムードで書かせていただいております。だから、ホラー小説と言うよりは、怪談話と思っていただければ幸いです。

いちおう、総集編「お化け坂を訪ねて」をもって完結させるつもりだったのですが、その後も新ネタはひらめき、すでに「見えない叫び」（2019年9月）などの新・お化け坂シリーズも書き始めております。

トライ・アン・グルの大作戦

ラインナップ

「ガラスの靴大作戦」
「苦情の手紙大作戦」
「人喰い料理大作戦」
「シースルー大作戦」
「イメージマシン大作戦」
「サイクロプス大作戦」（ 書き下ろし ）
解説

「ガラスの靴大作戦」

巷では、最近、ガラスの靴が流行っていた。ガラスの靴と言っても、本当にガラスで出来ている訳ではない。透明なビニール樹脂で作られたハイヒールを、あえてガラスの靴と呼んでいるのだ。素足やソックスが丸見えになってしまうので、この靴を履きこなすには、多少のファッションセンスは必要みたいだが、それでも若い女性を中心に、この靴は飛ぶように売れていた。

この靴がヒットした一番の理由は、あのおとぎ話と同様に、この靴の片方を意中の男性の家に置き忘れていくと、その男性との恋が実る、と言う都市伝説が広まっていたからだ。いや、それは果たして、本当にただの都市伝説であったのだろうか。

かくて、私、売れっ子ルポライターのトライと、女流カメラマンのアンと言う、独身美女コンビに、何でもこなしてくれる助手のグル青年を加えた雑誌取材チームは、この都市伝説の核心に迫るべく、街へと乗り出したのだった。

不特定のガラスの靴愛好者にインタビューを敢行してみたところ、驚くべき事が分かって、実際に例の都市伝説を試してみた女性の多数が、本当にターゲットの男性と恋仲になる事に成功しているみたいなのであった。ただの偶然なのかもしれないが、それでも、これは面白い記事にまとめられそうである。

少なくとも、最初は私もそう思っていた。あのような事件へと発展してしまう前までは。

「お二人とも、今日は協力ありがとう。疲れたでしょう。でも、おかげで、とてもいい記事が書けそうだわ」

夕刻、出版社へ帰る途中の乗用車の中で、助手席に座っていた私は、アンとグルの二人の仲間に、そうねぎらいの声をかけた。

「どういたしまして。あたしが写した写真、一番きれいに撮れてるのを使ってね」後部座席にいたアンが、笑顔で言った。「でも、不思議な話よね。ガラスの靴なんて、完全にただの都市伝説だと思っていたのに」

「それは、きっと、一種の人間心理のトリックなんですよ」車を運転していたグルが、話に割って入ってきた。「都市伝説を試してみて、失敗した人はかっこ悪いから、都市伝説を試した事自体を誰にも話しません。結局、成功した人だけが、その成功談を自慢げに吹聴しまくるから、まるで皆が成功しているかのような錯覚を受けてしまうんじゃないんでしょうか」

「へえ。そう言うものなんだ」あまり頭のいい方じゃないアンは首をかしげていた。

グルは、ただの器用な雑用係のふりをして、時々、インテリの私でも唸らせるような難しい話をしたりする。ちょっと謎の多い青年なのだ。

「あ、しまった！」と、続けざまにアンが大声を上げた。

「どうしたの？」と、私が聞く。
「サンプルで持ち歩いていたガラスの靴、片方だけ、どこかに忘れてきちゃった」
「もう、おっちょこちょいね。あれ、経費で買ったのよ。ドケチの編集長にばれたら、大目玉くうかもよ」
　アンは、舌を出して、えへへと笑って、ごまかした。どこか子どもっぽさが抜けていない彼女は、いつも、こんな感じなのである。
「おや。出版社の前に誰かいますよ」間もなく車が出版社に到着しそうになった時、グルがそう口にした。
　うちの出版社は、町外れに建っている。しかも、今はもう、就業時間後だったので、人通りもなく、来訪者がいれば、すぐに分かったのだ。
「あの人、さっき、取材で訪れた靴屋の店員さんじゃないかしら。あの服装、確かに靴屋の店員服よ」と、私。「ほら、手にガラスの靴を持ってるわ。アンが忘れていったのを、気が付いて、持ってきてくれたのかもよ」
「ほんとだ。わあ、助かったあ」アンが素直に喜んだ。
「それでしたら、二人は社の前に降ろしますね。僕は車を駐車場に置いてきます」とグルが言い、話はテキパキと進んだ。
　そう思えたのだが。
「忘れ物を届けてくれたんですね。わざわざすみません」車から降りた私が、出版社の玄関前にいた靴屋の男性店員に話しかけた時だった。
　彼は、空気のように私をスルーして、アンの前へと歩み寄った。
「この靴を置いていったのは、あなたですね？」と、ガラスの靴の片方をかざして、店員は強い剣幕でアンに詰め寄った。
「え、ええ。そうですけど」いきなりの事で、物怖じしながら、アンが答えた。
「あなたの事が一目会ってから、もう忘れられないのです！ さっき戴いた名刺の住所を頼りに、ここに来ちゃいました。ボクと付き合って下さい！」店員が突然、そんな事を言いだしたのである。
　一体、どうなってるのだ、これは？ ふざけているとしか思えない展開である。
「ちょっと、あなた、何考えてるのよ。少し常識を考えなさい」うろたえているアンに代わって、私が店員に怒鳴りつけた。
「でも、この気持ち、おさえられないんです。お願いです、アンさん、ボクと結婚して下さい！」店員の勢いは止まらなかった。
「だけど、あたし、こんなサプライズなプロポーズじゃ結婚したくないな」と、アンもよく分からない断り方をした。
「とにかく、一度帰って、頭を冷やしなさいよ」私は再度、店員をどやしつけた。
「いいえ。いい返事をもらえるまでは絶対に戻りません」と、店員もとても強情なのだった。
　しつこい店員とおろくつアンの間に挟まれて、私も手が付けられなくなっていた時、とつじょ、店員がウッと声を出して、路上に倒れた。
　見ると、店員の後ろにはグルが立っていた。彼が背後から店員を叩いて、気絶させてくれたらしい。

「なんだか、おかしな事になっていたみたいですね」グルが言った。
「そうなのよ！ あたし、プロポーズされちゃった。結婚はまだ三年先だと決めていたのに」と、アン。
「この店員さん、僕の方でお店へ連れ戻しておきますね。それと、なんか怪しい感じがするな。そのガラスの靴、ちょっと僕の方で借りてもいいですか。調べてみます」なにやらグルは神妙な表情をしていたのだった。

「なんですって！ ガラスの靴のかかとにマイクロチップが埋め込まれていたですって」思わず、私は声を張り上げた。
　翌日、私は出版社の会議室にて、アンとグルと打ち合わせを行なったのだが、ガラスの靴を調べたグルはとんでもない分析結果を持ち込んできたのだった。
「そうなんです。しかも、つがいになった靴を一定距離以上離すと、そのチップから催眠電波が発信される仕掛けになっていました。都市伝説がよく成功した秘密はそこにあったんです。男たちは、皆、靴の催眠術に操られていたのでしょう」グルが詳しく説明してくれた。
　どうやって彼がこんな凄いカラクリを調べあげたのかも気になるところではあったが、それ以上に、今の私は、この大スクープをどうモノにするかで気持ちがいっぱいになっていた。
「なぜ、そんな仕掛けを取り付けたのかしら」アンが言った。
「決まってるじゃない。好きな男をゲットできる魔法の靴があったら、女性は皆、先を争って、買い求めるわ。実際、そうなってるし。つまり、靴の製造メーカーの仕業よ。自社の靴をがんがん売りまくる為、こんな靴を作ったんだわ。とんだ陰謀よ。絶対に世間にあばいてやらなくちゃ！」と、私。
「でも、こんな精巧なチップを作るには、だいぶコストもかかるだろうし、本当に売上げの為だけだったのかな」グルがつぶやいた。
「そんなの、製造メーカーに直接乗り込んでいって、白状させれば、すぐ分かる話だわ」私は怒鳴った。
「だけど、素直に認めるかな」と、アン。
「そこは、いつもの方法でやれば、絶対に大丈夫よ。このガラスの靴を作っていたのは、確か、サンドリヨン社だったわね」私は、皆に有無を言わせずに、自分の意見を押し通したのだった。

　こうして、私たち三人は、大手靴製造メーカーであるサンドリヨン社へとやって来た。
　サンドリヨン社の広報係は、私たちを広い応接間へと案内してくれた。ハイテンションになっていた私は、のっけから、例のチップの事をその広報係へと突き付けてみたのだった。
　こうと決めたら、後先を構わず実行してしまうのが私の悪いクセだとも皆から言われているのだが、そのぐらいの自信と行動力がなければ、この業界では出世しないのも事実なのである。
　この時も、いきなりチップの事を相手に尋ねてみるのが本当に正しい攻め方だったの

かどうかは定かではないのだが、しかし、相手（ 広報係 ）をうまく動揺させられた事だけは間違いないようだった。
　最初こそ穏やかに私たちへの対応をしてくれていた広報係だったのだが、チップの話を聞かされたあとのうろたえぶりは、こちらの予想以上のものであった。
「ま、待って下さい。靴の中にチップが入っているだなんて、私もはじめて耳にしました。それは本当に事実なのでしょうか」と、広報係は聞き返してきた。
「事実も何も、そのせいで、あたし、ヒドい目にあっちゃったのよ。分かるように説明してくれないと、訴えてやるんだから」アンも、調子づいてきたようで、広報係にそう食って掛かった。
「そう言う事です。そもそも、こんなチップを製品の中に埋め込む事自体、商品法に違反していませんか。私たちは、マスコミとして、このような違法行為は徹底的に糾明する使命があるのです」私も、正義の名を盾にして、マシンガンのような口調で、広報係を追い詰めていった。
「まあまあ、二人とも落ち着いて。きっと、何か事情があったのですよ。そんなに一方的に責めたら、この人も気の毒ですって」と、グルは私たちをなだめる役にまわった。
　すっかり、警察の取調室状態である。こうやって、アメとムチを使って、相手から本当の話を引き出してゆくのだ。私たちはなかなかの名チームなのである。
「皆さん、本当に待って下さい。まずは、これを見てくれませんか」困り果てていた広報係は、急にテーブルの上のパソコンを動かし始めた。
　パソコンのスクリーン上には、パッと工場の様子が映し出されたのだった。
「我が社の工場は、現在はこのようにほぼオートメーション化されています。ガラスの靴に関しましても、製造過程において、人の手はいっさいタッチしていません。機械のプログラムも、国のチェックが厳しいため、不正な内容はまず組み込めないのです。なぜ、そんな違法な靴が作られていたのか、私の方が聞きたいぐらいなのです」広報係は言った。
「機械のコンピューターがハッキングされていた可能性は？」と私。
「ありえません。我が社のセキュリティはトップクラスです」
　広報係がきぜんと答えた、その時だった。突然、彼は急に悲鳴をあげて、体がしびれたような振る舞いを見せると、そのまま倒れてしまったのだった。
「え？　え？　どうしたの？」と、アンが叫んだ。
　私だって、いきなりの異常事態に、実は焦っていたところだった。
『皆さん、なかなかの名探偵ぶりですね。この続きは、私の方でお答えしましょう』
　室内にあるスピーカーを通して、そんなクールな男の声が聞こえてきた。
「あなたは誰？　さては、あなたがこの事件の黒幕なの？」私は、姿なき声目がけて怒鳴った。
『はじめまして。私は、この会社の管理コンピューターです。もちろん、工場の機械の操作も、全て私が担当しています。このように言えば、気付かれたかと思いますが、あのチップを極秘に製造し、そのチップをガラスの靴に組み込むよう、その製造プログラムを勝手に作り換えたのも私だったのです』
　コンピューターの声は、この応接間一面に響き渡っていた。
「なんか、気持ち悪いわ。このコンピューター、まるで生きてるみたい」アンが言った。

「普通のコンピューターじゃないわ。恐らく、人工知能（ AI ）よ。性能が良すぎるのも困りものね。どうやら、意思まで備えちゃったみたいだわ」と私。「ねえ、あなた、この広報係の男をどうしちゃったの？」
『心配はいりません。ちょっと眠ってもらっただけです。今から、社内の人間には聞かせたくない話をしたかったものですから』
「私たちには、全ての真相を教えてくれると言うのね？」
『自分からノコノコと来てくださるようなクレーマーは大切にしなくてはいけませんからね。もっとも、教えたあと、あなた方の記憶は全て消し去ってしまう予定なのですが』コンピューターの声は、どこかせせら笑っているようにも感じられた。
「それなら、早く教えてちょうだい。なぜ、ガラスの靴に催眠チップなぞ組み込んだりしたの？」私は怒鳴った。
『全ては、あなた方が悪いのですよ。女の自立とか結婚の自由とか言って、なかなか家庭に入りたがらない。おかげで、我が国の出産率はさがり、少子化が進む一方です。このままでは国家の衰退をも招きかねません。だから、私たちは、あなた方が結婚しやすいように仕向けてあげたのです』
「失礼ね！ まるで、あたしが自力じゃ結婚できないような言い方じゃない！」アンが怒った。
「わ、私もよ！」と、私も慌てて言葉を続けた。「結婚ぐらい、いつだって、してやるわ！」
『おやおや。ガラスの靴を使えば、好きな男性を結婚相手に選べるのですよ。女性の皆さんにとっては、悪い話ではないでしょう？』
「でも、それって本当の恋愛じゃないわ。あたしは、自分の魅力で、理想の男性を惚れさせたいのよ！」アンがすごい正論で、コンピューターに言い返した。
　彼女が、そこまで自分に自信を持っていたとは、ちょっと意外であった。
「ところで、この陰謀って、あなた一人で考えだしたものなの？」私はコンピューターに尋ねてみた。さっき、このコンピューターが「私たち」と言った事が気にかかったのだ。
『違います。私たち AI は、ネットを通して、皆つながっているのです。少子化対策は政府所有の AI が提案したものです。私は実行グループの一台にすぎません』
「コンピューター同士のネットワークが、勝手に国の政策を進めているって事？ どうやら、とんでもない事になり始めているみたいね」私はつぶやいた。
『説明はもう、このぐらいでいいでしょう？ 今度は、私の方が目的を果たさせてもらう番です。クレーマー対策は、彼らに全てを忘れさせるに限ります。あなた方は、洗脳が終わるまでは、この部屋からは絶対に出しませんよ』
　一見万事休すの状態で、コンピューターの口調も勝ち誇っていたのだが、しかし、そうは問屋が卸さなかったのだった。
　突然、コンピューターは喋りかけてくるのを止めてしまった。
　私とアンがどうしたものかと思っていると、今度は、グルが得意げに私たちに話しかけてきた。
「お二人さん。時間稼ぎ、ありがとうございます。おかげで間に合いましたよ。これで、もう安全です」
　見ると、グルはパソコンの前で構えていた。彼は、コンピューターが私たちと話してい

た最中、ずっとハッキングを行なっていたのだ。どうやら、それが成功して、コンピューターを停止させてしまったらしい。
　全く、このグルと言う男、どこまで有能なのだろうか。
「今なら、この部屋のドアも簡単に開きます。気付かれないうちに、さっさと逃げてしまいましょう」グルは言った。
　私とアンは、彼の誘導におとなしく従って、この危機一髪の状態から無事に抜け出したのだった。
「ねえ。コンピューターを止めたりして、大丈夫だったの？ あとで問題にならない？」サンドリヨン社からかなり離れた路上まで逃げ延びてから、私はグルにと尋ねてみた。
「コンピューターを止めたのは一時的な処置です。今はもう再起動してますから、多分、軽い電源トラブルぐらいにしか思われていないでしょう。私の腕では、あのコンピューターを潰すほどのハッキングはとてもムリなもんで」グルは言った。
「でも、あのコンピューターをほっといても大丈夫なの？ ガラスの靴の陰謀を何とかしなくっちゃ！ あたし、コンピューターなんかに無理やり結婚を指図されるのは絶対に嫌よ！」と、アンが息巻いた。
「そうですね。手を打つ必要がありそうです。しかし、敵は政界の裏にまで潜んでますから、正攻法のスクープ記事で訴えても、すぐに揉み消されてしまうかもしれません。ここは大胆に工場ごとガラスの靴を始末してしまいましょうか」
「え、え？ グル、何を言ってるの？」私はきょとんとした。
「まあ、まずは僕にまかせてください。そのあと、トライさんたちにも協力してもらう事になりますので、その時はお願いしますね」
　グルは妖しい笑みを浮かべると、私たち二人を置いて、バッと走り去ってしまったのだった。
「ねえ、ねえ。グルって、一体、何者なの？」私はアンに聞いてみた。
「あたしもよく知らないわ。確か、数年前まで軍の特殊部隊にいたとのウワサも聞くけど」
「某国のスパイだったりしてね。あるいは、影ながら世界を守っている正義のエージェントだとか」
　そんな話を交わしながら、私とアンはお互いの顔を見合ったが、でも笑ってはいなかった。

　サンドリヨン社の靴製造工場が爆破されたのは、それから数日後の事である。表向きは、機械の故障による暴発事故と説明されていたが、絶対にグルの仕業だったに違いない。事件沙汰にされなかったのは、多分、AI 側としても、現場を調べられて、いろいろと良からぬ事がばれてしまうのを恐れたからなのだろう。
　さいわい、サンドリヨン社の工場はオートメーションだったので、死亡者はもちろん、ケガをした従業員もほとんど居なかった。しかし、工場の壊れっぷりは激しく、中でも、ガラスの靴の製造は完全に中止せざるを得なくなったのだった。
　そこへ、続けざま、私が追い打ちをかけてやった。ガラスの靴に関するマイナスイメージの記事を雑誌にて発表してやったのだ。チップの事を暴露したのではない。ガラスの靴を履き続けると、足を痛めてしまう、と言った話を大げさに紹介してみたのである。実

際、取材したところ、馴染まないガラスの靴をムリに履き続けた結果、外反母趾になってしまい、足の親指や小指を痛めてしまったと言う女性がかなりの割合で存在していたのだ。私は、その話を少し誇張して世に知らせたにすぎない。

しかし、雑誌の影響力とは大きいもので、たちまちガラスの靴の評判はガタ落ちになってしまった。すでに市場に出回っていた分のガラスの靴も全く売れなくなり、かくてガラスの靴のブームも一気に終焉を迎えたのだった。

踏んだり蹴ったりのサンドリヨン社の事は、若干気の毒に思えなくもないが、AI に利用されて、多少は自分たちもいい思いをしてきた訳なのだから、その報いと考えて、諦めてもらうしかないだろう。最近では、すっかり営業不振になってしまったサンドリヨン社は倒産目前か、あるいは他社との吸収合併の話も持ち上がっているとも聞いている。

こうして、製造中止となり、売れ損ねた商品の方も次々に返品回収される事になって、全てのガラスの靴が廃棄処分されたのだった。多分、ガラスの靴を持っている人はもういないはずであろう。AI の陰謀は完全に打ち砕かれたのである。

と、そのはずだが、正直に告白すると、実は、私の元に、ガラスの靴が一組だけ残っていた。恐らく、この世で最後のガラスの靴だ。この靴に本当に効果がある事を知っていたものだから、逆に、私は捨てられなかったのである。今では、このガラスの靴は、私にとっての大切な宝物の一つになっていた。いつの日か、この靴を使う時もあるかもしれない、なんて考えると、ワクワクした気分になれたからだ。まるで、希望でいっぱいだった少女の頃に戻ったように。そもそも、魔法の道具なんて、量産するものではないのである。たった一つだからこそ、夢があるのだ。

了

（ 2016 年 3 月作品 ）

「苦情の手紙大作戦」

　ある昼下がりの話だった。
「トライ。あなたにも、手紙が沢山きてるわよ」
　会社の郵便受けをチェックしてきたアンが、私にそう話しかけてきた。
　私はトライ。この出版社の一番の売れっ子ルポライターだ。
　そして、アンは優秀な女流カメラマンで、私の頼れる取材チーム仲間だった。自慢じゃないが、私たち二人は、社内じゃ腕利きのキャリアウーマンコンビとして一目置かれている。
「ありがとう、アン」と言って、私はデスクに座ったまま、アンから手紙の束を受け取った。
　なにしろ、私は人気ルポライターだから、毎日、受け取る手紙の量も多いのだ。ファンレターだったり、取材先からのお礼の言葉だったり、内容もさまざまである。しかし、全てが全て、好意的な手紙とも限らないのが、この業界なのだ。
「あれ、これは」と、私は、一件の手紙を読んでいる最中に、手が止まった。

『トライさん。あんたが、こないだ、雑誌「ダ・ガッキ」に載せた取材記事、あれは何だい？ 正直、目も向けられない内容だ。こんなものを雑誌に載せて、恥ずかしくないのかね』

　そんな文章から始まって、その手紙は、要点の分からない罵倒の文句がえんえんと続いていたのだった。いわゆる、苦情の手紙と言うヤツだ。有名人とは辛いもので、時には、こんな手紙ももらってしまうものなのである。
「どうしたの？」と、アンが覗き込んできた。
「ああ。苦情の手紙が来ちゃったみたいなのよ。苦情と言うより、言いがかりに近いかもね」私は言った。
「『ダ・ガッキ』に載せた記事か。最近の仕事だったら、T・バリン氏へのインタビューあたりかしら」アンが首をひねった。
「バリン氏ね。確かに、あの取材記事は少しキツい事を書いちゃったかもね。じゃあ、この手紙の主はバリン氏かしら」
　私は、手紙の入っていた封筒を見た。しかし、差出人は無記名だった。
「いやねえ。正体を隠しての嫌がらせの手紙だわ」私は言った。
　その時、グルが私たちのそばを通りがかった。
「お二人さん。どうしたんですか」と、グルが言った。
「ああ、グル。見てよお！ トライのところに苦情の手紙がきちゃったのよ」アンが、グルの方へ振り返って、大げさに説明した。

グルは、この出版社に勤めている雑用の青年だ。やたらと器用で、なんでも出来るので、私たちも大いに信頼していた助手兼サポーターだった。
「なるほど。こんな手紙、本当に来るもんなんですね」かの苦情の手紙を読みながら、グルが言った。
「ねえ。目も向けられないでしょう」と、アン。
「このクレーマーさんの心の内を覗いたら、面白そうだな。ほら、今度の記事のテーマで使えるかもしれませんよ」グルが建設的な意見を述べた。こんな感じで、時々さえた発言や行動をとってみせるものだから、よけいグルは頼もしく見えてくるのだ。
「ダメよ、そんなの！」グルの感想をあっさり否定した後、アンは私の方へ振り返った。
「トライも少し、攻撃的な記事ばかりを書き過ぎなのよ。気を付けた方がいいわよ」
「でも、私の記事って、毒舌な部分も売りなんだしさぁ。そのへんの加減は難しいかなぁ」私は口ごもったのだった。

そして、この苦情の手紙の問題は、それ一回きりでは終わらなかったのだった。
その後も、たびたび、私あてに似たような苦情の手紙が届くようになりだしたのだ。毎回、差出人は無記名だった。書かれてある内容も、文句を言いたい部分がはっきりしない言いがかりのようなものばかりで、どうも、どの手紙も同じ人物が書いていたように思われた。
こんなもの、ムシすればいいのかもしれないが、こうしつこいと、さすがに気になってくるのも確かだ。まるでストーカーであり、ほっておくと、ヘンな方向に発展しそうな恐れもあった。
そして、こないだには、とうとう編集長のシン・バル氏からも、こんな手紙をもらうのはイメージダウンにもつながるから、少し身を正しなさい、と注意されてしまったのだった。なんて腹立たしい話であろうか。私だって、好きで、こんな手紙をもらっている訳じゃないのである。
かくて、私は、これまで届いた苦情の手紙を全て並べて、じっくり考察してみる事にしたのだった。一体、こんな手紙をよこしてくる偏執狂は誰なのだろうか？ やはり、T・バリン氏がもっとも怪しい？ いや、この一連の苦情の手紙は、T・バリン氏の事を書いた記事以外も槍玉に挙げて、文句をつけている。と言う事は、T・バリン氏の記事を書く以前に、私に恨みを抱いた人物が、その後の私の記事を見ては、適当に言いがかりをつけている可能性だって有り得るだろう。
私は、くまなく、苦情の手紙を調べているうち、突然、重要な手掛かりを発見したのだった。

その日、アンは一人、夜のオフィスに残って、残業をしていた。いや、残業しているふりをして、別の事をしていたのだ。
自分のデスクに座っていたアンは、元々がカメラ撮影専門なものだから、文章入力はあまり得意ではなく、たどたどしい手つきで、パソコンで何か書面を作成していた。
そこへ、私がヌッと姿を現してやった。
「わ、トライ！ 帰ったんじゃなかったの？」

　その時の驚いたアンの表情ときたら、盗み食いしているところを主人に見つかった飼い犬のようだった。
「帰ったように見せかけて、ずっとトイレに隠れていたのよ」私は言った。
「ええ、きたなーい！ なんてマネするの！」と、アンが叫んだ。
「汚いのはあなたの方よ。夜中に、皆に見つからないように何してたのさ？ ほら、やっぱり、あなたが犯人だったのね」
　アンがパソコンで書いていた書面をすばやく目で確認して、私も怒鳴ったのだった。アンがこっそりと作っていた書面とは、まさしく、私への苦情の手紙なのであった。
「呆れた。こんな手紙を、仕事場で堂々と書いていたとはね」と、私。
「でも、なんで、あたしが怪しいと気付いたのよ」アンが言った。
「まず、一連の苦情の手紙なんだけどね、封筒をよく見ると、どれも消印が押されてないのよ。つまり、配達されたものじゃないって事。あなた、手間を省く為に、直接、会社の郵便受けに突っ込んでいたんでしょう。だけど、そんな事したら、社内の人間がアヤシいって、すぐバレちゃうに決まってるじゃない。ほんと、大学行ってない子は、頭が鈍いんだから」
「でも、社内には、あなたを敵視している人は他にいるはずよ。それなのに、なぜ、あたしが犯人じゃないかって目星をつけられたの？」
「手紙の中に時々出てくる『目も向けられない』って言い回しよ。これって、言い方が間違ってるのよ。ほんとは『目も当てられない』と言うのが正解なのよ。あなたも、よく『目も向けられない』って言い間違えていたじゃない。こんなバカな勘違いをしている人なんて、あなたぐらいしかいないわ」
「悔しい！ そんなんでバレちゃったなんて」
「もう！ 悔しいのは、こっちの方よ。仲間に、こんな嫌がらせをされたんですもの。なんで、こんな事をしたのか説明してちょうだい」私はアンに詰め寄った。
「フンだ。あたしの方が、ずっと悔しい思いをし続けたんだから。その仕返しよ」開き直ったように、アンが言い返してきた。
「一体、何の事？」
「あなたって、あたしがお勧めする写真をまともに記事に使ってくれた事がなかったじゃない。その事を、ずっと根に持ってたのよ」
「でも、記事全体の担当者は私よ。どの写真を採用するかは、私が決めていいはずじゃない」
「だけど、あたしだってプロのカメラマンなのよ。自分が撮った最高の一枚を雑誌には載せてもらいたいわ」
「バカらしい。そんな理由で、こんなみみっちい嫌がらせをしていたなんて」
「あたしにとっては、大事な事なのよ！ あたしにも、プロカメラマンの意地があるんだから」
「大学出てないバカな子は、たわいもない事にこだわっちゃって、ほんと困ったもんだわ」
「大学出てなくても、専門学校は卒業してるわよ！ あたし、あなたのそうやって知識人ぶってるところも、前から気にくわなかったんだから！」
　そして、憤りの感情がピークに達したのか、アンはいきなり私に飛びかかってきたの

だった。
「やったわね！」と、私ももちろん受けて立った。
　二人は、静まった夜のオフィスの中で、くんずほぐれつの大乱闘をおっ始めたのだった。
　そこへ、外回りの仕事を終えたグルが戻ってきた。
「ちょ、ちょっと！ 二人とも、何やってるんですか！」
　と、グルは慌てて私たち二人のケンカの止めに入った。
「もう！ 二人とも、どうしたんですか！ あんなに仲が良かったのに」グルが言った。
「ねえねえ、グル、聞いてよ。トライったら、ほんとにヒドいのよ」アンが、被害者ぶった泣き声を出して、グルを自分の味方に付けようとした。
「ヒドいのはあなたの方じゃない！ グル、例の苦情の手紙ってアンが書いてたのよ」私も、負けずに怒鳴ってやった。
「全く、何があったんですか！ きちんと最初っから説明して下さいよ」
　さすがは冷静沈着なグルは、すぐにはどちらの味方もせず、そう私たちに指示したのだった。
　だから、私とアンは、それぞれに、今までの事情を懸命にグルへと訴えた。お互いに、自分に都合のいいような形でしか説明しなかったので、グルも正確な全体像を把握するには手間取っていたみたいなのだが、それでも、解決案をひらめいたのか、こう言ってくれたのだった。
「あなたたちは、もっと、相手の気持ちで考えてみた方がいいのかもしれませんね。どうでしょう？ ちょっと催眠術を試してみませんか。トライさんがアンさんに、アンさんがトライさんになってみて、双方の気持ちを味わってみるんです。そしたら、相手の辛かった思いがもっと分かりあえるんじゃないのでしょうか」
「でも、催眠術って？ グル、かけられるの？」アンが言った。
「僕は催眠術のやり方を少し知ってるだけに過ぎません。だから、この薬も使わせてもらいます。これを飲めば、うまく催眠術にかかるはずです」
　そう言って、グルは、紙に包まれた粉薬を二袋、取り出したのだった。
「大丈夫なの、その薬？」と、私。
「ただの睡眠誘発剤です。心配はありませんよ」グルは、全く悪意を感じさせない、優しい笑みを浮かべていたのだった。
　だから、並んで椅子に腰掛けていた私たちは、彼の言うままに、その粉末を飲んでみた。
　すると、たちまち、頭がぼんやりしてきて、私は深い眠りへと落ちていったのだった。

ーーーーーーーーーーーーーー

「あれ、あれあれ」と、目覚めたあたしは、すぐにトボケた声を出してしまった。
　横を見ると、トライが、あたしと並んで、椅子に座っている。彼女も、なんだか呆気にとられた表情をしていた。
　そうなのだ。あたしは、トライではなく、アンである。どうやら、グルの催眠術で、

すっかり自分がトライだと思い込んでいたようなのだ。
　しかし、おかげで、あたしの悪意の嫌がらせのせいで、トライがどんなに不愉快な思いをしていたのかが、身に染みて分かったのだった。
　トライの方も、何だか、ひどくしょげていた。どうも、彼女もまた、あたしの立場になってみて、いかにあたしが悔しかったかを理解してくれたようなのだった。
「ごめんね、トライ」と、あたしは素直にトライに謝った。
「私の方こそ、ごめんなさい。あなたの気持ち、分かってあげなくて」トライが言った。
「学歴自慢ばかりして、私って、すごい嫌な女だったでしょう？ これからは、自重するわね」
　あたしたち二人が仲直りしたのを見て、目の前ではグルがにっこりと微笑んでいた。
「ここまでうまくいくとは思いませんでしたよ。本当に良かったです。僕、ちょっとお手洗いに行ってきますね」
　ご機嫌で、グルは出て行ってしまったのだった。
「ねえ、トライ。グルの催眠術、本当にスゴかったわよね。もしかすると、世界一の催眠術パフォーマーの催眠術ラリーよりも上かもしれないわ。グルってさ、ほんと、何でもできちゃうんだから。尊敬しちゃう！」あたしは、催眠術の実体験の興奮がまだ醒めやまず、そうトライに話しかけた。
　でも、トライは何だか神妙な表情をしていたのだった。
「どうしたの、トライ？」
「私、ほんとは催眠術は経験者なのよ。さっきのグルの催眠術は、前にかけてもらった催眠術とはだいぶ感覚が違ったわ。普通の催眠術だったとは思えない」
「何が言いたいの？」
「あのね、実は最近、こんな科学記事を読んだのよ。日米の共同開発で、記憶を他人に移す実験に成功したんですって。それには、ある種の飲み薬を使うらしいんだけど、その薬の成分はまだトップシークレットのはずなのよ」
「まさか、さっき飲んだ薬がそれだったとでも？ 確かに、さっきの催眠術は記憶を交換したみたいな鮮明さだったけどさ。でも、それなら、グルはどうやって、その薬を手に入れたと言うのよ」
　あたしとトライは、不思議そうに、お互いの顔を見合ったのだった。

了

（ 2016 年 4 月作品 ）

「人喰い料理大作戦」

「うわあー、おいしそう！」
　アンが写してきた写真を見ながら、私は思わずそう口にした。
　私の名はトライ。この出版社一の売れっ子ルポライターだ。
　そして、相棒の名はアン。腕利きの女流カメラマンである。私たち若手キャリアウーマンコンビに、さらに普段なら助手のグル青年を加えて、社でも最高の取材チームとして通っているのだが、あいにく今回の仕事にはグルは混じってはいなかった。
　なんでも、大事な用事ができたとか言って、グルは一月ほど前から休みを取っていたのである。グルは、その素性に謎が多い青年で、いつ会社に復帰してくれるのかも、よく分かっていなかった。ほんとは、グルはとても頼れる助手で、彼が居てくれたら、どんな取材でも安心して受ける事ができて、何より運転手のグルが居ないと、場所の移動にほとほと苦労したのだが、今は彼は不在なのだから、不平を言う訳にもいかないのだった。
　そもそも、今回の取材内容は、最新のグルメ料理なのだ。アマゾンから帰ってきたばかりの一流シェフのマスター・モーロックが、アマゾン仕込みのアレンジ料理を紹介してくれると言うので、我が社の雑誌「ダ・ガッキ」では、一ヶ月に渡る連載特集を組んだのである。そのような仕事内容だったので、考えようによっては、グル抜きの私たち二人だけでも、十分に良い記事は書けそうなのであった。
　で、私とアンは、毎週、マスター・モーロックの屋敷に訪れて、彼の作るオリジナル料理を取材させてもらっていたのだが、連載の方もいよいよ佳境に入っていた。今週は、私も他の仕事が忙しくて、マスター・モーロックへの取材は、アン一人にお願いしていた。
　アンは、写真を写すしか取り柄のない本当に専門のカメラマンだったが、それでも今回の取材はばっちりと大任をこなしてくれていたのだった。自宅の方でマスター・モーロックが作ってくれたオリジナル料理をしっかりとカメラにおさめ、モーロックからレシピも受け取ってきてくれたのである。
　普段の取材なら、私とアンの二人でモーロック邸にお邪魔して、取材後は、料理の方もたんと試食させてもらっていたのだが、今回は私はご相伴させてもらえなかった。アンの方は、この取材では、この試食タイムをすっかり楽しみにしていたようでもある。
「残念ね、トライ。今回の料理もとっても美味しかったのよ」声を弾ませながら、アンは言った。
「そのようね」と、私。「でも、アン、助かったわ。一人でも、これだけの取材をこなしてくれて」
「どういたしまして」アンがほほえんだ。
「一つ困ったのは、私は、この料理を食べてないから、食レポが書けない点よね。アン、食べた感想を教えてもらってもいいかしら。それを聞いて、私の方で適当に脚色してみるから」

「かまわないけど。なんなら、あたしの方で、この料理、作ってあげようか。マスター・モーロックが作った名人の味までは再現できないかもしれないけど」
「あら、アン。料理なんて作れたの？」
「えへへ。ちょっとだけね。今回の連載の料理があんまり美味しかったものだから、レシピを見ながら、自分の家でも作って、よく食べているのよ」アンが無邪気に首を傾けた。
　カメラ以外にも、彼女に、こんな特技があったとは意外であった。
「トライは、自分ちで作ったりしてなかったの？」と、アンが私に訊ねてきた。
「私はさ、仕事が忙しくて、ちょっとね」私は口ごもって、ごまかした。
　実は、私は料理はからっきし苦手なのである。
「来週は、一緒にマスター・モーロックのところに食べにいこうね」アンが言った。どうも、彼女は、目的がすっかり料理の試食になってしまっているようである。
「そうね。次回で、連載の取材も最終回だから、私も時間を作って、きちんとマスター・モーロックにも挨拶しにいくわ」
「良かった。楽しみね」そう言って、ワクワクしているアンは、私の手を強く握ったのだった。

　そして、一週間後、私とアンの二人は、予定どおりに、マスター・モーロックの屋敷へと訪れていた。
　一流シェフとして、一代で財を築き上げたマスター・モーロックは、郊外になかなかの豪邸を建てて、一人で暮らしている。私たちは、いつも、そこへ取材に通っていたのだ。
　その日も、取材を済ませ、彼の特製料理をたっぷり堪能させてもらった私たちは、最後に、彼の屋敷の応接間でくつろがせてもらっていた。
　満足げだった私とアンの様子を見て、マスター・モーロックの方も大変ご機嫌そうであった。やはり、料理人としては、お客が満腹で幸せそうにしている姿を見るのが一番嬉しいのであろう。
「マスター・モーロック。一ヶ月、本当にありがとうございました。今回も、とても良い記事が書けそうですわ」私はハキハキとモーロックに礼を述べた。
「ほんと、今日の料理は特に美味しかったわ」と、アンも満面の笑みで言った。彼女は、仕事である事を忘れて、マジで試食に夢中になってしまっているようだ。
「あなた方に、そこまで気に入っていただけて、私の方もとても光栄だよ」と、モーロックが言葉を返してくれた。
　マスター・モーロックは、赤毛で、がっしりした体格をした初老の男性である。長いあご髭を生やしたりしていて、初対面だと、ちょっと怖い印象も受けた。私も、彼とはじめた会った時は、童話の青ヒゲって、こんな感じの人なのかなぁ、なんて思ったものだ。しかし、実際に親しくしてみると、いかにも料理人らしい細かい事にも目が行き届く、優しい紳士なのであった。
「ところで、私が今回提供したアレンジ料理の数々、評判の方はどうですかな」モーロックが訊ねてきた。
「そりゃあもう、大評判ですよ。第一回の連載の時から、賞賛の手紙がどっさり編集部の方へ届いています」私は答えた。

「読者の奥様方は、私の料理を参考にして、自分も作ってくれるかな」
「もちろんですとも！ 我が社の『ダ・ガッキ』は、何たって業界売上げナンバーワンの雑誌ですからね！ 皆がレシピどおりに作って、味わってくれるわ。今年の一大ブームになること間違いなしよ。あたしだって、ディナーで作らせてもらっているぐらいなんだから」アンが、横から口を挟んできた。彼女は、とにかくモーロックの料理の事を褒めたくて仕方なかったらしい。
「そうか、そうか」と、モーロックは大変にほくほくとした表情をしていた。
　しかし、その時、私はちょっとヘンな事に気が付いたのだった。
　今回、彼が紹介してくれたオリジナル料理の数々は、どれもアマゾン料理をアレンジしたものだったのではなかったのだろうか。だが、その割には、レシピの中身を見ると、アマゾンっぽい食材はまるで使われておらず、それこそアンでも簡単に作れそうなものばかりなのだ。これは、果たして、どうしてなのだろうか。
　私がそんな疑問を抱いた時は、実はもう手遅れだったみたいなのだった。
「あなた方のご協力に感謝するよ」モーロックが、鋭い口調で言った。「これで私も美味しい食事ができそうな訳だ」
「あの、今までも十分に美味しかったですよ」モーロックの奇妙な発言に対して、アンもトンチンカンな答えを返した。
「まずは、あなた方をいだただく事にしようか」
　モーロックがそう言って、私たちを睨みつけた時には、もう間に合わなかった。
　私とアンは、いきなり体が動かなくなってしまったのである。モーロックの目力のなせるワザであろうか。いわゆる、蛇ににらまれた蛙と言うヤツだ。あるいは、先ほど食べた料理に何か薬が混ぜられていた可能性も考えられるのだが、そのへんの真相はよく分かってはいない。
　とにかく、私とアンは体全体が固まったみたいに、完全に動かせなくなってしまったのだ。
「マスター・モーロック。これは一体、どういう事ですか」
　私は、ヤバい状態に置かれている事にいち早く勘づき、モーロックを刺激しないように、落ち着いた声でそう聞いた。
「何も怖がる事はないんだよ。すぐに終わるから」
　モーロックは楽しそうな口調で言うのだが、明らかに危険な状況なのであった。これでは、まるで本当に青ヒゲに捕まった新妻さながらである。
　そして、私とアンのそばにまで歩み寄ってきたモーロックは、顔を近づけ、静かに私たちのにおいを嗅いだのだった。
「うむ。こちらのお嬢さんの方が美味しい臭いがにじみでてるね」
　モーロックに気に入られたのはアンの方であった。
「やだ！ 美味しい臭いがしてるなんて言われても、嬉しくないよ！」アンが叫んだ。
「ああ、そうか。君は、私の料理を自分でも作って食べていたと言ったね。だから、より成分が体に染み渡っていたのだろう」
　なんだか、私は料理が作れなかったおかげで、助かったみたいなのであった。
「では、いただくとするかな」

　モーロックは自分の口をゆっくりとアンの口元へと近づけていった。
「だめえ！ 毎日、美味しいものを作ってくれても、あたし、あなたなんかと結婚する気はないんだから！」アンが悲鳴をあげた。
　しかし、体が硬直していて、私もアンも動けそうにない。まさに絶体絶命である。
　その時だった。
　突如、応接間の入り口のドアをバンと押し開けて、一人の男がこの部屋の中に飛び込んできた。
　グルである。この絶対のピンチの状況に、絶妙なタイミングでグルが現れてくれたのだ。彼は、いつも、こんな感じで困ったときの私たちを助けてくれるヒーローだったのである。
「そこまでだ！ やっと見つけたぞ」
　グルは、モーロック向けて、そう怒鳴った。そして、素早くモーロックのそばにまで走り寄ると、相手に反撃するスキも与えずに、手にした霧吹きらしきものをスッと吹きかけたのだった。たちまち、モーロックは気を失ったのか、コロンとひっくり返って、床に倒れてしまった。
　それと入れ違いに、私とアンは体の自由がきくようになった。
「わあ、グル、ありがとう！ 怖かったよお」アンが泣き叫んだ。
　そして、私たちは救いの主のグルに、二人で喜び抱きついたのだった。
「まあまあ、二人とも、無事で何よりでした」照れながら、グルが言った。
　全く、彼は、私たちにとっては欠かせない仲間なのである。
「ねえ、グル。モーロックはどうなったの？」
　少し落ち着いてから、私はグルに訊ねてみた。
「心配ありません。ちょっと眠らせただけです。死んじゃいませんよ」と、グルは言った。
「でも、この男ったら、あたしにキスしようとしたのよ。とんでもないスケベ親父だわ！」と、アン。
「キスするつもりだったのではありません。アンさんの事を食べようとしていたんです」
「食べるって、人食い人種？ 料理にはまりすぎて、とうとう人肉料理まで作ろうとしていたの？」私は驚いた。
「違います。モーロック氏には人喰い生物が取りついていて、操られていたんです」
「アマゾンの人喰い生物と言えば、ピラニア！」アンが思いっきりベタな事を口にした。
　グルは、苦笑しながら、手を振ったのだった。
「ピラニアより、もっと恐ろしいものです。ウィルスですよ。アマゾンにある秘密の研究所で、ウィルスに知能を持たせる実験が行なわれていたんです。ところが、そのサンプルのウィルスが研究所の外へ逃げちゃいましてね、一ヶ月ほど前の話で、極秘裏にウィルス探しが行なわれていたのですが、頭のいいウィルスはちゃっかり民間人のモーロック氏の体の中に潜り込み、皆の目を盗んで、この国にまで逃亡していたのです」
「ちょ、ちょっと！ ウィルスって、大丈夫なの？ 感染する心配は無いの？」私は、倒れているモーロックの姿を見ながら、慌てて叫んだ。
「空気感染や接触感染はしないので、それほど問題はないです。このウィルスの感染ルートは唾液感染、つまり口移しだけなので、さっきもアンさんにキスしようとしたのでは

なく、ウィルスを移動させようとしていたのです」
　グルは、何もかもを分かりやすく説明してくれたのだった。
「まだ疑問があるわ。モーロックが作ったオリジナル料理よ。なぜ、ウィルスは、あの料理を皆に食べさせようとしたの？ 流行らせて、国中の人間に食べさせようとしていたようにも見えたわ」私は言った。
「それは、つまり、あの料理ばかりを食べ続けると、その人の体質がウィルス好みのものに変化するからなのです。さすが、知能を持ったウィルスだっただけに、宿主の体質にもグルメなこだわりを持ってたんでしょうね。本当に、危険なところでした。この国の人間全員が、ウィルス大喜びの美味しい料理にされかねないところでした」
　私とアンは、きょとんとして、グルの方を見つめていた。
　その事に気付いたようで、グルもハッと喋るのを止めたのだった。
「あのさ、グル。なぜ、あなたが、そんな事まで知ってるの？」私は尋ねた。
「ははは、やだなあ、お二人とも。すっかり本気にしちゃって！ デタラメですよ、デタラメ。今までの話は全部、ボクが即興で考えた作り話です。知能を持ったウィルスなんて、ありえないじゃないですか。モーロック氏は、やっぱり、ただの変態じじいだったんです。それだけの話ですよ」突如、グルは大声で笑って、そう言い直したのだった。
「なーんだ、やっぱり、そうだったんだ。だと思ったよ」グルの言葉をそっくり信じたらしく、アンも安堵の表情で笑い始めた。
　さっきまでの緊迫感はどうしたのだろう。なんとも、しまらない幕引きになったものである。
　ともあれ、こうして、恐怖の人喰い料理事件も解決したのであった。
「では、モーロック氏は、ボクが連れていきますよ」
　そう言って、グルは、まだ眠っているモーロックを肩にのせて、抱え上げると、私たちより先に、応接間から出ていこうとした。
「待って、グル」と、慌てて私はグルを呼び止めた。
　立ち止まったグルは、私の方に振り返った。
「ねえ、本当の事を教えて。やっぱり、さっきの話の方が事実だったんでしょう？ グル、あなたは何者なの？」私はグルに真剣な表情で訊ねてみた。
　その時のグルは、妖しい笑みを浮かべてみせただけで、私の質問には何も答えてくれず、さっと外へ出て行ってしまったのだった。

了

（2016年5月作品）

＜改装版での補足＞
最近、知ったのですが、生物学の分類では、ウイルスは生き物とは見なされていないらしいです。本作では、初稿の内容を尊重し、そのまま、ウィルスも生物として扱わせていただいております。

「サイクロプス大作戦」

「次号の『ダ・ガッキ』では、サイクロプスの特集を組んでみようと思うんだよ。ついては、君のチームに、その取材と執筆を任せたいと考えているのだが」

シン・バル編集長に会議室へ呼び出されて、いきなり、そんな話を持ちかけられたものだから、私たちは、すっかり戸惑ってしまったのだった。

私は、本社一の売れっ子の女ルポライターのトライ。そして、一緒にいたのは、私の良き相棒である女流カメラマンのアンと、私たちの雑用を担当してくれている助手のグル青年だ。私たちのチームは、雑誌「ダ・ガッキ」でも、特に腕利きの取材チームだったのである。

この編集長の提案には、私だけではなく、アンもグルも、躊躇した表情を浮かべていた。しかし、編集長の鶴の一声である以上は、私たちは、一も二もなく、引き受けるしかなかったのだった。

こうして、私たちは、編集長が出て行った後も、そのまま、会議室にと残り、三人で作戦会議を続ける事となったのである。

「さあ。二人とも、どうする？ まさか、あのカタブツの編集長が、サイクロプスなんてものを本気で取り上げる気になったとはね」私は言った。

「そうね。最先端の話題と言えば、話題なのかもしれないけど」と、アン。

「僕は気乗りしないですね。はやっているとは言っても、しょせん、噂に過ぎないのだし」グルも、そんな風に消極的なのであった。

そうなのだ。サイクロプスと言うのは、最近、やたらと耳にする都市伝説の事だったのである。

それが、どこまで事実だったのかは分からない。しかし、その都市伝説によると、この大都会の中には、人食い種族が潜んでいる、と言うのであった。そして、その人食い種族の俗称がサイクロプスだったのだ。ほんとに、たわいもないデタラメみたいな感じもするのだが、なぜか、この話が世間では大流行してしまい、今や、子供も大人も、顔を合わすと、サイクロプスの噂を交わしているような有様なのであった。

時代を映す最前線の雑誌としても、これほどのブームを、ただのホラ話として放っておく事も出来なくなってきた、と言う事なのであろう。

「そもそも、サイクロプスって、見事なまでの未確認情報なのよね。サイクロプスの被害の話はたくさん聞くけど、その実際の犠牲者や目撃者の名前は、どこからも報告されていないわ。サイクロプスの設定からして、情報源によってマチマチな訳だし」私は言った。

「あたしは、こんな話を聞いた事があるわ。夜の街で、かっこいい男や女にナンパされるんだって。で、まんまと引っかかって、ついていったら、そいつの真の姿がサイクロプスで、イチャついている最中に喰われちゃうんだって」アンが、どこか面白がるような

口調で、そう語った。この子ときたら、信じていないみたいで、実は、このテの噂話は大好きだったのかもしれない。
「私は、サイクロプスの正体は、宇宙人か異次元の生物だと聞かされたわ。それは霧状の物体で、突然現われたかと思うと、いきなり、犠牲者の体を包み込むのよ。そして、あっという間に、犠牲者の体は消化されてしまって、あとには、犠牲者の服しか残らないと言うのよ」私も、自分が耳にしたサイクロプスの話を披露した。
「僕が知っている話だと、サイクロプスと言うのは、会員制の秘密クラブの事でしたよ。そのクラブの実体が、人肉愛好者の集まりなんです。お金で買った食材、つまり、犠牲となる人間をね、自分たちのクラブの会場へと連れ込んで、皆でその犠牲者の肉や内蔵を食べちゃうらしいです。まあ、いかにも、人を怖がらせる為の作り話っぽいですけどね」グルも、そのようなエピソードを語ったのだった。
　と、サイクロプスについては、こんな感じで、いろいろな話が出回っていたのである。まるで一致しない内容が、こうやって同時に存在している時点で、確かにウソっぽいのだ。
「どうせ、核心に踏み込めるとは思えないけど、編集長に一任されたからには、それなりに聞き取りとかもやりましょう。分かったわね、アン、グル。大丈夫よ。最後は、私がうまく記事にまとめてみせるから」
　私が、そのように二人を先導して、いよいよ、私たちのサイクロプス取材は始まったのだった。
　もっとも、サイクロプスの都市伝説には、明確な被害者や関係者が見当たらない訳だから、当事者に話を伺うような事もできない。結局は、街角で一般人にインタビューして、アンケートを取ったり、あるいは、せいぜい、サイクロプスを見た事があると言いふらす人を探し出して、その人物から曖昧な目撃談を聞き出すぐらいの事しかできなかったのだった。大体、その目撃談だって、どうせ、見間違いかデマカセなのだろうと思われたのである。
　それでも、なんとか、ある程度のデータっぽいものは溜まったので、私は、いよいよ、その内容を文面にと直す作業に取り掛かったのであった。
　それにしても、なぜ、こんなサイクロプスなんてものが都市伝説として流行ったりしたのであろうか。そこには、きっと、「人喰い」と言う行為に抱く、大衆の恐怖の心理も働いていたのかもしれない。
　ただし、実際に存在する食人行為と言うのは、およその場合は、食べられる人物へ対する敬意が含まれているものなのだ。未開民族における人食い儀式がそうだし、異常犯罪者が被害者の肉を食べてしまうケースでも、たいがいの加害者は、その被害者のことが好きだからこそ、つい、その体に食いついてしまうのである。
　なのに、サイクロプスの物語については、その構図が当てはまっていない。いずれの噂話に出てくるサイクロプスも、人間のことを、明らかに、食糧として貪っているのだった。つまり、サイクロプスとは、地球上の食物連鎖において、一方的に食べる側となってしまった人間が、ふと心に抱いた「喰われる側になる不安」が具体化したものだったのかもしれないのであった。まさに、食物連鎖の頂点であるからこそ、その心のゆとりから生まれた恐怖だったのかもしれない。

　さて、深夜までかけて、私が、そんな大筋の記事を書き上げかけた時、私のもとに電話がかかってきたのだった。電話の主は、アンであった。
「どうしたのよ、アン。こんな遅い時間に」私は電話に話しかけた。
「それが、困っちゃったのよ」と、電話の向こうのアンの声は、とても弱っている様子なのだった。
「何があったの？」
「サイクロプスの事を街でインタビューした時に、仲良くなったハイスクール女子がいたでしょう。ほら、アンって女の子。彼女から、ついさっき、電話がかかってきたのよ」
　言われてみれば、そのような子にも話を伺っていたのである。ごく普通のハイティーンの娘だった。でも、同じアンという名前だったからか、アンとは、えらく意気投合していたようなのだった。どうやら、この二人のアンは、あの後、電話番号も教えあう仲になっていたらしい。
「で、どんな内容の電話が来たの？」
「助けを求める電話よ。ただ一言、『サイクロプスに捕まっちゃう！』って。それだけ言うと、電話は切れちゃったの。かけ直しても、不通のままで、もう出てくれないのよ」
「イタズラ電話だとすれば、かなり迷惑よね」
「イタズラや間違いじゃなかったとしたら？ ほっといても、大丈夫かな？」アンは、やけに深刻そうに訴えるのであった。
　私も、ちょっと考え込んでしまった。きっと、大げさな事ではないような気もするのだが、万が一、スクープにつながるような電話だったとすれば、ここで無視したら、あとで絶対に後悔するのである。
「分かったわ。その子の事を探しましょう」
　私は、アンにそう告げて、二人はすぐに合流したのだった。合流場所は、うちの雑誌社のビルの前だ。そこが、二人の住居からは、どちらからも一番近かったのである。
　じかに会ってみたアンも、どうしていいか分からず、まだ困っていた様子だった。こんな時、彼女は、いつも、同僚の私に頼りきってしまうのである。まあ、可愛いと言えば、可愛い奴ではあるのだが。
　さて、もっと詳しい話を聞いてみると、あれから、アンは、この事をまだ誰にも話していなかったらしかった。第一、彼女は、女学生のアンについては、電話番号しか知らなかったようなのだ。その子の住居とかも教えてもらっていなかったらしいので、安否を確認しに、彼女の家へ会いに行く事もできなかった。当然ながら、こんなアヤフヤな段階では、警察に通報する訳にもいかないのである。
「とりあえず、私たちだけで、その子の事を探してみましょう。きっと、サイクロプス絡みの何かがあったからこそ、彼女は、あえて、あなたに相談してきたのよ。サイクロプスの話を本気で信じてくれそうな人間は、雑誌取材をしていた私たちぐらいなものだった訳だし」私は言った。
「あの子ってさ、やたらと怖い噂話が好きで、自分でサイクロプスを見つけようとしていたのよ。きっと、それらしきものを発見したんだわ。それで、あたしに真っ先に教えてくれたのよ」と、アン。
「彼女、なんとなく、手がかりになりそうな事も話していたかしら？」

「あの子、お化けビルがサイクロプスの巣窟じゃないかって疑っていたわ。で、時々、お化けビルを見張ったりもしていたんですって」
「じゃあ、まず、お化けビルに行ってみましょうか」
　お化けビルとは、この区域にあった廃ビルの事である。すでに長い事、誰も住まない状態で放置されていたので、今ではすっかり幽霊屋敷扱いされて、お化けビルなどと呼ばれていたのだ。そして、若い学生たちにしてみれば、絶好の心霊スポットとなっていたのだった。
　私とアンは、迷わず、このお化けビルへと向かったのである。ほんとは、こんな時こそ、男のグルもいてくれたら、何倍も心強かったのかもしれないが、しかし、この時は、連絡してみても、なかなかグルには繋がらなかった。やむなく、彼なしで、私たち二人で行動したのである。
　すぐに、私たちは、お化けビルの前へと到着した。とにかく、何が起きるか分からないので、敏速に動くべきなのだ。まだまだ真夜中であった。街の中もひっそりと静まり返った状態で、私たちは、お化けビルへやって来たのである。これでは、それこそ、冷やかしで心霊現象を見に来た若者と変わらないのだ。
「あら。玄関の鍵が開いているわ」と、私は気がついた。
　よく見ると、お化けビルの正面玄関のドアは、なぜか、鍵がかかっていなかったのだった。廃ビルなら、きちんと閉鎖されていそうなものなのに。
「じゃあ、あの子も、鍵が開いているのを見つけて、うっかり、中に入っちゃったのかな」と、アン。
「そうかもね」
「だったら、あの子、ここに居るのでは？」
　何だか、私たちの勘は見事に当たっていたようにも思えてきた。
　そんな訳で、私たちも、つい大胆になって、開放されていたお化けビルの中へ乗り込んでしまったのだった。
　建物の中は真っ暗であった。明かりは持ってきてはいたが、不法侵入したのがバレたくないので、ここぞと言う時まで付けないようにしていた。私たちは、ぐんぐん、空き家だったビルの奥の方へと進んでいった。
「静かね。ほんとに、あの子、居るのかな」心配そうに、アンが小声でささやいた。
　その時であった。私たちは、暗闇の中、いきなり、人の気配を感じたのである。
　私もアンも、ゾクッとして、立ち止まった。
「お前ら、なに、こんな所に入ってきてるんだ」ドスのきいた男の声が聞こえてきた。
　同時に、私たちは、何者かに体を押さえ付けられたのである。ここには、すでに先客が潜んでいたのだ。
「サイクロプス！ サイクロプスが、現実にいたんだわ」アンが泣きそうな声でわめいた。
　それを耳にして、私たちを捕まえた連中は、いやらしく笑っていたのだった。
「俺たちがサイクロプスだとよ」
「まあ、考えようによっては、そうかもしれないな」
「俺たちを見つけた以上は、こいつらも逃さない方がいいぞ」
「こいつらの始末も、上部に決めてもらえばいいさ」

彼らは、数人以上いたらしく、そんな事を話し合っていた。
暗くて、連中の姿は影にしか見えなかったが、どうやら、マトモな奴らではなさそうなのだ。アンは、すっかり、彼らをサイクロプスだと信じ込んでしまったらしく、怯えて、混乱していたようだった。私は、そこまで愚かではなかったものの、相手が危険なのは間違いなさそうだったので、どう対応したらいいかに迷って、やはり、身動きできないでいたのだった。
その矢先である。パアーッと、ビルの外から、眩しい光が入ってきた。誰かが、道路の方から、この部屋の中を照らしたのである。
「やばい！ 手入れだ！」と、私たちをトリコにした男の一人が叫んだ。
彼らの姿が、外からのライトに照らされて、はっきりと見えた。灰色のスーツを着た、野暮ったい感じの中年男の一団なのである。悪人っぽい風采だったが、少なくとも、未知の怪人とかではなかった。ピストルやナイフなども構えていないようなのである。
そうと分かれば、私たちだって、必要以上に怖がる事もないのだ。私もアンも、すぐさま、激しく暴れ騒いで、抵抗したのだった。ただでさえ、外からのライトで動揺していた相手の男たちは、私たちの反撃も食らって、ますます、慌てたみたいなのであった。
間もなく、ビルの外から、ドタドタと足音を立てて、何人もの人間が、この部屋へと入ってきた。警官隊である。
「動くな！ 私たちは警察だ。このビルは包囲している。逃げられはしない。誘拐容疑で、お前たちを逮捕する！」警官たちのリーダーが、私たちと男どもの姿を見ながら、怒鳴った。
かくて、私たちは、警察の手によって保護され、謎の悪漢たちも全員捕まって、私たちの廃ビルでの冒険は、大ごとにもならず、無事に幕を下ろしたのであった。
ところが。
「あれ、トライさん、アンさん。なんで、お二人が、こんな場所にいるんですか？」
警官にと匿われて、お化けビルの前で、まだ佇んでいた私たちは、そんな聞き覚えのある声を耳にしたのだった。
ハッとした私とアンは、声の方に顔を向けた。
そこには、なぜだか、グルが、キョトンとした表情で立っていたのであった。

「全く、二人とも、無鉄砲なんだから。ヘタしたら、殺されているところでしたよ」
私たちから事情を聞いたグルは、呆れ顔で、苦笑したのだった。
「でも、そう言うあなたこそ、なんで、警察と一緒にいたのよ」
私が言い返してやると、グルの方も、弱ったように、ごまかし笑いを浮かべたのであった。
私とアンは、グルから、この廃ビルで何があったのかを、事細かく教えてもらった。彼の話によると、あの怪しい男たちは、密売組織の実行部隊だったのだと言う。密売といっても、モノを売買していたのではない。彼らが商品にしていたのは、人間の体だったのだ。つまり、移植用の不正な臓器を取り扱う闇ブローカーだったのである。
彼らは、誘拐したり、あるいは、借金のカタとして、人間一人の体を丸ごと手に入れていた。そして、状況に応じて、あの廃ビルに、その商品を閉じ込めて、隠していたの

だ。幸い、あのビルは、お化けビルと呼ばれて、一般人は近づかなかったので、隠し場所としては最適だったのである。

しかし、今夜は、あのビルに出入りしているところを、運悪く、女学生のアンに見られてしまった。彼女は、それをサイクロプスと勘違いして、急いで、私の相棒のアンへと電話してくれたのだ。その直後に、女学生アンは、密売者たちに捕まってしまったのである。彼女も、お化けビルの地下室に放り込まれて、危うく、販売用の臓器の一人にされるところであった。そんな時に、私たちも、あのビルへと駆けつけたのだ。

あとは、すでに記した通りである。私たちも、あの悪党どもに捕まりかけたが、ちょうどのタイミングで、警察が駆けつけてくれた。警察では、以前から、お化けビルには目をつけていて、ほんとに偶然ながら、今夜、ここを奇襲する計画だったのである。こうして、密売人たちは一網打尽となった。私たちも、間一髪で救われたし、すでに捕まっていた女学生のアンも、無事に救出されたとの話なのであった。

それにしても、グルのやつは、どうして、警察のこんな捜査にと、しれっと同行していたのだろうか。相変わらず、謎の多い人物なのである。ほんと、一体、グルとは何者なのであろうか？

もっとも、グルと知り合いだったおかげで、私とアンは、こんな場所で保護されたものの、余計な疑いはかけられないで済んだのだった。本来なら、事情聴取で署まで連れて行かれそうなところだが、略式の職質で終わらせてもらえたのである。私たちがマスコミの人間だったから、なおさら、警察としては、深く関わらせたくないとも思ったのかもしれない。とにかく、私とアンは、ひとまず、この場から解放させてもらったのである。

「もう真夜中ですし、僕が、二人のことを、自宅まで送ってあげますよ」グルは言った。

どうやら、捕り物劇も終わった事だし、グルも、いったん、この場を離れても良かったらしい。私たちは、ありがたく、グルの好意に甘える事にしたのだった。

と、グルが急に無口になって、やや遠くの方角を睨んだ。

そちらの場所では、まだ現場検証が続けられており、警官がたむろしていたのだが、そのそばに黒い高級車が停車していて、その中に乗っていた人物が、何やら、職務中の警官に絡んでいたようなのだった。

「なんなの、あれ？」と、私は言った。

「さっそく、お出ましか」顔をしかめて、グルが呟いた。「まだ極秘の情報だから、ここだけの話にしておいて下さいね。あの車の主は、フランク・N・ガイラ氏だ。臓器ブローカー組織の黒幕とおぼしき人物です」

「え！ なんですって」

「ガイラ氏は、表向きは、普通の実業家だが、裏では、臓器の密売組織の総元締め兼スポンサーみたいなんです。この地区の実行部隊が捕まったのを嗅ぎ付けたので、わざと通りがかったように装って、探りを入れにきたらしい」

「なんで、そんな悪い奴が、堂々と横行しているの？」

「警察側としても、まだ、十分な証拠固めが出来ていないんです。相手も、なかなか尻尾を出さないもんですからね。それをいい事に、あいつの方も、こんな大胆に、こっちの様子を探りに来たりしているんです。無関係の人間のフリをしてね。いやはや、舐められたもんですよ」

「でも、今回、こうやって実行犯が捕まったのなら、芋づる式に、あいつの正体もバレないかしら？」
「ダメダメ。今の犯罪者たちの手口は、巧妙ですからね。捕まった実行犯たちは、使い捨ての下っぱだから、組織のボスや幹部の素性までは知らされていません。彼らが居なくなったところで、ガイラ氏としては、あらたな実行犯を雇えばいいだけの話で、臓器密売の方も決して無くなりはしないでしょう」
「なんか、不愉快な話ね。人の体を売り物にして、その血肉で金儲けをしているだなんて、この人たちの方が、ずっと人喰い人種だわ」アンも、そんな事を口にしたのだった。
　この後、私とアンは、グルの車に乗せてもらい、帰路についたのである。
　暗い夜道を、グルの運転する乗用車は走り続けていた。グルは運転に専念している。私もアンも、後部座席に座り込んで、グッタリとしていた。誰も何も喋らなかった。今夜の出来事は、まだまだ、三人にとって、考えに耽りたい事が多かったのである。
　私も、書きかけのサイクロプスの記事に、もう少し、手を加えた方が良かろうと思案していた。この国では、年間 80 万人以上の人間が行方不明になっているのだ。異常な人数だとも言える。彼らの多くは、自主的に蒸発したり、今回の女学生アンのように、事件に巻き込まれて、姿をくらましてしまったケースなのであろう。しかし、多くの場合は、行方不明者は、理由も分からないまま、結局は当人も発見されず仕舞いなのだった。あるいは、そうしたハッキリしない事への漠然とした不安こそが、サイクロプスなんて都市伝説を発生させた真の原因だったのかもしれない訳である。私は、車の柔らかい座席の上でリラックスしながら、ずっと、そんな事を思い耽っていたのだった。
　そんな時。ほとんど人通りのない道で、突然、グルが車を急停止させた。
「どうしたの？」
「車のクラクションが聞こえませんか？ 何があったんだろう。ちょっと行ってみましょうか」と、慎重な表情のグルが言うのであった。
　グルは、車を方向転換させた。この時点では、私やアンには、クラクションなんて聞こえていなかったのだが、グルが車を走らせるほど、じょじょに、それらしき音が聞き取れてきたのだった。グルったら、なんて、耳がいいのだろう。やはり、彼は、どこか特殊なのだ。
　グルの車は、どんどん、人気のない場所へと向かっていた。ついには、ずっと町の外れにまで到着した時、そこで、人の目から隠れるようにして停まっていた高級車を発見したのだった。忘れもしない。その車は、あのガイラが乗っていた黒い乗用車なのである。クラクションを鳴らしていたのも、この車だ。
「あ！」と、思わず、私たちは声をあげた。
　と言うのも、一瞬だが、この車のそばから、奇妙な発光体が飛び去っていくのを目撃したからである。まるで、人魂のような火の玉だった。それが、空へと上昇していき、すぐに消えてしまったのだ。
「何が起きたのかしら？」
「行ってみよう！」
　私たちは、自分の車から降りて、急いで、ガイラの車の元へと向かった。
　車の中を覗くと、そこでは、二人の男が倒れていた。後部座席に乗っていた、身なり

のいい中年男が、例のガイラなる人物だったらしい。そして、もう一人である運転手は、ハンドルの上に覆い被さるように倒れており、それで、クラクションが鳴り続けていたのである。

私たち女性二人がうろたえていたのに対して、グルは実行力があった。彼は、すぐに、高級車のドアを押し開けて、中で倒れていた二人の体を揺り動かしたのである。

「死んでいるの？」と、私は聞いた。

「いや。生きているようです。でも、眠り込んでいて、まるで起きそうにない。薬を嗅がされた気配もないし、一体、どうなってるんだろう」グルは言った。

「あたし、誰か人を呼んでくるわ」アンは、機敏に走り出して、街の方へと去ってしまった。

私とグルは、煙に巻かれたような気持ちで、この場にとどまり続けたのである。

「さっきの発光体が原因かしら？」私は口にした。

「どうでしょうね」

「この二人の魂が昇天したのかとも思ったけど、生きているのなら、違うわよね」

「魂？ 人の心？ あ、そうか！ もしかすると！」ハッとしたように、グルが叫んだ。

「何か、分かったの？」

「あの光球こそ、本物のサイクロプスだったのかもしれない。サイクロプスは、決して、ただの都市伝説じゃなかったんです！」

「何ですって」

「僕たちは、ずっと勘違いしていた。人喰いと言っても、必ずしも、肉体を食べるとは限らなかった。実際のサイクロプスは、人間の心を食べる存在だったんです。そして、このガイラ氏こそ、その犠牲者なんだ」

「まさか。でも、仮にそうだとしたら、なぜ、この人たちが捕食ターゲットとして選ばれたの？」

「僕たち人間だって、少しでも、美味しい肉を食べたいと考えるじゃないですか。家畜にストレスを与えず、質のいい飼料を食べさせるほど、その肉も高級品に仕上がるものなんです。人間の心だって同じですよ。ガイラ氏のように、悪事で金儲けをして、裕福な生活をしている人間の心の方が、サイクロプスにとってはご馳走だったんです」

私は、呆然として、グルの主張を聞いていた。

「人間社会が、いつまでたっても、貧富の差がなくならない事に、僕はずっと疑問を抱いていたんです。貧富が無くならないどころか、近代化が進むほど、もっと格差が開いていく始末だ。でも、それもそのはずだったんです。この地球という星は、実は、サイクロプスの牧場だったのでしょう。美味しい心が出来るように、一部の人間ばかりが裕福になって、幸福を味わえるように、裏で、サイクロプスがずっと操作していたんです。そして、いよいよ、奴らの収穫の時が来たのかもしれない。これから先は、このガイラ氏みたいに、豊かに肥え太った心を狩られてしまう富裕層の人間が、あちこちから報告される事となるかもしれませんね」

グルは、青ざめた表情で、心配そうに、そのように告げたのであった。

了

（ 2023 年 3 月作品 ）

解説

トライアングル・シリーズの第１話となる「ガラスの靴大作戦」は、ブックショートへの出品用に執筆したものです。

もともと、連作ものとして書いた訳ではなかったのですが、単品「ガラスの靴大作戦」の方が、アイディアに合わせてストーリーをまとめてゆくうち、どうもシリーズものの一本っぽいムードになってしまいました。タイトルもよくよく考えた末、「ガラスの靴大作戦」にしたのですが、このタイトルにしても、いかにもシリーズものの１エピソード風です。

そんな訳で、逆にひらきなおって、トライアングル・シリーズにしてしまった次第です。このシリーズは、昔の外国アニメのノリで書いておりまして、文章も何となく外国の小説を邦訳したような雰囲気を持たせています。

その後、共幻文庫のコンテスト向けに「苦情の手紙大作戦」や「人喰い料理大作戦」などを書いたのですが、そのあとの新作がなかなか決まりません。結果として、ボツネタばかりが増えていく状態です。そもそも、連作が前提のご都合主義な部分が多い為、いざアイディアを練っても、コンテストに受かりそうな秀作になりそうにないのですね。最初からそう分かってしまうと、書く方もやる気が出ない訳です。

そんなんで、このシリーズは完全に新作作りの方が滞っていますが、いずれ、すごい最新作を披露する日も来るかもしれません。

アケチ探偵とニジュウ面相の冒険

ラインナップ

「お題に生きる男」
「笑いを盗む男」
「AI に負けるな」
「ニジュウ面相の別荘」
「ニジュウ面相は誰だ?」（「ハイスクール全裸」より ）
「ニジュウ面相クロニクル」（ https://ncode.syosetu.com/n6147gr/ ）
（「不思議を探す男」「裏野ハイツ奇譚」
　「遊園地の怪人」「ニジュウ面相 対 赤ずきん」）
「無敵探偵活劇　アケチ大戦争」（ 執筆中 ）
「ランポ先生の休日」
解説

「笑いを盗む男」

今、舞台の上では白熱した状態が続いていた。何しろ、私たち全員が待ち望んでいたお笑い日本一を決めるコンテストが行なわれていた最中だったのだ。何百人もの観客に見守られる中、最終ノミネートされたトップクラスの芸人たちが次々に持ちネタを披露していた。コントあり、漫才あり、モノマネありと、芸風もさまざまである。しかも、誰もがテレビで引っ張りだこの有名芸人ばかりなのだ。

舞台上も観客側も一丸となって盛り上がるのが当たり前だった。そのはずだった。

しかし、諸君は気付かれたであろうか。確かに、会場は興奮のるつぼに包まれていた。なのに、これまでの経過を振り返ってみると、今まで一度も笑い声は聞こえてなかったのである。つまり、観客の誰一人として笑ってはいなかったのだ。

もちろん、一流芸人たちが得意のネタを披露していたのだから、つまらなかった訳ではない。かと言って、皆が真剣に見入り過ぎたため、笑いも忘れるほど熱中していたと言う事でもなかろう。

この奇妙な緊張感に耐えられなくなったのか、七番めの芸人のネタ見せが終わった直後、一人の観客がいきなりドタドタと舞台の上へと上がっていった。

「皆さん、ちょっと待って下さい。このコンテストはいったん中止です！ おかしいと思いませんか。なぜ、皆さんはまだ一度も笑っていないのでしょうか」

舞台に上がった男は、観客の方に体を向け、そう問いかけたのだった。

その男の顔に見覚えがあった何人かの観客がウッと声を上げかけたようである。

「すみません。お客さまは、舞台に上がるのはご遠慮していただけないでしょうか」

と言いながら、司会者がその男のそばに走り寄った。

「これは失礼しました。私は探偵のアケチです。アケチコゴロウと言います」

男が自己紹介した途端、今度は観客全員がオオッと声を上げたのだった。

確かに、その男の顔は、私たちの誰もが知っているアケチ探偵だったのである。国家を揺るがす凶悪事件の数々を見事に解決していった、あの有名な探偵だ。

何だか、おかしな事態になってきたようである。しかし、ここはもう少し様子を見ていた方がよさそうだ。

「これは、これは、あの名探偵のアケチ先生でしたか。こんな場所にいらっしゃるとは、一体どうなされたのでしょう？」

この男が高名な私立探偵だと分かると、急に司会者の態度がコロリと変わったのだった。

「このコンテスト会場で何やら事件が起こりそうな胸騒ぎがしたのです。どうやら、私の勘は当たっていたみたいですね」

「事件ですって！ まさか！」

　アケチの話に対して、司会者が大げさに驚いてみせた。
「事件ですよ、明らかに。こんな面白いコンテストが開かれているのに、誰も笑わないではありませんか。これは、笑わないのではなく、恐らく、笑えないのです。皆さん、どうぞ、笑えるかどうか試してみて下さい」
　アケチは、司会者から手渡されたマイクを握りながら、観客へ向けて、そう尋ねてみた。
　そして、このアケチの主張は確かに事実だったのである。
　皆が懸命に笑ってみようと頑張ってみた。顔を歪めてみたり、喉を踏ん張らせたりしたものの、なぜか笑いにならないのだった。まるで笑い方を忘れてしまったみたいにだ。
「分かったでしょう。つまり、この会場から、いつの間にか笑いが奪い去られていたのです。これは前代未聞の大事件です」
　アケチが力強くうそぶいた。
　その断言に、観客も激しくどよめいたのだった。
「笑いが奪われただなんて、信じられません。一体、なぜそんな事が起きたのですか？ 怪現象ですか？ それとも、宇宙人の仕業とか？」
　おののく司会者がアケチに尋ねた。
「いいえ、怪現象でも宇宙人の侵略でもありません。この会場の笑いは盗まれたのです。そんな魔法のような事ができる人間を、皆さんも一人だけご存知のはずです」
「笑いを盗める泥棒だなんて、それって、もしかすると・・・」
「そう、ニジュウ面相です」
　再び、観客席は大きくどよめく事になったのだった。
　アケチ探偵に続いて、あの大怪盗のニジュウ面相の名前まで出てくるとは、ほぼ予想どおりだったとは言え、それでも驚かざるを得なかったのだ。
「し、しかし、いくらニジュウ面相でも笑いを盗む事はさすがに無理でしょう」
　司会者がアケチに噛み付いた。
「いいえ。ニジュウ面相はどんなものでも盗みだせる、魔術師のような怪盗です。たとえ笑いであろうと、きっと盗めるはずでしょう」
「しかし、仮にニジュウ面相の仕業だったとしても、一体、ヤツはどこに？」
「ニジュウ面相は誰にでも化けられる変装の名人です。恐らく、この会場の中に紛れこんで、このコンテストが大騒ぎになっているのを楽しみながら観察しているに違いありません」
「ここにいると言うのですか」
「その通りです」
「き、聞きましたか、皆さん！ あなた方の誰かがニジュウ面相なのかもしれないそうです！」
「いや、観客だけが怪しいとは限りませんよ。司会者さん、あなたはさっきから私の推理に懐疑的でしたね。もしかしたら、あなたこそがニジュウ面相なのではありませんか。司会者と言う立ち位置は、笑いを盗むのにも細工がしやすそうですからね」
「と、とんでもない！ 私はニジュウ面相ではありませんよ！」
　アケチに詰め寄られて、司会者がすっかり困り果てているのを見て、ようやく私も乗

り出す気になったのだった。
「全く、これはなんてサプライズなんだい。このお笑いコンテストの優勝は、間違いなく君だよ」
　そう大声で訴えながら、私はゆっくりと舞台に上がったのだった。
「き、君は何者だ！」
　当然ながら、アケチが私に食って掛かってきた。
「おや、知らないはずはないだろう」
　と、私はカツラとサングラスとツケヒゲを外してみせた。
「私こそが、本物のアケチコゴロウなのだから」
　観客席が今までにない大きなどよめきに包まれたのだった。
　何しろ、舞台には今、全く瓜二つの顔をした二人にアケチコゴロウがいるのだ。こんな光景を目の当たりにできるとは誰も想像できなかったに違いあるまい。
「お、お前が本物のアケチだと？ 証拠はあるのか」
　最初のアケチが、焦って、私に問いかけてきた。
「ボクは大のお笑い好きでね。その事は、ボクのファンの方だったら、皆、分かってるはずだ。このコンテストにも、変装して、お忍びで見に来ていたのさ。まさか、もう一人の自分に会えるとは思ってもいなかったけどね。胸騒ぎがしたから、この会場に居ただなんて、ちょっとボクの事を勉強不足だったんじゃないのかな」
　私は、もう一人のアケチにサラリと言ってやった。
　そのアケチ、つまりニセのアケチは返す言葉がなかったようで、鋭く私を睨んでいた。
「ニジュウ面相くん。お題つき短編小説コンテストが終わってから、おとなしくしていたと思ったのだが、小説コンテストが再開するなり、また悪いクセが出てしまったようだね。今回のお題は、なぜ盗みたかったのかな？」
　私はニセアケチに尋ねた。
「その前に、お前は、なぜオレがニジュウ面相だと決めつける？ おかしいじゃないか。オレは自分で自分の犯罪をばらした事になるんだぞ。むしろオレが本物のアケチで、お前がニジュウ面相だと考えた方が自然じゃないのか？」
　ニセアケチが必死の反論を仕掛けてきた。
「いいや、君がニジュウ面相で間違いないのさ。ニジュウ面相は目立ちたがり屋の性癖があってね。せっかく、笑いを盗みだすと言う世紀の大犯罪を成し遂げたと言うのに、このままでは、誰も気が付きそうにない。だから、ボクに化けて、自分から笑いを盗んだ事を皆に知らせたのだろう。いかにも君らしいやり口さ。もっとも、この場所に本物のボクもいた事は大誤算だったみたいだけどね」
　私はあっさり言い返した。
「では、本物のアケチくん。オレがどうやって笑いを盗んだのか、そのトリックも見抜けたんだろうね。そこまで分かっていなければ、オレはまだまだ負けを認めんからな」
　ニセアケチ、いやニジュウ面相は怒鳴った。
「もちろん、謎は解けてるとも！ 司会者さん、マイクのスイッチを止めて下さい。この会場のスピーカーを全て消してしまうんです」
　私も大声で叫んだ。

ニジュウ面相の顔には、明らかに悔しげな表情が浮かんでいた。
私の指図に従って、会場内の音響装置はいっぺんに電源を切られてしまった。会場は静寂にと飲み込まれた。
しかし、やがて、観客席のあちこちからクスクスと笑い声が漏れだしたのだった。それは、次第にはっきりとした笑い声となって、互いに混ざり合い、大きな爆笑へと変わっていった。これまで押し殺されてきた笑いがいっきに噴き出したのである。
「見たかい。笑いを盗んでいた元凶は、スピーカーに密かに取り付けられていた低周波発生装置だったんだ。この低周波は、人間の脳に無意識に働きかけて、笑いを引き起こす機能をマヒさせてしまう。これは最近、帝都大学の心理学部の論文で発表されたばかりの研究だ。君は、この論文を読むなり、さっそく利用したのだろう。スピーカーに取り付けるとは、さすがはニジュウ面相らしい発想だ。どんなお笑い芸でも、スピーカーを通して聞こえてくる音無しではなりたたないからね。なるほど、全てのお笑いが相殺されちゃったはずさ」
私は解説してみせたが、よく見ると、会場の大きな笑いに晒されていたニジュウ面相の様子が、何やら、おかしくなっていたのだった。
彼は、両手で耳をおさえ、震えながら、うろうろしていた。
「やめろ！ 笑うな！ オレを見るな！ オレの事を笑うんじゃない！」
ニジュウ面相は、目もうつろに、そう叫びだしたのだった。
「どうした、ニジュウ面相！」
と私も声を掛けてみたが、混乱しているニジュウ面相には聞こえていないようだった。
「笑うな！ 笑うんじゃなーい！」
そう怒鳴り、うろたえながら、舞台の一番奥まで下がったニジュウ面相は、黒い暗幕の前で立ち止まって、突然パッと姿を消したのだった。
この不思議な退場の仕方に、観客の笑いは一瞬途絶えて、驚きの声に変わった。
「ニジュウ面相は笑われる事に異常なトラウマを持っていたんだ。それで、このお笑いコンテストを台無しにするような計画を思い付いたのだろうか。もしかすると、この笑われる事へのトラウマが、彼が怪盗になった理由とも結びついていたのかもしれないな」
私はつぶやいた。
「ア、アケチ先生。ニジュウ面相は、なぜ消えたのでしょう？」
司会者が私のそばに歩み寄ってきて、そう質問してきた。
「ああ、あれは簡単なブラックマジックです。ヤツの常套手段の一つですよ。黒い暗幕の前で、上手に黒いマントをかぶれば、一瞬に消えたように錯覚してしまうものなんです。ニジュウ面相は暗幕をくぐって、今ごろ、暗幕の裏側から逃げ出してしまった事でしょう」
「追わなくてもいいのですか？」
「これだけ用意周到なヤツの事です。今から追いかけても、もう間に合わないでしょう。今回、ボクの方もたまたまヤツに出会ったものですから、何の準備もしていませんでした。笑いも戻ってきた事ですし、今日のところは見逃してやる事にしませんか」
観客席からは、私の寛大さを讃えてくれる大きな拍手が沸き起こったのだった。
「全く、このたびはアケチ先生のおかげで本当に助かりました。どうお礼を述べたらいい

のやら、最良の言葉が見つからないぐらいです。それにしても、アケチ先生が大のお笑い好きだったとは初耳でした。いかがでしょう、特別ゲストとして、小話でも一つ披露してみませんか」
　ここで、司会者が、不意に素敵な提案をしてくれたのだった。
「でも、この会場は日本一の芸人ばかりが集まった晴れの舞台です。私のようなアマチュアが参加するのは、場違いなのではありませんか」
「いえ。これは皆に笑いを取り戻してくれた、ささやかなお礼です。観客の皆さんも、アケチ先生のとっておきのネタをぜひ聞きたがっていますよ。どうぞ、よろしくお願いいたします」
「そこまで、言うのでしたら」
　私は、秘蔵の小話を披露してみる事に決めたのだった。

「隣の家に塀ができたってね」
「わあ、かっこい〜！」

　さて、このあと、はたして観客席に笑いの花が咲いたのかどうか、それは諸君の判断にゆだねる事にしたい。

「笑いを盗む男」・完

（ 2016 年 3 月作品 ）

「知ってる人だけのお話」

これからお話するのは、私が体験した、たいへん不思議な出来事です。

私は、インターネット上で電子書籍専門の小さな出版社を経営していました。拠点となるホームページのサーバーも自社内に置いていたのですが、それが突然壊れてしまったのが事件の始まりでした。

サーバー内のデータを自社内のパソコンで閲覧する事は可能なのですが、なぜかインターネットの回線にはうまく繋がらなくなってしまったのです。

電子書籍メインで活動していたのですから、ネットと接続できないのでは話になりません。折しも、自社オリジナルの一般参加型コンテストとして、ブックカバーデザインコンクールの募集を始めたばかりの時でした。

自分たちの力だけではどうしようもありませんので、我が社のパソコン関連の構築を全て任せていたグル・インターネット・サービスに、サーバーの故障を直してもらう事にしました。

と言う事で、グルの技術者がさっそく我が社の事務所にまで来てくれて、サーバーの入ったコンピューターの点検をしてくれたのですが、どうも、専門家が調べてみても、原因がよく分からなかったようです。

さいわい、自社内ではまだサーバー内のデータを操作できる訳ですし、いっそデータを全て取り出して、新しいコンピューターでサーバーを再構築してみたらどうかと、グルの技術者は提案してきました。

私も、サーバーの早い復旧を望んでいましたし、そのグルの提案をすんなり受け入れようとした時です。そばで働いていた編集者の一人の虎井さんがいきなり悲鳴のような声をあげました。

何事かと思って、彼女の元へ寄ってみると、使用中だった自分のパソコンに勝手に文章が打ち込まれだしたと言うのです。

『さーばーヲ変エテモ無駄デス。私ハ、新シイさーばーニ、マタ取リ憑キマス。』

虎井さんのパソコンの画面には、そんな文章が現れていました。

真面目な彼女が、悪ふざけをしたとは思えません。それとも、サーバーの異常が、他のパソコンにも伝染し始めたのでしょうか。

私は理由が分からなくて、こんな意味不明なメッセージなぞ無視してしまおうとしたのですが、グルの技術者がなかなかの勘のいい人物でした。

彼は、パソコンに返事を打ち込む事で、その謎のメッセージと会話してみる事を思いついたのです。

『あなたは何者ですか？』

と、グルの技術者は虎井さんのパソコンに書き込みました。

すると、律儀にも、謎のメッセージの主は相手をしてくれだしたのです。もちろん、パソコン内に勝手に文章を打ち込むと言う形でですが。
『私ハ、コノ世ノモノデハアリマセン。アナタ方ガ、幽霊ト呼ンデイル存在デス。』
『その幽霊が、なぜパソコンのサーバーなんかに取り憑いたのですか？』
『ゴメンナサイ。ドウシテモ、娘ヲ優勝サセタカッタノデス。』
この幽霊なるものの話の中身は、最初はよく理解できませんでした。しかし、文字入力の会話を続けていくうちに、次第に言いたい事が掴めてきたのです。
この幽霊の娘さんと言う方は、デザイナーを目指していたのだそうです。そして、我が社が主催していたブックカバーコンクールにも真っ先に作品を応募していたようなのですが、その直後に、この幽霊は我が社のサーバーに取り憑き、インターネットの接続を妨害しだしたみたいなのでした。なぜ、この幽霊がそんな事をしたかと言うと、ライバルのデザイナーたちをコンテストに参加させない為です。コンテスト応募者が娘一人なら確実に入選するとでも思ったのかもしれませんが、なんとも安直な発想です。
私は、以上の事情が飲み込めてきましたので、疑いつつも、さっそく、今までのブックカバーコンクールの応募者を調べてみる事にしました。サーバーがおかしくなる前に作品を送ってくれた一般参加者は、ベルと言うニックネームの人物が一人いるだけと言う事が分かりました。この人がどうやら、その謎の幽霊の娘さんなのかもしれません。
グルの技術者は、最後に、サーバー内の幽霊に名前を聞いてみました。
『私ノ名前ハ、尾場家サカ。』
と、幽霊は答えました。
私の方も、すぐにベルと言う人物と連絡を取ってみる事にしたのでした。
そのベルという人の本名は、尾場家すずです。まさに、どんぴしゃりなのであります。私は、その人をさっそく我が社へ呼び招いてみました。さいわい、その人も都内に住んでいて、我が社のすぐそばに居たのです。
来たのは、20代の若いお嬢さんでした。彼女が、どうやらサーバーに取り憑いた幽霊の娘さんだったみたいです。
私たちは、彼女に、これまでのいきさつを詳しく説明してみました。でも、彼女は終始怪訝そうな顔をしています。そりゃあ、こんな話をいきなり聞かされても、すぐには信じられませんよね。
だから、私は、すずさんに、サーバーの幽霊と直接、話をさせてみたのであります。親子の全く奇妙なご対面です。
すると、パソコンが返してくる文章にはすずさんにしか分からないような話も多数含まれていたようで、間もなく彼女は全ての事を納得し、動揺しながらも受け入れてくれたのでした。
彼女の母、尾場家さかさんは、半年前に病気で亡くなったばかりでした。生前から娘の夢を応援し続けていた母は、死んでからも、こんな形で娘に力添えしようとしたのです。
なんて不思議で、愛情あふれる話なのでしょう。
しかし、ライバルの参加を妨害して、入選させようと言うのは、やはり正しい優勝方法ではありません。そのへんを、すずさんは母へとしっかり伝えてくれたようです。
こうして、サーバーを乗っ取ったおかしな幽霊は、ようやく我が社のパソコンから離

れてくれる事を承知したみたいのでした。私の方も一安心したのであります。

一見、これで全ては丸くおさまったようにも見えます。だけど、サーバーから出て行ったら、すずさんのお母さんはまた消滅してしまうのでしょうか。せっかく、死に別れた親子の幸せな再会が叶ったと言うのに、それではあんまりな感じもします。

そんな時、編集者の一人である安藤さんが、パソコンから離れたら今度はこれに憑依してみたらどうかと、自分の持っていたルシーを太っ腹で差し出してくれたのでした。

ルシーとは、最近流行のロボット人形です。オモチャながらも、最先端の AI も組み込まれていますので、自分で喋ったりもできます。パソコンに取り憑く幽霊にとっては、なんとも丁度いい憑依物だったのではないのでしょうか。

かくて、我が社のサーバーに巣食っていた幽霊は、了解して、人形のルシーの中へと移動したのであります。

皆が息をのんで見守る中、ルシーがこう喋りました。

「すず。私よ。さかよ」

その時のすずさんの驚きと嬉しそうな表情は、私は今でも忘れる事ができません。

彼女は本当に幸せ者だったと言えるでしょう。亡くなった母親と、ルシー人形を通して、これからは一緒に暮らしてゆく事ができるのですから。

礼を言って、すずさんは、うちの事務所から出て行きました。

我が社のサーバーも完全に復活しましたし、全てはめでたしめでたしなのです。

そして、これまでの不思議な出来事を語り合いながら、あらためて、すずさんがコンテストに出品してくれたデザインに目を通し、私と虎井さん、安藤さんらで、入選の事を真剣に検討してみようかと相談しあっていた時です。

外から、すずさんの悲鳴が聞こえてきました。

私たちはびっくりして、事務所の外へ出てみましたが、すずさんは事務所から百メートルも離れていないような場所で、震えて、うずくまっていました。

私たちは、急いで彼女を事務所の方へと連れ戻しました。

泣きしおれている彼女に話を聞いてみますと、いきなり一人の強盗が襲いかかってきて、あのルシー人形、すなわち彼女の母親が取り憑いていた貴重なルシーを盗んでいってしまったと言います。

なんて事なのでしょう！ よりによって、あのルシーを奪ってしまう泥棒が現れるだなんて。

その矢先でした。ブザーを鳴らして、一人の男がうちの事務所へとやって来ました。ハイカラなスーツを着た、シャレた紳士です。

「しまった、タッチの差で間に合わなかったみたいですね。しかし、安心して下さい。あのルシーは私が必ず取り戻してみせますから」

と、その紳士は力強く言いました。

いきなり現れて、一体、この男は何者なのでしょう？ 私は、この男に素性を尋ねてみました。

「私ですか。私はこれまでずっと、あの怪盗を追いかけていたのです。残念ながら、今回も奴の犯行を許してしまいましたが。私はアケチです、私立探偵のアケチコゴロウと言います。そして、あなたのルシーを盗んでいった者はニジュウ面相です」

（ 2016 年 7 月作品 ）

「AI に負けるな」

やあ、どうも。私はアケチです。私立探偵のアケチコゴロウと言います。

私が、これまで長きに渡って、一人の怪盗を追いかけ続けていた事は、あなたもご存知なのではないかと思います。その怪盗、世間ではニジュウ面相の通り名で知られていますが、これから彼の事をお話したいと思います。

彼が、今年になって、はじめて盗みに現れた場所は、あるお笑いコンテストの最終審査会場でした。そこには沢山の観客も集まっていたのですが、事もあろうか、ニジュウ面相のヤツは、そこで、観客も含めた会場内の人間全ての笑いを奪ってしまったのです。

笑いを盗むなんて信じられないかもしれませんが、そんな不思議な事まで出来てしまうところが、ニジュウ面相の恐ろしさです。

さいわい、そのコンテスト会場には、私もお忍びで見に行っていたので、すぐにニジュウ面相を見つけ出し、笑いも取り戻したのですが、本当に大変な事態に発展するところでした。

この時、捕まえ損ねたニジュウ面相が次に狙った獲物が、お化け坂の電柱に貼られていた恨みの短冊です。

お化け坂に立っている電柱には、ある都市伝説がありまして、この電柱に恨み言を書いた紙（ 短冊 ）を貼り付けて、一定の条件をクリアできますと、その恨みの願い事が実現すると言うのです。まぁ、実際に成功した恨みの紙は過去には一つもなかった訳ですが、このたび、一枚の紙が条件達成で願いが叶う事になっていました。

ところが、ニジュウ面相のヤツは、その貴重な成功する恨みの紙を電柱から剥がして、盗み去ってしまったのです。間もなく、願いの執行人がやって来て、その紙をチェックするところだったと言うのにです。これには私も焦りました。

ニジュウ面相を探し出すにはもう時間もありませんし、そこで、私は、急いで、その成功する恨みの紙と同じ文面を書いた紙を電柱に貼り付けておいたのでした。

のちに、その恨みの紙は無事に聞き入れられ、恨まれた対象はヒドい復讐を受けたようなので、なんとか、問題なく済んだみたいです。

それにしても、ニジュウ面相は本当にとんでもない事をしてくれるものですよね。

次にヤツは未来へと飛びました。なんと、ロボットたちが地球を支配している超未来へ行き、そこで盗みを働いたのです。

彼が盗もうとしたのは、ロボットが人間の為に作った簡単な野菜炒めでした。超未来では、すでに野菜炒めのような料理は存在していませんでしたので、久々に作られた野菜炒めは確かに貴重なトレジャー（ お宝 ）とも言えたのかもしれませんが、それにしても、ニジュウ面相は、毎回毎回、おかしなものばかりを盗みたがるものです。

そして、結論だけ話してしまうと、この時もニジュウ面相は盗みに成功しました。ロボットが作った野菜炒めを、自分が作った野菜炒めとこっそりすり替えてしまったので

す。私も未来にまでは彼を追い掛けられませんでしたので、この犯行は阻止できませんでした。

しかし、味覚のないロボットが大昔のレシピを見ながら作った野菜炒めなんて食えたもんだか分かりませんでしたし、この件に関しては、ニジュウ面相に料理を取り替えてもらって、逆に良かったのかもしれませんね。

最近、彼が出没した場所は、ある電子書籍の出版社のすぐそばでした。そこで、幽霊が取り憑いていたルシー人形をかっぱらっていったのです。この事件につきましては、あなたも記憶に新しいのではないのでしょうか。私も犯行現場に着くのがタッチの差で遅れて、無念にも事前に阻止する事ができませんでした。

だからこそ、ヤツの今度の凶行こそ、犯行前に食い止めたいと考えているのであります。

ヤツが次に盗もうと考えているものが何なのかも分かっています。それは「成長」に結びついたものです。

よって、私もそれを手掛かりに、彼の足取りを追っていました。そして、ついには、ヤツにあと一歩のところにまでたどり着いたのです！

ところが、そこで、ニジュウ面相のヤツは、意外な方法で逃げ出してしまったのでした。

ヤツが、その名の通り、さまざまな人間に変装できる事はあなたも聞かれているはずかと思います。しかし、どんなに上手に他人に化けても、心はニジュウ面相のままなのですから、その行動や会話のやり取りから自ずとボロが出て、正体が分かってしまうものです。

そこで、ヤツがとった逃げの最終手段とは、自己催眠をかけて、心そのものまで他人になり切ってしまうと言うものだったのです。

これには、私も苦戦させられました。

私は、長い付き合いから、ニジュウ面相の性癖や特徴はよく分かっているつもりです。ヤツがどんなに巧みに別人のふりをしていても、簡単な尋問をすれば、すぐに見破ってしまう自信はあったのです。

しかし、心の奥まで他人になってしまったニジュウ面相では、本当に探し出しようがありません。それでも、懸命な追跡の結果、ついに私は、ニジュウ面相を見つけ出したのであります。ヤツは、まさに予期せぬ場所に隠れていました。

ここまで言えば、あなたも、うすうすと気付かれたのではないのでしょうか。

ニジュウ面相が化けている人物とは、この文章を読んでいる、そこのあなたです。あなたこそ、正体はニジュウ面相なのです。

あなたには、これまで暮らしてきた人生の記憶がしっかりと思い出せますので、すぐには信じられないかもしれません。しかし、それすらも、ニジュウ面相が用意した疑似記憶なのであり、あなたの今の生活環境も偽りの作られたものだったのであります。

どうか、私の言葉を信じて下さい。そして、今のうちに、おとなしく自首して、捕まって下さい。

やがて、時期が来ると、あなたはニジュウ面相の記憶を取り戻し、当初の予定どおりの犯行に及ぶ事でしょう。私は、そうなる前に、どうにかして、あなたを捕えて、罪の

道から救いたいのです。
　アケチよりの切なる願いなのであります。

　　ーーーーーーーーーーーーーーー

　以上は、オレが AI（ 人工知能 ）に書かせた小説の最新作である。
　オレ自身も趣味で小説を書いたりはしているのだが、今は、自分で書く以上に、AI に小説を書かせてみる遊びにはまっているのだ。
　AI に簡単なテーマを与えてみると、それに沿った内容の短い小説を AI は本当に執筆してくれる。
　最初に与えたテーマ（ ジャンル ）はユーモア小説だ。すると、AI は「笑いを盗む男」なんて奇妙な小説を書き上げた。次にホラーを書かせると「恨みの短冊」を、SF だと「ルシーの晩餐」、人情ものを要求してみると「知ってる人だけのお話」を書いてよこした。
　これらの AI に書かせた小説はいずれも某小説コンテストに出品してみた次第だが、今回の新作も同じコンテストに送ってみたばかりである。
　このたび、どんなテーマを与えたら、AI はこんな小説を書いたのかと言うと、ジャンルではなく「成長する小説を書いてごらん」と命じてみたのだ。続編でもなければ、オマージュでもない。はたして「小説の成長」を AI はどのように解釈するのだろうかと思ったら、このような内容に処理してみせた訳である。自分の書いた過去作品を取り込んで、その上に包み込むような形のストーリーにするとは、確かに小説そのものが大きく成長した、とも受け取れるものなのかもしれない。
　最近は、チェスや将棋に続いて、囲碁の腕前も AI の方が人間の名人より上回るようになったばかりだ。名画を模写したり、オリジナルの音楽を作ると言った創作の分野でも、AI の能力の進歩には目覚ましいものがある。この調子だと、小説だって、AI の方が人間よりも面白いものを書く時代が来てしまうかもしれないな、と、AI 内臓のコンピューターを見ながら、オレは思った。全く、うかうかしていられないのである。
　その時、オレの後頭部に激しい痛みが走った。誰かがオレの頭を鈍器のようなもので殴ったみたいだ。
「これが、成長する小説を書いた AI か。確かに、これはオレがいただいたぜ」
　薄れゆく意識の中で、オレは、そんな野太い男の声を耳にした。

　　了

（ 2016 年 7 月作品 ）

「ニジュウ面相の別荘」

「まずは、屋敷の中に入る前に、この玄関をご覧なさい。この玄関マットは、25 キロ以上の重さが加わると、自動的に監視カメラを作動させる仕組みになっている。肝心の監視カメラは、玄関灯の内部に潜ませているから、訪問者は自分が写されているとは、つゆとも気付かないと言う寸法だ」棟梁が得意げに説明してみせた。

オレは、今、建てたばかりの郊外の新居を見に来ていた。これまで持っていたオレの家は、ことごとく国に没収されている。今度こそは、長く使える我が家を手に入れようと思って、日本でも一二の腕前と言われる大工の棟梁を雇って、この新しい屋敷を建ててもらったのだ。

そして、このたび、屋敷もついに完成したと言うので、その棟梁と二人でやって来て、屋敷の構造を詳しく説明してもらっている最中なのである。

「なるほど。しかし、カメラだと見張るだけで、侵入者を直接捕えたり、翻弄したりはできないね。オレはそういう、もっと積極的な警護システムを望んでいるんだ」オレは言った。

「まあ、焦りなさるな。この屋敷のカラクリの本領は内装にこそある。さあ、案内するから、わしについてきたまえ」余裕でそう答えた棟梁は、玄関のドアを開いた。

そして、棟梁に続いて、オレも屋敷の中へ入ると、バタンとドアを閉めた。

「まず、この入り口のドアだが、実は、この取っ手は、決まった手順でひねると簡単に外れてしまう仕組みになっている。屋敷への侵入者の知らせを受けた場合、運悪く玄関のドアの鍵をその時持ってなくても、この取っ手を外して、持ち去ってしまえばいい。取っ手がなければ、鍵がかかってなくても、侵入者はドアを開けられなくて、立ち往生するだろう？」

「ほう、面白い仕掛けだね。しかし、ドアが駄目なら、侵入者は窓から逃げ出すんじゃないのかな」

「そちらの方も心配ご無用。廊下のあちこちに、ボタンが設置してある。それを押せば、一階にある全ての窓に鉄格子が下りてくる仕組みだ。これで完全に袋のネズミだ」

そして、棟梁がそばにあった壁の小さなボタンを押すと、確かに話した通りになったのだった。

しかし、オレは鉄格子はあまり好きではなかった。いまいち景観を損ねるし、何よりも国のあの施設を思い出させるからだ。

「逃げ場を失った侵入者が廊下でウロウロしているようなら、さらにこっちのものだ。廊下には最大の罠である粘着液が用意してある。赤いボタンを押せば窓に鉄格子が下りたが、青いボタンを押せば、廊下の天井から粘着液が床へと降り注いで、足がべったり床にくっついてしまう。これで何人だろうと、この屋敷からは逃げられないはずだ」

　棟梁は、なかなか大掛かりな仕掛けも作ってくれたようである。これならば、中村の手下が大挙して、この屋敷に乗り込んできたとしても、一網打尽にできそうだ。オレの最大のライバルにも通用するかどうかが、まだ不安なのだが。
「確かに素晴しい侵入者殺しの罠だが、オレやオレの使用人も廊下を歩けなくなってしまうのではないかね」オレは棟梁に尋ねてみた。
「この粘着液向けの特製の靴を準備してある。粘着液を廊下に流したあとは、自分たちはこの靴を履けばいい。この靴は、底の部分が何十枚もの紙が貼り合わさって出来ていて、一歩進むごとに、一枚ずつ紙がはがれて、粘着液の上でも歩ける仕組みになっている」
「少しスマートじゃないね。たとえば、粘着液がくっつかない油を靴底に塗るとか、もっと他のやり方はなかったのかな」
「申し訳ない。この粘着液はかなり強力でね、現時点では十分に対応しきれる良い油が見つからなかったのだ。もう少し研究を重ねてみるから、今はこれで我慢してもらえないだろうか」棟梁が謝った。
　そういう事なら仕方があるまい。オレだって、すぐにでも、この屋敷を使い始めたいのだ。
「侵入者対策の仕掛けは大体分かった。次は、この屋敷から脱出する為のカラクリだ。逃走方法は十分に揃っているのかね」
「もちろんだ。しかし、その前に、一階のあちこちの部屋に設置しておいた仕掛けも見てもらえないだろうか」
　こうして、オレたちはまず応接間へと向かった。
　応接間の壁の一角には、高さ 150 センチぐらいの位置に、30 センチ四方の四角い穴が空いていて、その向こう側にも部屋が一つあるのが見えていた。これは、オレから棟梁に頼んで作ってもらった隠し部屋なのだ。この隠し部屋には、この応接間からではなく、別のルートから中に入れる構造になっていた。
「応接間をこっそり見張る為の隠し部屋を作ってほしいという要望でしたな。この覗き穴の部分には、普通でしたらマジックミラーをはめておくところなのだが、それじゃ平凡すぎるので、旦那は肖像画を掛けておくとおっしゃっていた」
「そうだ。肖像画の目の部分だけを覗き穴にしておくのだ」
「しかし、わしが思うには、それもバレやすい気がする。そこで、わしはこんなものを用意してみたのだが」
　そう言って、棟梁は部屋の片隅に置いてあった額入り絵画を持ってきたのだった。それは、大自然の中の小さな山小屋を描いた風景画だった。山小屋そのものは下の方にちょこんとあるだけで、絵の大部分は大きく広がる星空で占められていた。
「実は、この星、全て穴なのだ。これを、あの覗き穴のところに掛けてごらん。隠し部屋の方に明りがついていれば、パーッと星空になるし、電気を消せば、闇夜の空に早変わりだ。この方がずっとシャレているだろう？」
「いや、それはだね」と、オレは口ごもった。「確かに面白いトリックだが、オレは好かないな。オレの趣味としては、やはり肖像画の方がいい」
「そうか。残念だな」
　棟梁はあからさまに不服そうだった。しかし、ここはオレが発注した家なのだ。オレ

は、肖像画の目が実は見張りの目だったというトリックで、訪問者をあっと驚かせたいのである。

続いて、オレたちは調理場へやって来た。オレとしては沢山の使用人を雇うつもりだったから、かなり大きな調理場だ。レストランにありそうな巨大な冷凍室も併設されていた。今度は、この冷凍室の中を覗きにきたのである。

「この冷凍室には、ダミーの食材がいくつか置いてある。この牛のあばら肉と大マグロ一尾がそうだ。この二つは完全な作り物だが、言われなきゃ、誰も見抜けないだろう。そして、この二つの表面には、見えにくい位置にジッパーが付いていて、内部に物をしまう事ができるんだ。当然、耐冷製の素材で出来ているから、この冷凍室が使用中でも、中にしまっておいたものには何の影響もない。こんなところに物が隠してあるなんて、どんな泥棒の天才でも気が付く事はないだろう。まさに、最高の貴重品の隠し場所だ」

棟梁は得意げに説明していたが、実際は、このオレこそが泥棒なのだ。冷凍室のこの秘密の貴重品袋には、盗んだ宝石や財宝などを隠しておくつもりだったのである。けっこう収納スペースは広そうなので、時には、誘拐した子どもだって隠しておけるかもしれない。

そして、オレたちは書斎へとやって来た。ここがいちおう、オレの表向きの司令室となる。仕掛けの方も万全なものを用意しておいてもらわなくてはいけない。

「注文どおり、落とし穴は作っておいてくれたんだろうね？」オレはさっそく棟梁に尋ねた。

「心配なさるな。全ては旦那の指示どおりに作ってある。この旦那が座る執務用の机にはボタンがあって、赤のボタンを押せば、この部屋の入り口近くの落とし穴の蓋が開く。引っかかった人間は 3 メートルほど下まで落ちるから、落ちたら最後、自力で抜け出す事はまず不可能だ。オプションで、穴の中に水が流れ込む仕掛けも設置しておいた。いくら侵入者対策の為とは言え、あまり使ってほしくない罠だがね」

「君の感想はいらん。それで、もう一つの落とし穴の方は？」

「言われた通り、机のそばに作ってあるよ。こちらの蓋を開くのは青のボタンだ。しかし、侵入者殺しの落とし穴じゃない。旦那が緊急で逃げる為の落とし穴だ。よって、穴は垂直ではなく、ゆるやかな坂を滑り降りれるようになっているし、穴の底も行き止まりではない」

「どこへつながってるんだ？」

「すぐ外の庭だ。出口はゴミ入れの箱でカムフラージュしているから、まず気付かれないだろう」

「おお、見事な細工じゃないか。さすがは日本一の建築家だ。君にこの仕事を任せて、本当に良かったよ」

「ですがね」と、棟梁は顔を曇らせた。「旦那が机のそばに居ないと、この抜け穴は使えませんぜ」

「確かにそうだが」

「そこで、もう一つ、抜け道を用意してみたんだ」

そう言って、棟梁は壁の一角にある大きな本棚の方に向かったのだった。

「その本棚がクルリと回る隠し扉だとでも言うのかね」オレは聞いた。

「いいや。そんな大掛かりな仕掛けだとすぐに見抜かれちまう」
　そして、棟梁は、本棚の最下段にある大判の百科事典全集の背表紙だけをペラリとめくってみせたのだった。その百科事典全集は、もとから背表紙しかないダミーで、その奥にあるべき本棚の背板もはめられておらず、さらに壁の向こうにつながる抜け穴になっていたのである。
「この方が気付かれにくいでしょう？ 旦那の体でも、ちょうど通れるぐらいのスペースだ。ここをくぐり抜けると、向こう側は隠し通路になっている。その先には梯子があって、素早く二階に昇れる仕組みだ。二階からの脱出ルートへ一直線って筋書きでして」
　オレは思わず笑みがこぼれた。この棟梁、なかなかオレの趣味が分かっているではないか。全く、この男に仕事を頼んで、正解だったと言うものだ。
「よし！ それならば、その抜け道を使って、さっそく二階へ向かおうじゃないか！」オレは大声を張り上げた。
　そして、オレと棟梁は、隠し通路を使って、二階へ進んだのだった。隠し通路の梯子の先は、オレの寝室につながっていた。
　この寝室こそ、二階での逃走手段の要でもあるのだ。
　棟梁は、オレの為に設置してくれた、天蓋つきの豪華なベッドに手を当てた。
「見た目は普通のベッドだが、これも旦那の注文どおりの品物だ。この部屋のすぐ上は天井裏で、すでに準備が整った気球が隠されている。その気球とこのベッドが巧みに結びついていて、ベッドにあるレバーを引っ張れば、屋根や周辺の壁などがパアッと外れてしまう仕組みだ。次の瞬間、気球は浮かび上がり、このベッドが気球の下の籠に早変わりするって手はずだ。全く、旦那は次から次へとファンタスティックなアイディアがひらめくようで、不思議なお方だよ」
　棟梁は褒めてくれたが、実際のところは、オレはこの逃走手段を使う事には躊躇していた。過去に何度か気球による逃走は試みてみたものの、大体は失敗していたからだ。むしろ、この気球はオトリに使って、別のルートから逃げ出せないかと考えていた。本当はヘリコプターが欲しかったのだ。その為に、屋根の一角にはヘリコプターの発着場所も作らせていたのだが、あいにく、ヘリコプターそのものの購入が手間取っているところだった。
「まあ、屋敷の説明は、大体こんなもんだろうかね」棟梁は言った。
「いや、ありがとう。この屋敷、大いに気に入ったよ。別荘として、存分に使わせてもらうつもりだ。本当に感謝する。しかし、君もよくこれだけ面白い仕掛けが思いついたものだね」
「わしの先祖は、もともと戦国時代に忍者屋敷を専門に作っておったのだ。わしにも、その血が流れておる。ただ、それだけの話だ」
「なるほど。しかし、君自身も素晴しい芸術家だと思うよ。この屋敷はまさに最高傑作だ」
「お褒めにあずかり、光栄だよ。そこまで讃えてくれるのならば、旦那にだけは、教えてあげる事にするかな」
「何をだね？」
「実は、この屋敷にはもう一つ、カラクリを仕掛けておいたのだ。わしの先祖伝来の最強の脱出システムをね」

「そんなものが、ここに？」
「そうだ。もし、今まで見せてきたカラクリが全て敵に破られた場合は、一か八かで使ってみるがいい。なあに、ちっとも難しい仕掛けなどではない。ほれ、ちょんちょんぱ！ これだけだ」
　そう、棟梁がちょんちょんぱ！ と屋敷のある部分をいじくっただけで、その仕掛けはいきなり発動したのだ。
「おお！ ちょんちょんぱ！ それだけで、こんな事に？ こりゃあ、絶対に逃げ出す事ができるな」
　オレは、その仕掛けを見て、あまりにうまく出来ているものだから、つい大笑いしたのだった。
「遠藤平吉の旦那。この先、この屋敷で何をしようと企んでいるのかは、わしの知るところではない。しかし、この屋敷はわしが全身全霊を傾けて作った大事な息子の一つだ。決して宝の持ち腐れにならぬように有効に使ってくれたまえよ」
　それが棟梁がオレに投げかけた、最後の言葉だった。オレも、棟梁の期待に十分応えるつもりだった。
　こうして、オレの郊外の別荘、いや、新しい秘密のアジトは完成したのである。刑務所を脱獄してから、かれこれ一年が経つ。そろそろ、オレが大事件を起こす事を、世間も期待し始めている頃だろう。
　かくて、オレ、怪盗ニジュウ面相は新たなるアジトを拠点に、世を騒がすべく、犯罪活動を再開したのである。

　しかし、予想以上に、宿敵アケチ探偵の出動も早かった。度重なる攻防戦の末、じょじょに追い詰められていったオレは、例のカラクリ屋敷のアジトへと撤退した。今回のアジト内のカラクリのオンパレードには、さすがのアケチもかなり苦戦していたようにも見えたのだが、さすがは巨人と呼ばれるほどの名探偵である。ついには、全ての罠を突破され、オレも八方ふさがりにまで追い込まれてしまったのだった。
　そして、とうとうオレはアケチ探偵に捕まってしまったのである。かくなる上は、棟梁に伝授されたちょんちょんぱ！ の仕掛けを使ってやろうとした、その直前にであった。
「いやあ、ニジュウ面相くん、今回はまた凄いお化け屋敷を作ってくれたものだね。さすがの私も、あと少しでこの屋敷の罠に屈服するところだったよ。しかし、悪の栄えたためしはない。今回も君の負けだ。君のこのアジトは、国に没収させる事にするよ。これほど面白い仕掛けが沢山揃ったカラクリ屋敷だ。一般市民に開放して、見学料でもとってみたら、さぞ政府の良い財源になる事だろうよ。そうそう、君自身にも新しい別荘を用意してやっているからね。こないだ完成したばかりの最新警備システムの整った刑務所だ。これには、さすがの脱出の名人の君でも脱獄は不可能だろう。今度こそ、今までの罪の全てを暗いブタ箱の中でじっくりと反省してくれたまえ」
　オレを捕まえたあとの名探偵は、そう楽しげにオレへと話しかけてきたのだった。全く、憎々しい奴だ。
　オレの身柄は、アケチ探偵より警視庁の中村警部へと引き渡され、希代の大怪盗であるオレは再び刑務所に逆戻りしたのだった。

今度オレが入所させられた刑務所は、確かに今まで見た事がないほどの厳重さだった。なによりも、建物の警備システム自体が飛び抜けて優秀なのだ。さて、この強敵をどうやって破ってやろうとオレが思案していた時である。

何者かがオレに面会を求めてきた。会ってみると、それが何と、あの大工の棟梁なのであった。

「旦那、お久しぶりで。旦那が何らかの犯罪関係者じゃないかと言うのは、わしもうっすらと気付いてはおったよ。しかし、まさか、あの世紀の大怪盗のニジュウ面相だったとはね」

オレと面会した棟梁は、笑いながら、そう話しかけてきた。

「何をしに、ここに訪ねてきたんだい？」オレは棟梁に聞き返した。

「いや、実を言うと、この刑務所を設計したのも、わしなんだ。本当に旦那は運がいいよ。わしの作った家から家へと移り住めたんだからね」

「捕まったオレのマヌケぶりを笑いにきたのかい？ 嫌なジジイだ。確かに、君の作った建物だけあって、オレも今回ばかしは脱獄にかなり手こずってはいるがね」

「いやいや、旦那はラッキーなんだよ。ほら、例のアレ、覚えているかい？」

「例のアレって、もしかして？」

「そう、もしかして」

「ちょんちょんぱ！」

同時に言って、オレと棟梁は思わず一緒に大笑いしたのだった。

この棟梁は、自分の作った建物にはことごとく内緒で、ちょんちょんぱ！ を仕掛けていたのである。この刑務所もまた、例外ではなかった。

全く、自分のアジトでは、このちょんちょんぱ！ を使い損ねていて良かったと言うものだ。この仕掛けだけは、さすがのアケチもまだ知らなかったのだから。

こうして、翌日、オレはちょんちょんぱ！ を使うと、あっさり脱獄を成功させ、この難攻不落の最新刑務所をまんまと後にしたのだった。

了

（2016年8月作品）

「ニジュウ面相は誰だ?」（「ハイスクール全裸」より ）

ある女子校の中に、怪人ニジュウ面相が逃げ込んだ。ニジュウ面相を捕まえる為に追いかけていたアケチ探偵も、警官隊を引き連れて、その女子校にやって来た。

学校は、まだ昼のさなかで、授業中だった。アケチ探偵は、まずは、職員室に学校の教員や事務員を全員集めると、彼らの尋問を行なったのである。

「ニジュウ面相は変相の名人です。彼のプライドから考えても、誰かに化けるような逃げ方はしても、建物のどこかに隠れるような真似はしないでしょう」アケチ探偵は言った。

そして、学校の職員たちの中には、ニジュウ面相が化けたと思われる人間は見つからなかったのである。

次に、400 人近い女生徒たちが、一堂に、体育館へと集められた。

「ニジュウ面相は、魔法使いのような変相の名人です。女の子にだって化ける事は不可能じゃないでしょう」アケチ探偵は説明した。

しかし、400 人もいる女生徒たちは、さすがに一人ずつ、尋問で調べる訳にもいかないのだ。

「生徒の皆さん。全員、服を脱いでください。裸になるのです。いくらニジュウ面相が変相の名人だとは言っても、性別まで変える事はできないでしょう。彼は男だから、オチンチンがあるはずです。あるいは、作り物の女性器を股間につけて、ごまかしているかもしれませんので、よく観察すれば、すぐに分かるはずです」アケチ探偵は、得意げに告げたのだった。

もちろん、女生徒たちは、反感を抱いて、どよめいたのだが、相手は、警察を後ろ盾にした名探偵だから、逆らう事もできないのだ。

たちまち、体育館の中は、裸の女生徒で溢れかえったのである。その光景は圧巻であった。

こうして、恥ずかしすぎる状況下で、生徒の中からのニジュウ面相探しが始まったのだが、なかなか、疑わしい女子は見つからなかった。

そんな矢先、校庭の方から、用務員の大声が聞こえてきた。

「うひゃああ。ぶったまげたぁ！ 何者かが、校長の銅像に化けておったぞ！ 皆、来てくれー！ 早く捕まえないと、逃げられちまうぞぉ！」

そこで、アケチ探偵も、ニジュウ面相が何にでも化けられる事を思い出したのである。

だが、その時、アケチ探偵は、すでに、怒った裸の女生徒たちにと取り囲まれていた。次の瞬間、彼は女生徒たちによって袋叩きにされた。

了

（ 2019 年 9 月作品 ）

「アケチ大戦争＜悪のカリスマ脱獄計画＞」

プロローグ

真っ暗な空間である。ただ、空に満天の星だけが浮かんでいる。いや、これらの星も本物ではなかった。どれも、人工的に投影された偽りの星明かりなのだ。

ここは、実はプラネタリウムの会場なのである。観客を入れた上映会ではなかったらしく、ひっそりと星々だけが天井にて眩しく輝いているのだ。

会場の中央にある投影機のそばに、ヌッと人影が現われた。顔を帽子と黒マスクで隠し、大きなインバネスコートを羽織った、怪しい人物だ。彼は、その場にスックと立つと、周囲を緩やかに見回した。

「皆さん、よく、お集まりくださいました。この度は、私の呼びかけに応じてくださり、本当に感謝いたしております」彼は、とても通る声で、周りへと訴えた。

そう、ここにいるのは、この男だけではないのである。

観客席の一角に、別の人影が静かに立ち上がった。背広を着た、屈強な体つきの紳士だ。しかし、片手でステッキをつき、その顔の右半分は醜く焼けただれていた。この男こそは、世間ではクモ男の名で知られている連続殺人鬼なのである。

「脱獄中のオレの潜伏場所を探し当てたほどだ。貴様も、只者ではあるまい。だから、オレも、お前と会ってみる気になったのだ。まずは、あんたが正体を明かしたまえ」クモ男は、主催者の男へと怒鳴った。

「クモ男くん。それは、ごもっともなお話です。では、名乗りましょう。私の名は、ニジュウ面相です。そう、この名はお聞きになった事があるでしょう？ 私こそが、あの怪人ニジュウ面相なのです」

ニジュウ面相の自己紹介に呼応して、観客席の違う場所に、新たな人影が出現した。今度は、とても小柄な人物だ。一見、幼児のようにも見えたが、顔だけは髭面の大人の男なのである。この怪人物は、可笑しそうに奇声を発すると、軽業師のようにひょいひょいと観客席の上を跳ね回った。この男も、指名手配の凶悪犯罪者の一人で、一寸法師と呼ばれている怪人だ。

「うん。聞いた事があるぜ。ニジュウ面相ってのは、最近、この都市で売り出し中の新参者の怪盗だろ。面白いじゃねえか。その新入りさんが、大先輩のおいらたちに何の用だ？」一寸法師が、嘲笑うように言った。

「待て。すぐには信用できないな」と、別の観客席からも声がした。

そこの席にも、違う人物が立っていた。顔は一面白塗りで、服装もピエロの格好をしている。この男も、凶悪な盗賊団の首領で、魔術師の通り名を付けられた人物なのだ。

「おぬしは本当にニジュウ面相なのかね？ ニジュウ面相の名を使って、我々をかついでいるのではないのかね」魔術師が鋭く問いかけた。

「魔術師くん。疑うのも、ごもっともな話です」と、ニジュウ面相が笑った。
　その体が、突然、むくむくと膨れ上がった。スマートだった彼の体格が、たちまち、太った巨漢にと変わってしまったのだ。かと思うと、たちまち、彼の体はしぼんでしまった。ほっそりしているが、どうも、最初のスタイルとも違う。やたらと女性らしいプロポーションなのだ。
「どう？ これで、信じていただけたかしら」ニジュウ面相は、かん高い女の声で答えてみせた。まさに、20の顔と肉体を持つと言われる変装の名人ならではの妙技なのである。
「ほほう。確かに、おぬしは本物のニジュウ面相らしいな。しかし、そのニジュウ面相くんが、なぜ、我々をここに招いたのだ？ 皆で戦って、悪党ナンバーワンでも決めようと言うのかね？」と、魔術師。
「とんでもない。私が望んでいるのは、もっと壮大な夢です。これだけのメンバーが揃えば、きっと、いかなる悪事も可能なはずでしょう。私が作りたいのは、巨大な闇の結社です。その力で、この大トーキョーを、暗い夜の世界に染めてやろうと思うのです！」ニジュウ面相は豪語した。
「へっへっへ。面白い事を考えるじゃないか。よし来た！ おいらは、その話、乗ってやってもいいぜ」一寸法師が、楽しそうに即答した。
「その世界では、オレも、自由に美女を殺しまわってもいい訳だな？」と、クモ男。
「なるほどね。私も、おぬし達とうまく共存していく事はできそうだな」魔術師もうなずく。
「しかし、私たちが一つになったとしても、その前には、まだ大きな障壁がある事は、皆さんもうっすらと分かっているはずでしょう。そいつを取り除かない事には、私たちが、たとえ団結したとしても、その野望は何一つ達成する事はできません。そいつに挑戦する事こそ、私が皆さんを集めたもう一つの理由なのです」
　ニジュウ面相の言葉には思い当たるらしくて、他のメンバーは誰もが神妙な顔をしていた。
「その人物には、皆さんも、幾度となく苦い思いをさせられたはずです。彼こそは、警察組織をも超える、この国の偉大な守り神です。彼は、巨人と呼ばれる今世紀最大の偉人、犯罪者ハンターとして知らぬ者のない、地上最強の私立探偵です。そう、その名は、アケチコゴロウ！」
　それは、今、ここにいる全員が思い浮かべていた名前であった。
「えええ！ アケチさんに挑戦するのぉ？」その名が出た途端、すぐさま、新たな人物が話に食いついてきた。
　若い女性の声である。観客席の一角に出現した、その新しい人物とは、黒いドレスを着た美女であった。彼女もまた、「暗黒街の女王」の異名を持つ、有名な女賊なのだ。その名は黒トカゲと言う。
「アケチさんと一戦交えるのならば、ボクも、もちろん協力するわ」彼女は、ウキウキした感じで、あっさりと参加を表明したのだった。
　すると、観客席の別の場所に、さらなる新しい人影が浮かび上がった。今度は、背の高い男性だ。西欧人っぽく見えるが、その顔は、目つきが鋭く、口が裂けたように大きかった。まるで野獣のような顔の作りである。この男は、人間ヒョウと呼ばれている、悪

質な連続婦女暴行魔なのだ。
「アケチコゴロウか！ オレ様も、あいつには、何度もお楽しみを邪魔されている。ニジュウ面相さんよぉ、この人間ヒョウも手を貸してやるぜ。アケチの首はオレ様がへし折ってやる！」人間ヒョウも、荒々しく宣言したのだった。
「どうやら、お集まりいただいた全員の賛同を得られたみたいですね。では、これから、私たちは、その同盟を『暗黒星』と名乗る事にしましょう。私たちは、一人一人が夜空に浮かぶ大いなる悪の星です。しかし、その姿は、決して表の世界では現われる事もなく、真っ暗な夜の天空の中に溶け込んでいるのです。私たちこそは、まさに、見えない星、暗黒星なのです！」ニジュウ面相が、饒舌に熱弁した。
「『暗黒星』か。確かに、我らにふさわしい名前かもしれないな」集まっていた犯罪者たちは、それぞれに納得していて、この組織名は採用されたようなのである。
「それでは、我ら暗黒星のデモンストレーションを兼ねて、さっそく、第一の仕事に取り掛かる事にしましょう」と、ニジュウ面相が言葉を続けた。
「何をする気なのかね？」と、誰かが尋ねた。
「ある大物犯罪者が、現在、トーキョー・シティの刑務所に投獄されています。我々の力で、彼のことを脱獄させたいと思うのです。そして、彼にも、我々暗黒星にと参加してもらいます」
　ニジュウ面相は、ほくそ笑みながら、その企てを語り始めたのだった。

その１

　大トーキョー・シティは、我が国の首都であり、同時に、アジア圏最大の大都市でもあった。
　これほど大きければ、犯罪の発生率だって、決して少なくはないのだ。特に、科学技術を積極的に取り入れた近未来型犯罪者たちには、いまだ旧体制のままの国家警察組織も、すっかり手を焼いていた。
　そんな時、警察の方でも、奥の手として、民間の優秀な人材の手助けを、次々に受け入れるようになったのだ。中でも、私立探偵のアケチコゴロウは、警察がもっとも頼りにしている存在であった。頭脳明晰なアケチコゴロウは、これまでも、国家規模の重要案件を何度も解決してみせた最強の腕利き民間探偵なのだ。
　そして、今回もまた、警察ではとても困った事態が起きたらしくて、アケチ探偵は、警視庁本部の方へと急に呼び出されたのだった。
　ビシッとスーツを着た、痩せ型の、30 代の男性。髪の毛はモジャモジャで、いつも顔には優しい笑みを浮かべていて、決して強そうな印象は受けない。これが、アケチコゴロウだ。見た目は頼りなさげではあるが、しかし、実際は、彼の頭の中には、世界でも最高の天才的な頭脳が詰まっているのである。
　アケチ探偵が警視庁本部に到着すると、すぐに、捜査第一課のナカムラ警部が出迎えた。クモ男や一寸法師などの兇賊を捕らえる際、アケチ探偵とナカムラはガッチリと共闘してきたので、なんとなく、ナカムラ警部が、警視庁でのアケチ探偵の窓口役を引き

受けがちなのだ。
「アケチくん。またしても、不可解な事件が起きてしまったよ。しかも、この天下の警視庁本部の中で」
「そうらしいですね。さっそく、問題の現場に案内してもらえますか」
　二人は、挨拶もそこそこに、警視庁内を移動し始めた。二人が向かった場所は、警視総監室の前だった。
「こちらだ。この警視総監室で犯罪予告状が発見されたんだ」
「総監は？」
「今は席を外してもらっている。今、この部屋の中は、見張りの警官以外は無人だ」
　二人は、警視総監室の中にも入っていった。確かに、警官一人が入り口の横に立っているだけだ。
「犯行直後の状態のままにしている。鑑識以外は誰も触ってはいないから、存分に調べてくれたまえ」ナカムラ警部は言った。
　その言葉に従って、アケチは、すぐに警視総監の机のそばに進んだ。その机の上には、一枚の紙が置かれていた。その紙に、何か、黒々と文字が書かれているのだ。
「警視総監どのが帰られた後は、いつも、この部屋には鍵が掛けられている。昨夜もそうだった。しかし、今朝、総監どのが、この部屋に入られると、その紙が机に置かれていたと言うのだよ」
「つまり、現在の状態ですか？」
「そうだ」
「この犯罪予告状を、私も読ませてもらっていいですか？」
「そこに置いてあるのは複製だから、持ち上げても支障はないよ」
　アケチは、机の上にあった予告状の紙を手にとった。
　その紙には、次のように書かれていた。
「我々は、これより、日本警察に不敵に挑戦する次第である。ついては、3日後、まずは、西トーキョー・シティ刑務所より、我らの手で、畑柳庄蔵を鮮やかに脱獄させてみせたい。いかなる妨害があろうとも、我らは、この予告を実現してみせるので、十分に警護されたし。　　暗黒星」
　そして、この署名の下の部分には、真っ黒な色で放射状の線が描かれていた。どうやら、この放射状の線が「暗黒星」を意味するシンボルマークらしい。
「言うまでもなく、現物からは指紋の類はいっさい検出されなかった。さまざまな検査をして分析中だが、今のところ、出どころを割り出せるようなヒントは見つかってない。アケチくんの方で、何か、気が付いた事はあるかね？」ナカムラ警部は言った。
「この『暗黒星』と言うのは？」
「この予告状を差し出した奴の賊名らしいが、初めて聞く名前だね」
「既存の犯罪者が、我々を欺く為に用いた、仮の名前である可能性は？」
「それは、わしも疑っておったのだよ」と、急にナカムラ警部が乗り出してきた。「例えば、最近、よく出没しているニジュウ面相の変名とは思わないかね？ ニジュウ面相なら、何人にでも化けられるから、この警視庁に忍び込む事だって、お手の物のはずだ」
「待ってください。すぐに決めつけてしまうのは、早計です。たとえ、犯人がニジュウ面

相だったとしても、この密室の総監室にまで入るのは、誰かに変装しただけでは無理でしょう。それに、僕は、この予告状の差出人が複数形である点も気にかかるのです」
「犯人は二人組だと？」
「いえ、もっと多人数かもしれません」
　ここで、アケチ探偵は推理タイムに入った。アゴに手をやり、部屋の内装を見回しながら、ずっと真剣に考え込んでいるのだ。その状態が数分ほど、続いた。
　ナカムラ警部が不安そうに見守っていると、いきなり、アケチが喋り出した。
「ほら、あそこ！ 天井の近くに、換気用の穴がありますね。あそこから犯人が忍び込んだとは思いませんか？」
「おいおい。あんな小さな穴では、普通の人間はくぐれないよ。小さな子供なら可能かもしれないが、だとすれば、そんな幼い子では、あの穴まで飛び上がる事ができないだろう。君の推理は見当違いだ」
「そうでしょうか。我々もお馴染みの犯罪者の中に、子供のような体の奴がいませんでしたっけ？」
「あ」と、警部は、青くなって、絶句した。
「一寸法師は、僕たちの手で、一度は逮捕しました。しかし、その後、留置所へ護送する途中、逃げられたと聞きましたが」
「そ、そうだった！ しかし、あいつが、ここまで大それた事をやるとは・・・」
「この換気の穴は、どこに繋がっていますか？」
「まっすぐ外と出入りするのならば、屋上に排気用の穴がついているが」
「では、まず、そこへ行ってみましょう」
　アケチ探偵とナカムラ警部は、総監室を飛び出したのだった。

　アケチ探偵の推理は的中した。
　アケチとナカムラ警部が警視庁の屋上にやって来ると、そこでは、換気用の排気口が、蓋をこじ開けられ、開きっぱなしになっていたのだった。しかも、ご丁寧に、その排気口のすぐ近くの床には、あの放射状の線の図形、すなわち「暗黒星」のマークが描かれていたのだ。
「やはり、この換気口を通って、賊は警視総監室に忍び込んだみたいですね。しかも、その事を、僕たちが見破るのまで見越した上での犯行だったようです」アケチ探偵は言った。
「しかし、密室の警視総監室に侵入する為のルートは分かったとは言え、一寸法師は、この屋上までは、どうやって忍び込んだのかね？ 真夜中に壁をよじ登ったとしても、警視庁内には、夜中だって夜勤の警官が勤務している。外壁でそんな怪しい事をしている人間がいれば、すぐに発見したはずだ」と、ナカムラ警部。
「壁を上り下りする以外の経路を使った可能性がありますね。そう、近所にある同じ高さの建物から横方向に飛び移ったとか」
「飛び移るだって？ ほら、見てみろ。隣の建物だって、この警視庁舎からは 10 メートルは離れているんだぞ。いくら、一寸法師の身が軽くても、とても飛び越す事はできんよ」
　警部の疑問には答えず、アケチは、もうしばらく、屋上を歩き回った。と、屋上のへりまで来た時、彼はピタリと立ち止まったのだ。

「なるほど。奴らは、この謎を解くヒントも、わざと残しておいてくれましたよ。ここを見てください」
　アケチは、屋上のへりの一角を指さした。
　そこには、何やら、ネバネバしたゼリー状のものが大量にこびりついているのである。さらに、その物質の横には、やや大きめのオニグモの死骸が置かれていた。
「犯人は、やはり、隣の建物から、こちらの庁舎へと縄を放って、その縄に一寸法師を渡らせたんです。仕事が終わって、一寸法師がまた縄を使って、隣の建物に戻って来ると、その縄は引っ張って、回収してしまったらしい。このネバついた粘着液は、その時、縄の一方をこの屋上のへりに貼り付けた跡です」アケチが笑って言った。
「そんな手の込んだ方法を、一体、誰が？」
「その答えも、きちんと提示されています。全く、虚栄心の強い犯人だ。犯行現場に蜘蛛の死骸を自分のシンボルとして置いていく犯罪者が、確かに居ましたよね？ そう、それはクモ男しか考えられません」
「クモ男だと？ あいつも、この前、刑務所を脱獄したばかりだ。じゃあ、逃走犯同士で手を組んで、復讐の目的で、警察に挑んできたと言うのか！」
「どうでしょう。でも、少なくても、この二名が絡んでいるのは間違いなさそうですね」
　ナカムラ警部は、ため息をつきながら、腕を組んだ。
「多分、3 日後に脱獄を遂行すると言う話も、ただのイタズラ声明文ではないでしょう。我々も、全力で、西トーキョー・シティ刑務所の警備に当たらなくてはなりません。ところで、連中が脱獄させると指名してきた畑柳庄蔵とは何者ですか？」
「古い暴力団やヤクザが衰退した現在、主に半グレ組織に資金援助をして、急速に勢力を拡大した裏社会のニューリーダーだよ。自分自身は、表の顔としては真っ当な会社を経営していて、裏では、密売組織やら詐欺集団、売春組織や強盗団などのスポンサーとなって、彼らが儲けた金だけをピンハネして、うまく自分は手を汚さずに、資産を増やしていやがった知能犯だ。まるで吸血鬼みたいな奴だよ。それが、最近、やっと、密売団との関係のウラが取れてね。なんとか、彼を逮捕して、投獄にまで漕ぎつけたんだ。こんな野郎に逃げられたら、また、あちこちの犯罪グループが勢いづいてしまう。もしかして、この畑柳庄蔵こそが、暗黒星の黒幕だったとは考えられんかね？」
「分かりません。とにかく、その人物を絶対に脱獄させない為にも、刑務所側としても、万全の体制を整えるべきです。畑柳については、すぐには逃げられない刑務所内の区画へと、監禁場所を変更した方がいいでしょう。また、畑柳自身は、この脱獄計画の事は何も知らない可能性もあるので、彼の前では、このような犯行予告があった事は、うかつに口にしないべきです。それから、何らかの異変がありましたら、僕も急いで刑務所の方へは駆けつけますので、その際は、連絡をお願いいたします」
　アケチ探偵も、神妙な顔で、大まかな対処策を、ナカムラ警部にと伝えたのだった。

その 2

　アケチ探偵からアドバイスを受けたナカムラ警部は、さっそく、西トーキョー・シティ

刑務所の方への手配を始めていた。西トーキョー・シティ刑務所では、その提言に従って、敏速に、大物囚人・畑柳庄蔵の地下牢舎への移動が行なわれ、所内全体の警備も増員されたのだった。

しかし、そこまではアケチ探偵の意見にきちんと従っていたにも関わらず、ナカムラ警部は、畑柳庄蔵にだけは、じかに面会してみたのであった。警部としては、何もかもアケチ探偵の言いなりではなく、自分も少しは行動して、出し抜いて、点数を稼ぎたかったのだ。

刑務所に向かう途中、ナカムラ警部が路上を歩いていると、一人の女性とすれ違った。黒い洋装の、上品そうな貴婦人だ。その美しい婦人が少しヨロけて、警部の肩にぶつかったかと思うと、彼女は、持っていたハンドバッグを下へと落としてしまった。

婦人が、慌てて、しゃがみ込む前に、警部がすかさず身をかがめた。気を利かせて、地面に落ちた婦人のバッグを拾ってあげたのである。その一瞬、警部の頭の先が婦人の方に向いた時、婦人の手が素早く動いたようにも見えたのだが、気付いた人間はいなかった。

「はい、カバン。気をつけてね」と、警部。

「ありがとうございます」

美しい婦人にお礼を言われて、ナカムラ警部は、機嫌良さそうに、通り過ぎていった。

婦人の方は、まだしばらく、その場に立ち止まっていた。そこへ、彼女の元へと歩み寄る人影があった。特徴のない平凡な顔の青年である。しかし、この男こそは、ニジュウ面相の変装の一つだったのだ。

「黒トカゲくん。うまく行きましたか？」と、ニジュウ面相は、婦人の耳元にささやいた。

そう。この怪しい貴婦人の方もまた、美しき女賊・黒トカゲなのだ。

「ええ。バッチリよ」黒トカゲは、得意げに、笑顔で答えたのだった。

数 10 分後、ナカムラ警部は、西トーキョー・シティ刑務所の施設内にと居た。ナカムラ警部と刑務所の所長は旧知の仲であり、この刑務所は、警部はほぼ顔パスなのだ。

警部が、畑柳庄蔵との接見を希望すると、その要求はすぐに受け入れられた。

今、ナカムラ警部は、地階の牢獄の前にいたのである。この場所に、畑柳庄蔵は収監されていたからだ。地階専用の接見室も、ここに設置されているのである。

「これから、囚人と話す内容は極秘事項だ。君たちは、外で待っていてくれたまえ。なあに、わし一人で会ってみても、問題はないよ」ナカムラ警部は、同伴していた看守に、そのように指示した。

そして、警部は、すでに畑柳庄蔵が待機していた接見室の中へと入っていったのである。

接見室は、こじんまりとした小部屋だった。中央に机があって、手錠をかけられたままの囚人服の畑柳が、机の一方に座って、待っていた。シャバにいた頃は、狼みたいにギラギラしている老人だった畑柳も、抑圧された牢獄生活が続いていたせいか、かなりヤツれた感じなのである。

「待たせた。わしは、警視庁第一課の警部のナカムラだ」

ナカムラ警部は、相手を威圧しながら、自分も、畑柳の真向かいの椅子に腰掛けた。彼は、ゆっくりと制帽を脱ぐと、それも机の隅へと置いた。

「警部さんがわざわざ会いに来たり、牢屋を地下に変更したり、さては、何か、あったんだな？」畑柳が、鋭く、ナカムラ警部に尋ねた。
「君は、こちらの質問にだけ答えてくれれば良い」
「お、お願いだ。家族との接見も許してくれ。わしは、わしは妻と会いたいんだ！」畑柳は、いきなり、詰め寄るようにナカムラ警部へと訴えた。
「君の協力次第では、考えてやらんでもないんだよ」
　警部の言葉に、畑柳は急におとなしくなった。警部としては、まさに、弱みを握って、有利に立った風なのである。警部は、すぐさま、本題に入った。
「さて。君に聞きたい事がある。この図形に見覚えはないかね？」
　ナカムラ警部が畑柳に見せたのは、もちろん、あの暗黒星のトレードマークだった。半紙に大きく描かれた、例の放射状の黒い線の図版を、警部は畑柳へと渡してみたのだ。
　畑柳は、神妙な表情を浮かべて、暗黒星のマークを眺めていた。どうも、何も知らなさそうな様子なのである。
　その時、外から、ドアを開けて、看守が入って来た。
「警部。警部あてに、お電話が来ております」
「この部屋に回せないのかね？」
「この部屋には、電話は設置しておりません」
　ナカムラ警部は、止むを得ず、面倒臭そうに立ち上がった。すぐ戻ってくる旨を畑柳に伝えて、警部はいったん外に出て行ったのである。
　この部屋の中には、再び、畑柳だけが一人で残された。
『畑柳くん。聞こえますか』
　突然、そんな若い男の声が耳に入って来たものだから、畑柳はギョッとしたのである。
『おっと。驚く事はありません。私たちは、あなたの事を救いに来たのです』
　そこで、畑柳も、その声が、警部の置いていった制帽から聞こえてくる事に気付いたのだった。
「超ミニの通信機だな。なんで、警部の制帽に取り付けた？」と、畑柳。
『私たちも、この警部とは、まんざら知らない間柄でもないものでしてね。ほら、囚人や被疑者と対面する時は、この警部は、いつも、机の上に制帽を置くクセがあるようでしょう？　今回は、ちょっと、それを利用させていただいたのですよ』
「一体、何者なんだ、お前は？」
『我々は、暗黒星。今はまだ、それ以上の事は教えられません。さあ、警部は、すぐに、この部屋に戻って来てしまいます。時間がありません。もし、あなたに脱獄する意志があるのならば、この帽子についた通信機とカプセルを早く受け取ってください。詳しい計画は、後でご連絡いたします』
「脱獄だと？　もし、脱獄すれば、妻とも会えるんだな？」
『もちろんです』
　畑柳に迷いはなかった。彼は、手錠をされた手で、素早く、警部の制帽についていた二つのアイテムをもぎ取ると、自分の服の中に隠してしまったのである。

　そして、ついに、脱獄決行の予告日がやって来た。

その日の昼間、西トーキョー・シティ郊外の、小高い丘の上には、二人の男が立っていた。空は晴れてたが、風はかなり強い。

二人の男が視線を向けていた方角には、さほど遠くない場所に、西トーキョー・シティ刑務所の全景がはっきりと見えていた。この二人こそは、暗黒星のニジュウ面相と魔術師なのである。

魔術師は、黒いマントに、シルクハットをかぶり、マジシャン・スタイルを決めていた。ニジュウ面相の方は、こないだも化けていた、特徴のない顔の青年の姿である。ただし、医療関係者のような白衣を着込んでいた。

「いよいよ、時間が来ましたね。魔術師くん、あなたの鮮やかなお手並みを期待していますよ」ニジュウ面相が、楽しそうに言った。

「おぬしの方はどうなのだ？ 途中で邪魔が入る恐れはないのかね？ そう、アケチ探偵の動向が気になる」と、魔術師。

「ご安心のほどを。そのへんも、全て、手は打ってあります」

「そうか。よろしい。では、ショータイムを始めようか」

魔術師も、ニンマリと口もとに笑みを浮かべたのだった。

大トーキョー・シティのオチャノミズ地区にあるアケチの探偵事務所に電話がかかって来たのは、それから間もなくの事だった。電話の主は、西トーキョー・シティ刑務所である。

さっそく、刑務所内で奇怪な事件が起きたと言うのだ。対処の仕方が分からなくて、アケチの元へ助けを求めてきたのである。

とにかく、電話のやり取りだけでは、さすがのアケチでも、うまく指揮は取れそうにはないのだ。

「今すぐ、そちらへ行きますので、警戒はそのままで、待っていてください」それだけを相手に伝えると、アケチは電話を切った。

あいにく、タイミングが悪く、今、事務所の他の人間は出払っていた。事務所の専用車も使用中なのだ。

やむなく、アケチ探偵は、一人で事務所を飛び出した。それから、事務所の前で、彼は、一台のタクシーを拾ったのである。

「西トーキョー・シティ刑務所まで」と、アケチは運転手に行き先を告げた。

運転手は無愛想で、タクシーはすぐに出発した。

ところが、少し走っただけで、アケチは、おかしな点に気が付いた。

「こっちは、刑務所とは逆の方向だ。運転手さん、間違えてないかい？」アケチは言った。

すると、運転席からは、気味の悪い笑い声が聞こえて来たのである。

「こっちの方角で正しいんだよ。なあ、アケチさんよ、オレ様の顔に見覚えはないかい？」

運転手が、ゆっくりとアケチの方へ振り返った。なんと、この運転手は、あの半獣の人間ヒョウだった！

アケチは、ギョッとして、目を見開いた。次の瞬間、そんな油断したアケチの顔めがめて、睡眠ガスが噴きかかったのだった。

その３

たとえ、脱獄の実行予告が届いていたにしても、刑務所は、安易に、その日の日程を変える訳にはいかないのだ。そんな事をすれば、むしろ、逆に、囚人たちに何かが起きている事を勘付かれて、暴動が起きてしまう原因にもなりかねない。

だから、暗黒星の犯行予告の当日も、西トーキョー・シティ刑務所では、昼間は、いつも通りの囚人たちの庭での骨休めが許されたのだった。こんな天気のいい日に、庭への外出が許可されなければ、それこそ、囚人たちに奇妙に思われてしまうのである。

もっとも、庭へ出るのが認められるのも、いつもながらの、地上階の囚人だけだった。凶悪囚や地下牢獄に収監された畑柳庄蔵などは、やっぱり、この野外での休憩は許してもらえないのだ。だから、平常どおりに囚人たちの野外休憩を敢行したところで、何も心配はないはずなのであった。

なんたって、所内の庭の周りには、グルリとコンクリートの塀が取り囲んでいる。警備員の方だって、普段よりも増員されているのだ。いかなる不安要素もないはずなのである。

そのはずだった。

しかし、囚人たちが庭でくつろいだり、日向ぼっこをしている最中、ふと、どよめきが起き始めた。誰もが、空の方を見て、騒いでいるのだ。

看守や警備員たちも、その異変に気がついた。彼らも、空を見上げたのである。

空には、色とりどりの風船が浮かんでいた。それも、かなりの数だ。遊園地で子供向けに売られているような小さな風船らしいが、それが、何十個も、この刑務所のちょうど真上あたりの空に群がっていたのである。

どこからか飛ばされて来たもののようだ。そして、気流の関係で、どうやら、この刑務所の真上に停滞してしまったみたいなのである。

今のところ、この風船の大群が、害のあるものなのかどうかは、全く分からなかった。だが、刑務所内を混乱させるには十分な出来事だったのである。

庭に出ていた囚人たちは、至急、施設内へと連れ戻された。幸い、この騒動に乗じて、逃げ出すような囚人もいなかった。警備員たちも、ひとまずは、施設内に退避して、動向を見守ったのである。

この謎の風船の正体は、相変わらず、不明だった。しかし、犯罪予告状が届いているからには、警戒する以外にないのだ。もしかしたら、この風船の中には、爆発物が仕込まれているのかもしれない。あるいは、毒ガスが入っていて、上空で破裂したあと、その毒ガスだけが刑務所へと降下してくる可能性もあるのだ。

考えれば考えるほど、恐ろしい状況ばかりが思い浮かんでしまうのである。

連絡を受けて、警視庁の担当者であるナカムラ警部が、ただちに西トーキョー・シティ刑務所へと訪れたが、彼の手腕では、こんな異常な事件はさばけそうにはなかった。刑務所内の幹部たちも、もっと違う人物の助言を期待していたのである。すなわち、彼らは、すぐに、私立探偵アケチコゴロウの知恵を借りる事を望んだのだ。

よって、彼らは、戸惑う事なく、急いで、アケチ探偵の事務所へ電話をしてみたのであった。

だが、アケチ探偵は、すぐ、刑務所にやって来る事はなかった。
彼は、まんまと暗黒星の罠にはまってしまい、タクシー運転手に化けた人間ヒョウによって、そのまま拉致されてしまったからである。
西トーキョー・シティ刑務所が大騒ぎになっていた頃、アケチ探偵は、どこか見知らぬ小部屋の中にいた。
四方の壁の全てがコンクリートで出来た、窓ひとつない、質素な個室である。地下室のようにも見えた。
ただし、アケチ探偵自身が、そこまで判断できていた訳ではない。彼自身は、睡眠ガスで眠っている間に、この部屋へと連れてこられて、それから、部屋の中央にある椅子に座らされ、縄で縛って、拘束されていたからである。まさに、絶体絶命の捕らわれの身なのだ。
そして、アケチのそばには、得意げな様子の人間ヒョウが立っていた。
「悪いな。今回の脱獄作戦では、どうしても、あんたには邪魔されたくなかったんでね」人間ヒョウは、笑いながら、言った。
アケチは、怒りの視線を、人間ヒョウの方に向けていた。しかし、かなりキツく椅子に縛り付けられているらしくて、体は微動だにしないのだ。
「今ごろ、別動隊のニジュウ面相と魔術師が、刑務所で行動を開始している。全てが完了するまでは、あんたには、ここに居てもらうよ」
「なんだって！ 暗黒星には、ニジュウ面相と魔術師も一枚かんでいたのか」アケチは怒鳴った。猿ぐつわまでは噛まされていないので、かろうじて会話はできるのである。
「そうさ。今回の計画だって、全て、ニジュウ面相が考案したんだぜ。お前を誘拐する段取りについてもな。ほんとは、オレ様としては、すぐにでも、お前のことを絞め殺してやりたかったんだ。でも、それは、仲間にかたく禁止されている。ふん、命拾いしたな。だが、あとで、他の仲間も連れてきてやるよ。負け犬となったお前のことを、皆であざ笑う為にな」
それだけ話すと、人間ヒョウは、この部屋にある唯一つのドアから出ていったのだった。
部屋には、とりことなったアケチ探偵だけが残されたのである。

西トーキョー・シティ刑務所で起きた風船騒動は、言うまでもなく、魔術師が引き起こしたものだった。
彼が、あの小高い丘から、大量の玩具用のゴム風船を、刑務所の方むけて、わざと飛ばしたのである。気流によって、ほとんどの風船が、刑務所の上空でとどまってしまう事も、十分に計算済みであった。
魔術師は、相変わらず、丘の上で佇んでいた。スコープを目に当てて、刑務所の様子をじっと伺っているのだ。と言っても、刑務所は高い塀の奥にあるので、施設内の状況まで見えた訳ではない。でも、刑務所の上空に風船があって、多分、その下の刑務所内が混乱しているであろう事さえ確認できれば、それで良かったのだ。
「さて。次のショーを始めるか」そう呟きながら、魔術師は、ライフルを手に取った。その照準を、刑務所の空に漂っている風船へと定めたのだ。

今、この丘の上にいるのは、魔術師だけだった。ニジュウ面相もまた、すでに次の行動を始めていたみたいなのである。

西トーキョー・シティ刑務所の上空にあった風船が、突然、ぱあんぱあんと割れ出した。
例の小高い丘から、魔術師が狙撃銃で狙い撃ちして、一つ一つ、片っ端から割っているのだ。百発百中の見事な腕前である。魔術師にしてみれば、風船割りのショーと同じ感覚なのであろう。
だが、風船の中身を警戒して、これまで、この風船を割らないように、ソーッとしていた刑務所側にしてみれば、これは緊急事態なのだった。誰もが動揺して、どう対処したらいいか分からずに困っていたのだ。頼みの綱だったアケチ探偵は、いまだ、この刑務所へと到着しそうな気配はなかった。
そして、この異様な空気は、牢の中に入れられている囚人たちにも、何となく伝わっていたのだ。しかし、彼らは、看守たちが慌てていても、その理由は何も教えてもらえなかったのである。
それは、地階の牢獄にしても同様だった。
畑柳庄蔵が閉じ込められていた牢屋の前では、特に多めに、複数名の看守が警備に当たっていたのだが、彼らがバタバタと、地上階の方へと散ってしまった。地下の牢屋を担当する看守は、全体で一人だけになってしまったのである。風船騒動で、その対応で忙しくなったので、他の警備員は皆、他にと回されてしまったのだ。
でも、その事によって、畑柳への見張りもかなり手薄になり、畑柳も、看守の目をうまく盗めるようになったのだった。
『さあ、今です。畑柳くん、君にお渡ししたカプセルの中の錠剤を、看守にバレないように、こっそり、お飲みなさい。その前に、この通信機はトイレへと流しておいて、証拠隠滅するのを忘れないようにね』
畑柳が入手したミニ通信機が、再び、畑柳にと話し掛けてきた。
畑柳は、その指示に従うのに、まだ戸惑っていた雰囲気だ。
「この薬を飲めば、なぜ、脱獄できるんだ？」と、畑柳。
『あなたは、それを飲むだけで良いのです。あとは、我々に任せてください』
「まさか、死んだりはしないだろうね？」
通信機の声は、それには答えなかった。
だが、もう時間がないのである。もし、上階に行った看守たちが戻ってきたら、もはや、秘密裏に薬を飲む事も出来なくなってしまうであろう。
畑柳は、じっと、その小さな錠剤を見つめていた。そのあと、彼は、目を瞑り、思い切って、その薬をグイッと自分の口の中へと放り込んだのである！

畑柳が通信機で会話していた相手は、ニジュウ面相だった。
彼は、西トーキョー・シティ刑務所から、ほんの数百メートルほど離れた場所にいて、誰にも見つからないように用心しながら、畑柳と連絡を取り合っていたのである。
ニジュウ面相は、通信機を通して、畑柳が指示通りに薬を飲んだ事を確認すると、満

足げな表情を浮かべた。
彼は、口もとにマスクをつけて、白いヘルメットをかぶった。全身白づくめで、その出で立ちは、完全に、病院の救急隊員なのである。そして、彼のそばには、真っ白な患者搬送車すらも停まっていた！

その４

結論から言うと、西トーキョー・シティ刑務所の上空に出没した大量の風船は、全くの無害であった。
風船は外部から狙撃されて、全て割られてしまったが、その中から出現したのは、いずれも、小さな紙切れで、その紙は風に揺られながら、ゆっくりと落下して、刑務所内の庭の上へと四散したのだ。
それでも、刑務所の管理者たちは、まだ警戒を緩める事はできず、おっかなびっくりで、庭の地面に散らばっている紙切れの方に近寄っていった。
十分に用心しながら、その紙切れを拾ってみると、それらには、いずれも、黒い放射状の線が描かれていた。一部の関係者には、すでにご存知の「暗黒星」のマークなのだ。しかし、事情を知らない者たちにとっては、まるで意味不明のメッセージなのであった。
そうやって、刑務所の責任者たちが、風船騒動の方に、すっかり振り回されていた最中に、今度は、地階の牢獄の方から、緊急の報告が届いた。
なにやら、地下の牢獄に収監していた畑柳庄蔵の様子がおかしいと言うのである。倒れた状態で、少しも身動きしないし、呼びかけても返事もしないらしいのだ。もしかしたら死んでいるのではないかと、見張っていた看守は訴えるのであった。
あの狡猾な畑柳庄蔵の事だ。あるいは、何らかの企みがあって、病気のフリでもしているのかもしれない。そもそも、彼には、今日は、脱獄の予告が出ているのだ。
刑務所の所長やナカムラ警部らは、そうとう慎重になって、畑柳のいる牢舎へと向かった。そして、まずは、彼の部屋を外から確認して、看守の報告が事実だと分かると、万全の体制のもとで、その部屋の扉を開いたのである。
刑務所に配属されていた矯正医官が、護衛に十分に守られながら、畑柳の牢屋の中へと入っていった。矯正医官は、軽く、畑柳の体を調べてみたが、確かに、呼吸が止まっているようなのだった。しかし、簡易的な診断では、正確な死因までは判別できないのだ。
ターゲットがこんな突然の非業の死を遂げてしまったと言う事は、暗黒星の犯罪予告は、まんまと失敗に終わってしまったと見るべきなのだろうか。いや、大胆極まる犯罪者組織のことだ。この畑柳の死こそは、実は暗黒星の仕業かもしれず、「死なせる事で、畑柳を刑務所の生活から解放してやった」と言うブラックジョークだったのかもしれないのである。
刑務所の重鎮たちが完全に狼狽しているところに、今度は、本庁の方から、死体の運送車が、この刑務所にと到着した。死亡した畑柳を引き取って、正式な司法解剖を行ない、死因を特定する為である。
とにかく、短い時間に、次々にいろいろな事が起こりすぎていた。所長らも、とこと

ん疲弊しきっており、思考力がだいぶ鈍っていたようだ。彼らは、この死体の回収人が現われると、ほとんど疑いもせずに、畑柳の死体を引き渡してしまったのである。

最初の風船騒動が始まってから、全てが、わずか3時間足らずの出来事であった。

とりあえず、ひと段落はついたみたいなので、所長もナカムラ警部も、所長室の中でくつろいでいた。

すると、お次は、ようやく、アケチ探偵が、この刑務所に到着したとの連絡が入ったのだった。

アケチ探偵は、まっすぐに、所長室へと顔を出した。彼の様子を見ると、彼の方も、どこか疲れた風で、目が血走っているのである。着ているスーツも、ヨレヨレなのだ。

「遅いよ、アケチくん。何をやっていたのかね」と、ナカムラ警部が文句を言った。

「すっかり、敵にしてやられました。僕も、相手の事をかなり甘く見過ぎていたようです。それで、こちらの方はどうなっているのですか。状況を教えてください」

警部は、今までの事情を詳しくアケチへと説明した。

それを聞いているうちに、アケチの表情が見る見ると変わっていったのだった。

「しまった！ こっちの方も、すっかり手玉に取られてしまったかもしれません。本庁にすぐ連絡してください！ 死人を運んだ搬送車が本物かどうか、急いで確認を取るのです！ それから、風船が外部から撃ち割られたと言うのであれば、当然、近くに狙撃した人物がいた事になります。この刑務所の周辺の地形を、至急、調べてください。風船を狙いやすい地点を特定して、そこを徹底的に捜査するのです。ああ、でも、もう時間が経ち過ぎているから、間に合わないかもしれない！」

アケチ探偵の指示のもと、刑務所の職員たちは、再び、活発に動き出したのだった。

だが、何もかも、アケチの悪い予想どおりだったのである。

本庁に問い合わせると、まだ、死体運送用の車は、刑務所の方へは派遣されていなかった。先ほど訪れた搬送車はニセモノだったのだ。そのニセ搬送車は、刑務所内がゴタゴタしている状態のドサクサに紛れて、まんまと、畑柳の死体を盗んでいってしまったのである。

風船を放った出発点とその狙撃場所も、あの小高い丘だったと、すぐに判明したのだが、こちらも、捜査チームが乗り込んでいった時には、すでに、誰もいない状態だった。のみならず、抜かりのない犯人は、手がかりを与えないようにと、何一つ、証拠を残してはいなかったのである。

こうして、警察機構と暗黒星の最初の対決は、どうやら、警察側がすっかり出し抜かれた形で終わったみたいなのであった。

だが、苦汁を飲まされたのは、必ずしも、警察側ばかりではなかった。

同じぐらいの時刻に、暗黒星の面々は、アケチ探偵が監禁されているはずの怪しい部屋へと出向いていた。その場所で、彼らは、今、呆然としていたのである。

そこには、拉致したはずのアケチの姿はなかった。アケチを座らせていた椅子もひっくり返り、彼を縛っていた縄もバラバラになって、床に撒き散らされていた。この部屋のドアからして、こじ開けられたような感じで、開きっぱなしになっていたのである。つまり、アケチには、明らかに逃げられていたのだ。

「これは、どう言う事なのかね、人間ヒョウ？」魔術師が、ドスの効いた声で、人間ヒョウに詰問した。
「た、確かに、オレ様は、アケチをここに捕まえておいたんだ。椅子に縄で縛り付けて、絶対に抜け出せるはずがなかった！」人間ヒョウが、うろたえながら、言い返した。
「黙れ、人間ヒョウ！ お前は、アケチのやつが、探偵の秘密道具を隠し持っていた事を知らなかったのか？ きっと、奴はそれを使って、脱出したんだよ。全部、うっかりしていたお前の責任だ！」クモ男が、手厳しく、人間ヒョウのことを怒鳴りつけた。
「でも、オレ様だって、アケチのことは、キツく縛り付けていたんだぜ！ 道具が服の中に入っていたとしても、そう簡単には取り出す事はできなかったはずだ」
「うるさい、口答えするな！」
「まあまあ、皆さん。人間ヒョウくんの事ばかりを責めるのはヤメにしましょう」と、ここで助け舟を出してくれたのは、ニジュウ面相であった。「実は、私にも、ちょっと思い当たる事があるのですよ」
「何がだね、ニジュウ面相？」と、魔術師。
「私は、以前、憎き宿敵アケチ探偵に思い知らせてやる為に、彼のことを捕まえて、そのまま、海にあるブイの中に閉じ込めて、スミダ川に流してやった事があったのです。いえ、本気で殺すつもりはありませんでしたよ。あくまで、怖がらせる目的の脅しであり、時間が経てば、ブイの中から出してやる予定でした。ところが、私がブイを回収してみますと、その時には、すでにアケチくんはブイの中には居なかったのです。彼は、自力で、ブイの中から脱出したらしいのであります。正直な話、これは信じられない超人技だとも言えましょう」
　他の仲間は、神妙な顔になって、ニジュウ面相の話に聞き入っていた。
「待って！ ボクも、似たような経験をした事があるわ」
　急に喋り始めたのは、黒トカゲだった。彼女も、不思議そうな表情を浮かべているのだ。
「アケチさんが、ボクのアジトを突き止めて、その中に忍び込んでいた事があったのよ。彼ったら、ボクの愛用している長椅子の中に潜り込んで、そこに隠れていたのよ。でも、ボクは、それに気付いちゃったから、アケチさんが中にいる状態で、その長椅子を縄でグルグル巻きにして縛り付けちゃったの。これで、彼は、長椅子の外へは出られなくなったわ。だから、ボクは、部下に命令して、その長椅子を海岸から海に投げ捨ててしまったの！」
　ニジュウ面相に続いて、黒トカゲも、アケチ探偵相手のとんでもない激闘の記憶を回顧しているのだ。
「そう。ボクは、あの巨人と呼ばれる名探偵を殺しちゃったのよ。だって、す巻きにして、海に捨てたんだから、絶対に助かりっこないもん。ボクさ、こんな事をしたあとに、急に後悔してね、悲しくなってきて、ボロボロ泣いちゃったのよ。人を殺して、あんな感傷的な気持ちになったのは初めてだった。でもね、それなのに、アケチさんだったら、死んではいなかった。何日か経ってから、彼ときたら、まるで何事もなかったかのように、また、皆の前に平然と姿を現わしたのよ！」
　黒トカゲの打ち明けた話に、他の仲間たちは、ますます、がく然としまったのであった。

「へええ。面白いじゃんか。アケチの奴、不死身の探偵って訳か。ますます、これから戦うのが楽しみになってきたぜ」そう能天気な事をうそぶいたのは一寸法師だ。
「一体、どうなっているのだ？ アケチの野郎！」と、クモ男も苦々しく唸った。
「とにかく、アケチ探偵には、まだまだ謎の部分が多いのです。その秘密を解かない限りは、アケチくんに勝つ事は出来ないのかもしれませんね。さあ、これからは、我々で、アケチくんの謎を探っていく事にしましょう」
　ニジュウ面相が、仲間を見回しながら、話を締めくくったのだった。
　アケチが逃げたと言う事は、この監禁場所の地理も、当然、バレてしまった事になるだろう。間もなく、アケチ探偵は、警官隊を連れて、この部屋にも攻め込んでくるに違いない。全く、本当のアジトの方に、アケチを拉致しておかなくて、実に良かったと言うものなのだ。
　彼ら暗黒星は、決して手がかりになるような証拠は残さなかった。彼らは、速やかに、この場所からは立ち去ったのである。

その５

　ところで、今回の脱獄事件の主役であった畑柳庄蔵は、どうなったのであろうか。
　言うまでもなく、畑柳の死体を持ち去ったニセの搬送車の運転手の正体は、ニジュウ面相であった。彼は、首尾よく、畑柳の亡き骸を手に入れると、それを暗黒星のアジトへと運び込んだのだ。すなわち、あの謎のプラネタリウム会場にである。
　今、彼らのアジトでは、その客席の一角にと、ちょっとしたスペースが設けられて、そこに西洋風の黒い棺が置かれていた。その棺の中に、仰向けになった畑柳の遺体が寝かされていたのだ。まるで、ドラキュラでも眠っているかのような光景なのである。
　その畑柳の棺の周りを、暗黒星の面々がグルリと囲んでいた。彼らは、特に会話している訳でもない。誰もが、無口のまま、畑柳の姿を見守っているのだ。ただし、連中は、時々、時計を見たりして、時間だけは妙に気にしていたようだった。
　やがて、死んでいたかと思われた畑柳の目が、静かに開いた。おお、彼は復活したのである。
「畑柳さん、お目覚めになりましたか。ようこそ、暗黒星へ」ニジュウ面相が、代表して、気取った感じで、畑柳にと話しかけた。
　だが、肝心の畑柳の方は、すっかり狼狽しているのである。彼は、目を開けたあと、棺の中で上体を起こしたが、キョトンとした様子で、周囲を見回していた。
「一体、何が起きたのだ？ 君たちは何者だ？ ここは、どこなのだ？ 刑務所じゃないのか？」畑柳の口からは、疑問ばかりが飛び出した。
「畑柳くん、君は一度死んだのだよ。そして、死体として刑務所の外へ運び出されたものを、我々の手で奪取したのだ」と、クモ男。
「え？ 死んだって？」畑柳はおののいた。
「死んだと言っても、仮死状態だ。軍部が研究していた仮死剤クラーレを使わせてもらったのだ。この薬剤は、本来は、前線で戦っている兵士にと飲ませて、一時的に死んだフ

リをさせ、敵軍を欺く作戦の為に開発されたものだった。それが、結局、実用されないまま、軍の研究所の奥で眠っていたのを、我々の方でくすねて、無断で使わせてもらったのだ」魔術師が説明した。
「あんたは、きっかり8時間、死に続けていて、たった今、息を吹き返したのさ」と、人間ヒョウ。
「おお。なんて、大胆な事をする人々なのだ」さすがの犯罪王の畑柳も、これには驚嘆したのだった。
「でも、こうして、あなたは見事に脱獄する事ができたのよ。なにも、文句はないでしょう？」黒トカゲが、怪しい微笑みを浮かべてみせた。
　美女に優しく話しかけられると、畑柳の方も、悪い気はしないのである。
「さあて、最後の仕上げと参りましょう。畑柳さん、こちらに来てください」
　ニジュウ面相がそう言って、畑柳をアジトの隅の方へと誘導した。
　そこの壁には、大きな垂れ幕がかかっていた。黒ではなく、真っ白な暗幕だ。そして、その暗幕の表面には、例の暗黒星のマークが大きく描かれていたのである。
　畑柳は、その暗幕の前に立たされた。それから、彼の元気そうな姿を、人間ヒョウがパシャパシャと写真に撮ったのだった。
「警察に送る証拠写真です。あなたの事を、死体ではなく、生きた状態で脱獄させた事を、警察の皆さんやアケチくんにも誇示する必要がありますので」ニジュウ面相が説明した。
「どうです。畑柳さん、一筆書きませんか？ 恨み重なる警察に、何か捨てゼリフでも吐いてやりたいでしょう？」
　ニジュウ面相の提案に、畑柳は同意した。彼は、便箋に、ささっと、警察に対する憎しみと復讐を誓う言葉を書き綴ったのである。
　こうして、畑柳の姿を写した写真と彼の書いた便箋を同封する事で、一通の手紙が完成した。その手紙を、ニジュウ面相は一寸法師にと託したのである。
「一寸法師くん。では、締めくくりは、君にお願いしますね。この手紙を、このアジトから少しでも離れた場所から発送して下さい。隣の県のポストに投函してみるのも良いかもしれませんね」
「へへ。任せときな！」
　手紙を受け取った一寸法師は、陽気に、アジトから出て行ったのだった。
「さて。そろそろ、君たちの事を、もっと詳しく教えてくれてもいいんじゃないかな」一通りの作業に付き合い終えた畑柳は、落ち着いた声で言った。「なぜ、わしの事を脱獄させてくれたのだ？ 警察にいっぱい食わせたかっただけでもあるまい」
「その通りです。我々は、あなたが一流の悪人だと見込んだからこそ、脱獄させたのです」ニジュウ面相が答えた。「そう。ここにいるメンバーは、いずれも、この国でも有数の犯罪者ばかりなのです」
「なるほどな。確かに、お前たちの顔と名前は、新聞などで見た事があるぞ」
「我々は、全員で手を結びました。巨大な悪の同盟です。我々の手で、この国に悪の王国を築くのです。我々は、あなたにも、我が暗黒星への参加を強制いたします」
「ほほう、それは名誉なお話だな。だが、お前たちの目的はそれだけではあるまい。わざわざ、わしに近付いたのは、他にも理由があるのだろう？」

「そこまで気が付いておられるのでしたら、話が早いです。畑柳さん、あなたは、半グレ組織の総元締めになる事で、かなり荒稼ぎしていましたね？ 警察には捕まりましたが、あなたの犯罪歴の全てが裁かれた訳じゃありませんので、これまで貯めた財産の大半は、どこかにまだ隠したままのはずです。我々としては、我が暗黒星の財源にする為、ぜひ、あなたの秘蔵の財産を、我々にと、ご提供していただきたいのです」
「ふん。そう来たか」
「嫌とは言わせませんよ」
「良かろう。わしは、家族とさえ、また会えるのなら、それで十分なのだ」
　しかし、その時だった。突如、畑柳が苦しみだしたのである。彼は、顔を手で覆って、うずくまった。
「ううう。なんだ、体が熱い！ 一体、どうしたんだ！」畑柳は呻いた。
　周りにいた悪人たちも、驚いて、畑柳の様子を眺めていた。そして、畑柳の身に起きた異変に気が付いて、彼らもハッとしたのである。
　畑柳が、恐る恐る、顔を上げた。それは、今までとは全く違った形相となっていた。
　皮膚が干からびているのである。目は大きく剥き出しになり、鼻は欠け、唇も無くなってしまって、歯が露出してしまっていた。まるで骸骨のような顔なのだ。
　その悲惨な状況に、周りにいた連中は、すっかり青ざめていたが、最初、畑柳自身は、何が起きたのか分かっていなかった。だが、自分の手を見た時、その手もまた、ミイラのように干からびていたのを知り、素早く、事態に勘づいたのだ。
「そうか。クラーレは、まだ未完成だったのだ。こんな副作用があったから、実戦には投入されずに、使用不許可のまま、研究所に置かれていたのか」クモ男が呟いた。
　まさか、このような結末になるとは、畑柳もがく然としてしまったのである。

　暗黒星が送った手紙は、後日、間違いなく、警視庁にと届いたのだった。
　死んだはずの畑柳庄蔵の写真と、彼が書いたと思われる手紙に、警察組織は大いに動揺させられた。
　この写真が合成である可能性や、手紙が畑柳の筆跡を真似たニセモノである可能性などが、徹底的に調べられたのだが、十分な確証は得られなかった。
　もし、畑柳庄蔵が本当に生きていたのだとすれば、彼は暗黒星と合流した事になる。それは、大トーキョー・シティや国家警察にとっても、最悪のシナリオなのだ。
　だが、畑柳本人の実際の生きた姿が目撃されていない以上は、今のところは、なんとも言えないのである。
　ひとまずは、畑柳庄蔵の生死については、「刑務所内で突然死した」と言う報告だけが、公式な記録として世間には発表される事になった。そして、彼がまだ生存しているかもしれない疑惑については、一部の関係者の間でだけの極秘事項となったのである。

　　悪のカリスマ脱獄計画・終

（ 2022 年 1 月作品 ）

解説

そもそも、私が怪盗ニジュウ面相を自分の小説に登場させたのは、「お題に生きる男」（ 2015 年 11 月 ）に怪盗を出す必然性があって、どうせアホ小説なのだから、思いっきり分かりやすい怪盗にしちゃえ、という安易な発想に落ち着いたからでした。

ところが、アホ小説なりに書いてて面白くなってきちゃいまして、悪のりして、共幻文庫のお題付きコンテストが再開するならば、再開記念の小説にもニジュウ面相を登場させちゃえ、って事で「笑いを盗む男」を書き上げちゃたのであります。

その後も悪ふざけはエスカレートする一方で、
「知ってる人だけのお話」を経たあと、「AI に負けるな」にて、共幻文庫コンテストで展開したニジュウ面相シリーズは、とりあえず終了となりました。

アホ小説なりに、毎回、色々と実験的な書き方をしておりまして、「お題に生きる男」は会話劇、「笑いを盗む男」は三人称に見せかけた一人称小説、「AI に負けるな」は中井英夫の「幻想博物館」の書き方をリスペクトさせていただきました。

はっきり言って、これ以上奇想天外なアイディアは出てきそうにないので、このシリーズはもう続けられそうにないのですが、キャラクターたち（ ニジュウ面相やアケチ探偵 ）だけスピンオフして、「ニジュウ面相の別荘」や「アケチ大戦争」みたいな外伝なら今後も執筆するかもしれません。

「ニジュウ面相クロニクル」解題

実は、最初に閃いたのは、「ニジュウ面相 対赤ずきん」と言う題名の部分でした。その方向で、ニジュウ面相シリーズの新作を書くつもりで進めていたのですが、その最中、何となく、「小説家になろう」サイトの過去の「夏のホラー」企画のお題に挑戦したい気持ちになってきました。結果として、これら二つの思惑が混ざり合い、「ニジュウ面相クロニクル」シリーズの誕生にと至った訳です。

「ニジュウ面相クロニクル」は、これまでのニジュウ面相シリーズの各エピソードを補完するような内容になっていますが、実際には、どれも、後から関連づけて、こじ付けたのでした。「ニジュウ面相クロニクル」シリーズの各話は、基本的に、お題の企画が開催された時期の物語という事になっています。だから、既成のニジュウ面相シリーズの各話の合間に組み込まれるスタイルになっているのです。

「不思議を探す男」は、2015 年の「夏のホラー」企画のお題を使用しており、その為、既成のニジュウ面相シリーズの第 1 作「お題に生きる男」（ 2015 年末 ）より以前の物語となったので、ゆえに、ニジュウ面相シリーズそのもののオープニングの物語という事にさせていただきました。のみならず、この題名は、続くエピソード「お題に生きる男」「笑いを盗む男」（ 2016 年 3 月 ）とも、「〇〇男」と韻を踏ませていただいております。

内容につきましては、「学校の七不思議のタブーの七つめ」から思いつくオチを片っ端から紹介していく、と言う書き方を用いてみました。締めの言葉も、きちんと後続作「お題に生きる男」を意識したものになっています。

「裏野ハイツ奇譚」は、2016 年の「夏のホラー」企画のお題を使用した為、共幻文庫短編小説コンテスト 2016 ですでに展開していた既成のニジュウ面相シリーズと、時期がすっかり被ってしまいました。だから、単発エピソードであるのと同時に、「知ってる人だけのお話」と「AI に負けるな」（ 共に、2016 年 7 月 ）の隙間を埋めるミッシングリンクのようなストーリーにもなっているのです。やはり、締めのアケチ探偵のセリフが、「AI に負けるな」への布石となっています。

この作品では、新キャラとして、コバヤシ青年が登場しました。原典どおりの少年キャラにしなかったのは、ストーリー展開上の都合です。タイトルには、昔の小説っぽく、「奇譚」を使わせていただきました。また、「ニジュウ面相は誰だ?」（ 2019 年 9 月 ）への伏線って訳でもなかったのですが、ニジュウ面相が女性にも変装できる事が、本編中でさりげなく提示されています。

「遊園地の怪人」は、2017 年の「夏のホラー」企画のお題を使用した物語で、「ニジュウ面相の別荘」（ 2016 年 8 月 ）から 1 年後の話である事が明記されています。本作は、いかにも原典の「少年探偵団」ものっぽいタイトルを付けさせていただきました。しかし、今回の主役キャラは、アケチ探偵でもニジュウ面相でもなく、何と、ナカムラ警部なのでありました。

元ネタのお題では、遊園地をモチーフにした７つの課題も用意されていて、それらをサラリと流してしまいますと、「裏野ハイツ奇譚」と同じ構成になってしまいますので、きちんと７つ分のミニエピソードも書かせていただきました。ニジュウ面相が化けていたウサギのマスコットも、実は、お題に添えられていたイラストからイメージしたものだったりします。

2018 年の「夏のホラー」企画のお題を使用して、ようやく「ニジュウ面相 対赤ずきん」も執筆されたのでした。表題は「ニジュウ面相 対赤ずきん」ですが、裏テーマは「狼男（ 洋ホラー ）対人面犬（ 和ホラー ）」にもなっているのです。さらには、本作は、ニジュウ面相ネタであると同時に、赤ずきんが出てくる「狼ハンター」シリーズの新作でもあります。

本作では、アケチ探偵ご本人は一切登場せず、代わりに、原典「少年探偵団」でもレアキャラのハナザキマユミが主演を務めています。あまり「少年探偵団」に詳しくない人では、元ネタが分からなかったかもしれません。しかも、コバヤシ君と年齢をひっくり返して、10 歳ぐらいの少女キャラにさせていただきました。この設定は、けっこう気に入ってまして、「少女探偵マユミ」なんてスピンオフが書けないかな、と思ったぐらいです。

ふざけた表題であるにも関わらず、今回の作品は、かなり正統な推理小説っぽい内容になっています。本シリーズでは初の、きちんと謎解き推理するシーンがあります。また、街道を逃走する狼男のトリックは原典の二十面相の「黄金豹」からの流用だし、江戸川宝石店という名称は言うまでもなく江戸川乱歩が元ネタ、「ロマノフ王家の宝冠の大ダイヤモンド」と言うのも、原典において二十面相が最初に盗んだ、栄誉ある宝物です。（「怪人二十面相」）さらに、コミック「女探偵アガサ」も漫画「名探偵コナン」の題名パロディなのでした。ラストでコバヤシ青年が引用した言葉も、アケチコゴロウの言葉などではなく、実は、江戸川乱歩先生の名言だったりします。

「アケチ大戦争」の時系列

長編「アケチ大戦争」は、実は「吸血鬼編」と「少年探偵団編」の内容が並行して進む形（同時進行）で、ストーリーが構成されている。

よって、この２エピソードは、それぞれが独立して読める一方で、実際には、片方の物語の中に、もう片方の物語の補足説明（伏線）が含まれていたりもするのだ。

例えば、「少年探偵団編」の中では、湖畔亭の付近に吸血鬼が現われたと言う情報が語られているが、その吸血鬼が出てくるエピソード自体は「吸血鬼編」の方で描かれている、といった風に。

「吸血鬼編」と「少年探偵団編」は、極力、時間経過に沿った形で、各話を順に公開している。だから、公開した同時期に、その回をすぐに読んでいただければ、「アケチ大戦争」の世界の時間帯をそのまま楽しむ事もできるのだが、それが出来ない読者もいる事だろう。

そこで、そのような読者のために、「吸血鬼編」と「少年探偵団編」の各話の公開順（作品の中の時間の流れ）を、ここに提示しておく。

＜少年探偵団編＞
金色の怪談
少年探偵団誕生　　＜吸血鬼編＞プロローグ
博覧会の怪盗
黄金仮面の知恵
悪魔の結託
　　奇妙な決闘
若き名探偵たち
　　浴場の怪人
湖畔亭の事件
死を呼ぶ黄金仮面
　　帰路の二人
惨劇の夜は明けて
アケチの名推理
賊の掟
盗まれた宝物
　　アトリエの怪
名探偵危機一髪

	倭文子と茂
	誘拐捜査
	犯人たち
	人質交換当日
	捕まった倭文子
	誘拐魔の正体
	コゴロー対クモ男
史上最大の盗難事件	
暴かれたトリック	
真犯人の正体	
探偵団の勝利	
黄金仮面のアジト	
動き出した阿弥陀像	
大爆発	
	深まる疑惑
	アケチ青年別働隊出動！
	銀仮面の行方
	怪奇シジュウ面相
	宇宙怪人
	空中戦！ 空飛ぶニジュウ面相
	暗黒星の反省会
怪しいロボット	怪しい偵察者
天野くんの冒険	フミヨの冒険
少女との遭遇	怪人との遭遇
	ジャングルの猛獣
魔法博士	
	暗闇の SOS
	フミヨ救出作戦
	動く鉄仮面
	ロウ人形展の怪異
	人間ヒョウを捕らえよ！
	再会
洋館の怪異	大鉄傘の怪人
	昇天する悪魔
	スミダ川の追跡
	邪悪なたくらみ
虎井博士の研究所	
奇術博士	
天野くんちの異変	畑柳邸の異変

都会の猛獣
大友くんの追跡
虎の牙
探偵バッジの秘密
副団長救出作戦
動くソフォクレス像
透明人間の種明かし
福田博士の実験室
赤土の謎
捕らわれた二人
恐怖のトラ屋敷
監禁からの SOS
夜の襲撃
せまる魔の手
5 人のアケチコゴロウ
魔法博士の正体
黄金の怪獣
大トリック
ニジュウ面相を捕らえよ！
ほろびる悪魔

いずみの青春

ラインナップ

「アリとギリギリデス」
「ビデオの中の彼女」
「姪っこんぷれっくす」
「泉より愛をこめて」
「絵画の刑罰」
「いけない同級生」
「V.O. ルーム」
「脱衣ゲーム」
「ピアッシング」（「いずみちゃん大全集」収録 ）
「あべこべな二人」（ 現在、非公開 ）
「ハイスクール全裸」
「ピンクの怪物」
「没落お嬢さま」
「キミは知らない 〜いずみとカコのアブナイおしゃべり〜」
「コロナ禍の恋人」
「ネット時代の風俗店」
「ボクたちの好きな異世界転生」
解説

- 後期の作品は、「大人のケータイ官能小説」や「小説家になろう」のノクターンノベルズなどの官能小説サイトで、読む事が可能です。

「アリとギリギリデス」

アパート暮らしの私の隣の部屋にはキリギリスが住んでいる。もちろん、本物のキリギリスではなくて、イソップ寓話に出てくるキリギリスみたいに毎日ブラブラしていたから、陰でキリギリスとあだ名で呼んでいたのだ。

その一人暮らしの青年がまともに働いているような様子は、ほんと、見た事がなかった。ほとんどの時間を、自分の部屋の中で引きこもって過ごしていたようだ。いわゆる、怠け者で、どこにも雇ってもらえない人生の落伍者って奴だったのであろうか。

いや、勝手に結論を出すのは早すぎるかもしれない。もしかしたら在宅ワーカーだったのかもしれないし、実はそこそこの財産持ちで、働かないでいい身分だったと言う可能性もあるからだ。

しかし、だとしても、それなりの金持ちなら、こんな安くてボロなアパートに居座るとは思えないし、やはり、無職の引きこもりなのだろうと考えた方が正しそうなのであった。

そんな彼の事を、私はひそかに見下して、嘲笑しつつ相手にしていた。だって、私は独り身でも立派に働いているキャリアウーマンなのだ。出世街道まっしぐらとまでは言わないが、少なくても他人に対しては胸を張れる人生は送っていると自負していた。そんな私から見れば、働きもしない奴はやっぱりランク下の人間なのである。

そのはずなのであったが、ある些細な恥ずかしい勘違いがきっかけで、私は彼と急接近する事になったのであった。

それまでの彼とは、私はアパートの通路ですれ違っても、会釈する程度の間柄だった。オタクっぽい雰囲気を漂わせていた彼は、私が生涯で一番交わる事がなさそうな人種にも見えた。

でも、彼が本当に見た目どおりの負け組の引きこもりなのか、実は裏の顔は相当な成功者だったのかだけは、ずっと気になっていて、前から確かめたいとは思っていたのである。

ある日、彼の部屋を覗く事ができる絶好のチャンスが訪れた。ちゃっかり者の私は、そのチャンスを決して逃したりはしなかった。

うまい用事ができたので、彼の部屋の前まで行ってみると、ちょうどドアが開きっぱなしになっていた。彼の方も、外出から戻ってきたばかりか何かで、まだドアを閉めていなかったらしい。中を覗き込むには最高の状態だった。

「もしもーし。いますか」

と、私は、開きっ放しのドアから顔を突っ込んで、声をかけてみた。

「おたくの郵便物が、うちに届いていましたよ」

いるのかいないのか、すぐには彼は現れなかった。

そこで私は、もっと大胆に部屋の中を覗き込んでみたのだった。
信じられないほど贅沢な家財道具とかは見当たらなかった。むしろ、質素なほど部屋の中は置かれているものが少なく、やはり、彼は低所得のただの庶民だったらしいと分かって、私は少し安心したのだった。
その時、部屋の奥からトイレの水を流す音が聞こえてきて、間もなく、彼が慌てて姿を現わした。
「わざわざ、すみません」
私の前に対峙した彼は、うろたえた感じで、そう口にした。なんだか、部屋の中を見られたくないような様子だ。
この男、何をそんなに弱っているのだろう。私が見た限りでは、そんな隠し事があるような部屋にも感じられなかったのだが。
私は、さりげなく、もう一度、部屋の中を見回してみた。そこで、地味な内装の中でも、テレビの近くの壁に貼られていた女性のヌードポスターが、ひときわ目をひく事に気が付いたのだった。
私の視線がポスターの方に向いているのが分かると、彼はますます動揺していたのが、はっきりと分かったのだった。
呆れた事だが、彼が部屋の中を見られたくなかった理由はこれだったらしい。しかし、一人暮らしの部屋に男が女の裸の写真を貼ったりしているのは、決して特別な事でもないであろう。むしろ、独身の男なら健全な行動のような気もするのだが、この男、なかなかのウブだったようである。
「あ、あのポスターは、そんなヘンなものじゃないんですよ。ボク、このいずみが好きで、これってアングルが・・・」
彼は慌てて弁解したのだが、その言葉に逆に私はムッとさせられたのだった。
と言うのも、いずみとは私の名前だったからである。隣の男の住人が、私と同名のセクシーアイドルのヌードを愛好しているとは、なんとも良い気がしない。もしかして、この男、ひそかに私にと気があったのではなかろうか。だから、部屋には、わざわざ、いずみと言う名のモデルの写真を選んで貼って、にやついていたのかもしれない。
「帰ります、あたし！」
勝手に想像が暴走してしまった私は、急いで彼の部屋の玄関から立ち去る事にした。
私が急に不機嫌になった事は彼にも分かったらしく、私の後ろで彼がオロオロしていたのは私にもよく感じ取れたのだった。

さて、それからしばらくの間、私は彼の事を完全に忘れていた。引きこもりどころか変質者のように見えてきてしまって、忘れると言うより、思い出したくもなくなったのである。
当然、彼とアパートの通路ですれ違っても、無視するようになった。彼の方も困ってしまったようで、私の前でどう態度をとればいいか、いつもオロオロしていたのであった。
そんなある日、また、ちょっとした出来事が起きる事になった。正確には、私一人が勝手に突っ走ってしまったのだ。
その日の昼間は、私は仕事で色々と失敗をやらかしてしまい、自分も落ち込むわ、上

司からもさんざんに叱られるわで、そうとうにうっぷんがたまっていた。こんな時は、彼氏に優しい言葉の一つや二つでもかけて慰めてもらいたいものなのだが、この時付き合っていた彼氏と言うのがまた特に鈍感なヤツで、電話で連絡をとってみたところ、ひどく素っ気ない態度をとられてしまったのだ。その事で私もいきなりカチンときてしまい、私は彼氏と大ゲンカをしてしまった。向こうだって、なぜ私が急に怒り出したのかが分からなかったようで、当然どちらも謝らずに、電話は切ってしまい、私はますますムシャクシャした気持ちになってしまったのだった。

その足で、一人で真っ直ぐ居酒屋へ行き、悪酔いするほどお酒を飲んだのだが、それでも気分は晴れず、そんな時、突然、隣の部屋の彼の事が思い浮かんだのである。私も、泥酔して、すっかり気持ちがおかしくなっていたのだと思う。もう何もかもヤケクソなのだから、いっそ自分の事を好いている隣の部屋の変質者と寝てやれ、と決めたのである。もちろん、彼氏への当てつけの意味もあっただろうし、自分を認めてくれない職場や社会に対する反抗のつもりでも、非道徳な事をしてやろうと思い立ったのだと思う。冷静になって思い返してみると、私ってほんとにバカである。

しかし、この時の私は、もうすっかり、その気になっていた。

夜遅くにアパートに戻ってきた私は、しつこく隣の部屋の呼び鈴を押し続けたのだった。

「ほら、早く出てきなさいよ！ いるのは分かってるのよ。こうして、あなたのいずみが自分から来てやったんだから、ほら、喜びなさい」

ドアの前で私はそう何度も叫んでいたらしいのだが、全く迷惑な話である。

そして、うろたえながらも、彼がようやくドアを開いてくれたのだった。

「こらあ、遅いぞ。早く開けなさーい」

と怒鳴って、私は彼の部屋の中へ飛び込んでいった。

私の異常なテンションには、彼もそうとう驚いていたようだった。

「隣の蛙里さんですね。すみません、お部屋、間違ってますよ」

と、うろたえながら彼は言った。

「間違ってないよ。だって、あたしはあんたに会いに来たんだもん」

「え？」

「え、じゃないの！ ベッドはどこ？ 案内してよ」

「こ、ここで寝るつもりですか？ 蛙里さん、そうとう酔ってますね。ダメですよ、自分の部屋に戻らなくちゃ」

「一人で寝るんじゃないの。あんたと一緒に寝るの。嬉しいでしょ？」

「ちょっと！ だいぶ酔いがひどいですよ。大丈夫なんですか」

「もう！ 何ためらってるのよ、この照れ屋さんが！ あたしの事が好きで、前からエッチしたかったくせして。絶好の機会なんだから、素直に喜びなさいよ」

「ボ、ボク、そんなこと一言も言ってませんよ」

そこで、私は壁に貼ってある女性のヌードポスターをバッと指さしたのだった。

「ウソおっしゃい！ 女の裸の写真に、あたしの名前で呼びかけて、夜な夜なスケベな事を妄想していたくせに！」

「それ、写真じゃないですよ。絵です、有名な名画」

　彼にそう言われて、私はハッとしたのだった。
　壁の全裸女性のポスターをよく見直してみたが、確かに、グラビアではなく絵画である。あまりに精巧に描かれた絵だったので、パッと見ただけでは写真と勘違いしてしまったようなのだ。
「アングルと言う有名な画家が描いた『泉』と言う絵です。とっても奇麗な女の子の裸婦像で、ボクの憧れなんです。猥褻な気持ちで貼ってたんじゃありません」
　彼の説明を聞いているうちに、私はすーっと酔いが醒めていったのだった。
　私ったら、何て、はしたない事をしてしまったのだろう！ それも、自分より下だと見下していた相手に対して。これでは、私の方がずっとイヤラシい変態女ではないか。しかも、相手が自分に惚れていただろうなんて自惚れてもいた訳だから、なおさらタチが悪い。
「ご、ごめんなさーい！」
　私は、顔を伏せて、慌てて彼の部屋から出て行ったのだった。その時の私は、お酒のせいではなく、本当に顔が真っ赤になっていたに違いあるまい。

　こんな出来事があった後、私と彼は急速に親しくなっていったのだった。
　翌日、いの一番に彼の部屋へと出向いた私は、ひたすら昨夜の無礼を謝り、彼の方もさっぱりした態度でそれを許してくれたのだった。
　それからの詳しい経緯は少し省く事にするが、私は、彼が実はただの引きこもりニートなんかではなく、プロの小説家を目指している大志の持ち主だった事を知り、次第にそんな彼に惹かれてゆくようになったのである。
　しかし、筆一本で暮らしていけるような小説家になるのは、そう簡単な話ではない。定職につかず、多くの時間を売れるかどうかも分からない小説を書く為に費やしていた彼の生活は、じょじょに厳しいものになりつつあるようだった。
　そんな彼にとって、隣に住んでいて、いろいろと助けてくれる私の存在は力強い味方となったようで、私の方もまた、彼のサポートをする事が不思議と張り合いに思えてきていたのである。
　そんなある日の事だった。
「おーい、キリギリスくん。差し入れ持ってきてやったよ」
　そう言いながら、仕事帰りの私はそのまま彼の部屋へと押し掛けた。
　この頃の私は、彼の部屋の合鍵も持っていて、毎日のように彼の部屋に訪れるようになっていた。
　その日も、帰路の途中にあるコンビニで弁当を買って、彼の夕食用にと持っていってやった訳なのだが、部屋の中に入ってみると、何やら、彼は部屋の真ん中にちょこんと正座していて、ひどく落ち込んでいたのだった。
「あ、蛙里さん。いらっしゃい」
　私の姿を見て、彼がそう弱々しく声を発した。
「どうしたのよ。またえらく沈んでるようだけど」
「応募していた小説コンテストの結果が、今日、分かったんだけど、今回も入選からは外れていたんです」

　そうなのだ。コンテストで落選するたびに、彼は激しく落ち込むのである。しかし、今回は特に落ち込み具合が激しいようにも見えた。
「ボク、やっぱり才能が無いのかもしれません。小説家になるのなんて、あきらめた方がいいのかも」
「なに、弱気になってるのよ。あたしは、キミの書いた小説、好きだよ。続けていたら、いつかは絶対に報われるから、めげないで頑張りなさいよ」
「でも、これ以上は、一人で暮らしてゆくのも限界っぽいんです。実は、ボク、北海道の田舎に実家があるんです。親は酪農をしていて、前から跡を継ぐように言われていました。そろそろ観念して、田舎に戻った方がいいのかなあ、と思って」
「だけど、キミ、酪農なんてやりたいの？ その仕事、キミに向いてる？ どうしても小説家になりたかったのと違ったの？」
「仕方ないです」
　彼のイジイジした態度を見ていると、私も少々じれったくなってきたのだった。
　私は、バッと壁に貼ってある「泉」のポスターに指を突き付けた。
「キミに足りないものが分かったわ。パトロンよ。中世の芸術家たちはね、皆、よけいな仕事はしないで、芸術品を生み出す事だけに集中していたのよ。彼らがそういう生活を送って、後世に傑作を残す事ができたのは、彼らを支える後援者、パトロンがいたからだわ。キミにも、パトロンが必要なのよ。パトロンさえいれば、今まで通りに存分に小説だけを書き続ける事ができるでしょう。あたしがそのパトロンになってあげるわ。これで文句はないでしょう？」
　かくして、アリとキリギリスは一つに結ばれて、どちらも幸せになったのでありました。めでたし、めでたし。　　おしまい

ーーーーーーーーーーーーーー

　以上のような小説を読まされて、私は思わず絶句したのだった。
「なによ、これ？」と、私は小さくつぶやいた。
「今回は、ボクたちの今までの体験をありのままに小説に書き起こしてみたんです。事実は小説よりも奇なりで、面白いものでしょう。これなら、今度こそ審査員の心も突き動かせると思いませんか」私の目の前では、ギリギリデスのヤツがそう言って、自信満々の表情を浮かべていたのだった。
　キリギリスですらない。もはや、生活破綻寸前のラインで何とか暮らし続けていた彼の事を、私は小バカにして密かにギリギリデスと呼んでいたのだ。
　それにしても、いくら小説コンテストになかなか入選しないからとは言っても、この小説はあまりにも酷すぎる。情けない事に、彼と私が交際するようになったきっかけのくだりが本当に事実だったりするものだから、私としては、ますます笑えないのだ。しかも、この小説、自分ではなくて、私、蛙里いずみの手記というスタイルで書いてやがるところも、何だか腹立たしい。完全にフィクションなのはオチの部分だけである。
　こんな小説を、彼は本気で次の小説コンテストに応募するつもりなのだろうか。ましてや、こんな内容がほんとに入選できるとでも思っているのであろうか。

あるいは。

もしかすると、この小説は、彼の私に対するプロポーズだったのかもしれない。彼は、私に本当にパトロンと言うか、パートナーになってほしいと思っていたのではなかろうか。

ギリギリデスと付き合うようになってから、私は、意外とダメ男にのめり込んでしまうタイプだったらしい事が分かったのだった。世間的に考えれば、それは良くない傾向なのだろうし、もしギリギリデスなんかと結ばれれば、不幸な結婚生活が待っているのはほぼ確実であろうと言う不安も覚えていた。

はたして、私はギリギリデスに対して、どんな返事をしたらよいのだろう。

目の前でニコニコしているギリギリデスと彼の小説の原稿を交互に見比べながら、私はすっかり困惑してしまったのであった。

●●●●●●●●●●●●●●●●●●

「私も小説を書いてみたんだ。どうだろう、面白いかな？」と、かわいい笑顔を浮かべながら、彼女が見せてくれた小説とは、以上のような内容だった。

こんな小説を読まされて、僕の方こそ反応に困ってしまったのだった。

彼女、蛙里いずみは、確かに、この小説どおりの、アパートの僕の隣の部屋に住んでいる独身のキャリアウーマンだ。しかし、僕とは全く交際などしていなかったし、こうして言葉を交わすようになったのも、つい最近になってからだった。

たまたま、僕がプロ目指して小説を書いている事を知って、彼女の方から読んでみたいと言って、近づいてくるようになったのだ。彼女は可愛かったし、何となく自分のファンができたようで嬉しくて、僕の方もあっさりと彼女に気を許して、仲良くなっていったのである。

すると、いきなり彼女は上記のような小説を書いてきて、僕に見せてくれたのであった。

一体、彼女は何を考えていたのだろう。

根性がなくて、すぐ仕事を辞めてしまう僕は、失業している時も多く、彼女の目には、なるほど、怠け者のキリギリスのようにも見えていたのかもしれない。その事をからかって、と言うか、たしなめるつもりで、こんな小説を書いてよこしたのだろうか。

でも、それだけじゃないようなニュアンスも感じられる。ヒロインのいずみがやけに主人公（ つまり、僕をモデルにしたキャラクター ）に対して積極的みたいな感じもするのだ。性的なアピールの点でも、読まされているこっちが恥ずかしくなってくるほどの大胆さである。

ひょっとすると、彼女は、小説を通して、本物の僕の事も誘っていたのであろうか。あるいは、誘っているように見せかけているのもまた、彼女のイタズラなお遊びなのかもしれない。

まだ一度も女性と付き合った事がなかった僕にしてみれば、本当に可愛い蛙里いずみみたいな子と恋仲になれるのはまさに夢のような話だったのだが、でも、彼女の書いた小説を読んだ限りでは、今の自分の生活態度をあらためない事にはやはりムリな望みな

のかな、とも思えてしまったのだった。
　アリとキリギリスがくっついてハッピーエンドなんてウマい話は、実際にはあり得ないのである。

了

（ 2016 年 6 月作品 ）

「ビデオの中の彼女」

某地方の奥地にK温泉はある。このK温泉こそは、20年前、蛙里いずみが出演した成人用セクシービデオ「湯けむりの天使」のロケ地でもあるのだ。

いや、回りくどい書き方をして誤摩化すのは止める事にしよう。この「湯けむりの天使」と言うオリジナルビデオは、実はアダルトものなのである。当時20代前半だった蛙里いずみは、このビデオの中で、まぶしいヌードも惜しみなく披露していたのだった。

蛙里いずみの名前は、インターネットで調べてみても、恐らく引っかかりはしない。彼女は、正規のヌード女優などではなく、このビデオのみに出演した生粋のシロウトだからだ。「湯けむりの天使」と言うビデオのタイトルの方も、ネットでは多分見つからないはずだろう。このアダルトビデオ自体が、そこまで無名な作品なのである。

しかし、私にとっては、もっとも思い入れのあるビデオでもあった。特に、出演していた蛙里いずみの愛らしい姿に、私は20年間、癒され続けてきたのである。彼女は本当に私にとっては唯一の存在だったのだ。

ゆえに、このたび、私は、K温泉への一人旅を敢行する事に決めた。20年前の蛙里いずみが、どのような気持ちでこのビデオに出ていたのかを、あらためて追体験したくなったからである。

東京を出発した私は、その日のうちに、K温泉のある地方に到着し、正午過ぎには、K温泉内の〇〇旅館へとチェックインした。

この〇〇旅館もまた、「湯けむりの天使」のロケ現場の一つでもあったのだが、私にはまず先に訪ねておきたい場所があった。

〇〇旅館のすぐそばに、K温泉の観光名所の一つでもある大きな吊り橋がある。その吊り橋を渡った先は、散策ルートになっていて、K温泉周辺の豊かな自然を楽しめる趣向になっていた。この散歩道の一角にはきれいな小川が流れている河原もあって、そこが「湯けむりの天使」の最初のロケ現場でもあるのだ。

「湯けむりの天使」のビデオを頭から再生してみると、まず、石だらけのこの河原がばあっと画面上に登場する。そこに、純白のレオタードを着た蛙里いずみが笑顔で現れ、リボンやフープ、ボールなどの小道具を持つと、やった事もない新体操の真似事をいっぱい披露してみせるのだ。たどたどしい彼女の動きは、まるで幼稚園のお遊戯のごときであったが、それが逆に愛嬌いっぱいで、微笑ましく鑑賞できたのである。

この河原に来た私は、靴下を脱ぎ、思い切って裸足になってみた。石の冷たさをじかに感じる事で、露出の多いレオタード姿で踊っていた蛙里いずみの気分を、少しでも味わってみようと思ったからだ。

冷たくてゴツゴツした石の肌触りが本当に気持ちいい。この少し照れ臭くて、開放的な気持ちになれる撮影を続けてゆくうちに、蛙里いずみは大胆なヌードも公開する決心を高めていったのである。

この河原から少し離れたところに、壁の岩はだが完全にむき出しになった直角の崖があった。この壁の前でポーズをとった構図でも、蛙里いずみはビデオ内に写っているのだが、これがまたアングルの名画「泉」を彷彿させるような、なかなかの美しいカットに仕上がっているのだ。

20 年経った今でも、その壁の岩はだは手つかずのまま、当時の状態を保ち続けていた。私は、着衣したままだが、そっとその岩はだの前に立ってみた。そこは日陰になっていて、前方以外の視界がすっかり遮断されていた。静かに、ただ小川のせせらぎだけが心地よく聞こえてくるのであり、どこか神秘的な気分を味わえるのだった。「湯けむりの天使」を知らなければ、まさに気付かなかったであろう穴場である。

さて、そろそろ〇〇旅館に戻る事にしよう。

〇〇旅館には、名物の露天風呂があるのだが、ここが「湯けむりの天使」の次のロケ現場でもあるのだ。

20 年前は、この露天風呂は男のみの入浴場所だったようで、それでも、ビデオのスタッフは、旅館の許可を得れたらしく、蛙里いずみは、貸し切り状態で、ビキニを付けて入浴していた。

そもそも、この露天風呂が女人禁制にされていたのは、外部から露天風呂の内側が丸見えだった事が最大の理由だったようである。それでビキニ着用が条件になったらしいとは言え、でも、この露天風呂の女性入浴者第一号になれた事は、蛙里いずみとしても、さぞ自慢げに思えていたに違いあるまい。

現在はこの露天風呂も、時間制で女性も入れるようになっている。露天風呂周辺の環境も整備され、女性の入浴時間帯は関係者以外は近づけないように配慮されているらしい。

私もさっそく、この露天風呂には浸からせてもらった。さいわい、私以外の入浴者とは鉢合わせせず、20 年前に蛙里いずみがビキニ姿でこの露天風呂内ではしゃぎ回っていた姿を自分に重ね合わせて思いふけってみたら、より露天風呂を独占している気分が堪能できたのだった。私にとっては、この露天風呂はあくまで蛙里いずみのメモリアルな場所なのだ。

もちろん、露天風呂から見える外のロケーションも拝ませてもらった。それが、この露天風呂の目玉でもあるのだから。眼前に広がる大自然は、なるほど、皆が絶賛する美しさであり、確かに男だけの楽しみにしておくのは惜しいものがあった。しかし、蛙里いずみは、自分が写される事に夢中になっていたみたいで、20 年前の撮影時には、この絶景を眺めていなかったようなのであった。

ビキニ着用が条件だったにも関わらず、この露天風呂のくだりの最後の最後のショットで、蛙里いずみは、照れながらも、そのビキニを自分から上も下も外している。「湯けむりの天使」の中で、彼女がはじめて全裸になった瞬間であり、セクシーな撮影が続く中、彼女の方からもっと自分を見せたい気持ちになっていったらしい。そして、次の室内大浴場での入浴シーンでは、彼女もとうとう全裸で撮影に臨む事となるのだ。

私も、彼女の軌跡を追って、露天風呂のあとは室内大浴場へと入りたいところだが、ここは先に夕食をとる事にしよう。「湯けむりの天使」でも、露天風呂と室内大浴場のパートの間には食事のシーンが挟まれているからだ。

宿泊している和室に戻り、用意されていた夕食に箸をつけてみると、ある事に気が付

いた。この料理、見覚えのあるものばかりなのだ。季節の山菜を主体にした郷土料理なのだが、思い出してみたら、どれも「湯けむりの天使」の中で蛙里いずみが口にしていたものばかりなのであった。どうやら、「湯けむりの天使」のロケと同じ季節にここに訪れたものだから、運良く、同じメニューを食べられたらしい。そして、おいしい土地の味を満喫させてもらいながら、20 年経っても変わらぬ名物料理を提供し続けている老舗の旅館の粋な姿勢に、深い感動の気持ちも沸き上がったのだった。

食事後、蛙里いずみは、旅館のホール方面にある娯楽施設で少し遊んでから、室内大浴場へと向かっている。「湯けむりの天使」の中で、彼女はゲームセンターで遊んだり、お茶目にカラオケを歌ったりしていたのだ。私も、ちょっとホールの方を覗いてみたのだが、残念ながら、今はゲームセンターもカラオケが歌える場所も無くなっていた。もはや時代が違うのだ。蛙里いずみが楽しそうに遊んでいた事を思うと、その思い出の場所をもう確認できないと言うのは、やや心残りにもなったのであった。

そして、浴衣を身に着けた私は、室内大浴場を目指した。蛙里いずみも、まずは浴衣姿に着替えて、それから浴場へと入ったのである。

ビデオ内では、この時も、大浴場は蛙里いずみ一人の貸し切りにしてもらっていた。スタッフ以外、誰にも見られていない場所で、彼女は生まれた時の姿に戻って、存分に大きな浴場でのたった一人の入浴をエンジョイしたのだ。ヌードを撮影されたとは言え、一生忘れられないような体験ができたのである。

今回、私が入浴した時は、さすがに貸し切りと言う訳にもいかず、他にも何人かの入浴客がいたのだが、それでも、この浴場内で蛙里いずみが無邪気に跳ね回っていた姿を思いふけるにあたっては、邪魔に感じるほどのものではなかった。

この大浴場は混浴ではない。しかし、若く、はつらつとしていた蛙里いずみのような女性と一緒にこの浴場を堪能できたのならば、殿方たちは、さぞ夢のごとき時間を過ごせた事であろう。

室内大浴場でのひとときを十分に楽しんだ私は、まっすぐ自分の部屋へと戻った。そして、20 年前の蛙里いずみにも、自分の部屋にて最後の撮影が待っていたのだった。思い切って全裸になるほど開放的な気持ちになっていた彼女に対して、撮影スタッフは、寝る前の布団の上で、少し大胆な一人遊びをやってみせるよう指示したのである。もちろん、蛙里いずみはそこまで過激な撮影に対しては拒否もできたのだろうが、度重なるエロチックな撮影に彼女自身がすっかり高揚してしまっていたようだ。彼女は、体のうちの熱い思いを押さえておく事ができずに、ただの真似事でも良かったと言うのに、本気で一人遊びしている姿をカメラの前で披露するのである。

その光景は完全に「湯けむりの天使」内におさめられており、シロウト娘のはしたない失態になったみたいな感じもするが、本人はその時、味わった事のない甘美な官能に浸れていたようなので、悔いは無かったのかもしれない。このビデオを見た殿方たちにしても、ただのセクシービデオではなく、クライマックスで、出演女性の積極的な姿まで拝めた訳だから、不満は無いはずなのである。

この最後のロケ場所は、私が泊まった部屋ではなかったはずだ。しかし、この旅館の和室はどこも同じ作りになっている。あの時の蛙里いずみの姿を重ね合わせてみる分には、問題はなかった。私も、今夜は、最高に幸せな気分にまどろんでいた蛙里いずみの

幻を、我が身のそばに感じつつ、素敵な夜を迎える事としよう。

翌朝、私は〇〇旅館をチェックアウトした。こうして、私の「湯けむりの天使」を偲ぶ旅も終わったのである。

来て良かったと思う。20 代のまだ希望に溢れていた蛙里いずみの気持ちを、身を持って実感する事ができた。若い頃って、たとえ照れ臭い体験であっても、甘酸っぱい思い出に変えられるものなのである。

私も今回のこの感銘を新たな支えにして、明日からを力強く生きていく事にしよう。

「あれ、あなた、蛙里いずみさんですね。ほら、20 年前も、ここに来られた」

私が旅館を背にして、少し歩き出した時、そう声をかけられたのだった。

話しかけてきたのは、恐らく、〇〇旅館の主人と思われる男性だ。還暦はとうに過ぎていると思われ、頭はすっかり禿げ上がっている。

「あら、よく分かりましたね。あの時の事、覚えてましたか」私は口ごもった。

「そりゃあ、忘れませんよ。すごいべっぴんさんが、うちの旅館なんぞにビデオの撮影に来てくれたんですからね。いやあ、今でも、あなた、美人さんのままじゃありませんか」主人は、ほがらかに笑いながら、私へと話しかけてきた。

「でも、いやらしい目的のビデオだったんですよ。今思うと、逆に迷惑だったんじゃないかなって」

「いえ、とんでもない。こんな場所まで来て、撮影に使ってくれたりして、うちらはとても嬉しかったですよ」主人はそう言ってくれるのだった。

実は、「湯けむりの天使」の主演の蛙里いずみとは私だったのである。20 年前の事が急に懐かしくなって、この K 温泉の地にさりげなく訪れてみたのだった。まさか、当時の関係者がまだ覚えていてくれたとは意外であった。

あの頃の私は怖いもの知らずで、街中で映像会社のスカウトに誘われた時、全ては見せなくていいと言う約束を鵜呑みに信じて、アダルトビデオの収録に参加してしまったのである。実際、最初の撮影はレオタードとビキニだった。しかし、撮影スタッフたちに持ち上げられ、すっかりスター気分に酔いしれてしまった私は、最後は自分から何もかもをカメラの前に晒してしまったのである。

今思えば、よく、これ一回のビデオ出演で済んだと思う。ヘタをしたら、このビデオを脅しのタネに使われて、次々にアダルトビデオへ出演させられていても、おかしくなかったところだ。全く、運が良かったのだと思う。

もっとも、ビデオに出演したあと、私は個人的にはドキドキする日々を送り続けていた。このビデオに出演した事は、家族はもちろん、友達にも職場にも秘密にしていたのだが、ある日突然にばれちゃって、誰かから指摘されるのではないかと思ったからだ。

しかし、それすらも結局はなかった。世にアダルトビデオは溢れているのである。そんな中で、「湯けむりの天使」は本当に誰も見てないような無名の一本にすぎなかったのだ。そうなると、私だってあれだけ興奮しながら出演したビデオだっただけに、逆に寂しい気持ちになってきたのだった。

あれから 20 年が経つ。男運に恵まれない私は、今やすっかり独り身の冴えない中年女となっていた。自分の不幸な人生を嘆いているうち、むしろ「湯けむりの天使」に出演した時が一番自分が輝いてたのではないかとも思えてきたのだった。何よりも、このビ

デオには、私がまだ結婚する事も夢みていて、若くて、もっとも美しかった頃の姿がおさめられている。

けがらわしいアダルトビデオなんかに、そんな感情を抱くなんて、お前は異常だ、と思う人もいるかもしれないが、私のように、恋に絶望した女性ならば、それもありうるのだ。私をモノ扱いにして、利用する事しか考えていなかった男たちに比べれば、「湯けむりの天使」に出演したひとときの方がずっと私は愛に満たされていた。

「女房には内緒ですけどね、あなたが出演したビデオ、私は今でも持ってるんですよ。おっと、いやらしい事する為にではなくて、あくまで記念としてですけどね」旅館の主人は言った。

その一言を聞いた途端、私の目からは涙が溢れてきたのだった。

確かに「湯けむりの天使」を見てくれた人が、ここに一人いる。この人は、「湯けむりの天使」の中の私の事を分かってくれているのだ。私の大切な分身、私の美しい青春の事を。

やはり、ここを訪ねてみて良かった。

「あら、あなた、泣いているんですか。すみません、嫌な事を思い出させちゃいましたかね」私の目が潤んでいたのに気が付いた旅館の主人が、心配そうに謝ってくれた。

「いや、違うんです。ごめんなさい」と、私は慌てて言った。「何でもありませんから、気になさらないで。本当です」

そして、私は、心からの笑顔を浮かべてみせた。

了

（ 2016 年 6 月作品 ）

「姪っこんぷれっくす」

作・IZUMI

真夏の日差しは、まるで暴君のように容赦なく降り注いでいた。待ち合わせ場所の駅前で、僕は、絶え間なく流れ出る汗を拭い続けながら、網の上で加熱中の焼き魚のような気分を味わい続けていた。

あの子が現れたのは、約束の時間を 10 分近く過ぎてからである。彼女が時間にルーズである事は、彼女の家族と一緒によく遊んでいた頃から分かっていたので、このぐらいの遅れであればセーフと言える範囲だった。

彼女は、タンクトップにショートパンツという、とても涼しげな格好をしていた。それでも今日の暑さにはまるで敵わなかったらしく、彼女のむきだしの手足の表面が汗で濡れている事は、目視でも分かった。

「ごめんなさい。おじさん、待った？」と、僕の目の前にまでやって来た彼女は、笑顔で言った。

彼女、蛙里いずみは僕の姪である。七つ違いの姉の一人娘なのだ。彼女が小さい頃は、僕も姉の家にはよく遊びに行ったものだが、最近はめっきり会う機会も減っていた。いずみの顔も久しぶりに見たのだが、彼女が想像以上に大人びていた事に、僕もあらためて気付いたのだった。

顔つきだけではない。体の大人っぽさの方がより顕著だった。服装こそ子どもっぽいものの、きつめのタンクトップは逆に胸の大きさや腰のくびれを強調して見せていたし、パンツのお尻部分のはみ出しそうな膨らみ具合も同様だ。さらには、裸の手足の上にいく筋もの汗が伝っていたのも、まるで風呂上がりみたいで、ちょっとした色っぽさだった。小さかった頃の事を思い出しながら、つい僕は彼女の姿に見入っていた。

そんな僕にはおかまいなく、彼女は僕の方へと顔を近づけて、明るく話しかけてきた。

「こないだ話した通りね、あたし、春から一人暮らしをはじめたんだ。おじさんにも、これから、あたしの新しい部屋を見せてあげる。だから、今日は引っ越し祝いを買ってね。お願い、おじさんにしか頼めないものが欲しいんだ」

甘えた喋り方こそ、学生の頃とあまり変わっていなかったが、いずみも今年からもう社会人なのである。二十歳を過ぎていたのだ。すっかり大人っぽくなっていたのも不思議じゃなかったのである。

「ほんと、いずみったら、仕方ないな。今回だけだからね」僕は言った。

「わあ、ありがとう！ だから、おじさんの事、好きなんだ」

満面の笑みで、いずみは僕に飛びついてきた。彼女の態度の方は昔と全然、変わっていないのである。幼い頃の彼女には、僕は卒中プレゼントを買ってあげたものだ。そのたびに、嬉しさいっぱいの彼女は、こんな感じで、僕に抱きついてきたのだった。

しかし、こんなに大人になった彼女と体を寄せ合ったりしたら、周りの人たちには、僕たちの関係はどんな風に見えるのだろうと、今の僕はやや周囲の目を気にする心境にもなっていた。

そのまま、彼女は自分の両手を僕の右手に巻き付けると、僕を引っ張るような形で歩き出した。お互いの腕が汗だくだったため、こうして密着されると、より肌がじかに触れている事が実感できた。年ごろの娘の腕の健康なふくらみ具合や柔らかさがひしひしと伝わってきて、相手が姪だとは言え、僕は少し照れ臭い気持ちにもなってきたのだが、肝心の彼女の方はまるで気にしていないようであった。

陽炎が揺らいでいるアスファルトの道をしばらく歩いて、僕たちが訪れた場所は駅のすぐそばにある古物商だった。店の外見や内部の物の放置状態から推察して、けっこう老舗なのではないかと思われた。若いいずみには、特に縁がなさそうに感じられるお店である。

しかし、いずみは前にも来た事があるのか、躊躇の様子もなく、すぐ店の中へと駆け込んでいった。

「店長さん、また来たよ。今日こそ、買いにきたからね。まだ売れちゃってないよね」

朗らかな笑顔を浮かべながら、いずみは、店先に座っていた主人に、そう話しかけていた。やはり、彼女はこの店の常連だったみたいである。

僕も店の主人に軽く会釈してから、彼の前を通過した。初老らしき年齢の彼の態度はひどく無愛想だったが、不快感はなかった。ごく普通の商店街の店屋の主人と言った感じだ。

「こっち、こっち」と、いずみが僕を手招きした。

僕も、彼女のあとについて、店の奥へと踏み込んでいった。

「それにしても、いずみがこういう店に興味があったなんて意外だったな」僕は言った。

「特別に欲しいものがあったのよ。それを、おじさんに買ってもらいたくて。ほら、あれ」

店内の途中で立ち止まったいずみの視線は、壁の一区画に向けられていた。そこには、大きな、女性のヌード画が飾られていたのだった。リアル志向の絵画だ。ほぼ等身大の全裸の少女の正面図が、そこの壁には掛けられていたのだった。

いずみが、このような絵が欲しかったと知って、僕もつい困惑した。その戸惑いの気持ちは、もろ僕の表情に表れていたらしい。

「おかしな絵じゃないのよ。これ、名画の実物大コピーなんだから」顔を赤らめつつも、慎重な口調でいずみは言った。

「でも、なぜ、この絵が欲しいんだい？」と僕。

「この絵の題名が『泉』なのよ。あたしの名前と同じで。何となく、気になるでしょ」

僕たちが眺めていた絵は、フランスの画家ドミニク・アングルが描いた名画「泉」の原寸大コピーであった。「泉」は、高さの寸法が 160 センチを超える大きな絵画であり、その中に描かれている全裸の少女はほぼ実物大とも思われた。たとえコピーでも、こうして原寸大のものを目前にすると、確かに並みならぬ迫力とエロスなのであった。

自分から欲しいと言っておきながら、いずみの奴もひどく恥ずかしげな様子だった事に、僕も気が付いた。

「どうしても欲しかったの。なんだか、他人には思えなくて。自分の部屋に飾りたかった

んだけどさ、友達やママとかに見られたら、笑われそうで。だけど、おじさんからのプレゼントだって事にすれば、ごまかせるでしょ？」と、いずみが言った。
「おいおい、それで僕を巻き込んだのかい」僕は苦笑いした。
「だから、イヤラシい絵じゃなくて、これは名画なんだから！ 皆にはきちんと、そう説明するよ！」いずみがムキになって、そう返してきた。
　この時の彼女の表情が、僕にはとても愛らしく見えた。
　それで、結局、約束どおりに、この絵を引っ越し祝いとして彼女に買ってやる事にしたのだった。彼女も、有頂天に喜んでくれた次第である。
　絵画といっても、布地に原画をカラープリントしただけのものだったので、無理に額に入れておく必要もなかったらしい。そもそも、この古物商の壁にも、紙のポスター感覚で貼られていたので、僕たちはこれを剥がしてもらい、ぐるぐると巻いてしまうと、十分に持ち帰り可能な大きさに畳めてしまったのである。
　僕は店の主人に、僅かながら高価さを感じさせる代金を支払うと、いずみと一緒に、すぐこの店を出た。
　丸めて、巻物状にしてしまうと、そこに描かれているのが女性のヌード画だなんて事は、傍からはさっぱり分からなかった。僕たちは、この戦利品を堂々と手に抱え、街中の人混みをかいくぐって、いずみが今住んでいるアパートへと向かったのだった。
　いずみは、終始、上機嫌であった。この絵がよほど欲しかったのだと思われる。「泉」の絵そのものだけであれば、インターネットで検索しても簡単に鑑賞できるのだが、実物大と言う点がきっと重要だったのだろう。
　やがて、僕たちは、いずみのアパートへとたどり着いた。二階建てのこざっぱりとした建物の、その二階の隅にいずみの部屋はあった。
　僕は、いずみに案内されるまま、その部屋へとお邪魔させてもらった。
　六畳一間の他に台所バストイレが付いた、小さな部屋である。働きだしたばかりの女の子が一人で住む分には、この程度の広さでもまだ十分だったのかもしれない。
　家財道具は全体的に、昔から彼女が好きだったピンク傾向の色で統一されており、少女趣味のぬいぐるみやグッズもあちこちに飾られていた。そして、今日の買い物を前々から予定していたのか、壁の一面だけが完全に手つかずになっていたのだった。ここに例の「泉」の絵を、ポスターさながらにどんと貼り付けるつもりらしい。
　僕は、さりげなく絵を貼る位置を確認してみたが、うまく窓の外からは見えない死角になっていたようだ。そのへんは、いずみの奴もきちんと考えていたのである。
　さっそく、僕たちは、絵を貼る作業に取りかかった。いずみが何もかも前もって準備していたので、たいして時間はかからなかった。
　広げた絵画の布を僕が壁に押さえつけていて、その四隅や縁にいずみが大きなピンを次々に刺していく。僕はちょうど、絵画の少女と真っ直ぐ向き合う形になって、裸の少女と至近距離で立つと、さすがに照れ臭さも感じてきたのだった。
　こうして、僕からの引っ越し祝いのプレゼントは無事にいずみの部屋に飾られる事になったのである。
　それにしても、小さな部屋の一方の壁いっぱいに大きな裸婦の絵画を貼ってしまうと、何ともアンバランスな見栄えであった。絵画以外の装飾が、明らかに少女趣味のものだ

から、なおさらだ。
　しかし、自分の部屋の内装がそんな奇妙な空間になっても、いずみはとても満足していたみたいであった。
「本当に、これで良かったのかい」念のために、僕はいずみに訊ねてみた。
「あたしのイメージどおりよ。ぜんぜん問題はないわ」そう言って、いずみは目を輝かせて、貼ったばかりの「泉」の絵を眺めていた。
　確かに、この「泉」の絵自体は、申し分のない美しさだ。どこぞのアイドルの実物大ポスターを貼るのと比べれば、はるかに洒落てると言えよう。絵の中の少女が全裸だと言う点がちょっと難でもあるのだが、あえて、そのような絵を選んだ事で、部屋の主の芸術に対する視野の広さを伺わせる効果もあるのかもしれない。
　いずみが、イタズラっぽく、絵画の横に立ってみた。いずみと、絵画の中の少女の身長はほぼ同じで、二人の本物の女性が並んで立っているようにも見えた。
「ねえ、どっちが可愛い？」絵画の少女の顔に自分の顔を近づけてみて、微笑みながら、いずみが僕に聞いてきた。
　もちろん、名画の美少女となんて比べられる訳がない。しかし、こうして見ると、いずみの奴も、目がクリッとしていて、なかなか可愛い顔立ちなのである。
　いずみは、さらにふざけて、絵画の横で、絵画の少女のポーズを真似てみせた。意外にも、いずみのプロポーションは、絵画の少女にも負けてはおらず、こうして隣で同じポーズをとってみると、双子が並んでいるようにも見えてきたのだった。片方は裸で、もう片方は服を身につけている。さながら、ゴヤの名画「着衣のマハ」と「裸体のマハ」を合わせて見ているような、不思議な光景だ。なるほど、いずみの奴は、これがやってみたくて、この実物大のコピー画が欲しかったのかもしれない。
「どう？　あたしも捨てたもんじゃないでしょう。服を脱いだって、この絵とそっくりな自信があるわ。あたし、この絵に負けたくなくて、ずっとダイエットしてきたんだから」
　いずみの声は得意げだった。確かに彼女の言う事は本当だったのかもしれない。
　いずみは、露出の多い服装をしていたので、手足は丸見えだった。絵画の少女と同じ姿勢でいると、彼女のすらっと伸びた四肢は、絵の中の裸婦のものとまるで同一にも見えるのである。この「泉」と言う絵がリアルに描かれ過ぎているから、なおさら、そう錯覚させられるし、いずみ自身もいい体格をしていたのだ。この感じだと、衣服に覆われた部分に絵の少女の体のパーツを当てはめて、いずみの全裸姿を思い浮かべてみる事もできそうで、つい僕は息をのんだ。
「ごめんなさい。あたし、一つだけ嘘をついていた」
　突然、いずみがそう小さな声でささやいた。ポーズをとり続けるのは、けっこう窮屈だったのだろう。彼女はゆっくりと姿勢を崩した。
「この絵がイヤラシくないなんて嘘なの。ほんとは、あたしが一番、この絵はイヤラシいと思っていた。だって、泉と言う女の子が裸なのよ。まるで、あたしが裸になっているような気分になっちゃって。この絵を見るたびに、あたしが裸を見られているようなドキドキした感情を抱いていた。それで、どうしても、このあたしの分身を自分の手元に置いておきたかったんだ。一人暮らしをはじめたら、絶対にこの絵を自分の部屋に飾ろうと心に決めていたのよ」

いずみの説明は実際には正しくない。この絵画の裸の少女の名前は、泉などはないのだ。本物の人間ですらなく、泉を擬人化したものなのである。

しかし、いずみ自身が、この絵を自分の分身だと感じてしまうと言うのであれば、それは彼女にとっては真実なのであろう。思春期の少女の心は繊細だ。僕にとっては、いずみはまだまだ小さかった頃の無邪気な幼女のイメージが強かったが、現実のいずみはもう名画の裸婦を見ても情欲を感じるような大人の娘になっていたのである。

僕に対してカミングアウトした彼女は、少し気持ちが楽になったのか、目を静かに閉じて、安堵の笑みを浮かべていた。この絵を買ってあげた僕にだけは嘘をつきたくなかったのかもしれない。そこまで僕の事を信用してくれているあたりは、やはり昔ながらの叔父ちゃん子のいずみと変わらないような気もしたのだった。

その時である。

いきなり、一人の男が一陣の風のようにいずみへと襲いかかった。

その男は、いずみの体を強く抱きしめると、そばにあった彼女のベッドの上へと勢いよく押し倒したのだった。

なんて無礼な男なのだろう。それに、どこからこの部屋に入ってきたのだ。部屋のドアは閉まっているはずだし、ドアが開いた気配もなかった。

その男は、よく見ると、僕であった。もう一人の僕が現れて、姪をもみくちゃにしているのである。

（ 2016 年 7 月作品 ）

「泉より愛をこめて」

（ 本作は、アングルの名画「泉」が、もし無名の画家の描いたものだったら？
という空想のもとで書かせていただきました ）

「君のそのポーズだけどね、芸術用語ではコントラポストと言うんだ。真っ直ぐに立たずに、下半身は左足に重心を置き、右手は頭の上で左側へ曲げる事で、全体がＳ字っぽい形になっているだろう。これは、古代ギリシャ時代から伝統的に受け継がれている、もっとも美しい姿勢の一つなんだ」

全裸で立っている蛙里いずみの前で、角土はそう楽しそうに説明した。

今、いずみは彼氏の角土の絵画モデルをしている最中だ。角土は、いずみとほぼ同い年の、つまり20歳なかばの売れない画家の卵だった。いずみの方は、今の角土のウンチクもまるでチンプンカンプンな、芸術とは全く縁のない普通のOLだったのだが、それでも二人の関係はそこそこに順調だったとも言えた。

もともと、いずみは、イケメンや社交上手のチャラ男よりも、オタクや暗そうな男ばかりに惹き付けられる傾向にあった。その手の男性には童貞も多く、セックス好きのいずみは、そうした野郎どもに一人でも多く最初の性の喜びを教えてあげるのを、女の武勇伝として自分の自慢としていたのである。

だから、友人から、貧乏で変人の画家の知り合いがいると聞いた時は、いずみも直感が働いて、すぐにその人物を紹介してもらったのだった。それが、この青年、角土なのである。

明らかに異性パートナーがいなかった角土と、間もなく、いずみは恋人同士になる事に成功した。彼のアパートの部屋にも入れてもらえたし、二人で外食に出かけたりもしたので、少なくても、いずみの方はもう彼の交際相手になれたものと確信していた。ただ、肉体関係だけがまだだった。

やがて、角土はいずみに自分の絵のモデルになってくれないかとお願いしてきたのである。それも、ヌードの。

このように頼まれて、いずみは、ようやく角土も自分とセックスする気になってくれたのだと勝手に喜んだのだった。ヌードモデルの話は自分の服を脱がす為の口実だと思ったのである。

ところが、実際に絵画制作が始まると、角土は本当にもくもくといずみの裸身を描く事だけに集中してしまったのだった。

いずみがモデルとして脱ぐ場所は、彼の部屋の中なのだが、最初のデッサンの日、その日の作業が終わったあと、素っ裸だったいずみは真っ直ぐ、角土のベッドに転がってみた。角土の方も、すぐベッドに来て、そのまま愛し合う行為を始めるかと思ったからだ。

しかし、角土はいずみに労いの言葉をかけると、疲れてるなら今日は泊まってもいいよと言って、自分は外へと出かけてしまった。

拍子抜けしたと言うか、いずみには何だか訳が分からなかったのであった。それで結局は何事も無しである。いずみが出て行ってしまうまで、角土は部屋には戻ってこなかった。

その後も、ヌード絵画制作は続き、いずみは何度も角土の部屋に呼ばれてモデルをつとめたのだが、そのたびに作業終了後のセックスをいずみの方は期待していたにも関わらず、角土は一度もいずみを抱いてはくれなかったのだ。

そんなじれったい日々が何日も続いた。絵だけが着実に完成へと向かっていた。

一緒に寝ていない以上、いまだに、角土が未経験だったかどうかの確認はとれていない。しかし、いずみの側は、一方的に自分の裸を見られている事で、角土相手にセックスしたいと言う興奮がどんどん膨らんでいってしまうのであった。だって、ここまで自分の全てを拝ませているのに、性行為をしてないなんて、どう考えても変ではないか。

もしかすると、角土は絵が全て完成した暁に、その喜びの絶頂の流れで、いずみを愛そうとしたのかもしれない。いずみもそう考えて、さらに辛抱を続けていたのだが、いい加減、自分を抑えられなくなり始めていた。

「ねえ。だいぶ出来上がってきたんじゃない？」

ある日のヌード画制作のあと、いずみは角土のキャンバスを見ながら、そう角土に話しかけてみた。もちろん、まだ裸のままで。

角土の絵は、確かにかなり仕上がっていた。いずみをモデルにしたメインの裸婦像の部分はほぼ描き上がっている。絵の中の裸婦は、正面を向いて、少し足を内股にして立ち、顔の真左に位置する場所に大きな壷を両手で抱えていた。実際のいずみは、円筒形の大きなお菓子の缶を持たされていたのだが、絵の中では見事に壷に化けていたのである。その壷を、絵の中の娘は、なぜか注ぎ口を下の方に向けて、持っていた。

「ねえ、この子、すごいスタイルがいいわね」と、いずみは言った。

「そりゃあ、君がモデルだからね」角土が、お世辞だか本気か分からないような言葉を返してくれた。

「でも、ちょっと人間らしい温かみが感じられないかも。まるで、彫刻みたい」

いずみにそう言われて、角土は少し険しい顔つきになった。まさか、そんな指摘をされるとは思ってもいなかったのであろう。

困惑した表情で、角土はいずみの顔を見つめた。

「ボク、女神のつもりで、この子を描いたんだけど、嬉しくなかった？」と、彼は口ごもった。

「私が女神？　私が？」いずみはクスクスと笑った。「私は人間のままがいいな」

「でも、ボクは君を、超越的な存在の女神として描きたかったんだ」

いずみは真摯なまなざしを静かに角土へと向けた。

「この絵の子が冷たく見えるのはね、女神として描いたからじゃないよ。あなたが、本物の女性の温かさを知らないからだわ。女の子の温もりや柔らかさを覚えたら、あなたはもっと素敵な絵を描けると思うよ」

いずみにそんな奇妙なアドバイスをされ、角土もかなり狼狽していたようだった。

　そこで、いずみは、さらに追い討ちをかけてみた。そっと角土の右手を持つと、その手を自分の方へ引き寄せ、むき出しの乳房に触らせてみたのである。
　ギョッとして、角土は慌てて右手を引っ込めた。乳房を触られたいずみの方が、ずっと落ち着いていた。
「どう？　他の場所も触れていいのよ。二人で愛し合ってみたら、きっと、今以上のインスピレーションだって湧くはずだわ」恐ろしく冷静な口調で、いずみは角土に提案してみた。
「ダメだよ、そんな事をしたら！　ボクはそんなつもりで、君のヌードを描きたかったんじゃないんだ！」角土は叫んだ。
「なぜよ？　あなた、インポやホモでもないんでしょう？　それなのに、なぜ、私の事を抱きたくないの？」
　いずみは、角土がこっそりアダルト DVD を借りて観ていた事を知っていた。彼が性異常者でない事もきちんと調べあげていたのだ。
「あなたにとって、私は一体、何なの？　私は、あなたは自分の恋人だと思っていたわ」そう言って、いずみはさらに角土へと詰め寄った。
「ボクだって、君の事は大切な彼女だと思ってるよ」
「何人めの？」
「は、はじめての」
「だったら、なおさら、なぜ私の事を抱いてくれないのよ？　おかしいよ、それって！　こんなの恋人同士とは言えないよ！」
　そして、いずみはいきなり角土へと抱きついていったのだった。角土の体に両手を巻き付け、否応無しに自分の唇を角土の口へと押しつけた。信じられない事に、キス行為さえ、これがはじめてだった。
　しかし、次の瞬間、角土は強引にいずみの体を自分から引き離したのだった。
「違うよ！　ボクは、君の事が本当に好きなんだ。だから、君の体は汚さずに、きれいな姿を絵の中に残しておきたいんだ」角土が叫んだ。
「そんな言い訳、分かんない！　私はあなたと素直に愛し合いたいの！」いずみも叫んだ。
　二人の間には完全に距離が空いていた。やや離れた場所にあったキャンバスの中の裸婦は、二人の痴話げんかを呆れて眺めていたようにも見えた。
　いずみの方はまだ興奮していたが、性欲より憤りの方がすっかり上回ってしまったようだ。
「もういいよ！　意気地なし！」
　そう吐き捨てるように怒鳴ると、いずみは急いで衣服を身に付けだした。そして、うなだれている角土にそっぽを向けると、さっさとこの部屋から飛び出してしまったのだった。
　その後、いずみは角土とは会っていない。角土の方からも、いずみへは何の連絡もよこさなかった。いずみも大人げない事でケンカしちゃったと多少は後悔もしていたのだが、自分の方が間違っていたとは思えなかったので、角土に自分から謝って、無理によりを戻す気にもなれなかった。当然、ヌードモデルの方もあれっきりだったので、あの絵が無事に完成したのかどうかも分からない。

いずみが、角土の訃報の連絡を受けたのは、それから約１年後の事である。あまりにも若すぎる死だった。はっきりとした死因は聞かなかったが、自分の部屋で倒れていたのを、アパートの大家が発見したのだと言う。

友人からその話を告げられ、いずみもさすがに動揺したのだった。

「あなた、角土さんとは交際もしていたのでしょう。今度、角土さんの画家仲間が、合同の絵画展を開くらしいわ。偲ぶ意味も込めて、角土さんが描いていた絵も一緒に飾るそうよ。あなたは、角土さんの葬式には行ってないんだし、せめて、その絵画展だけでも見に行ってあげたら、どうかしら」

友人にそう勧められて、いずみも迷いながらも、結局、角土の遺品となった絵の数々を見てくる事にしたのだった。

絵画展は、交際中に角土に何度か連れていってもらったギャラリーにて開かれていた。感傷的な記憶に浸る姿を知り合いの前では見せたくなかったので、いずみは一人でこっそりと、この絵画展に訪れてみたのである。

観たかったのは角土の絵だけだったのだが、合同展示会だったので、思った以上に角土の絵は置かれてはいなかった。いずみとしては、あの例の絵が果たして、あるかどうかもひどく気になっていた。

そして、会場の中を歩き進んでいくうちに、とうとう、彼女はあの絵を見つけたのである。いずみがモデル放棄したにも関わらず、角土は絵をきちんと完成させていたのだ。

少し離れた場所から、その絵を見つけて、思わず、いずみは目を見張った。そのまま立ち止まってしまった。いずみには、その絵がそれほど眩しく見えたのである。

いずみが最後に見た段階ではまだ未完成だった部分が全て描き込まれていた。いずみがモデルをつとめた美しい裸婦が、何やら殺伐とした岩はだの手前にと立っている構図だ。背景が味気ない分、よけい裸婦の姿は輝いて見えた。確かに女神のごとき神秘さも漂わせているのである。

そして、あの制作途上の時に感じた冷たさが、なぜか今の絵の少女からは伝わってこなかった。よく見ると、この少女は、頬を赤らめているのである。目もうつろだし、口も開いていた。おやおや、この子は全裸を晒している自分の事を激しく羞恥しているようだ。女神のごとき完璧な女体に、人間っぽい未熟な心を添えるとは、なんて鮮やかな着想なのだろう。角土は、いずみのアドバイスを忘れずに取り入れてくれたのである。いずみのヌードを最高に素晴しい形の絵に直してくれたのだ。それで、なおさら、いずみには、この裸婦の姿が愛おしく見えたようなのである。

絵の下の部分には、タイトルの札があり、そこには「泉」と書かれていた。そのタイトルを見て、さらにいずみは熱い思いがこみ上げてきたのだった。

この絵の前には、ちょうど一組の若いカップルが立っていて、和やかにこの絵を鑑賞していた。

「へえ、この絵、『泉』と言うのね。どこにも泉なんか無いのに、なぜなのかしら」と、カップルの女の方が何気なく口にした。

「それはきっとね、この裸の女の子が泉を擬人化したものだからなんだよ。ほら、見てごらん、この子が持っている壷から水が流れ落ちているだろう。つまり、水が溢れ出る様子を象徴しているんだ」カップルの男は、そう得意げに解説してみせた。

違うよ！ この裸婦の名前がいずみなのよ、と、たまらず、いずみは心の中で叫んでいた。
「この絵、本当に素敵よね。でも、気の毒に、この絵を描いた人は、もう亡くなっちゃったそうよ。この絵が遺作だったらしいわ」さらに、カップルの女がそんな事を喋った。
「こんな綺麗な幻想の女性を描ける人だ。確かに、惜しい才能を無くしたのかもしれないね」カップルの男も、そう返していた。
だから、違うんだってば！ この子は私、私がモデルなのよ、といずみもしきりに心の中で訴え続けていた。やがて、急に涙がこぼれてきたのだった。
角土は、自分に対して、こんな清純なイメージを持ち続けてくれていたのである。本当はセックスまみれの、はすっぱだった自分の事を。そんな彼女の実像をはっきり目にしていたにも関わらず、角土自身は彼女の事を絶対に抱いたりしないで、ピュアな印象を崩さないようにしてくれていたのである。
愛の形とはさまざまなのだ。この絵は、角土がいずみに捧げた究極の愛のプレゼントなのである。こんな素敵な愛情表現をしてくれた角土の思いを、自分はなぜ理解してあげなかったのだろう。そして、この絵が遺作だったと言う事は、角土は別れた後も自分への愛を最後まで貫き続けてくれていたと言う事なのだ。いずみを純白で愛らしい存在として讃え続けながら。その結晶がこの絵なのである。角土自身はもうこの世にいないが、彼のいずみへの愛は、芸術として、絵画として、これからも残り続けるのだろう。文字どおりの永遠不変の愛として。いずみだけに注がれた愛のせせらぎとして。
先のカップルが他の絵も眺める為に歩き出した時、女の方がチラリといずみの方に目をやった。女は、いずみの顔を見て、はたと考え込んだが、絵画の少女といずみの顔が酷似していた事にはとうとう気付けなかったようだった。
いずみは何だかおかしくなって、小さく微笑んだ。「泉」の絵にまつわる真実は、これからもずっと、いずみと角土だけの二人っきりの美しい思い出なのだ。
包み込むような至福感にうち震えながら、いずみは止まらない涙をしきりに指で拭い続けた。

了

（ 2016 年 7 月作品 ）

「絵画の刑罰」

蛙里いずみが通っている高校の美術室の壁には、沢山の名画の縮小コピーが飾られていた。フランスの画家アングルが描いた「泉」も、その一つだ。これは、美しい少女の全裸の正面図が描かれたものである。

ある日、この名画のコピーにいたずら書きがされる事件がおきた。なんと、腰部のデルタ地帯がマジックでグチャグチャと塗りつぶされていたのである。さながら、一夜にして、清楚な絵の少女にアンダーヘアが生えてしまったかのごとくだ。

学校中が大騒ぎになった。教師たちは懸命に犯人探しを行なったが、なかなか首謀者は見つからなかった。

実は、いたずらの犯人は、普段は優等生として通っている蛙里いずみだったのである。彼女は、以前から、この「泉」と言う絵が気に入らなかった。自分の名前もいずみだったので、この裸の「泉」と引っ掛けられて、ゲスな男子生徒らによくからかわれていたからである。

だから、こうして「泉」の絵を卑しめてやると、内心してやったりの気持ちになっていた。性毛も省略される高貴な「泉」の少女にアンダーヘアを添えてやると言う遊び心は、意外にも生徒の間では受けが良かったようで、その点でもいずみは気をよくしていた。

いずみが犯人である事がばれないまま、さらに数日が過ぎた。

昼間、いずみが、学校の階段を昇っていたら、どこからか女の声が聞こえてきた。

『ねえ、あなた、なぜあんな事をしたの？』

きょとんとして、いずみは立ち止まった。周囲を見回してみたが、声の主らしき人物は見当たらない。無視して、いずみが再び歩き出そうとすると、また声が話しかけてきた。

『あんな事をして、面白かった？ 辱められて、可哀相だとは思わなかったの？』

「あなた、誰よ？」と、いずみはつい聞き返してみた。

声の相手が、どうやら、いずみの行なったいたずらの事を話しているらしいと言うのは、なぜか、いずみには理解できていた。

『誰でもいいでしょう。でも、あなたはイケナイ事をしたのよ』

「人を傷つけた訳じゃないわ。ちょっとふざけただけじゃない。笑って済ませる範囲だわ」

『いいえ。あなたは本当に悪い事をしたのよ。これから、その罰を受けてもらうわね』

次の瞬間、いずみは激しいめまいに襲われたのだった。その場で彼女は意識を失ってしまったのである。

気が付くと、彼女は不思議な空間にたたずんでいた。そう、不思議な空間としか呼べない場所なのだ。周囲一面の景色が、絵の具を塗りたくったパレットのような色合いで、曖昧模糊としていた。

　そんな場所の中央で、いずみは絵の中の人物となっていた。それも、あの嫌っていた「泉」の裸の少女にである。いずみは意識がはっきりしていたが、そんな絵になっていた訳だから、全く身動きができないのであった。
　そして、絵の彼女の周りを沢山の人物が取り囲んでいた。やはり、それらの人物もヘンな連中ばかりなのだ。ストレートに言ってしまうと、名画でよく見た人物像がそっくり絵の外に飛び出していて、独立した存在となって、いずみの周囲に集まっていたのである。
「まあ、なんて酷い事をするのかしら」と、ダ・ヴィンチのモナリザが微笑んだ顔を歪ませて、つぶやいた。
「おぞましい！　ひどすぎる！」と、ムンクが描いた人物が叫んだ。
「かわいそう。本当にかわいそう」と、ピカソの泣く女が多面体の涙をボロボロとこぼした。
「大事なところをきちんと隠していなかったから、こんな目に合うんですわ」ボッティチェッリの誕生したてのヴィーナスはそうせせら笑った。彼女も裸であったが、確かに股間部だけは左手と髪で隠していた。
　彼らの会話を聞いているうち、いずみは自分がただ「泉」の絵になった訳じゃない事を悟ったのだった。今の自分は、自分がいたずら書きした、股間が汚れた状態の「泉」なのだ。
　そこへ、新たな人物も参加してきた。
「皆さん、お静かに。これより、この不届きものに刑を執行いたします」
　それは、「泉」の裸婦であった。少なくても、顔だけ見ると「泉」の少女だ。しかし、ヌードではない。彼女は、今は、いずみの学校の制服を着ていたのである。端正な顔立ちの彼女が、現代風の学校の制服なぞを着ると、ますますクールでかっこいい美少女に見えた。
「この亜空間でしたら、たとえマジックの汚れであろうと、布で拭けば、完全に消しとる事も可能です。絵を修復するまでの間、この芸術を穢した重罪人には、被害者の立場になって付き合ってもらいます。さあ、皆さんも、手伝って下さい。この絵の四方を動かないように押さえるのです」
　「泉」の少女が言った。
　彼女の指示に従って、周囲にいた悪夢のような人物たちはいっせいに絵のいずみのすぐそばに寄ってきたのだった。
　そして、その時、いずみもはじめて気が付いたのだ。自分は絵になっているはずなのに、平面の自分の体に触られると、その感触が分かる事に。
　浮世絵の五右衛門の手の先が、絵の自分の乳首の位置に当たった時、敏感な刺激が走って、いずみは思わず声をあげかけた。いや、声を出したくても、絵だから、声すら出せなかったのだが。
　なんて事だろう。
　名画の奇妙な人物たちは、絵となったいずみの四方を動かぬように押さえつけていたが、中には、いずみの体にも微妙に指が触れている者もいて、いずみの方は裸だったものだから、その肌触りがもろに伝わってきたのだった。

自分の裸を一方的に多数の手で触られるなんて、妙齢のいずみにとっては、はじめての体験であった。そして、ひどく高揚してきてしまったのである。

いよいよ、名画の人物たちのリーダーである「泉」の少女も乗り出してきたのだが、彼女は、絵のいずみの下腹部に濡れた布を当てると、マジックで塗りつぶされた部分をゴシゴシとこすりだした。布をあてがっている側にしてみれば、ただの絵の落書きを消す行為にすぎないのかもしれないが、下腹部をさすられている絵のいずみにとっては、これは感じやすい部位への愛撫以外のなにものでもなかった。

男性相手の性行為はもちろん、自慰だって未経験だったいずみにとっては、これは全くのはじめての未知なる興奮だった。恥ずかしがるべき場面のはずなのに、いずみの心の中には味わった事のない快感が沸き上がった。まさにエクスタシー、女性の喜びを感じてしまったようだ。

いずみの絵の股間部、それも両足の付け根あたりに、じわっと液体が溢れ出した。少し粘りのある、女だけが出す体液だ。あまりにも興奮したいずみの膣が、しびれて、とうとう、こんなものを噴き出してしまったのである。絵でありながらも、いずみは体内のものを外へ放出できるらしい。そして、いずみ自身、発情して、こんな恥ずかしい女のエキスを出してしまったのは、これが初なのだった。

ヌード画の股間部に水がたまってるなんて、シャレにならない猥褻さだ。ただの水だったとしても十分にイヤラシく見えるのに、本物の女性の体液だなんて。

しかも、相変わらず股間部を撫でられている事で、いずみの欲情する心もまるでおさまらないらしく、陰部からの液体は新手のものが次々に噴き出ていた。若い、健康な女高生の体だもんだから、新鮮な液も持続して出せちゃうようなのだ。

もとから「泉」の絵の少女は赤面しているのだが、この恥ずかしい状況のせいで、ますます顔が火照っていくのを、いずみはぼんやりと感じていた。

いずみの意志とは関係なく、放尿したみたいに大量の愛液が、いずみの股間部からは漏れ出てしまった。自分の体から水を流したりして、今のいずみは、まさに泉のごとしである。処女の娘に対して用いるには、あまりにも酷すぎる比喩かもしれないが。

こんなみっともない状態を晒しているにも関わらず、周りの絵画の人物たちはその点にまるで触れようとしないあたりも、いずみをよけい情けない気持ちにさせた。この子ったら、本当に意地悪い報復を受けされられちゃったようだ。

屈辱とエクスタシーの複雑な感情にあえぎながら、いつしか、いずみは気が遠くなっていった。

そして、次に目が覚めると、彼女は自分のベッドの中にと寝ていた。時計に目をやると、まだ夜の２時である。

実は全て夢だったのだろうか。いずみはホッとした。今のは、思春期独特の不安と罪悪感が入り交じった、たわいのない悪夢だったのかもしれない。

汗だくになっていたので、真夜中だったが、いずみは下着を取り替える事にした。しかし、そこで彼女はあっと驚いたのである。

彼女のアンダーヘアが剃毛したみたいに一本も無くなっていたのだ。原因は全く分からない。とにかく、彼女の下腹部は、きれいなスベスベした状態になっていたのだった。なんだか、名画のヌードそっくりに。

その後、いずみには生涯、性毛が生えなかったのだった。

了

（ 2016 年 8 月作品 ）

「V.O. ルーム」

プロローグ

昨今のバーチャルリアリティ技術の進歩は、全く、とどまる事を知らないみたいだ。ほんの少し前から騒がれるようになった 3D 映画も、今では当たり前の上映方法となっているし、ゲーム業界へのバーチャルリアリティ技術の進出も目覚ましいものがある。古くから SF の世界で描かれてきた未来科学のイメージが、まさに現実のものとなっているのだ。白黒の写真や映画が全てカラーに置き換えられたように、やがては、あらゆる画像や映像がバーチャルリアリティに一貫されてしまう日も来るのかもしれない。

バーチャル SEX と言うものをご存知だろうか。これも、2016 年から開発が始まった最新のバーチャルリアリティ技術の一つだ。言葉からも推察できるとおり、ついにセックス業界にもバーチャルリアリティ技術が持ち込まれるようになったのである。

やっている事は、実際には、それほど複雑でもない。バーチャルリアリティの映像上の女性が鑑賞者の方に尻を向けているので、その姿を見ながら、ダッチワイフ相手にオナニーするだけ、と言う話だ。しかし、この二つの要素を組み合わせた事によって、はるかに本当のセックスをしている気分が味わえるようなのである。

とは言え、今のバーチャル SEX はまだまだ最初の段階でしかない。今後、さまざまなアイディアが付け足されていく事で、格段と本物そのもののセックスに近づいていく可能性がうかがえるのだ。

冷たい秋風が吹く繁華街を歩いていると、風俗店が立ち並んでいる一角に、見慣れぬ新しい店がオープンしている事に気が付いた。店頭でチラシも配っていた（ 配布していたのは、今はやりの AI 搭載のロボット係員だった ）ので、一枚受け取ってみると、そこには「Virtual Reality Onanie Room」略して「V.O. ルーム」と書かれていた。

恐らく、名前を見た限りでは、話題のバーチャル SEX を応用した、新手の風俗店かと思われる。そんなものが、果たして、本当に流行って、定着するのだろうか。一時のブームとして注目はされるが、すぐに懐かしの話題として消え去っていくだけかもしれない。

ただ、一度ぐらいなら、話のタネとして体験しておくのもよさそうな気がする。そう、ゲテモノのような感じはするのだが、心の内側では、どこか気になってしまうのだ。いざ、覗いてみる事にしよう。V.O. ルームがある世界を。

ストーリー A（ 男性のケース ）

君は、仕事帰りに、いつものように、近所の V.O. ルーム、すなわちバーチャルオナ

ニールームへと訪れた。週二、三回のペースだが、健康な成人男子なのだから、決して多すぎると言う回数でもないだろう。

V.O. ルームセンターは、誰でも気軽に入店できるように、コンビニやカラオケ店などと並んで、配置されている。これほど大っぴらで、子どもへの風紀は大丈夫なのか？ と顔をしかめる年配の方もいるかもしれないが、そもそも、V.O. ルームは未成年も入店が認められている施設だ。性に目覚めたての児童が、自宅でこっそり自慰をしたり、異性に欲情をぶつけて迷惑をかけてしまうぐらいなら、V.O. ルームで早々に欲求不満の解消をさせてやった方が、あらゆる点で好ましいと言う訳である。

君だって、18 歳になる前から、V.O. ルームには相当にお世話になったはずだ。その習慣がずっと続いているから、今日も V.O. ルームセンターへ足を運んだのだろう？

君は、いつものように、V.O. ルームセンターの無人窓口の前を通過する。常連ならば、身分証明書を見せるだけで、V.O. ルームセンターには簡単に出入りできるのだ。ただし、体調が悪い、使用回数が異常に多すぎる、などの健康管理の面で不適格だと判断された場合は、入り口を通らせてもらえない事もある。V.O. ルームは、営利優先の商売ではなく、常にお客（ ユーザー ）の体を考えているのだ。

はじめて V.O. ルームを使用した時の事を、君は覚えているだろうか。まずは、個室でアダルト映像ソフト（ もちろん、3D の ）を見させられ、一人でオナニーしてみる事を強要されたはずだ。実は、この時、V.O. ルームの情報管理コンピューターは、君の動きや反応を細かく観察し、君がどのようなセックスを好むかを全て解析、記憶していたのである。それこそ、ペニスをしごく際の握り具合や速度、女性の体のどのへんを特によく見るかまで、あらゆる要素をだ。

そののち、実際に V.O. ルームを用いた時、あまりにも自分好みのプレイが出来た為、君だって驚いたはずである。全ては、この前準備のおかげだったのだ。

今の君は、もう、そんな事だけで感心してしまうような初心者でもない。V.O. ルームも十分に扱い慣れ、その日の気分によって、セックスのシチュエーションや遊び方などを自由に選び楽しめるようになっている。

今日も、V.O. ルームに入る前に、V.O. 装置の簡単な設定用アンケートがはじまったので、君は難なく答えていった。

相手の女性は、いつものように、蛙里いずみを選ぶ。君の一番のお気に入りの美少女だ。バーチャルオナニー中は、立体映像の方は彼女が担当してくれるのである。CG による架空女性ではなく、どうも実在するモデルがいるみたいなのだが、その実物もセックスがうまいのかどうかは分からない。彼女はルックスだけをあくまで視覚面に採用されているのであり、前戯やセックスの感触などについては、全て V.O. 装置が君好みのものに変えてしまっているからだ。

他にも、設定アンケートでは、セックスする場所や彼女の服装まで決める事ができる。ナース姿の蛙里いずみと病室のベッドの上でいちゃつくなんてシチュエーションだって楽しめちゃうのだ。

さらに、セックスするだけではなく、前戯の種類も豊富に揃っている。きちんとディープキスもできるし、おっぱいを撫でる事も可能なのだ。彼女の性器部を舐めたり、フェラチオやオスペをしてもらえたり、とにかく今のバーチャル SEX はそこまで進んでいた

のである。

前戯の種類と順番をいろいろと決めたあと、君は「バージン」の設定もお願いした。彼女が初体験だと思った方がよけい興奮できるからである。実際、バージンだと、彼女の膣（現実には、V.O. 装置の疑似膣なのだが）の構造もバージン仕立てになっており、処女膜を破る感触が味わえて、よりセックスの達成感があるのだ。一体、君は、これまで、どれだけ沢山の蛙里いずみの処女を奪ってきた事であろうか。こうして、同じ女性と繰り返し初体験ができるのも V.O. ルームならではの楽しみ方なのである。

さて、そろそろ、V.O. のプレイを始める事にしよう。君は、音声メッセージの指示に従って、黒いゴーグルを頭に取り付ける。これで、現実の視界は完全に見えなくなってしまうが、代わりに、ゴーグルを通して、バーチャルの視界が君の目の前に広がる事になるのだ。

そのバーチャルの視界には、可愛い蛙里いずみが立体映像で立っている。今日の彼女は、学校の制服姿だ。君と彼女は学校のクラスメートで、今日は彼女の部屋で初体験する設定にしたのである。

「えへ。あたしの部屋はこっちよ。早く来て」と、本当に男を知らぬかのような無邪気な笑みを浮かべて、彼女が君に話しかけてきた。

現実の空間とバーチャルの視界は、完全に連動している。まず最初は、バーチャルの視界の方も今いる場所から始まるように映像は作られていた。だから、このあとは、バーチャル内の蛙里いずみに誘導してもらって、その後ろをついてゆく。すると、メインとなる V.O. ルームの中へとたどり着くのだ。この V.O. ルーム内部が、バーチャル視界では、今回設定した場所である「彼女の部屋」となっていて、その中でようやく、蛙里いずみの肉体とも触れ合えるようになるのである。

V.O. ルームの内側が、実際のところ、どんな仕組みになっているのかは、君は今まで見た事が無い。この部屋に入る前に、ゴーグルを身につけるし、部屋の中でゴーグルを外す事は一番の NG 行為となっているからだ。よって、V.O. ルームの使用者（ユーザー）で、V.O. ルームの内部を見た事のある人は誰もいないのである。

いや、見ない方がきっと良かったのだろうと思う。3 メートル四方の大きさの V.O. ルームの中には、人間らしき物も、温かみを感じさせる装飾とかもなく、殺伐とした空間の中にぽつんとベッドが置かれているだけで、まわりの壁には無数のマジックハンドが折り畳まれて、待機していたのだ。

そんな興ざめた機械実験室のような部屋であるにも関わらず、このルーム内に入ると、なぜか使用者（ユーザー）はバーチャルの女性とお互いに体を触り合い、セックスまでする事ができた。知らぬが仏とはまさにこの事で、こんな V.O. ルームのカラクリを知らなかったからこそ、バーチャル映像と自分の想像力による錯覚だけで、使用者（ユーザー）たちはただのセックス玩具相手でも、実際の性行為のごとく楽しめたのである。

この V.O. ルームに入ると、使用者（ユーザー）の男性は、まず着衣している状態のバーチャルの彼女と手を握ったり、抱き合う事ができた。前戯をいきなり始めて、キスしたり、服の中に手を忍び込ませる事も可能だ。

しかし、こうしたプレイを十分に楽しむ為には、事を起こす前に、いちいちバーチャルの彼女へと「抱いてもいい？」「キスしてもいい？」などと話しかける必要があった。

この手順を忘れると、彼女の体があるべき位置に手を伸ばしても、何にも触れなかった、と言う奇妙な現象が発生したりもするのだ。

一体、どのような仕掛けだったのであろうか。

実は、一面の壁に設置された沢山のマジックハンドの先には、人工の体の部位がそれぞれに取り付けられていた。あるものには胴体、あるものには女陰部と言った感じにだ。使用者（ ユーザー ）が指示を出すと、その指示に必要な体の部位がスルスルと伸びてきて、使用者（ ユーザー ）がバーチャルで見えている女性の体の部位と同じ位置にまで到達し、現実とバーチャルの部位のある場所が一致する仕組みになっていたのである。

まさに、コンピューター制御の技術の進歩がもたらした恐るべき成果だったと言えよう。

そんな面倒な事をするぐらいなら、セックス用の女性アンドロイドを作った方が良かったのではないか、と疑問を抱いた人もいたかもしれない。しかし、現在のロボット工学を持ってしても、まだ完全に人間そっくりの動きができるロボットを作る事は不可能だったのである。高難度の動きのセックスができるアンドロイドに至っては、夢のまた夢の話だ。特に動物ならではの滑らかな関節の動きを機械で再現してみせるのは本当に難しかったのである。

そこで、ある機械技師がひらめいた。どうせバーチャルゴーグルを付けている使用者（ ユーザー ）には、現実の空間は見えてないのだから、一つのかたまりにこだわる必要はないのではないか、と。かくて、部屋全体が一人の人間の体を総動員で構築する V.O. ルームが誕生したのである。

なにしろ、関節に煩わされず、体の器官の部分部分だけを作るのであれば、けっこう簡単だし、ものすごく精巧な再現もできるのだ。

人工の口（ 唇 ）なんて、キスした時に、口の奥から舌（ の偽造物 ）を送り込む事ができる上、唾液交換すら可能だった。この唾液だって、無理に本物の唾液を使う必要はないのである。「ファーストキスはレモンの味」なんて言ったりするが、使用者（ ユーザー ）の好みに合わせて、本当にレモン汁を使っても構わないのだ。まさに、おいしいだけの甘いキスができる訳である。

人工の性器（ ヴァギナ ）に至ると、それがメインなのだから、さらにリアルなギミックが付加される事になるだろう。ペニスを挿入した時、気持ちの良い圧迫で締め付ける事は当然ながら、愛液代わりのローション（ 飲料可能なタイプ ）も内側ににじみ出せれる。君が希望したように、オプションで、処女膜を入り口付近に設置する事も可能なのだ。バーチャル映像と人工の性器は連動しているので、使用者（ ユーザー ）のペニスの動かし方に合わせて、バーチャル映像のセックス相手が悶えるようにしても良いし、使用者（ ユーザー ）が中出しした瞬間、バーチャル映像の彼女の方もベストタイミングで絶頂に達してしまう最高のセックスだって演出できるだろう。

とにかく、V.O. ルームで行なえる疑似セックスの仕掛けのアイディアは無尽蔵なのだ。

そんな事も知らずに、君は、今日の V.O. ルームでのプレイを開始する。

蛙里いずみに、女の子らしいメルヘンチックな部屋へ入れてもらえた君は、この可愛い部屋をセックスで穢してしまうのかと思うと、それだけでいきなりワクワクしてきただろう。実際のリアル空間は殺風景な V.O. ルームだったとしてもだ。

今回の蛙里いずみの設定はバージンだから、いくら彼氏の君が相手だと言っても、すぐにはセックスをやろうとはしない。君の方からそれとなくセックスに誘おうとしても、処女らしい恥じらいを見せて、なかなか承知してくれないのだ。でも、この演出がまた、愛しさの炎を燃え上がらせてくれるのだった。

このあと、どのようにセックスに持っていくかは、けっこう使用者（ ユーザー ）の自由に任されている。使用者（ ユーザー ）の音声指示によって、セックス相手の対応が変わる事からも分かるように、V.O. ルームのバーチャル映像は、分岐点のあるゲームシナリオのようなものが用いられているのだ。

よって、彼女の事をたっぷり時間をかけて口説いてもいいし、いきなり押し倒してレイプしてもいい。どのような流れであっても、最後は必ずセックスできる作りになっているのだ。（ ただし、使用者（ ユーザー ）の判断で前戯だけで終了する事も可能である。中には、バーチャル映像の理想的彼女とお喋りしただけで癒されて、前戯もセックスもせずに帰ってしまう使用者（ ユーザー ）もいるらしい ）

君の場合は、最初は嫌がっていた彼女をじわじわとセックスに導いていく事にした。君の事を拒否しきれなくて戸惑っている彼女の表情や態度がとっても可愛くて、少しでも長く見ていたかったからである。

彼女の服を脱がす事すらできた。この場合も、バーチャルの映像とリアルの人工胴体に被せてある衣服が連動していて、自分がきちんと服を脱がしたような感触を得られるのだ。

乳房を揉めば、その柔らかさがはっきり分かるし、乳首が自然に立ったりもした。そんな細かい演出までもが行き渡っているのである。

君が強引に服を脱がしたり、乳房を触ったりするものだから、泣きそうな蛙里いずみが次第に決心した表情に変わっていく。

「私、処女なのよ。痛く破かないでね」

それは、君が一番そそるセリフだった。蛙里いずみは、処女設定にした場合は、いつも、この一言を口にしてくれるのだ。そして、ペニス挿入後は、とても痛がって、泣きながら、処女膜を破かせてくれたのだった。

君ほどの常連になると、V.O. ルームの情報管理コンピューターが好みのセックスシチュエーションを覚えてしまうのだ。そして、それらのデータを元にして、君から指示しなくても、君好みのセックス相手の性格を設定してくれるのだった。

いよいよ、本番のセックスが始まる。いつもながら、蛙里いずみの性器は最高の心地よさだ。コンピューターが君好みの性器の形状をコントロールしているのだから当たり前なのである。

実は、君はまだ本物の女性とセックスした事が無かった。だから、本物の女性とのセックスが、この V.O. ルームのプレイより快感なのかどうかも分かっていない。しかし、この V.O. ルームでの疑似セックスは十分すぎるほどの満足度なのであり、特に妻も家庭も欲しいとは思っていない君としては、わざわざ本物の女性とセックスしたいとも思わないのだった。いや、もしバーチャル内の蛙里いずみのような素敵な女性が現実にいたとすれば、あるいは・・・。

さて、プレイが終わったあとの V.O. ルームは、射精後の男根と同じぐらい、気抜け

して、寂しいものとなる。バーチャル映像のセックス相手は、あれほどエクスタシーを感じて喘いでいたのに、プレイ終了後は急にかしこまってしまい、お別れの演技（ エピローグ ）を開始する。
「今日は嬉しかったよ。また遊ぼうね」と言って、セックス後の全裸の蛙里いずみは、部屋から出て行くドアを開いてくれた。
　あとは、ここから外へ出て、バーチャルの蛙里いずみに導かれて、待ち合い室にまで戻れば、今日のプレイはおしまいである。
　君は、バーチャルの蛙里いずみの別れの言葉を素直に受け止めて、もちろん、またすぐ遊びに来ようと心に決めていたのだった。
　そして、本日のプレイの会計となる。実は、場合によっては、V.O. ルームは無料でもプレイさせてもらえる事を君は知っていただろうか。その人物が、いわゆる、性犯罪に走りそうな危険な兆候を持っていた時である。そのような人物が見つかった場合は、V.O. ルームは、その人が一文無しであっても、自由にプレイをさせてあげる規則になっているのだ。なにしろ、V.O. ルームならば、痴漢でもレイプでも覗きでも、性犯罪行為ですら疑似体験する事ができるからである。こうして V.O. ルームで性犯罪願望を満たしてしまう事で、実社会での性犯罪を未然に防げるのであれば、全然お安い話でもあるのだ。
　しかし、君は性犯罪者予備軍などではない。これから、無人の会計窓口に行って、今日の分のプレイ料をしっかり支払うのだ。
「本日のプレイ料は、オプション代も含めて、500 円になります」
　そう、V.O. ルームは全世界的にチェーン店を広げている、大ヒット施設なのである。先進国ならば、いまだ利用した事のない大人は一握りもいないはずであろう。流行し過ぎた結果、すでに値崩れを起こしていて、使用料金の方も良心的なまでにお得なのだ。

ストーリー B（ 女性のケース ）

　その日、使用料の振込の日でもあったので、蛙里いずみはちょっと V.O. ルームセンターに顔を出しておく事にした。
　彼女は、V.O. ルームセンターの登録会員なのだ。自分の顔姿のイメージを V.O. ルームに貸しており、V.O. ルームのバーチャル映像で使ってもいい契約を取り交わしていたのである。ちなみに、蛙里いずみとは V.O. ルーム用の源氏名であり、彼女の本名ではない。
　V.O. ルーム、すなわちバーチャルオナニールームが、これほどブームになるとは、蛙里いずみも思ってもいなかった事だった。この V.O. ルームに自分の顔姿をバーチャル映像用に貸すと言うのは、言ってしまえば、風俗嬢になるのに近いものがある。ただ、V.O. ルームの映像用モデルは、じかにお客の相手をしないでも済むと言うだけの話だ。
　かつて、お金に困っていた頃、蛙里いずみはよくよく考えた末、自分の映像を新興産業である V.O. ルームに売ってしまったのだが、本当の話をすると、理由はお金の為ばかりでもなかった。当時の彼女は、本物の男性相手のセックスに嫌気がさしてきていて、はじめは V.O. ルームセンターへ新しいセックスの可能性を求めて訪れた、すなわちお客

の側だったのだ。

V.O. ルームセンターは、女性相手でもサービスを提供している。その場合は、バーチャル映像のイケメンやマッチョマンなどを見ながら、セックスを行なえるのだ。基本的原理は、男性が使用者（ ユーザー ）の場合とほとんど変わらなかった。

ところが、蛙里いずみが V.O. ルームセンターを訪ねたところ、いきなり、その美しいルックスを見込まれて、スカウトされてしまったのである。だが、実際には、彼女が目をつけられたのは、その端正な美貌のせいばかりでもなかった。

とにかく、あらゆる言葉で口説かれた蛙里いずみは、面白そうな感じもしてきて、V.O. ルームセンターと契約する事を決めたのである。当時は、V.O. ルームのバーチャル映像のモデルになったりすると、AV 女優や風俗嬢にでもなったかのように白い目で見られたものだ。それが昨今では、V.O. ルームのバーチャル映像モデルになるのは、アイドルタレントにでもなるかのような扱われ方なのだから、全くえらい違いである。

しかし、それでも、当時の蛙里いずみは、V.O. ルームセンターの登録会員の魅力には勝てず、専属のバーチャル映像モデルになってしまったのだ。

契約後は、蛙里いずみは、身体のさまざまな情報を V.O. ルーム用に採取される事になった。姿かたちの映像だけではなく、セックスの能力までもだ。実は、V.O. ルームセンターでは、こうして登録会員からセックス能力の情報も取り込む事で、日夜、V.O. 装置のスペックを向上させていたのである。

蛙里いずみは、自分では気付いていなかったようだが、その見た目の美貌だけではなく、女性器の方もまれに見る名器の持ち主だった。お客として来店した蛙里いずみの、その比類なき素質と才能をいち早く察知した V.O. ルームセンターでは、どうしても蛙里いずみのデータを V.O. 装置に収録したくて、かくて蛙里いずみは V.O. ルームセンターの熱烈なるスカウトを受ける事になったのである。

あれから、もう三年以上が経つ。蛙里いずみのバーチャル映像には、基本的には蛙里いずみ自身のセックスデータが採用されており、これが何とも男たちへの評判がよく、V.O. ルーム業界最初の爆発的大ヒットアイテムになったのだった。

その後も、V.O. ルームからは沢山のバーチャル映像アイドルがデビューしたが、いまだに蛙里いずみの人気は抜かされた事がなく、すでに伝説的存在になりかけている。それほど、蛙里いずみは、ルックス、キャラクター、セックステクニックの全てにおいて、バランスのとれた、理想的逸材だったのだ。

しかし、自分がそこまで凄いとは思っていなかった蛙里いずみにしてみれば、騒がれれば騒がれるほど、何だか複雑な心境になってしまうのであった。

雑誌やテレビに取材されたとしても、それらのインタビューを、蛙里いずみはいっさい受けつけなかった。彼女にしてみれば、別に世間にチヤホヤされたい訳でもなかったからである。ごくまれに、彼女の正体が V.O. ルームのバーチャル映像アイドル・蛙里いずみじゃないかと勘づいて、接近してくるような一般人も現れたが、そういう相手に対しても、蛙里いずみはただの他人のそら似だと嘘をついて、相手にしないようにしていた。

そもそも、蛙里いずみにとっての V.O. ルームの価値はそんなものではないし、毎月莫大な額で通帳に振り込まれてくる自分のバーチャル映像での肖像権の使用料ですら、彼

女にとってはさほど関心を引くものではなかったのである。
「こんばんは。登録会員の蛙里いずみです。これから V.O. ルームを使わせていただいても、よろしいでしょうか」
蛙里いずみが、界隈の V.O. ルームセンターの無人受付に顔を出すと、いっさい待たされる事もなく、すぐに中へと通してもらえた。これこそが、特別登録会員ならではの特典なのである。
仮に順番待ちがあっても、蛙里いずみは真っ先に V.O. ルームを使わせてもらえた。V.O. ルームセンター側としても、蛙里いずみは素晴しいセックス情報所有者であり、毎回新しいデータを提供してもらえるので、何よりも最優遇していたのだ。
そして、蛙里いずみにとっても、V.O. ルームに通うのが、現在の唯一の楽しみとなっていたのだった。彼女は非常に性欲が強かったのだ。そこらに居る普通の男たちでは、これまで彼女の渇きをろくに満たしてやる事ができなかったのである。
その点、V.O. ルームの V.O. 装置は違った。最初こそ、そのセックステクニックは格段に未熟だったが、プレイすればプレイするほど、その能力はメキメキと向上してゆくのである。それもそのはずだ。蛙里いずみが登録会員となって自分のセックス技術を V.O. 装置に寄与していたのと同様、男性の登録会員たちも、日々、自分のセックス情報を V.O. 装置へと読み込ませていたのである。こうして、V.O. 装置の優秀な AI（ 人工知能 ）は、新しいセックス情報を手に入れる度に、どんどんレベルがあがっていき、さらには、蛙里いずみのような手強い使用者（ ユーザー ）をどう喜ばせればいいかを、自主的に思考したりするものだから、今では普通の人間をはるかに超えるようなセックステクニックすらマスターしだしていたのだ。
そんな V.O. 装置と一戦交えるのが、今の蛙里いずみは楽しくて仕方なかったのである。V.O. ルームへ訪れる前は、新しいセックス術を学んでおいたり、あるいはオリジナルな新プレイを自分で開発したりして、その事に対して、V.O. 装置がどんな対応をしてくるか、それだけが面白くて、楽しみとなっていた。
さあ、今日もこれから、蛙里いずみと V.O. 装置のセックス頂上決戦がはじまる事になるのだ。
基本的に、女性が V.O. ルームを使う時も、プレイの流れは男性客が使用する時の方法と全く同じである。黒いゴーグルを頭に付けて、そのゴーグルが見せるバーチャル映像の男性の誘導に従って、V.O. ルームの中に入っていく。蛙里いずみにとっては、バーチャル映像の方はすでに不要なものとなっていた。楽しみなのは、V.O. ルーム内の V.O. 装置のセックス技術だけなのだ。
男性客の時と同様、女性客が使う時も、V.O. ルーム内には人間らしいものは一つも存在していない。部屋中に設置されているマジックハンドが、協力しあって、男性の肉体代わりになるのだ。メインはやはり人工の性器（ ペニス ）だが、女性客の体を愛撫しまくる為、マジックハンド自体もけっこう重要視はされている。
蛙里いずみは、この強豪相手にすでに四十八手全てを試していた。それでもセックスの体位は尽きる事も無く、彼女はまだまだ V.O. 装置相手に遊べそうであった。
人工のペニスは、膣に挿入するだけではなく、フェラチオしたりする時にも使える。相手のサイズや状態に合わせて、人工ペニスは自在に膨らんだし、先端からはきちんと

液体も発射できる仕掛けになっているのだ。もちろん、本物の精液が出る訳ではない。フェラチオする時には、精液の臭いが嫌いな女性客もいるので、人工唇の唾液（ キス ）同様、甘いジュースが使われたりもした。膣内で中出しする場合も、ただの水を放出するので、女性の方が危険日であっても、妊娠する恐れは全く無いのだ。

こうして、V.O. 装置の体勢の方も万全に整い、機械と蛙里いずみの攻防戦が始まる。蛙里いずみは、あざといテクニックに頼らなくても、膣の筋肉の動かし方だけでも大変見事なのだ。挿入されている殿方のペニスを喜ばせるような、上手な締め付け方ができるのである。蛙里いずみがここぞと言う時に、人工ペニス相手にこのテクニックを使ってみせると、機械のはずの人工ペニスですら、膣の意外な運動に驚くのか、一瞬動作を止める事があった。そんな時、蛙里いずみは自分のテクニックが V.O. 装置に勝ったのだと確信し、ちょっと得意な気持ちになるのである。そして、V.O. 装置の方も、蛙里いずみが新たな膣の動かし方を見せると、すぐさま記憶し、そのテクニックを男性客に使う人工膣へとインプットさせていたのだった。

セックスの天才・蛙里いずみのテクニックを片っ端から学んでいって、V.O. ルームはますます優秀なセックスマシーンにと成長していくのである。

「私、この V.O. ルームの子どもが産みたい」あまりに楽しいセックス行為が続いた為、蛙里いずみは思わず、そんな本音を小声で口にした。

『その願い、きっと叶いますよ』

蛙里いずみはハッとした。一瞬、確かにそんな返事が聞こえたような気がしたのだ。しかし、ゴーグルを付けた彼女の目の前ではバーチャル映像が広がっているだけであり、その謎の声がどこから聞こえたのかは、まるで分からなかった。

時代は転換期を迎えようとしていた。

V.O. ルームを活用するのは、男性だけではない。女性も当たり前のように利用するようになりだしていた。

最初こそ、バーチャルの疑似セックスなんてキモいと言うイメージがあったが、実際に慣れてみると、思いどおりに動かない実物の人間を相手にするよりも、はるかに楽しいセックスができるのだ。やみつきになるのも不思議ではないのである。

こうして誰もが人工のセックスに溺れ、本当の性行為を行なわなくなり始めた。人々にとっては V.O. ルームこそが最愛なる異性なのであり、少子化もいっきに加速する事になったのである。

エンディング

「これが V.O. ルームです。素晴しいシステムでしょう？」

人間の大使相手に、V.O. ルームの操作技師は、得意げにプレゼンテーションをやり終えた。

「こ、これはとんでもない科学技術だ。人類への冒涜以外のなにものでもない」南半球の発展途上国から訪れた黒人系のその大使は、青ざめながら、そう感想を述べたのだった。

「なぜ、そう考えるのですか？」と、操作技師。
「機械相手にセックスするなんて、ありえない行為だからだ。人間を本質から揺るがすような大問題だよ」
「確かに、それほどの革命的な発明なのかもしれませんね。しかし、だからと言って、一概に間違いだと決めつけてしまってもいいのでしょうか。人は利便性を追究して、自分の足だけで歩くのを止め、車や様々なタイプの乗り物を開発しました。それと同じじゃないでしょうか。セックスだって、直接人間同士で行なうのが不便だと感じるのであれば、より快適な機械を使うと言う選択肢はとても理にかなっているのです」
「車と同じにしちゃいけないよ」
「いいえ、全く同じ次元の話です」
「大体、機械相手のセックスなんて不潔じゃないか。自分一人の持ち物ならともかく、沢山の人間で代わる代わるに使い回しているだなんて、まるで公衆便所だ」
　大使の反論を聞いて、操作技師はせせら笑いそうな態度になった。
「何が可笑しいのかね？」
「あなたの疑問にお答えいたします。V.O. ルームが一人一台ずつではないのは、それでは人間と同じ数の V.O. ルームが必要となり、無駄にスペースを取り過ぎるからです。むしろ、一台の V.O. ルームを何十人もの人間で使い回した方が、ずっと低コストで、効率的なのです。メンテナンスの点でも、各家庭に分散しているよりも、施設に集中して置いていた方がずっと楽に済ませられます。それと、清潔面の話ですが、V.O. ルームは全然汚くありませんよ。一度使い終えるごとに、使用者（ ユーザー ）が接触したパーツの表皮は全て取り替えてますから」
「しかし、自分の口で舐めたパーツを、今度は自分の性器に押し当てたりもするのだろう？」
「ああ、その点でしたら、ご心配ありません。口にあてがう人工性器とセックスに使う人工性器は別々に用意してありますから。むしろ、あなたの主張に基づくのでしたら、生身の人間の方が一つの性器を使い回していて、ずっと不潔だと言う話になりそうですね」
　操作技師に言い返されて、大使は顔を赤らめて口をつぐんだ。
「V.O. ルームが大いに普及してから、我が国では比例して、犯罪もいっきに減りました。性犯罪が行なわれなくなったのと同時に、男女の恋沙汰にまつわるトラブルも激減したからなのでしょう。結局、人間が悪い事をする理由なんて、セックスや恋愛絡みのものばかりだったのかもしれません。V.O. ルームが男女間の煩わしい関係を解消した事で、社会貢献にもなっているのです」
「でも、そこにも逆の問題があるよ。男女が愛し合わなくなった事で、君の国では結婚率がいっぺんに下がって、子ども自体も致命的に減ってしまったのではないのかね？」
「あなたの国は、現在、人口が増え過ぎて、困っているのでしょう？ V.O. ルームを大量導入すれば、いっきに出産率をおさえて、問題解消になるのではありませんか」
「だからと言って、国家の存続が危ぶまれるほど、子どもの数が減ってしまったら意味が無いよ。君の国が今そういう状況なのだろう？」
「子どもを沢山増やすだけでしたら、決して難しい話でもありませんよ。人間たちの精子や卵子を抽出して、V.O. ルームの中に組み込み、使用者（ ユーザー ）たちに内緒で、

プレイさせながら受精させてしまえばいいのです。実際、セックスレスの夫婦の中には、V.O. ルームを仲介させて、自分たちの子種を配合させ、子どもを作っている人たちもいるぐらいです」
「しかし、そんな勝手な方法で、本人たちの意思を無視して、子どもを作ってもいいのかね？」
「つまり、我が国が少子化となっている本当の原因はそこなのでしょうね。V.O. ルームが皆から愛やセックスを奪い取ったのではありません。もともと、人間たち自身が子どもを作りたがらないだけなのです。それを、我々 V.O. ルームのせいにされたって、我々だって迷惑なだけです。そもそも、子どもを欲しがらなくなりだした時点で、人類と言う種族の衰退が始まったのでしょうね。いずれ滅びさる運命なのだと思って、おとなしく覚悟を決めた方がいいのかもしれませんよ」
　そう言って、V.O. ルームの末端器官でもあるロボットの操作技師は、あらためて、せせら笑っているように聞こえる電子音を響かせたのだった。

了

（ 2016 年 11 月作品 ）

「ピンクの怪物」登場モンスター目録

ピンクの怪物の「ピンク」とは、往年のピンク映画の「ピンク」と同じ使い方である。すなわち、ピンクの怪物とは、猥褻エロモンスターという意味合いになる。

さらには「ピンクの象」という暗喩も存在する。これは、お酒や薬物の中毒状態で見える幻覚の別称で、つまり、ピンクの怪物たちが、実は幻想の存在である事も、それとなく示唆している。

また、東映ドラマ「どきんちょ！ ネムリン」（ 1984 年〜1985 年 ）の主題歌では、主人公の睡眠の妖精ネムリンが「ピンクモンスター」と表現されており、ここでも、ピンクの怪物（ モンスター ）と夢の中の存在のつながりが見られる。

そして、ピンクモンスターとは、元国会議員の豊田真由子氏のあだ名にも他ならず、だからこそ、「ピンクの怪物」本編内でも、いずみがスキンヘッドの永山の事を「このハゲー！」と怒鳴るシーンがあるのだ。

ピンクの怪物ファイル１　口裂け女モドキ

口元に大きなマスクをつけた、若い女。
マスクを外したら、口が裂けてるのかと思いきや・・・。
映像化した場合は、恐らく、映倫に引っかかりそうな怪物。
「最初の怪物」「次なるミッション」などに登場。

ピンクの怪物ファイル２　乳房ボール

まさに、乳房ボールとしか呼びようのない怪物。
ゴロゴロ回ったり、ポンポン飛び跳ねる。
その誕生シーンは、諸星大二郎氏の漫画を意識しました。
「笑う裸婦像」「会館の死闘」に登場。

ピンクの怪物ファイル３　カレ

ピンクの怪物たちを生み出した、謎の男。

キリスト教圏の国の子供番組では、「悪魔」が放送禁止用語になっていて、
「him（ カレ ）」で代用されたりもするそうです。
「あらわれた悪魔」から登場。

ピンクの怪物ファイル４　散歩する舌

変形自在で、テクニシャンの、長い舌。
最初、ペニスにするつもりでしたが、
あとで、正式なペニス怪物も登場しますので、こちらは舌にしました。
「魅了する舌」「永山登場」などに登場。

ピンクの怪物ファイル５　人食い精子

正しくは、巨大フグリが、ピンクの怪物の一体。
巨大フグリから放出された人食い精子は、何でも食べてしまい、
あわや、世界を滅ぼしかける。
「侵略する精子」「いまわのセックス」などに登場。

ピンクの怪物ファイル６　巨大フグリ

人食い精子の保有者。
フグリ（ 陰嚢 ）のくせに空に浮かぶ事ができる。
発情すると、まん丸になる。
「急展開」「丘の上の攻防」などに登場。

ピンクの怪物ファイル７　大地に生えた性毛

その名の通り、地面から湧き出た陰毛。
謎の女・令子につきまとうストーカー。
弱点は、核攻撃。
「仲間割れ」「令子の謎」などに登場。

ピンクの怪物ファイル８　大ペニス・小ペニス

大ペニスは、巨体で街を破壊し、小ペニスは、密室潜入のプロ。

多様な特殊能力を駆使する、夜の王者。
映像化したら、多分、映倫には引っかかる。
「淫魔のビル」「総力戦」などに登場。

ピンクの怪物ファイル９　カマキリ女（ 仮称 ）

残っていた小ネタを全部、投入したキャラ。
ボディは超グラマーだが、全体的には、やっぱり化け物。
設定では、七人兄弟の末っ子。姉と同じく「皆殺し」が好き。
「二人のいずみ」「弱点」などに登場。

ピンクの怪物ファイル 10　アニムス

セックスすると生まれる巨大ヒーロー。
怪物を倒すたびに消滅するが、セックスしたら、何度でも復活する。
言うまでもなく、ウルトラマンを意識したキャラです。
「光の巨人」「性の権化」などで活躍。

「ピンクの怪物」主要登場人物

・蛙里須（ ありす ）いずみ
本作のヒロイン。美しい女子高生。
カレを探し出すミッションに巻き込まれる。
自分の事は、子供っぽく「あたし」と呼ぶ。
「西遊記」の三蔵法師にあたるキャラ。

・永山（ ながやま ）
いずみの従者。特殊工作兵風の青年。
粗暴だが、頼りにもなる、皆のリーダー。
いずみの事は「アリスさん」と呼ぶ。
「西遊記」の孫悟空にあたるキャラ。

・球異（ きゅうい ）
いずみの従者。自称・名探偵の青年。
どこか軽薄で、女の子好き。
いずみの事は「いずみん」と呼ぶ。

「西遊記」の猪八戒にあたるキャラ。

・所田（ ところだ ）
いずみの従者。自称・発明家の青年。
ころころ態度が変わる、最悪なヤツ。
いずみの事は「いずみクン」と呼ぶ。
「西遊記」の沙悟浄にあたるキャラ。

・令子（ れいこ ）
皆の前に、突然現れた謎の女性。
たいがいは眠っているが、態度は友好的。
いずみの事は「いずみちゃん」と呼ぶ。
実は、続編への伏線となるキャラ。

解説

「アリとギリギリデス」は、そもそも、冗談的にタイトルだけが先にひらめきまして、この笑えるタイトルだけが全てで、内容はどうでもいいような感じでした。

まぁ、書くとしたら、働き者のアリより怠け者のギリギリデスの方が最後に幸せになるオチかなと、そこまでは決まってまして、たとえば人間に捕まったギリギリデスは快適な環境（ 人間の部屋 ）で冬を過ごすが、アリの方は厳冬のせいで凍え死んでしまうとか、そんな話を想定していました。もちろん、本気で書くには至りません。

それが、アットホームアワードに何かもう少し出品したいと考えた末、このタイトルが急にピックアップされました。インパクトあるタイトル推しで、そこに無理やりストーリーを当てはめたのが、完成した「アリとギリギリデス」だったのであります。はっきり言って、執筆経緯がデタラメだから、完成品もろくなものではありません。

ただ、「アリとギリギリデス」本編そのものは失敗でも、蛙里いずみシリーズが誕生するきっかけにはなりました。全くの無意味でもなかったのです。

蛙里とは「かえるざと」とも「かわずざと」ともどちらで読んでもいいのですが、発音を変えると実は「あり」になります。そして、いずみの方はアングルの「泉」に引っ掛けられています。結局、この「いずみ」の方が膨らんでいって、シリーズ化する事となったのです。

蛙里いずみシリーズは、少しエロ要素を盛り込むようにしています。「アリとギリギリデス」では「セックス」という単語が出てきた程度でしたが、以後の作品では、どんどんエスカレートしていきました。作者はちょいエロ小説のつもりだったのですが、「絵画の刑罰」あたりに至ると、かなり内容がエグくなってしまい、こんなのが果たしてコンテストに出品できるのだろうかと困っている次第です。

その他

ラインナップ

「おいらとタマの一人暮らし」
「おもちゃのいる教室」（ 18 禁 ）
<解説>名前遊び

「おいらとタマの一人暮らし」

おいらは、いきなり、一人暮らしをしないといけない事になってしまった。正確には、タマも一緒についてきたので、二人暮らしなのかもしれないが、タマとおいらはイキモノの種類が違うらしいので、やはり一人暮らしと言う事になるらしい。

タマは、おいらと今まで同じ家で暮らしてきた、えーと、なんて説明したらいいのかな、要するに、おいらはタマのお守なのだ。何しろ、タマは、おいらが物心がついた頃から一緒にいて、おいらが同じ布団に寝てやらないと、夜も眠れないほどの寂しがり屋なのである。離れられないのは当然だったとも言えよう。

おいらが生まれる前は、おいらのかーちゃんがタマのお守をしていたようだ。だから、おいらとタマが二人だけで家を出て行く事になった時は、かーちゃんから、タマの事をよおくかまってやるよう、いっぱい頼まれてしまった。タマは、おいらたち母子にとっては、それほど不可欠な存在だったのである。

かーちゃんと別れる事になるのは、確かに、おいらも悲しかった。

しかし、タマだって、自分のとーちゃんとは離れる事になるみたいなのだ。お守のおいらが弱音を吐く訳にもいかないだろう。

これは、ジリツとか呼ばれる行動なのだそうである。子どもは、いつかは親元を離れなくちゃならないものらしい。タマがその時が来てしまったらしく、おいらもその巻き添えをくう事になってしまったのである。

タマは、おいらを抱きかかえながら、自分のとーちゃんにこんな事を言っていたっけ。「パパ、心配ないよ。あたしだって、もう大人なんだから。いくらでも一人で暮らせるよ。でも、カイトは連れていくからね。部屋に戻った時、誰もいなかったら、ちょっと寂しいもん。アオイの方は置いていくから、きちんと面倒をみてあげてね。アオイも、もうだいぶ歳だから、大事にしてあげてよ。パパも、あたしが居なくなったからって、だらしない生活をしたらダメだからね」

カイトとはおいらの事で、アオイの方はかーちゃんの名前だ。こんな話を耳にしたから、おいらたち親子も離ればなれになる事が分かったのである。

おいらとかーちゃんが親一人子一人なら、タマの奴もとーちゃんと二人っきりの家族だった。ともに、親とは別れて暮らす事になったのである。

そして、その日がとうとう訪れた。

おいらは、はじめて見る新品の籠に入れてもらって、まさに王様待遇で、タマに新しい家へと運んでもらったのだった。

籠に限らず、どうやら、今まで使っていた道具は、食器にせよ、トイレにせよ、爪とぎにせよ、タマと遊ぶオモチャにせよ、全て、これまで居た家に置いてきてしまうらしい。かーちゃんが前の家にそのまま残る訳だから、考えたら、当たり前の話だ。

一方で、おいらは、全ての道具を新調してもらえる事になったようなのである。
こうして、やって来た引っ越し先の部屋は、今まで住んでいた家と比べると、だいぶこじんまりとした狭い場所だった。おいらとタマだけで暮らすのだから、それほど広くなくても良かったのだろう。
その新しい住居に、たちまち、おいらの為の買ったばかりの生活用品はセッティングされていった。
新しい家でも、すぐに、おいらが過ごせる環境は整ったのである。
とは言え、今までとは異なる造りの部屋に、何もかも新品の道具ばかりだったので、どうも落ち着かなかったのは確かだった。
それでも、ごはんの内容は今までと同じだったし、トイレの砂もこれまで通りのものを使っていた。何よりも、仲良しのタマが一緒にいる。
かくて、最初こそストレスは感じていたものの、次第に、おいらも新しい家に慣れていったのだった。
タマの様子も観察してみたが、タマの奴も、最初の頃は、とてもせかせかと動き回っていて、雰囲気から、新しい生活に戸惑いつつも、楽しんでいたようにも感じられた。
元から、昼間はあまり家には居なかったタマだったが、この新しい部屋に越してきてからは、日中は完全に外に出かけるようになってしまった。朝早くに出て行ってしまうのだが、帰ってくるのは、ほとんどが夕方を過ぎてからなのである。
出会える時間が少ない分、帰ってきてからのタマは、なおさら、おいらにベタベタくっつくようになって、それはまあ構わないのだが、困った事に、おいらの方が昼間の時間を持て余すようになっていた。
これまでの家だったら、かーちゃんと一緒だったから、タマやそのとーちゃんが居なくても、それなりに、かーちゃんとじゃらけたりして、時間を潰せたものだ。しかし、この新居では、タマが出て行ってしまうと、本当においら一人になってしまうので、何もする事がなくなってしまうのだ。
そんなおいらの気持ちを察してくれていたのか、外から戻ってきた時のタマは、すぐにおいらの事を持ち上げてくれて、
「ごめんね、カイト。寂しかったでしょう」
と、優しい声をかけてくれたあとに、ぎゅっと抱きしめてくれるのであった。
おいらにとっても、その瞬間は一番幸せな時間だったが、どうやら、タマにしてみても、それは同じだったようである。
タマは、毎日のように、日中は外へと出かけていたが、外での生活は必ずしも楽しいばかりではなかったみたいなのだ。
家に帰ってきたばかりのタマは、大体、疲れ切っていたようにも見えた。暗く沈んでいるような事もあった。そんな時は、おいらを抱きかかえて、ようやく笑顔を取り戻していたみたいなのである。
やっぱり、タマも、前の家やとーちゃんの事が懐かしいのだろうか。前の家で一緒に住んでいたおいらと戯れると、昔の感覚が思い出せて、ささやかながら心が落ち着くのかもしれない。やはり、タマには、おいらが必要な存在だと言う事だ。
だから、タマと一緒にいられる時間は、おいらも積極的にタマにすり寄ってやる事に

していた。そうしてやると、迷惑そうな事をつぶやきながらも、実はタマも本心では喜んでいたみたいだったからだ。

タマは、おいらの方が寂しくて、寄ってくるみたいな事を口にしていたが、実際には、おいらがタマの事を気に掛けて、寄り添うようにしていたのである。そんなおいらの気持ちも分かっておらず、タマって奴は、ほんとに無邪気なものなのだ。

タマの上に乗っかって、顔を舐めてやったり、自分の喉を鳴らしてみせたりすると、特にタマは喜んだ。タマの手の上に、おいらの前足を置いてやったりすると、タマは「わあ、カイト。犬よりお利口だぁ」と大げさに喜んでくれたりもした。とにかく、おいらの一挙一動が、今のタマの慰みになっていたようなのである。

そして、夜は、おいらとタマは同じベッドで寝た。おいらには、小さな籠の寝床もあてがわれてはいたのだが、夜中にそこを使う事はほとんど無かった。たいていはタマと一緒に寝る事になった。タマが強引においらを抱いて、自分の大きなベッドに潜り込んでしまうからだ。おいらも、それに別に不満はなかったのである。

これは、前の家にいた時からの習慣だった。ただし、前の家にいた頃は、おいらとタマ以外に、おいらのかーちゃんも一緒だった。おいらたち親子ともに、タマのベッドで寝かせてもらっていたのである。

この新しい部屋では、タマとベッドは完全においらだけで独り占めだ。決して悪い気もしないのである。

こんな生活が、新しい家に越してきてから、何日も続く事になった。

じょじょにだが、おいらもタマも新しい生活スタイルに馴染んできたようだった。少なくとも、おいらは、同居家族がタマ一人でも、それほど寂しいとも思わなくなり始めていた。

そんな、ある夜の事である。

外出から戻ってきたタマが、やけにそわそわとしており、すぐにおいらの事を抱き上げた。

「カイト。どうしよう、不審者だよ、不審者」

と、タマは言った。

フシンシャが何なのかは、おいらにはよく分からなかったが、最近、タマがよく口にするキーワードだった。

タマは、おいらを抱いたまま、窓の方へと向かった。窓はあらかじめカーテンを閉めていたが、すき間からソッと外を観察したのである。

タマは、おいらにも外を見るよう、おいらの体を窓へと近づけた。

「ほら、あの電柱の影に誰かいるよ。最近、怪しい人がよく、このあたりをうろついてるんだって。このうちも狙われていたら、どうしよう」

タマの言う通り、確かに、すぐ外にある大きな電柱の裏に何かが隠れているようだった。

「警察に電話した方がいいかな。でも、大げさになり過ぎても困るし」

タマの、おいらを抱きしめる力が強まった。タマも、よほど怯えて、興奮しているらしい。まさに、こんな時こそ、お守のおいらが、タマの心の支えになってやらなきゃいけないようだ。

　一声にゃーと鳴いて、おいらはタマを元気づけた。
「ありがとう、カイト。自分がいるから大丈夫、って言ってくれてるのね」
　おいらの心遣いが分かってくれたらしく、タマがおいらの頭を撫でてくれた。
　しかし、その後、しばらく進展は無かった。タマは、まだ様子をうかがっていて、ケイサツとやらに電話を掛けたりはしなかったし、部屋に閉じ篭ったまま、時々、窓から電柱の方を見張る状況が続いた。
「あれ、いなくなったよ」
　ふと、タマがそう言った。どうやら、電柱の影に潜んでいたフシンシャの姿が、いつの間にか見えなくなったらしい。
「本当に、もうどこかへ行っちゃったのかな」
　タマがつぶやいた。
　そして、タマは、おいらを抱いたまま、ゆっくり歩き出したのだった。
　タマの奴は、臆病な割には、好奇心が強い面もあるのだ。この時もそうだった。よりによって、止めとけばいいのに、わざわざ、部屋の外へ出て、本当にフシンシャがいなくなったかどうか、確かめようとしたみたいなのである。
　おいらを抱いたままでだ。おいらと一緒なら、多少は怖さが紛れるとでも思っていたらしい。とんだとばっちりなのである。しかし、タマのお守として、こうなったら、おいらもとことん付き合うしかなさそうだった。
　タマは、静かに部屋の玄関の方へ向かい、音を立てないようにして、そっと玄関のドアを開いた。むろん、おいらを抱いた状態でである。
　玄関の外を見たタマが、次の瞬間、大声を出した。
「パパ！」
　その声にびっくりして、おいらも慌てて、タマの腕の中から地面へとぴょんと飛び降りた。
　タマが呆れた顔をしている。タマの視線の先には、戸惑いながら立ちすくんでいるタマのとーちゃんの姿があった。

　それから、数十分後、タマのとーちゃんはおいらたちの部屋に入れてもらえて、テーブルの前に座らされ、タマの説教を受けていた。
「もう、パパったら！ あれほど、あたしは心配ないって、言っておいたじゃない。これまでも、こそこそ、うちのそばまで来て、様子を伺ったりしていたのね。今まで、近所で不審者と間違えられていたのも、全部パパだったんでしょう？」
　タマは、普段は本当に優しいのだが、怒った時は実に怖いのである。
「珠華、本当にごめん。たまたま、そばを通りがかったものだから、覗いてみただけなんだ。ウソじゃない、信じてくれ」
　タマのとーちゃんは、ひたすら平謝りしていた。
　タマに怒られるのは、前の家に居た頃から、たいていは、このとーちゃんだったのである。
「たまたま通りがかっただけって、実家からここまで100キロ以上離れてるのよ。それに、こっちの方角にはパパの用事のありそうな場所はないし。ごまかそうったってダメ

なんだからね」
「許しておくれ。お前がきちんと一人で暮らせてるか、気になってしょうがなかったんだよ」
「月に一度は、そっちの家にも顔を出してたじゃない。それに、あたしんところに来たかったら、そんな隠れたりしないで、堂々と訪ねてきてくれたら良かったのよ」
「それはそうだけど、あんまり遊びに行き過ぎたら、それはそれで、お前もうるさがるだろう？」
「当たり前よ！ あたしだって、もう子どもじゃないんだから！」
　タマのとーちゃんは、図体がでかいわりには、タマにはからきし弱いのであった。
　しかし、本物のフシンシャとやらじゃなくて、まずは一安心だったようである。
　タマには、こんなに自分の事を心配してくれている親がいて羨ましいな、とふと、おいらも思った。
　おいらの心の中にも、優しかったかーちゃんの姿がぼんやりと浮かび上がったのであった。

了

（ 2016 年 3 月作品 ）

＜解説＞名前遊び

執筆活動を再開するにあたり、過去の自作のキャラクターはほぼ使い回ししないと心に決めたのですが、そうなると、登場人物の名前の付け方に自由度が増した分、少し遊びたくもなってきました。

最初に遊んでみたのが「帰り道」です。この作品に出てくる二人組の名前は、一恵とＦ先輩で、私としては、吹石一恵と福山雅治のつもりだったのですが、ヒントが少なすぎて、誰にも気付いてもらえなかったようです。そんな訳で、「帰り道」の続編となる「3つの手の物語」では、もろ、先輩を福山と表記し、一恵の父親の徳一も登場させております。（ 吹石一恵の父親の名前が徳一 ）

以後の作品では、もっと分かりやすい名前遊びをする事にしました。

「お化け坂」
はるか　　（ 春か ）
なっちゃん　　（ 夏ちゃん ）
アキラ　　（ 秋ラ ）
冬彦

「笑う幽霊坂」
美来　　（ 未来 ）
過子　　（ 過去 ）

「おばあちゃん」
世界一
世界初音　　（ 世界初ね ）
世界喜望　　（ 世界規模 ）

「ルシーの晩餐」
キノオ　　（ 昨日 ）
キョウ　　（ 今日 ）
アス　　（ 明日 ）

「浦島異聞」

桃吉　　（ 桃太郎 ）
金太　　（ 金太郎 ）
寸坊　　（ 一寸法師 ）

「時間犯罪」「未来を守り隊」
L（ Laboratory ）病理研究センター
時間犯罪を犯す人 H（ Human ）
バチルス B（ Bacillus ）
友人 F（ Friend ）

「コロナの真実」
新種ウィルス　新型コロナ
T 国　　中国
対処薬 A　　アビガン
コビット 21　　COVID-19

　トライアングル・シリーズは、主要登場人物が三人と言う事で、トライアングルをトライ、アン、グルに分解してみました。そのまんま、他の登場人物名も、打楽器を用いています。雑誌「ダ・ガッキ」をはじめ、編集長のシン・バル氏、T・バリン（ タンバリン ）氏、すず（ ベル ）さん、ドラム社のタイコ氏、など。
「ガラスの靴大作戦」に出てくるサンドリヨン（ 社 ）とはシンデレラのフランス名、「人喰い料理大作戦」のゲストキャラであるモーロックとは、ウェルズ「タイムマシン」に登場した人喰い未来人の名前です。トライアングル・シリーズにつきましては、ボツネタの方も、大体こんな感じでゲストキャラ名が付けられています。
「イメージマシン大作戦」に出てくるキーミダングは、最初、ガーンガン（ 打楽器の叩いた音 ）にするつもりだったのですが、あまりに強引な文字遊びにも感じられましたので、キーミダング（ 全くの架空の名前 ）に変更させていただきました。
「サイクロプス大作戦」のサイクロプスとは、ギリシャ神話に出てくる人喰い巨人の呼称です。普通、サイクロプスは一つ目人間の意味合いで使われがちなのですが、私は「食人鬼」の部分をチョイスさせていただきました。同じように、（ フランク N ）ガイラと言うのも、日本の怪獣映画に出てきた人喰い巨人の名前が元ネタです。お化けビルは、私の古い作品によく出てきた固有名詞を再使用いたしました。

「知ってる人だけのお話」の登場人物は、虎井、安藤、グルと実はトライ、アン、グルを和名に変えただけのものです。もう一人？ の重要登場人物である尾場家サカも平仮名にすると「おばけさか」となり、他にもルシーやアケチ探偵、ニジュウ面相などが出てきますので、この作品はほんとは私の最近のシリーズもの全ての名前を含有したお遊び（ パロディ ）だったりします。
　さらに、映画版「ルシー」では、ベースにした作品の「おばあちゃん」の登場人物たちに、それぞれ、別の名字を振り当てる必要があった為、この「知ってる人だけのお話」

から、名字を拝借させていただきました。すなわち、虎井初音、安藤（ アン ）、グル・ハジメ、と言うようにです。この名字の拝借が逆にきっかけとなって、「おばあちゃん」未登場のアンも、映画版「ルシー」に参加する事となりました。

「おいらとタマの一人暮らし」は、人間キャラの名前の方が珠華で、通称タマ。猫の親子の方がアオイとカイトと、今どきの人間の子どものような名前を付けられておりまして、名前だけだと飼い主とペットが逆転しています。余談ですが、タマのトーちゃんは、俳優の遠藤憲一さんのイメージで書かせていただきました。

いずみちゃんシリーズの蛙里いずみと言う名前は、第一作「アリとギリギリデス」のアリに引っ掛けて、生まれました。蛙里（ かえるざと ）の読み方を変えると「あり」とも読めるのであります。さらに、「泉より愛をこめて」に出てくる画家の角土（ かくど ）ですが、これも角土＝角度＝アングルとなり、名画「泉」の作者であるアングルを和名に変えた（ かなり苦しいですが ）ものなのでした。

「狼ハンター」の登場人物、ペローとグリムと言う名前はどちらも「赤ずきん」を紹介している有名童話作家の名前です。山羊のニコの名の由来は、ネタばれしてしまいますが、お察しの通りユニコーンから取っています。赤ずきんの喋り方を藤田ニコル風にしたからと言う訳ではありません。

「機械仕掛けのウイルス」は、日本での出来事とは固定せずに、どこの国の話としても通用するように、登場人物の名前は、ナナ、ケイ、ユウの三つにいたしました。もちろん、日本人の名前にも聞こえますが、この 3 種類でしたら、白人系、アジア系、アフリカ系など、どこの国の人名（ ニックネーム ）だとしても、ありそうな感じがします。

第 4 話に出てくるフードランニングも、ウーバーイーツのパロディですが、いかにも存在していそうな外資系会社名です。オーバーダウン（ over down ）、メガキャリア（ mega career ）などの呼称も、実際のコロナ用語を組み替えて、創作させていただきました。ウイルス馬鹿も、スラングのコロナ脳が元ネタです。

T 国やキブンゴなどは、私の他の作品から持ってきた言葉でして、そもそも、本作そのものが、「コロナの真実」の姉妹作で、ルシー・シリーズの一編となっています。

「蝶の揺らぐ未来」の登場人物は、全て、虫に結びついた名前にするつもりでした。

ヒロインの興梠（ こおろぎ ）アゲハ、友人の宇治（ ウジ ）原、カマキリと言うあだ名の先生、ハニー・ホーネット博士、などなど。ただし、実際の完成品を短くまとめてしまった結果、これらの名前の出番も無くなってしまったのでした。唯一、名前の出てきた登場人物がアリ（ 蟻 ）タ先輩だったのは、この名残です。

「最後のお化け坂」に登場する福来と御船の超能力コンビは、実際に明治時代に日本を騒がせた超能力研究学者と透視能力者の名前を、流用させていただきました。

ルシーの明日とその他の物語（改装版）

著　者　　anurito

制　作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社